

# 南蛮都市・豊後府内

## 都市と交易



2001

# CONTENTS

あいさつ	1
大友フォーラム開催趣旨	2
大友氏館跡の国史跡指定へ至る経過と今後の方向性	3
第一章 中世大友再発見フォーラム 記念講演	7
1. 「南蛮貿易都市の軌跡」石井 進 (東京大学名誉教授)	8
2. 「戦国時代の館 その景観と空間機能」小野正敏 (国立歴史民俗博物館助教授)	13
第二章 中世都市研究会 テーマ「豊後府内の都市と交易」	19
1. 報告①「考古学から見た中世大友府内城下町の成立と構造」坂本嘉弘 (大分県教育委員会)	20
2. 報告②「文献・絵図から見た大友館と府内の町～都市と国際性～」鹿毛敏夫 (大分県立先哲史料館)	26
3. 報告③「戦国時代豊後府内の貿易陶磁器」高畠 豊 (大分市教育委員会)	32
4. 報告④「陶磁貿易から見た東南アジアと日本・豊後」大橋 康二 (佐賀県立九州陶磁文化館)	43
第三章 宗麟の都市	49
1. 大分のまちの形成と特質	50
2. 府内と府内古図	61
3. 上原館について	71
4. 高崎城跡	74
5. 大友氏関連遺跡・名所	
大友氏の菩提寺「万寿寺」	76
府内の防衛拠点「鶴賀城」	77
豊後国一宮「杵原八幡宮」	79
6. 戦国期都市臼杵について 一もうひとつの大友戦国都市一	80
第四章 発掘調査概要	91
1. 大友氏館跡の調査概要	92
大友氏館の変遷	93
第1・3次調査	97
第2次調査	102
第4次調査	104
第5次調査	106
第6次調査	108
第7次調査	110
第8次調査	112
第9次調査	114
2. 中世大友府内町跡の調査概要	115
第1・2次調査	116
第3次調査	118
第4次調査	120
第5次調査	122
第6次調査	124
第7次調査	126
第8次調査	128
第9次調査	130
第10次調査	132
第11次調査	134
第12次調査	136
第13次調査	138
第14次調査	140
3. 府内城・城下町跡第12次の調査概要	142
第12次調査	143
第五章 宗麟と器	145
1. かわらけ	146
2. 茶の湯と宗麟	148
第六章 府内で活躍した人々	151
1. 大友宗麟	152
2. 府内の大豪商・技術職人・商人・蔵奉行	153
3. 府内で活躍した外国人	154
第七章 資 料	155
府内の町割変遷図 (坂本報告資料)	156
主要輸入陶磁器一覧表	158
大友氏系図	159
大友氏関連年表	160
天正十六年参宮帳写	162
「豊後府内の都市と交易」に関連する文献史料	166

#### 《凡 例》

- 1.本書は、大友氏館跡国史跡指定記念「中世大友再発見フォーラム」及び第9回中世都市研究会全国集会の開催にあたり作成した資料集である。
- 2.発掘調査の概要については、調査進行途中のものもあり、あくまでも現時点での調査所見である。
- 3.調査概要の時期区分については、各世紀を初頭・前葉・中葉・後葉・末葉の5期区分により表記した。
- 4.各原稿の文末に執筆者を記した。
- 5.この資料集の編集は、大分市教育委員会文化財課がおこなった。

## あいさつ

平成10年7月に巨大な景石を配した大友館の庭園跡を発見して以来、大分市教育委員会では文化庁・大分県のご指導並びに地元地権者の皆様のご理解・ご協力をいただき中、今日まで館跡の範囲確定並びに館遺構の確認調査を行ってまいりました。

その調査結果並びに古絵図等の文献などにより、大友氏館跡がほぼ200m四方、約40,000m<sup>2</sup>に及ぶ広大なもので、その中に東西60m以上にもおよぶ見事な池庭が広がっていたこと、また発掘現場からは京都系土師器や茶臼、天目碗などの茶道具も発見されており、文化的な意識の高さをうかがい知ることができます。さらに庭園跡は山口の大内氏や福井の朝倉氏のそれをしのぐ大きさの池庭であり、館の大きさは当時の室町将軍家と並ぶ規模であったこと等々、まさしく日本中世史上における西国の雄という名声にふさわしいものであったことが分かってまいりました。

またその間、館跡内の8物件約10,000m<sup>2</sup>につきまして、地元地権者の皆様のご理解を賜りながら、このたび文化庁から国史跡としての指定をいただいたところでございます。この場を借りまして、改めて関係機関並びに関係各位に対しまして厚くお礼申し上げます。

大友氏は、私たち大分に生きる者にとって、心の支え、誇りとなる貴重な文化遺産でございます。今後とも、皆様のご理解とご協力をいただきながら、館跡をはじめ関連遺跡の発掘調査や文献による研究などを通じて、当時の生活様態や、大友氏の先進性などを明らかにしつつ、それらを現在の大分の都市づくりの中に生かすことにより、大友氏の復活を図ってまいりたいと存じます。

このフォーラムが、多くの市民にとって、大友を身近に想い、郷土の誇りを感じる契機となりますように祈ってやみません。

最後に共催していただきました、中世都市研究会の方々から、大友氏等に関するたくさんの方所高所からのご指導、ご助言をいただけますよう、お願い申し上げます。

平成13年9月1日

大分市教育委員会

## 大友再発見フォーラム開催趣旨

大分市では将来の50万都市に相応しいスケールの大きな都市の骨格づくりを標榜いたし、その核となる市街地整備の事業として、大分駅高架をはじめとする駅周辺総合整備事業に取り組んでいるところであります。また、これにかかわる埋蔵文化財の調査事業も鋭意進めているところでございます。

こうした中、当該地の一角におきまして、奇しくも四百数十年前にさかのぼる大友氏館の庭園跡の一部が発見されました。これが豊後きっての英傑大友宗麟の頃の、国際性豊かな府内の活況を示す、我が国でも指折りの史跡に相当するとのことから、全国に報道されたことはご承知のとおりでございます。

このため、その取り扱い等につきまして国・県ともご相談をいたします中で、慎重に検討してまいったところでありますが、その結果、国の史跡指定をいただく方向で保存に向けて取り組む一方、当該地周辺を中心に継続して調査を進めることといたしました。

そのような方針の中で、今後の調査の進め方やその調査成果をこれからの総合的な都市づくりにどう調整し、反映させていくべきか等々種々の課題が控えておりますこともご案内のとおりでございますし、この大友氏遺跡が、そのような「魅力と夢」をもった都市づくりを具現させるための、大切な歴史遺産として、今後どのような役割を担えるものなのか等について、有識者や地元関係者からなる大友遺跡検討委員会を設置し、ご検討いただいているところであります。

大友氏館跡につきましては、地権者の同意を得ました8物件（約10,000m<sup>2</sup>）について平成13年2月に文部科学大臣に申請をいたし、5月16日に文化審議会の答申を経て、このたび国史跡指定の告示を受けましたところです。これによって、大友氏館跡約40,000m<sup>2</sup>の内、おおよそ四分の一の面積が指定されたこととなります。今後とも、市民や地元のみならず、地権者の方々のご理解を得ながら、指定・公有化を進め、保存面積の拡大を図ってまいりたいと考えています。

大分市では、この大友氏館跡の国史跡指定を記念いたしまして、8月25日の土曜日から9月2日の日曜日の一週間を大友週間と銘打ち、各種記念行事を計画いたしましたところでございます。

本事業は、中心行事となる大分市主催の「中世大友再発見フォーラム」や中世都市研究会主催によります「豊後府内の都市と交易」をテーマとする研究集会等をとおして、大友氏遺跡を全国に発信するとともに、市民のみならずにはこの整備事業の推進にご理解を賜るよう計画するものであります。

# 大友氏館跡の国史跡指定へ至る経過と今後の方向性

## 1、現況

大友氏館跡及び中世大友府内町跡は、大分市街地の東部、大分川河口付近の左岸に形成された微高地上に位置する。その範囲は、戦国時代の大友城下町を描いた「府内古図」をもとに、明治の地籍図・地名などを手がかりにして現在の地図上に復元した「戦国時代府内復元想定図」によると南北約2.2km、東西約0.7kmとなる壮大な規模のまち（都市）が推定されている。その中心施設である大友氏館跡は、現在の顕徳町三丁目に位置し、一辺約200m四方、面積約40,000m<sup>2</sup>の規模となる。

この大友氏館跡の所在する地域は、現在「近隣商業地域」及び「準防火地域」となっており、個人専用住宅を中心としてアパートやマンション、店舗等が密集する。また、JR日豊本線を介する南側一帯は、御蔵場と称される大友氏の蔵場跡であり、元町公園（現況 農地及び一般住宅地）として都市計画決定がなされている。

## 2、現在までの保存の経緯

### 1) 館跡の調査

大分市では、21世紀の県都としてふさわしい都市機能の充実を目指し、大分駅の高架と駅南地区の区画整理事業を基幹とする大分駅周辺総合整備事業を平成7年度より着手している。この事業の対象地区には中世大友城下町跡として周知された大友氏関連遺跡が存在しており、事業との調整を図る必要があった。事業はまず区画整理に伴う代替地事業が先行し、大友氏館比定地の一部も代替地に予定されることになったため、平成8年度及び平成10年度から平成11年度の初めにかけて確認調査（大友氏館跡第1次調査）を実施した。その結果、巨岩を使った景石を配し池を伴う大規模な庭園遺構が発見され、この地点が館の内部であることが確認された。また、館推定地内西側外郭線付近では民間マンション建設に伴う調査（大友氏館跡第2次調査）では、16世紀前半の土塁遺構、16世紀後半の大規模な整地、掘立柱建物跡などが検出され、館の形成過程にかかる所見が得られた。これらの調査結果から、大友氏館比定地が実際に大友氏の館跡である可能性が極めて高いと判断されるとともに、日本史上にとどまらず世界史的広がりさえ有する大友氏とその中心的な遺跡の歴史的重要性が深まった。これを受け、大分市教育委員会では、文化庁及び大分県教育委員会と協議を重ね、平成11年3月に国史跡指定に向けての方向性が打ち出された。

以上の方向性に基づき、大分市教育委員会では平成11年より補助事業による大友氏館跡範囲確認調査を実施する事になり、再度庭園遺構及び土塁遺構の広がり確認調査（大友氏館跡第3次～第5次調査）を行い、庭園遺構は東西約60メートルの規模であることが明らかとなった。さらに、平成12年度は館跡中央部及び北限施設等の確認調査（大友氏館跡第6次～9次調査）を行い、中央部では大型の礎石建物遺構などが検出され、大友氏館の中心施設は礎石建物が想定

されること、北限推定ラインでは築地状の溝と土塁状遺構が確認され、築地状の施設で画されていたことなど重要な成果が次々と得られている。

## 2) 大友遺跡検討委員会の設置

これらの確認調査事業に併行して、大友氏館跡の保存整備及び大友氏館を中核とするまちづくりに関し、総合的に検討を行うため、大分市政策アドバイザー2名、学識経験者3名、観光・まちづくり代表4名、地元代表2名、行政機関2名の合計13名からなる大友遺跡検討委員会を市長の諮問機関として平成11年度に設置し、平成13年度を目途に基本構想を取りまとめていただくよう鋭意検討をいただいている。また、委員会を補佐する内部プロジェクト組織（11課、14名）も併せて設置している。

## 3) 意向調査の実施

遺跡保護の方向性を探るため、関連住民を対象とした意識調査を平成11年度に実施した。その結果、配布数275に対して111人の回答があった。全体として史跡指定についてはほぼ半数近くの人（43.2%、この内地権者に限定すると46.0%）が同意するとしており、反対する人は16.2%（同18.4%）と少ないものの、あとはわからない（35.1%、同33.3%）と答えていることから、指定の意義、指定後の規制等について詳細に説明し、理解を求める必要がある。また、土地の公有化についても、半数以上の人（61.2%、同70.1%）が理解を示しているが、反対する人の割合（11.7%、同13.8%）も史跡指定とほぼ似たような率となっており、わからないと答えた人（20.7%、同12.6%）を合わせて、今後指定の意義、公有化について移転補償等、特に地区内で営業・生活している人々に対する配慮が望まれる。

なお、条件が整えば協力すると答えた人では、適切な金銭補償を要求する人が最も多く、その次に代替地や生活環境がかわらないことなどをあげた人が多かった。

## 4) 国史跡指定の申請について

第1次大友氏館跡の国史跡指定申請は、地権者の同意を得た8物件（約10,000m<sup>2</sup>）について、平成13年2月に文部科学大臣に申請し、5月16日に文化審議会の答申を経て、このたび国史跡指定の告示を受けたところである。これによって、大友氏館跡約40,000m<sup>2</sup>の内、およそ四分の一の面積が指定されることになる。今後とも地権者の方々のご協力を得ながら、指定、公有化を進め保存面積の拡大を図っていく予定である。

# 3、将来にわたる保護の概要

大友氏は、鎌倉時代に豊後に入国以来、一貫して豊後国守護をつとめ、戦国時代の終わりころまで、およそ320年余にわたって、豊後を中心に九州北部に大きな勢力を築いた。その大友氏の政治・経済・文化の中心地は「府内」と呼ばれ、第21代宗麟のとき最盛期を迎え、府内教会、西洋式病院、コレジオという学院などヨーロッパの装いを多分ににじませた景観の都市であったと言われる。また、宣教師フランシスコ・ザビエルが山口から来訪しキリシタン布教の

始まりとなったのもここ豊後の地である。近年の町屋域における発掘調査において、中国華南三彩やベトナム、タイ、ミャンマー産の陶器など南蛮の品々が次々と出土し、府内の異国ぶりをうかがわせている。

府内の中核であった大友氏館は、方約200mの大きさがあり、中心建物に礎石を使い、北を築地状の施設で囲っていたことが明らかとなり、京都の細川管領邸にみられるような屋敷景観が想定される。また、庭園跡は西の京とたたえられる山口・大内館をやや上回り、京都風のかわけ（土師器）や茶臼、天目碗といった茶道具類など、ここでも大友氏の都ぶりの一端を垣間見ることができる。このような館や町が整え始められるのは、現時点では、宗麟の父義鑑ころと推定され、宗麟、そして大友氏最後の当主義統（第22代）のころには北部九州への覇権を象徴する大友氏館、キリシタン布教の地、そして西洋と南蛮文化の香りをたたえる国際貿易都市「府内」として繁栄をみたのであり、日本の中世を代表する都市遺跡の一つと言える。その中核となる大友氏館跡が極めて重要な文化遺産と評価される所以はここにある。

大分市は、21世紀を見定め「こころかよい 緑あふれる 躍動都市」を都市像に掲げ、個性的な都市の創造に向け、県都としての風格を備えた魅力あるまちづくりを推進している。都市としての歴史的な成立過程や地形的な環境を踏まえ、大分駅北の商業業務の中核都心、市民の憩いの場となる上野丘陵（上野の森）、そして大分市の21世紀の方向づけとなる南北市街化の一体化を図った駅南情報文化新都市構想（大分駅周辺総合整備事業）などそれぞれの地域で必要となる整備方針を示し、まちづくりが進められている。大友氏館跡及び中世大友府内町跡は、こうした中心市街地整備に隣接したところに位置していることから、点在する大友氏関連遺跡とのネットワークを結び、大分の土地ならではの特性を生かしたまちづくりとして都市計画に組み入れる必要がある。その中で大友氏館跡は、全面保存を目的とした長期的な取り組みを図る中、短期的には庭園跡を中心とする整備計画を策定し、効果的な保存・活用を図ることが望まれる。

#### 4、他の法令による規制、開発計画

##### 1) 他の法令

当該遺跡の所在する顕徳町三丁目は、昭和25年6月21日に「準防火地域」、平成8年6月21日に「近隣商業地域」として都市計画決定がなされている。また、館跡の南側は、JR日豊本線を介して昭和36年12月25日に都市計画決定された元町公園計画地（7.1ha）が接しており、大友氏館跡の保存整備はこの元町公園整備との一体化を十分に図ることが必要である。

##### 2) 開発計画

国土交通省及び大分県では、館跡に接する南側と東側においてJR日豊本線の高架と都市計画道路・中島三芳線（国道10号）改良工事など大分駅付近連続立体交差事業が着手され、大分県教育委員会において発掘調査が進められている。今後はその調査状況を注視するなか、その取り扱いについての確な判断が必要となる。国・県を含めた開発関連機関との意思疎通を図る

とともに、遺跡保存の具体的な方向性について早急な結論の開示が望まれる。

## 5、保護に関する将来計画の概要

大友氏館跡内には、現在木造住宅、アパート・マンション、店舗等が密集しており、住民説明会や意向調査の結果から見て、ただちに全体指定並びに公有化は困難であると考えられる。したがって、当面は空き地となっている個所での新規集合住宅やマンション建設計画時及び老朽化等による住宅建替時、並びに居住者からの申し入れ等による用地取得を随時行い、長期的な視野に立った遺跡の保存を図る必要がある。

まず、短期的な取り組みとしては、庭園跡を中心とする範囲の保存整備の必要がある。現在、大友氏館跡はJR日豊本線によって南に計画されている元町公園と分断されているが、平成20年度には高架化が完成する予定であり、館跡（庭園跡）と一体化が図れる。このことにより、散策道や、駐車施設などの利便施設等の設置も可能となろう。

こうした短期的、部分的な史跡整備の事業効果をあげるためには、大友氏館跡とともに、大友氏関連遺跡を含めた全体的な基本構想を早急に策定することが必要であり、現在大友遺跡検討委員会において鋭意進められている。

第一章

中世大友再発見フォーラム

記念講演

## 1. 「南蛮貿易都市の軌跡」

いし い すすむ  
石 井 進

東京大学名誉教授、鶴見大学客員教授。榊田学会会長。1931年生まれ。東京大学文学部卒業、同大学院修了。1993～97年まで国立歴史民俗博物館の3代目館長を務める。主な著書に『日本中世国家史の研究』（岩波書店）、『鎌倉武士の実像』（平凡社）、『中世の村を歩く』（朝日新聞）、『鎌倉びと声を聞く』（NHK出版）ほか。



### I 「中世都市府中」としての姿

古代の国府→戦国時代の城下町。その中間をつなぐミッシング・リンク（失われた環）としての中世都市府中。豊後府中はその好例。

cf.小川信『中世都市「府中」の展開』思文閣出版 2001。

すでに鎌倉時代、守護大友氏は仁治3年（1242）、寛元2年（1244）に「新御成敗状」と「追加」計44ヶ条を制定。その中には「府中法」ともいうべき10ヶ条。きわめて珍しく重要な法。

cf.笠松宏至「幕府の法と守護の法」（『岩波講座 日本通史』8、1994。のちに笠松著『中世人との対話』東大出版会、1997所収）

新御成敗状 仁治三年正月十五日

- (1) 一 神社仏寺の事（本文略）
- (2) 一 六ろくさいにち斎日殺生の事（同前）  
（中略）
- (19) 一 府中に地を給わる輩の事  
右、かの地に付する所のさいもつ濟物を難けたい澁し、所役を懈怠せば、屋地はこれを召すべし。
- (20) 一 道祖神社の事  
右、同府の住人ら、かの社を府内に立て置くの条、これを止むべし。ただし殊に所存あらば、その旨を申し、左右に随うべし。
- (21) 一 町おしがい押買の事  
右、上下を論ぜず、一向にこれを停止せしむべし。次に町人ら諸物のちきほう直法、法に背き過分の条、これを止むべし。
- (22) 一 府中に笠を指すの事  
右、往反の諸人、指したる雨の儀に非ざるの時、面々にこれを指すの事、これを停止すべし。

- (23) ー 大路の事  
右、或いは田畠を作ると号し、或いは在家を立つると号し、狭めしむるの条、尤も自由なり、早くその通の行事に仰せて、これを制止せしむべし。
- (24) ー 保々の産屋の事  
右、晴の大路にこれを立つるの事、これを止むべし。もし承引せしめずんば、これを破却せしむべし。
- (25) ー 府中墓所の事  
右、一切あるべからず、もし違乱の所あらば、且つは改葬（すべき）の由、主に仰せられ、且つはその屋地を召すべし。
- (26) ー 私物を道々の細工らおしやくに押作せしめる事  
右、然ることきの輩あるにより、細工ら煩いの事ありと云々、これを止むべし。
- (27) ー 出禄の事
- (28) ー すころく 双六・しいちはん 四一半・めまし 目増・ばくえき 字取等の博奕の事  
右、以上は停止すべきなり。もしあい鎖めずんば、その身を禁遏せしめ、所職を改むべし。

追加 寛元二年十月九日これを記す。同四年閏四月廿日偏頗あるべからざるの由、各起請文を申されおれんぬ。

- (29) ー 訴訟人の事（本文略）
- (30) ー 奉行人の事（同前）
- (31) ー 御下知状並びに問状の事（同前）
- (32) ー （中原親能） 掃部頭禅門並びに（大友能直） 前豊前国司及び（大友親秀） 出雲路桑門の成敗の事  
右、かの三代沙汰の中にひきよ非抛の事あるの由、訴人出来すと雖も、かの時の事は是非に及ぶべからず。ただし神社仏寺並びに公事及び御家人の事においては、その理、至極せしめば尋問すべし。（以下略）

〔後日之式条〕三浦周行博士旧蔵書入本。

東京大学文学部日本史研究室蔵

## II 「南蛮貿易都市」としての姿—「キリシタン大名」大友宗麟（1530-1587）を中心に—

天正6年（1578）キリシタン入信直前の宗麟の談話。「予が16才で、国主であった父君（義鑑）とともに府内にいた頃、（すでに）予はキリシタンになりたいと思った。（省みれば）当時、予が示したわずかばかりの（デウスへの）奉仕が、今予がデウスから受けているこの御恵みの発端ではなかったかと思われてならない。

予がその歳頃（引用者注、天文14年[1545]）に、府内に近い港に一隻のシナのジャンクが入って来たが、船員の（中に）6、7名のポルトガルの商人がまじっていた。その首領はジョルジュ・

デ・ファリアという富める人であった。シナ人の異教徒であったジャンクの水先案内人は予の父に、もし勞せず富もうと欲するなら、あのポルトガル人たちを殺して、彼らの財産を奪えばよいと勸告した。父は利欲に目がくらみ、シナ人たちの企みを実行するつもりであった。

予はそのことを知ったので国主に会い、(殿)の保護を求めて遠くからはるばる領内の港へ商いにやって来た異国人たちを何の理由も罪もないのに、ただ(己が)利欲のために殺害するようなことがこの世にあってよいものか。彼らが到来したことは領国にとって名誉であり、(当地の)港を信用すればこそ来(航)したのであって、国主にとっては有利な出来事であって、いかなることがあろうとも、(予は)そのような行為に同意することはできぬ。予は彼らを助けるためには死ぬ覚悟をしているくらいだ、と鋭く反撓した。その結果、父は(中略)そのような悪事を実行することを断念した。

その後、当地ヘディオゴ・ヴァス・デ・アラゴンという一人のポルトガル人が渡来した。彼は当地に5年いて、ほどほどに判る程度に(日本)語も話せるようになった。(中略)(この男が)世俗の商人に過ぎないのに、商用すらも信仰熱と信心の業を奪わないところを見ると、彼が礼拝しているデウス(なるもの)は、疑いもなく偉大な重要性を持ち、深遠な教えに違いないと、そのことをつねに心に留めておいた。(下略)」(フロイス『日本史』7、松田毅一、川崎桃太訳。中央公論社、1978、145-147頁)

宗麟とザビエル。天文20年(1551)、ザビエルを府内に招き、キリシタン布教とポルトガルのインド副王との親善を求める。

イエズス会などキリシタンと、その布教保護者であるポルトガル・スペイン両国王とは密接な関係にある。また両国の商業貿易活動とキリシタンとは表裏一体。

すでにザビエルは貿易に深い関心を示し、いくつかの提案。日本で高価に売れ、莫大な収益が約束される商品のリスト。また日本中の金銀の大半が集まる堺に商館の設置を。また自分を日本に送る商品の代理人にしてくれたら、1つのものを100以上に殖やしてみせる、とも。ザビエル自身も来日の際、マラッカ長官から贈与された最良のコショウ30バール(約5700キロ、中国での相場は約1000クルザド。1クルザドは銀で10匁くらい)を持参。それを売却して経費にあてたらしい。またザビエルは堺で日比屋了珪と接触、日比屋はのちに上方のキリシタン教会の一大支柱となった。(高瀬弘一郎『キリシタンの世紀』岩波書店、1993、29-35頁)

宗麟とイエズス会。天文21年(1552)、ガーゴ司祭の居所として一軒の家を与える。弘治元年(1555)、トルレス司祭に「国王の持家で、同国で最良の家屋の一つ」を贈る。司祭らは宗麟の同意を得て、そこに接した非常に良い地所を購入。宗麟はさらに毎年一定の扶持を与えるよう命令。先にガーゴの与えられた地所を二分し、一は墓地に、一は病院に。また宗麟は博多でも地所を与え、府内の病院に俸禄を与えた。(フロイス『日本史』6、107、160-161、163頁)

宗麟の得た現世利益。多くの子供と広大な領国。武器(南蛮鉄砲、大砲[石火矢])、火薬の原料と

しての硝石。宣教師に貿易の仲介を依頼—入信以前より3000ドゥカドの銀をマカオに送り、金・生糸に投資していた。

ローマ教皇は1575年、マカオ司教区を設定、日本はその一部。ポルトガル国王の布教保護権下、その潜在的領有化におかれる。そして天正16年（1588）には、府内司教区が設定され、日本教会全体がその下に。府内は理念上、その中心都市となる。

ルイス・デ・アルメイダは医学知識をもつ若いポルトガルの貿易商人。1556年頃に、4000～5000ドゥカドの私財をもって日本でイエズス会に入会。これを資金として、イエズス会は生糸・金・ジャコウ等々を扱う貿易活動にのり出し、重要な財政基盤とする。

アルメイダは府内の病院で大きな役割を果たしただけではない。「下（九州）の諸侯の誰か一人をキリシタンにする（中略）方法」として、「その殿に、適当な港があれば（ポルトガル）の貨物船がその殿のところに来航するとの希望を抱かせることにした。こうしたのはアルメイダ修道士がこれらのことに特別の手腕と才能を有していたからである。」（フロイス『日本史』6、293頁）

宗麟の「南蛮」派遣船。天正元年（1573）8月25日大友家家判衆連署状（島津家老中あて）（島津家文書）（『大分県先哲叢書 大友宗麟資料集』4、1500号）。

「今度、南蛮に至り差し渡され候船帰朝せしめ、御領中においてつなぎおき候の処、去る大風のみぎり、少過の子細これあるの由、到来により、貴殿に至り使節を以て申され候の処、未だに御返事なく候の事、御こころもとなく候、（中略）速に御分別なさるべきの事、もっとも目出たかるべく候、然らばかの船、南蛮国においても、かくの如き節、少難の儀これありと雖も、宗麟より差し渡さるゝ船の段、在知あり、彼国守相談を以て、廉直のあつかい、あまつさえ使節を以て申し越され候の処、万一御得心相滞るにおいては、大国までのおぼえ如何々々の条、御遠慮を以て示し預からば、祝着申さるべく候。（中略）

（追而書）

追て、伊集院右衛門尉（忠棟）殿へ、（臼杵）鑑速先書を用い候と雖も、御返事遅滞の条、衆中申し談じ、重疊連署を用い候（下略）

同年9月 日島津氏老中連署状写（薩摩旧記雑録）（『大友宗麟資料』4、1501号）。

「破艘の儀につき、毎々御使書、珍重に存せしめ候、御札のごとく貴家・当方、<sup>けんめい</sup>堅盟の故を以て、自他の覚かれこれ法意の扱、露頭の上、<sup>わづか</sup>纔に思慮を廻らされ、船・銀子・鹿皮、南蛮国進物の種々、目録を以て進められ候こと歴然に候。その外巨細の段は、寿庵齋に到り申し談じ候の条、紙面に尽くし難し。先々筆を<sup>お</sup>闔き候。余は仲掃部助殿演説あるべく候。（中略）豊州老中へ返書案文」

cf. 『図録 府内と臼杵から戦国の世界が見える～都市・貿易・民衆～』大分県立先哲史料館、1999。

### III最後に

「南蛮貿易都市」にして「戦国城下町」である府内の町の研究は、今はじまったばかり。さらに広い面的な調査研究とともに、国内の「戦国城下町」や「貿易都市」はもとより、広く国外のアジアの諸都市との比較研究が必要。たとえば世界遺産に指定されたベトナム中部の古都ホイアン（フェフオ）なども、そうした対象の一つ。

Cf.日本ベトナム研究者会議編「海のシルクロードとベトナムーホイアン国際シンポジウム」穂高書店、1993。  
佐久間貴士「巨大商都の出現ー大坂とホイアンー」  
（『ものがたり日本列島に生きた人たち』2、岩波書店、2000）。



## 2. 「戦国時代の館 その景観と空間機能」

お の まさ とし  
小 野 正 敏

国立歴史民俗博物館考古研究部助教授。1947年横浜生まれ。明治大学文学部史学地理学科卒業。1972年福井県一乗谷朝倉氏遺跡調査研究所文化財調査員を務める。主な編著書に『戦国城下町の考古学』（講談社）、『よみがえる中世6』（平凡社）、『図解・日本の中世遺跡』（東京大学出版会）ほか。



- 1 発掘された大名館の構造と規範性
- 2 屏風に描かれた将軍邸と管領邸
- 3 権威を象徴する出土品
- 4 もうひとつの武器として

近年の発掘調査によって、「府内古図」や現在の街区から想定されていた大友館をはじめ、府内の町の様子が具体的になってきた。特に方2町、約200m四方と確認された大友館は、戦国期の館としても第一級の規模であり、さらに東南隅の大きな庭園により特徴付けられる。大友館の具体像はこれからの発掘調査により解明されていくことになるが、全国の館の発掘例などを参考にしながら、その意味を考えてみよう。

各地で発掘された戦国大名クラスやそれに準ずる館や屋敷の内部、さらにそれを取り巻く空間には、多くの共通性が指摘できる。特に、1町四方の四角い館、大きな庭園をもつことが、最大の特徴である。復元される景観は、「洛中洛外図屏風」に描かれた公方邸や管領邸と類似した規模や空間構造をもつことが多く、それらをモデルとする規範が受容され、同じような景観の館や屋敷が各地に作られたことを推定させる。またそのとき、細川の惣領家が就任する管領邸と庶流家の典厩邸を比較すると明らかなように、屋敷の規模、門に象徴される格式、建物群、庭園の規模、中門の唐破風の有無など、その格差が意識的に描き分けられていることがわかる。館はその主人の格付けを表現し、各々の世界の中で序列的な規制をうけるものであった。

館全体を発掘した越前の戦国大名の居館・朝倉館をモデル化すると、館内は、大きくハレ（非日常）とケ（日常）に分かれる。ハレの空間は、「表」と「奥」からなり、異なる空間原理をもつ。主殿を中心とする表（端）は、儀式空間として広場に面し、式三献などが行われた。会所を中心とする奥には、庭園をめぐる泉殿や茶会用小座敷などが配された。会所は、連歌、茶の湯・花・香などの遊芸や文芸の寄合、饗宴など、中世に特有の接客空間である。建物内には、押板、書院、違棚などの唐物を主体とする美術品を飾る施設をもつ部屋が特徴である。

また、出土品にも、図表に示したように、戦国大名クラスの遺跡には共通する様相が指摘できる。それは青磁の花生・香炉・大型の酒会壺・盤、白磁の梅瓶・水注・四耳壺さらに唐物の茶道具など、いずれも室禮の道具として使われた権威や富を象徴する威信財ともいうべき陶磁が多いことである。

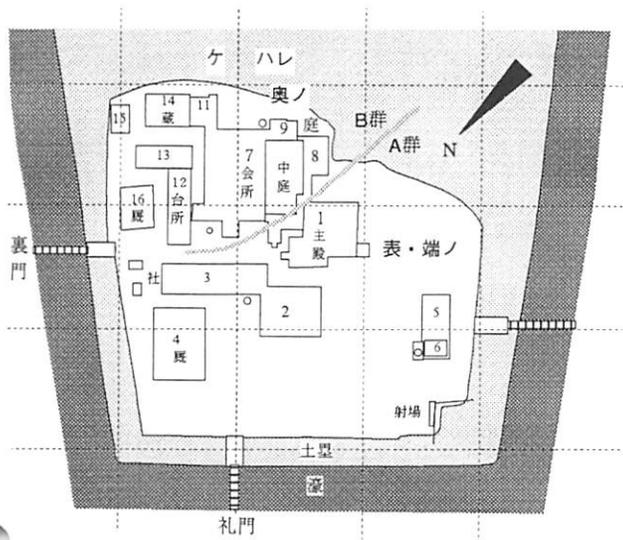
それらには13、14世紀の宋や元の時代に作られた数百年も古い骨董品が多いことも特徴である。中にはさらに古い12世紀頃の定窯白磁や高麗青磁などの稀少品を持つ例もある。

この組み合わせは、染付を除けば、1323年に韓国新安沖に難破した日本向け貿易船の高級陶磁器や鎌倉・今小路西遺跡の武家屋敷出土の陶磁器セットなどと共通する。つまり戦国期の権力者が求めた価値観は鎌倉時代の唐物だったといえよう。そのモデルは先の館などと同様に、足利義政の東山殿の座敷飾りを記したとされる「君台観左右帳記」などに凝縮されている足利将軍とその周辺の同朋衆と呼ばれる芸術家達が培った価値観にあった。そのことは、鎌倉時代が単に唐物が豊富に流入した時代というだけでなく、東国から京都にはいった室町将軍が、自分たち武家のアイデンティティを鎌倉将軍に求めたことではなかったか。それは将軍御成をはじめ、おう飯、式三献など、重要な武家儀礼には、鎌倉将軍から引き継いだものが多いことと通じる。そうした都の政治的、文化的な権威に裏付けられた唐物類を所有し、規範に則って飾ることが、一定の階層にとってステータスシンボルとして必要不可欠であったことを示している。

威信財が機能する空間には、3つの場があった。ハレの空間は、儀式空間である「表」と、文芸・遊芸、饗宴空間である「奥」とに分かれる。唐物荘厳を主体とする座敷飾りは会所や茶座敷などの奥の空間の道具である。表である主殿の儀式空間では、土器=かわらけが主役であり、それは式三献をはじめとする儀式における権威の象徴としてもっとも意識された道具でもあった。大友氏や大内氏の発掘成果にみるように、地方の大名が特定の時期に京都系の手づくねかわらけの受容と模倣を行うことは、政治的、文化的な画期として重要な意味を表現していることが確認できる。三つ目が、ケの場における高級什器の使用である。

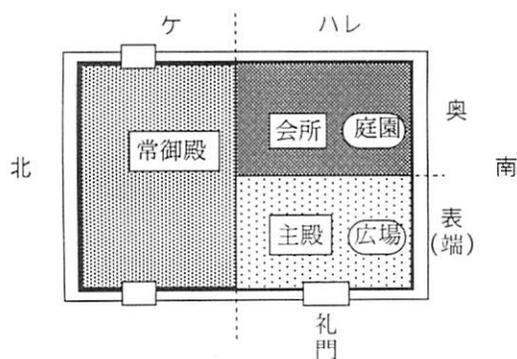
「貴賤群集して、天長地久の祈りを請う。諸民袖を重ねて、千秋万歳の楽しみに誇るものなり」永禄11年（1568）、後に15代室町将軍となる足利義秋の朝倉館御成の晴れやかな情景を、「朝倉始末記」はこう描写した。朝倉義景は、このイベントに国の主人たる最大限の権威を誇示し、それを都から来た公卿達はいうまでもなく、路上に集まった群衆をふくめ、内外、上下にみせることに大きな意味を認めたのである。始末記は最後にこう結んでいる。「誠にこれ四夷治めざるに治まり、衆民服さざるに服す。恐らくは花山に馬を放ち、桃林に牛を繋ぎし、世にも超えて安寧なるものなり。」戦国大名をはじめ権力者が、自分の権力の正当性を誇示し、内外の反勢力から身を守るために使ったのは、槍や鉄砲といった武力だけではなかった。特に地方の権力者にとって、館の空間やハレの場で、将軍を頂点とする規範の世界をそこに具現することは、自らの立場を権威づけ、権力者としての徳を示すことであった。そして、それは将軍の権威が裏打ちするもうひとつの武器ともなったのである。

# 越前・朝倉館模式図

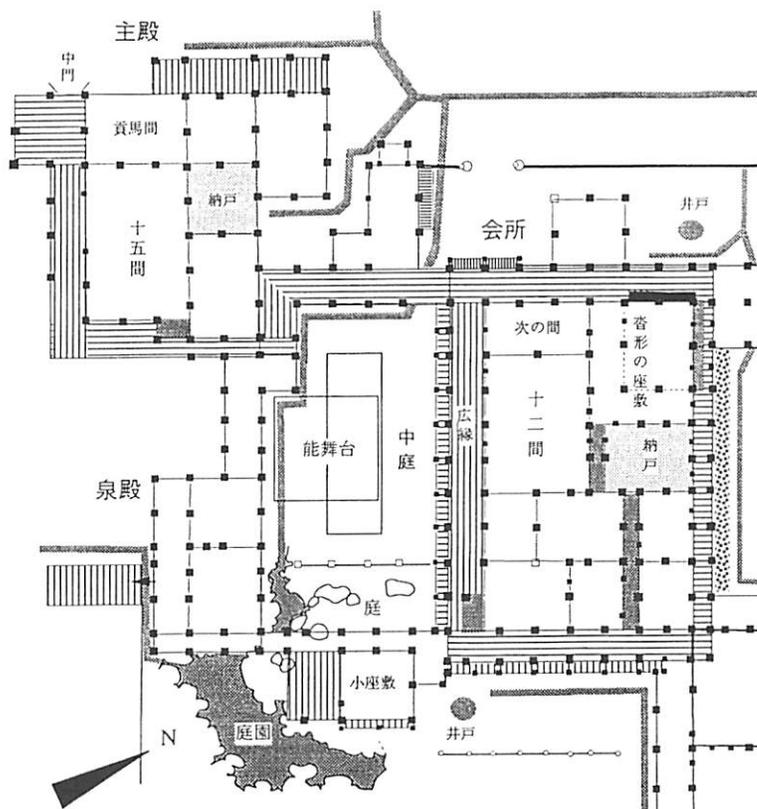


	主要建物・施設	行事	機能	意識・原理	室礼
表	主殿（寢殿） +広場	杯事	儀式	主従関係の確認・契約	和様
奥	会所（広間） +庭園	饗宴 +献儀	宴会 芸能	身分関係の積極的な否定 寄合「一味同心」「一座建立」	唐様

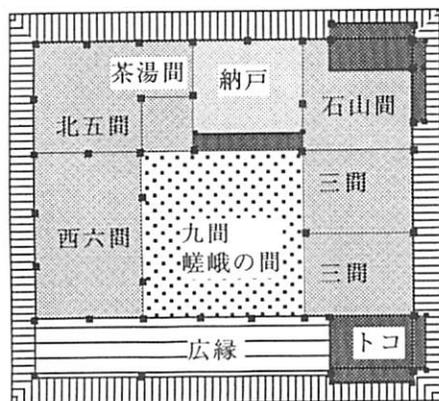
表2 主殿と会所の空間比較



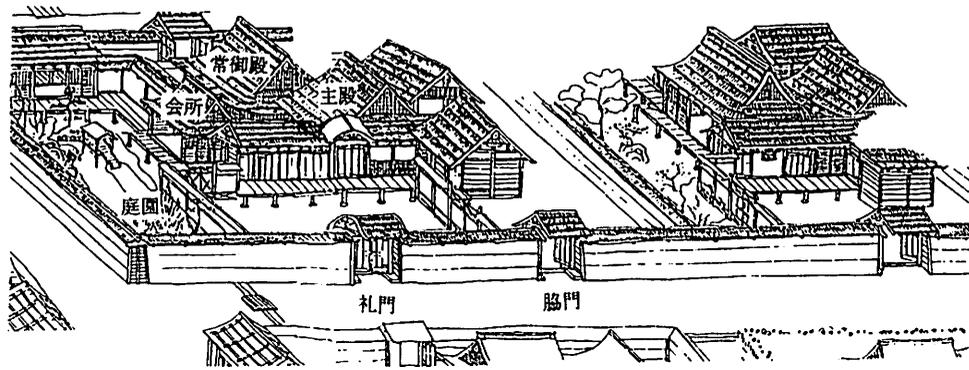
都型の館・屋敷の空間概念



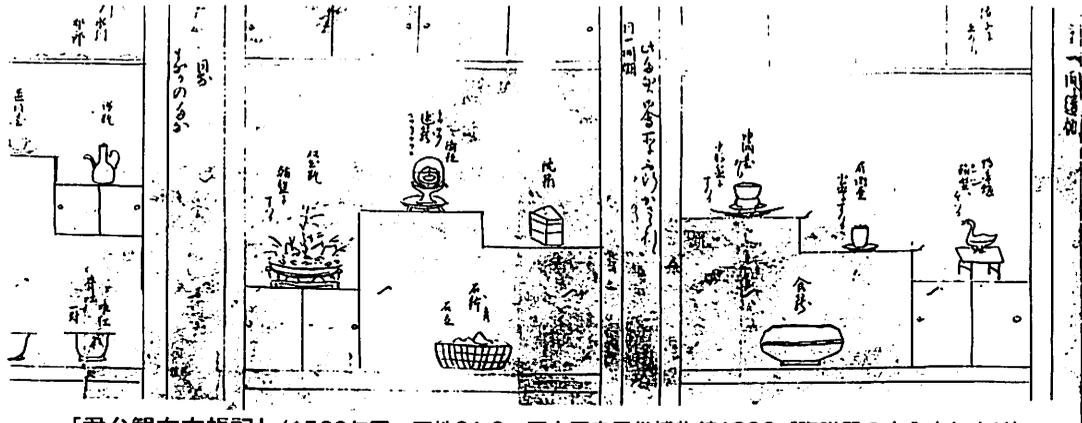
朝倉館中心部建物復元



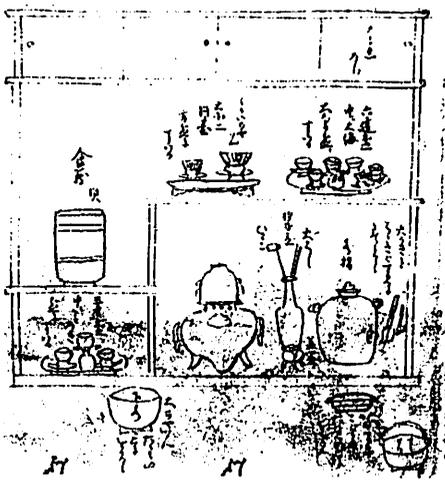
東山殿会所の間取り復元  
(宮上茂復元図より)



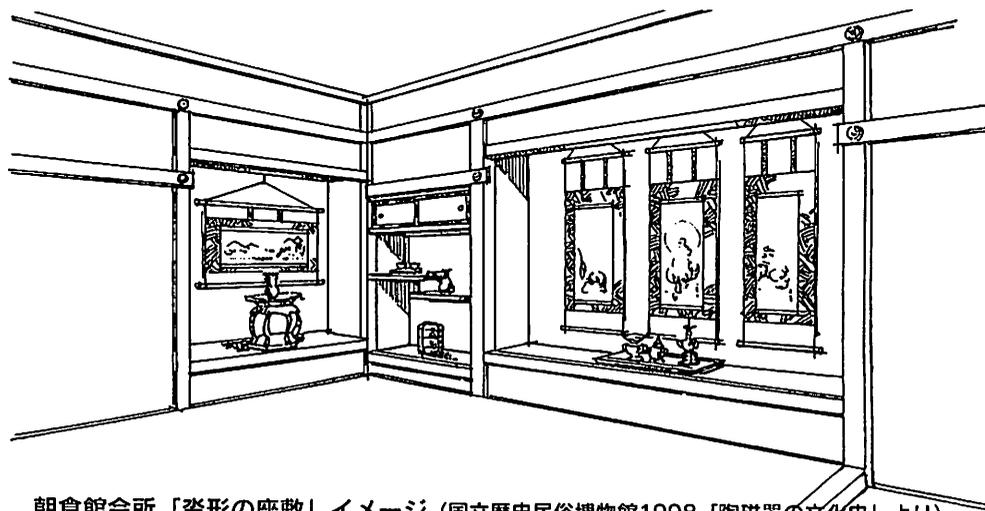
洛中洛外図の細川管領邸と典厩邸 (平井聖1982「図説日本住宅の歴史」)



「君台観左右帳記」(1560年写 天地31.9 国立歴史民俗博物館1998「陶磁器の文化史」より)

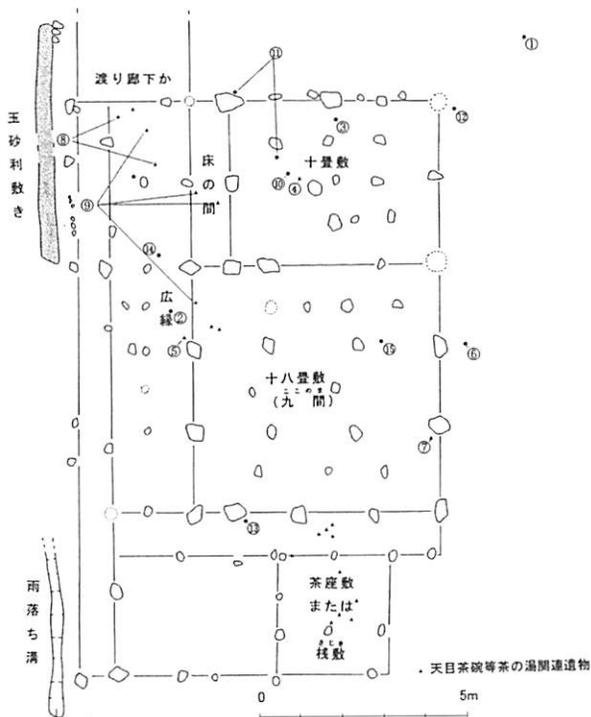
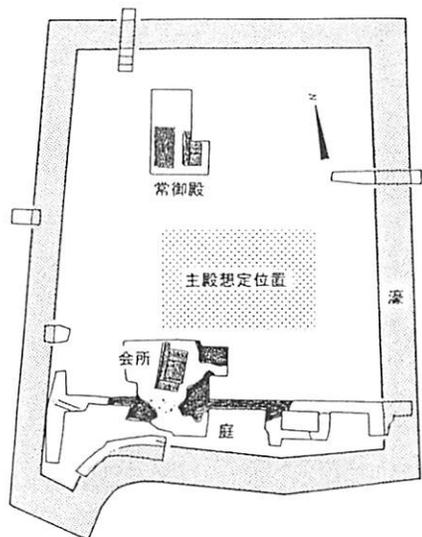


- 「朝倉義景亭御成記」(内閣文庫本 福井市史より)
- 公方様御元服付而御成 永禄十一(戊卯)月廿一日
- 御沓形ノ御座敷ノカサリ
- 一 御座敷 三幅 本尊門拍風香 四座敷 三具足コトウ 卓
  - 一 御座敷 一幅山水 牧漢筆 花瓶コトウ 卓
  - 一 御盆 盆 湯瓶 茶壺 盆背地 御食籠仙香立
  - 御書院
  - 一 双花瓶 コトウ 勅筆 文沈
  - みつしの御棚 朗詠二巻 左伝十冊
  - 一 御硯 文台
  - 文沈 引合一帖 杉原一帖 香合 長盆 松皮
  - 一 御茶湯 タイスノ中
  - 小つほ 真ノ手箱
  - 御けんさん 長盆 水さし 桶尺立 水こぼし
  - 一たんすの中 御けんさん二金銀 同台二茶せんをき
- 以上

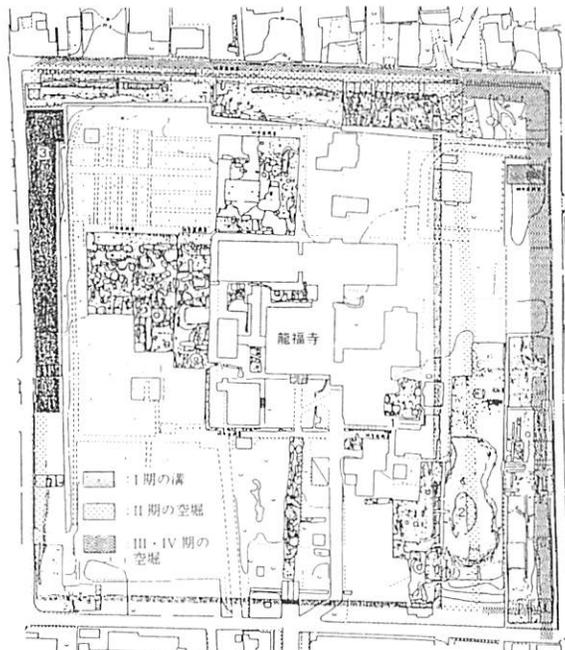


朝倉館会所「沓形の座敷」イメージ (国立歴史民俗博物館1998「陶磁器の文化史」より)

阿波・勝端館模式図

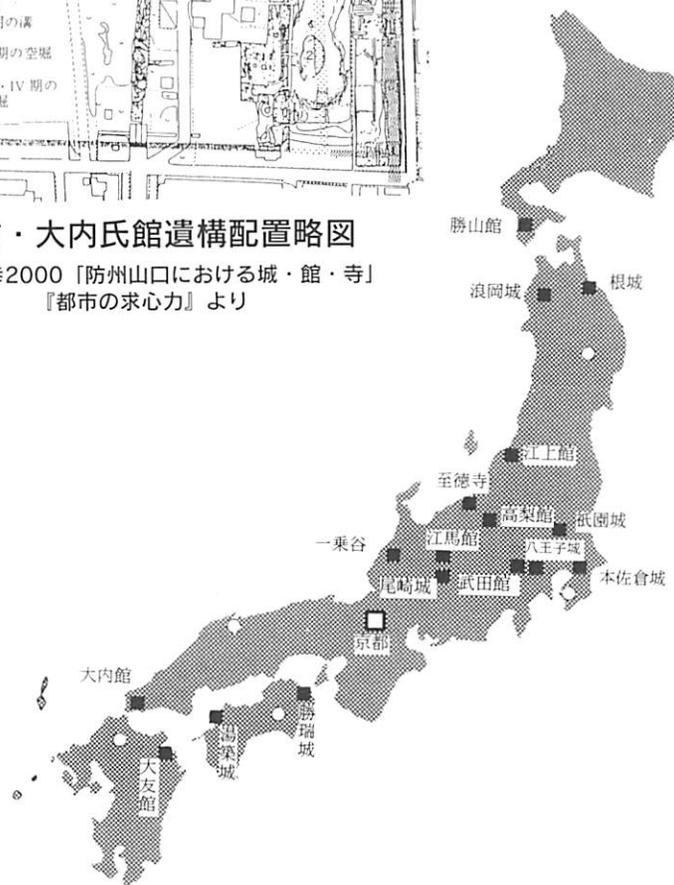


藍住町教委2000「勝端城館跡概要説明資料」より

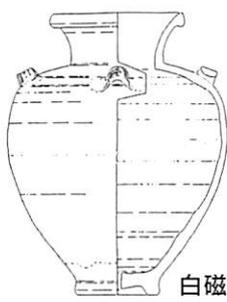


周防・大内氏館遺構配置略図

古賀信幸2000「防州山口における城・館・寺」  
『都市の求心力』より



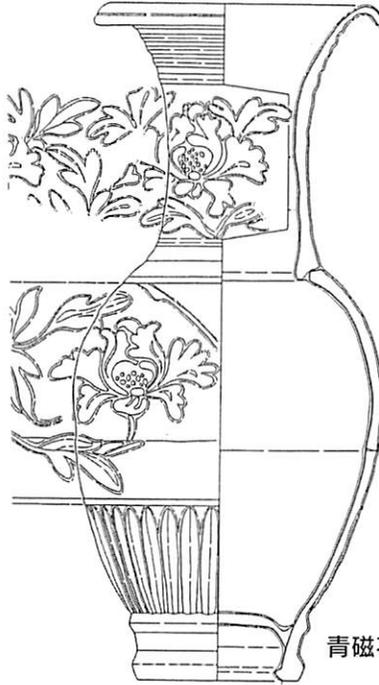
	白磁梅瓶・四耳壺	青磁盤	青磁酒海壺	青磁花生	青磁太鼓胴盤	青磁器台	天目茶碗・茶入	元代染付	その他	庭園
勝山館		○		○			○			?
浪岡城	○	○	○			○	○		陶枕	■
根城	○	○	○	○			○		馬上杯、玉壺春	■
至徳寺	○	○	○	○		○	○	○玉壺春	釉裏紅玉壺春、碗	
高梨館		○	○	○	○	○	○		耳かわらけ多い	○
朝倉館		○	○	○	○	○	○	○酒海壺、盤	高麗青磁陶枕、定窯白磁鉢	○
本佐倉城	○	○	○	○			○			
武田館	○	○	○		○		○	○酒海壺	宋胡録香合	○
八王子城	○	○	○	○		○	○		ベネチアングラス	○
祇園城	○	○		○			○		浮牡丹大香炉	
湯築城	○	○	○	○	○		○		高麗青磁瓶子	○
江上館	○	○	○	○		○	○			■
尾崎城	○	○	○	○	○	○	○	○皿	馬上杯、朝顔型天目	■
江馬館	○	○		○			○		高麗青磁碗	○



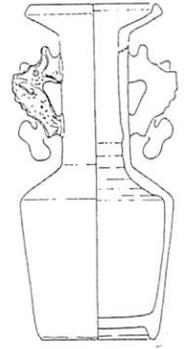
白磁四耳壺



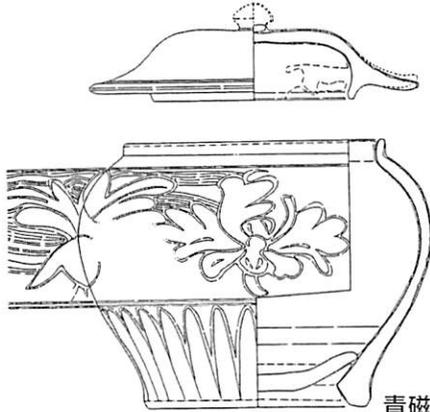
白磁梅瓶



青磁花瓶



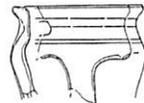
青磁花生



青磁酒海壺



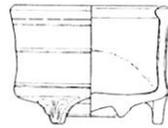
染付酒海壺



青磁器台



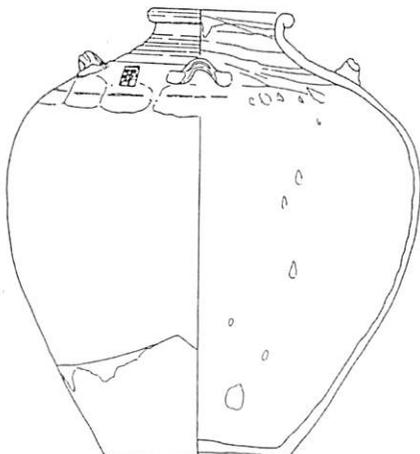
青磁馬上杯



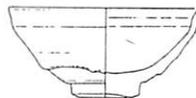
青磁香炉



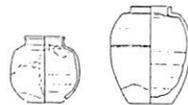
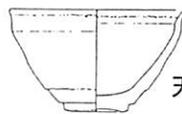
青磁水盤



褐釉四耳壺 (茶壺)



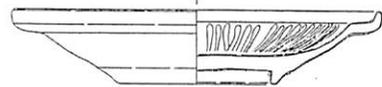
天目茶碗



茶入



青磁盤 (大皿)



戦国時代に好まれた骨董品の中国陶磁

## 第二章

# 中世都市研究会

テーマ「豊後府内の都市と交易」

# 1. 報告① 考古学から見た中世大友府内城下町の成立と構造

坂本 嘉弘 (大分県教育委員会)

## 1. はじめに

### (1) 遺跡の認知

16世紀後半、九州の6ヶ国の守護権を得、南蛮貿易を行い、自らキリスト教に改宗した大友宗麟の拠点となった豊後府内は、古絵図等により、大分川の西岸の自然堤防上にあったことは知られていた。しかし、館跡や御蔵場、万寿寺などの主要施設が、現在の地図に投影され、その具体的な位置や範囲が示されたのは、1987年に刊行された「大分市史」である。それによって、町の規模は、東西約0.7km、南北約2.2kmの規模であったことが明らかになった。

### (2) 調査の起因と経過

府内町の位置が具体的に現在の地図に図示されるようになって10年後、かねてから計画されていた、大分駅周辺総合整備事業が施行段階になった。その事業は、2008年の2巡目大分国体を目指すものでもあり、区画整理に伴う移転地、JR線の高架化、国道10号線の拡幅、県道庄ノ原佐野線の建設等に伴う発掘調査が相次ぐようになり、その調査区は、あたかも、府内町跡に対し、幅約20~30mのトレンチを東西2本と南北1本、設定する状況となった。また、これに民間開発に伴う発掘調査も加わり、短期間に集中的な調査を実施することとなった。

### (3) 調査の方法

発掘調査は、1996年の大分市教育委員会の区画整理事業に伴う調査から開始され、これに1999年から大分県教育委員会が行うJR高架化に伴う調査が加わり、同じ遺跡を2つの体制で調査することになった。そこで両者で調整を行い、出来得る限り同じ方法の調査を実施することとした。その結果、遺跡名は、「中世大友府内城下町跡」とし、「大友氏館跡」以外の部分を、「中世大友府内町跡」とし、県・市問わず、調査順に1次・2次・3次・・・とした。そして「中世大友府内町跡」の調査は現在15次調査まで実施している。

## 2. 中世大友府内城下町の立地

### (1) 中世大友府内城下町の地形

中世大友府内城下町の立地する大分川の西岸の自然堤防は、少なくとも、ふたつの微高地で構成される。すなわち、大分川に近い万寿寺・清忠寺・工座町・上市町のある東側の微高地と、大友館・御蔵場のある西側の微高地である。両者とも最高所は標高5m強で、その間には、府内町跡第9次調査で確認された、南北に延びる浅い鞍部が確認できる。

この自然堤防の形成は、東側微高地の府内町跡第7次調査で見ると、下部になるほど粗くなる砂質土層で構成され、西側微高地は、上部が粘土層、下部が砂層で構成されている。これらの自然堤防の形成時期は、府内町跡第5次調査で、下層の砂層から4世紀代の土器が出土し、上部の中世遺構の検出面である粘土層が無遺物層であること、府内町跡第7次調査の砂層上部で8世紀代の遺構・遺物が出土していることから、この間に形成されたものと推測できる。なお、第5・7・8次調査で検出された井戸は標高約2mの位置で湧水する。

### (2) 中世大友府内城下町の範囲

中世大友府内城下町の範囲は、1987年の『大分市史』刊行の段階でほぼ確定できていた。またその

立地する沖積地の分析もすでにされている。それによると、中世府内町の範囲は、大分川を東の境にし、西端は、現在の上野丘陵に通ずる道路周辺を想定している。そこで発掘調査を実施してみると、府内城下町の南西から西側にかけての位置、すなわち、真蔭池周辺から上野丘陵の北側に沿ったJR久大線沿い、そして、その北側にかけては、低湿地特有の青灰色粘質土層が分布しており、生活の痕跡は全く認められなかった。さながら「深田」のような状況である。こうした低地は現在の地形でも読み取れ、発掘調査で確認された位置から、古絵図の大分川河口沿いに記載されている「舟入」方向にかけて続いており、これが中世大友府内城下町の西端と考える。

なお、御蔵場が扇形をしているのは、こうした低湿地に制約された結果と言える。

### 3. 中世大友府内城下町跡出土土師器の編年

中世大友府内城下町跡の発掘調査は、大分市教育委員会の大友氏館跡や推定横小路町跡などの調査を端緒とする。その調査で出土した土師器の中で、白色をした手づくね土器である京都系土師器が注目され、16世紀から17世紀に至る時期を、1期から5期まで区分する編年案などが提示されている。一方1999年から開始した大分県教委の調査では、大友氏館跡の周辺を調査したが、層位や遺構の切り合いなどから、京都系土師器に先行する土師器群の良好な資料が出土した。

そこで、中世大友府内城下町跡の調査には、多数の調査班が担当しており、各調査区で検出される遺構に対する時期の共通認識を持つため、14世紀から16世紀の土師器編年を作成した。この編年案は、各調査区で、さらに検討・修正を加えながら使用している。

#### (1) 14世紀後半から15世紀前半

土坑から出土した一括資料である。口径12cm前後と7.5cmの大小の2器種がある。底部はいずれも、口径の約3分の2を測る大きさで、糸切り底である。器面は横方向の回転によるナデで仕上げ、口縁部は外傾し、口唇部は尖る。

#### (2) 15世紀後半から16世紀初頭

土坑内に一括廃棄された土器群、溝の最下部の一括資料、祭祀行為による一括埋納土器で、京都系土師器を全く含まない。口径は14cm弱から7cm強まであり、少なくとも3~4法量の存在が推測できるが、その境は明瞭でない。底部は小さく、口縁部は「逆八」の字状に開き、口唇部断面は「コ」の字状に成形される。外面は横ナデであるが、内面は強い指押さえ、または工具によるらせん状の段が付く。底部は糸切り底である。

この土器は、最新時期で京都系土師器が伴う。それから推測すると、より古式のものは、製作時の粘土柱からの切り離しの際の痕跡か、底部の端が直立し、口縁部端部にかけて内湾気味になる。内部の強いらせん状の指ナデは、内底部中央までおよび、えぐれている。これが、新しくなるにつれ、底部からの「八」の字状の立ち上がり部が丸みを帯び、口縁部が外反し、口唇部は丸みを帯びる。また、内底部の中央は横ナデで、平坦に仕上げられる。

これらの土器群には、15世紀後半に編年されている、備前焼の播鉢や青磁碗が伴う。

#### (3) 16世紀前葉

溝の上部で近接して出土した一括資料、土坑から廃棄状態で出土した資料である。前時期からのロク系土師器に、新しく京都系土師器が伴う。

ロク系土師器は、糸切りのある底部からの立ち上がり部は、丸みを帯び、口縁部は明らかに外反する。そして口唇部断面は、尖るように丸みを帯びる。外面は横ナデであるが、内面には工具によるらせん状の沈線があり、中央部はナデで平坦に仕上げられている。一方手づくねで作られる出現期の

京都系土師器は、「逆八」の字状に口縁部が立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられている。器壁は薄く、特に底部は薄い。側面観が扁平な逆台形をしている。

この他、こうした系統の異なる技法の折衷と考えられる土師器もこの時期のみに存在する。ひとつは、口ク口引きで、内外面ナデ仕上げである。しかし、底部からの立ち上がり部の外面に段々が付き、外反する口縁端部の形状は京都系土師器に類似する。もうひとつは、胎土が京都系土師器と同じであるが、技法は口ク口引きで、内外面横方向のナデ仕上げであり、段や沈線はない。

京都系土師器の出現については、周防国大内氏の関連や、京都との直接的な導入などが考えられている。ここでは、小野貴史・塩地潤一が論じた「式三献」に代表される室町幕府からの儀礼の導入時期である天文6年(1537)とするが、今後の検討も必要である。なお、共伴する備前焼の播鉢は、16世紀代に編年されているものである。

#### (4) 16世紀中頃から後葉

溝の上面で一括して廃棄された約30点の資料である。口ク口系土師器は含まれず、法量は明瞭に16cm・14.3cm前後・12~13cm・10.5cm前後・8.2cmの5法量に分かれる。口縁部は横方向のナデで、外面は、強い指ナデで、凹線状にくぼむ。このため、口縁端部が急に外反する形態になる。

同じ形態の京都系土師器を出土する土坑からは、16世紀代に編年されている備前焼の播鉢と一緒に出土している。

#### (5) 16世紀後葉から末

大友氏館の池跡の最終時期や、近世初期の下層にある島津氏侵入(1586)の際の火災面やその面に掘り込まれた遺構をこの時期に該当させる。前時期に比較すると、口縁部外面の指ナデは弱くなる。その一方、器壁は厚くなる。また、口縁部に比べ器高が高い塊形になる京都系土師器と同じ胎土と製作方法で作られた新しい器種の出現もある。

この時期に伴う備前焼の播鉢は、交差播り目がみられ、その編年では、16世紀末に位置づけられており、整合する。

## 4. 中世大友府内町の成立

### (1) 15世紀以前

中世大友府内町のある大分川西岸地域の状況についての初見的な記述は、天喜元年(1053)にも「市河」と呼ばれる河原市の存在を示すものがある。その後、文暦元年(1234)と仁治3年(1242)に「府中」として登場する。

しかし、現在までの発掘調査で確実に確認される最古の時期は、14世紀代で、府内町跡第6次調査の大溝や、府内町跡第5・8次調査で検出した土坑などである。中でも府内町跡第6次調査の大溝は、徳治元年(1306)の万寿寺建立に近い時期であり、注目される。また、文和4年(1355)に万寿寺の「北辺屋敷畠地」の記述があり、万寿寺の存在と発掘調査とは整合する。

府内町跡第5・8次調査でも14世紀の遺構は確認されているが、土坑程度の掘り込みで、大きな区割り事業を伴うものではない。大友氏館跡でも、第6次調査の主殿の位置から14世紀代の土師器が出土しているが、15・16世紀代の土師器に混入しており、遺構は明確でない。

このように、11世紀後半から13世紀の「市河」や「府中」については、現在までの発掘調査で場所を示す遺物・遺構は確認できていない。

## (2) 15世紀前半

15世紀前半になると、府内町跡第7・8次調査で、大規模な区画の溝が確認されている。府内町跡第7次調査で検出された大規模な区画の溝は、大路沿いの両側で確認された。調査範囲が狭いため明確な方位を知ることは出来ないが、大路に並行(N-10°-E)する可能性が強い。また、この大路から約85m西側で、同じ方向に延びる同時期の溝を検出している。その規模や位置から、万寿寺に関連する施設が存在したものであろうか。府内町跡第8次調査で検出した溝は、東に行くほど深さを増し、断面が「V」字になっている。その方向は、府内町跡第7次調査で道路断面を確認した東の大路に直交(W-10°-N)する。

また、大友氏館の主殿部にあたる大友館6次調査では、14世紀後半から15世紀前半に位置づけられる掘り込み地業を伴う整地地業がある。その後の遺構の重複状況を見ると、大友氏がこの場所に館を構えることを証明する、遡り得る最古の時期といえる。

現在までの発掘調査で検出された、この時期の遺構は、以上の3ヶ所のみであるが、中世大友府内町の大路の中でも、方位の異なる上市町・工座町・下市町等がある大路(N-10°-E)を中心とした町割が、万寿寺北方地域に形成されていた可能性が強い。また、大友氏館もこの時期には、何らかの形態で存在していたと推測できる。

## (3) 15世紀後半から16世紀初頭

この時期の遺構は、各所に存在する。まず、大友氏館では、庭園部の池の最初の掘削と、主殿部を築造するための盛土作業が行われている。また、館の中央にあたる大友氏館跡第4次調査では、この時期の整地作業の痕跡を検出している。

府内町では、横小路町の道路の下位で、15世紀後半から16世紀初頭の方位の異なる溝が検出されており、道路構築以前にも何らかの地割の存在が指摘されている。また、大友館の南の16世紀中ごろに築かれた御蔵場の土塀の基礎の下から、15世紀後半から16世紀初頭の「L」字に東に曲がる大溝(W-9°-N)と、それに囲まれた場所で、大小の土坑が検出されている。この調査区の東に隣接する第8次調査では、並行する15世紀から16世紀初頭の2条の溝に挟まれた道路状の遺構(W-4°-N)も検出されている。

さらに、万寿寺では、14世紀の大溝は埋まり、方向のみを踏襲した、異なる区割りがあり、万寿寺の南境は北方に移動していると考えられている。そして、府内町跡第12次調査では、大友氏館の東側大路の下部にも15世紀代の溝が確認されている。

このように、15世紀後半から16世紀初頭には、何らかのかたちで、大友館の北方までの、府内の町割区画が確認できる。

## (4) 16世紀前葉

この時期の区画の溝は各所で検出されている。まず、大友氏館内部では、庭園の池の拡張改造が行われている。さらに、館内では、西境中央に近い位置で「L」字に屈曲する掘り込み事業を伴う土塁(N-4°-E)、北境を区画する最初の版築状の土塁、中央部では二町四方の館を東西に2分する溝(N-4°-E)が検出されている。これらの遺構の存在は、大友氏館が最終的には二町四方になる以前に、異なる規模、形態の区画を持つ館が存在していたものを、この時期に造成したものと考えられる。

一方府内の町は、府内町跡第5次調査の御蔵場の土塁の前段階とも言える2条の並行する溝(W-4°-N)と、これとは交差しないが、北方の大友氏館方向に直角に延びる溝(N-4°-E)などが検出されている。

また、これらの方位は、15世紀後半から16世紀初頭とは異なり、座標北方向に近くなる。なお、方

位（W-4°-N）のみで見ると、御蔵場の土堀の基礎と考えられる土壘状遺構の東方の延長線上には、万寿寺の北縁を限る幅約20mの堀状痕跡（現状水田）がある。この堀は、大分川から続いており、大友氏館の東側を南北に通る大路まで掘り込まれている。

#### (5)16世紀中頃から後半

この時期の遺構は、府内古図に描かれたものと考えられる。中には、16世紀前葉に構築され、廃絶時期がこの時期になるものも含まれる。また、古図には描かれていない遺構も存在する。

大友氏館では、東西約66mの大形景石を配した最終段階の庭園があり、館西部では土壘を削平する普請を行っている。また、池の北側の中心部には、主殿と考えられる礎石建物が建立されていた痕跡が確認された。さらに北側の境では、北方に拡張されながら造られた2本の溝に挟まれた最後の土壘がある。

一方府内の町では、16世紀前葉に構築され、以後継続的に使われてきた横小路町の道路が16世紀末に廃絶している。また、府内町跡第4次調査で検出された名ヶ小路町の道路もこの時期に存在することが明らかにされている。さらに、府内町跡第5次調査で確認された御蔵場の土堀の基礎もこの時期に築造する。それは、前時期と同じ場所にあった溝を埋め、版築状に基礎を固め、両側に溝を並行に掘る構造をもつものである。府内町跡第7次調査では、約20mの間隔で南北方向の町屋を区画する南北の溝が検出されている。そして、府内町跡第11・12次調査では、大友氏館の東側の大路が検出されている。その方位は、N-4°-Eである。

また、古図には表現されていない遺構も検出されている。府内町跡第8次調査で検出された、大友館南側の南北方向の溝である。館の東側を限る可能性のある土壘から半町西側にあたり、N-4°-Eを示す。埋め立てられたのは16世紀後葉から末葉である。この掘り込みからさらに半町西側、二町四方と想定されている大友氏館の中央部を南北に区切る方向に延びる溝と、その東側にある土壘状の遺構も描かれていない。これらの遺構は、古絵図に描かれている大友氏館の南側にある道路を南北に分断するように構築されている。

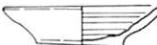
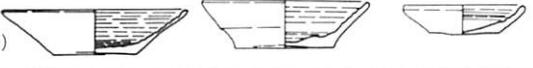
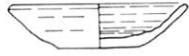
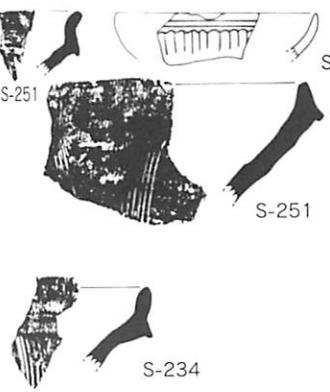
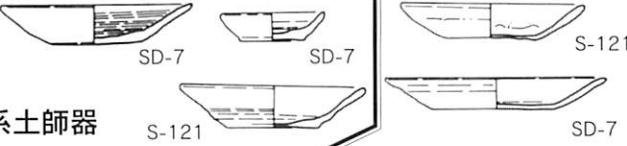
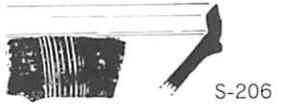
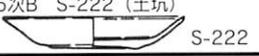
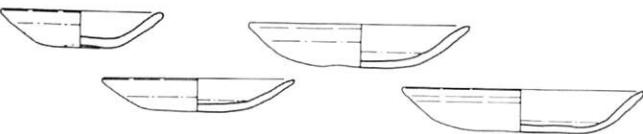
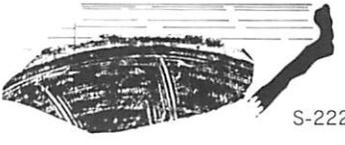
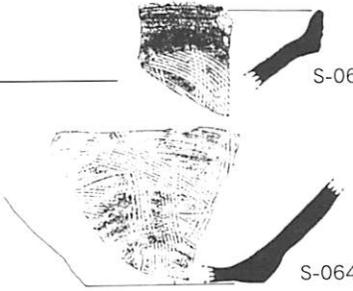
## 5.まとめ

以上、中世大友府内城下町跡の発掘調査で検出された溝や道路・石列や土壘状の遺構を、都市計画にかかわるものと理解すると、N-10°-EとN-4°-Eの2つの基本軸があることがわかる。これを方位ごとに概略すると、N-10°-Eは、14世紀後半から15世紀中頃までは、大分川沿いの大路を軸とし、これに直角に交わる区画で町づくりが行われている。御所小路町や名ヶ小路町の道路はW-10°-Nで、東の大路に直交する。大友氏館から東側の小路は、変更されることなく、16世紀末まで存続する。

N-4°-Eの軸線は、15世紀後半から出現し、16世紀前葉から各地区で見られる。御蔵場の周辺の土壘状遺構や、万寿寺の北境にある幅20m近い堀など大形土木事業も、この方位に直交する。大友氏館跡においても北境を調査した第7次調査でも、16世紀後半はW-5°-N、西側境で検出した16世紀中頃の掘り込み地業を伴う土壘、府内町跡第12次調査で検出した16世紀後半の大友氏館東側大路の可能性が強い道路もN-4°-Eを示す。

さらに大友氏館の東側の御所小路町も府内町跡第7次調査で見ると、道路は変更されないものの、町屋の町割はN-4°-Eに変更されている。

このように、最終的には15世紀後半から開始される、N-4°-Eを基本軸とした町割り、新たな府内城下町の都市建設を行っていると言える。

14世紀後半?	5次B S-236 (土坑) S-252 (土坑) 	年代參考資料
15世紀後半、16世紀初頭	親繁・政親・義右・親治・義長 5次B S-245 (土坑)  S-251 (溝下層)  S-134 (祭祀土坑)  S-230 (土坑)  S-234 (土坑) 	
16世紀前葉	義鑑 5次A SD-7(溝上部) 5次B S-121 (土坑)  口口系土師器	
16世紀後葉	義鎮 5次B S-222 (土坑)  5次B S-105 (溝上部)  5次B S-106 (S-105を切る土坑)  京都系土師器	
16世紀後葉、末葉	義統 館1次 池Ⅲ期  4次 S-160  1587年 4次 S-064 	

中世大友府内城下町跡 出土土師器 編年表 (2001年6月試案)

## 2. 報告② 文献・絵図からみた大友館と府内の町 ～都市と国際性～

鹿毛敏夫（大分県立先哲史料館）

### 1. 中世都市府内の発展

#### (1) 府内河原市とその町的发展

中世の豊後府内は、大分川が別府湾に注ぐ河口の西岸に営まれた水辺の町であった。

11世紀半ば平安末期のこの大分川河口西岸付近の様子については、宇佐宮御神領大鏡の大分郡勝津留の四至記載が注目される。勝津留は荏隈・笠和・判太の三郷の境に11世紀半ばに形成された別符であり、やがて鎌倉期に豊後に入部した大友氏が隆国府勝津留に守護所を設置したことにより、豊後支配の中核機能を担うことになる。現大分市においては、上野丘台地東端部とその東北平野部に該当する。宇佐宮御神領大鏡の天喜元（1053）年の申文によるその四至は「東限北廻二方市河也、南石屋崎際、限西高国府岸上額畠際」、また承保4（1077）年の申状でも「東限市河、南限石屋寺前、西限高坂并横道、北限市河并田中寺」とある。この記述によると、11世紀後半の勝津留東部・北部には「市河」と呼称される地域があり、しかもそれは「東限北廻二方市河也」の記載のように勝津留の東部から北部へと巡るように形成されていたことがわかる。戦国期の府内の町を描いたものとされる複数の古図によれば、上野台地東岸を北流する大分川は、現長浜町付近で大きくうねり西流して別府湾に注いでいる。つまり府内の町並みを東から北へ取り囲むように流れており、市河の「河」とはこの大分川の流れを指すものと思われる。そして「市河」との呼称から推し測れば、西に大きくうねるこの大分川河口西岸に河原市が形成されていた可能性が指摘できる。

この河原市を想定した地区にまつわって「雉城雑誌」は、「建久年中、大友左近将監能直、下総国古河ノ市ノ例二倣、同所ノ市蛭子ヲ若宮ノ神人矢野氏、畠成氏ヲシテ勸進ス。其始八宮殿ヲ工座町ニ営ミ、二月ヨリ十二月ニ至テ一・六ノ日ヲ以、府民ニ市ヲ立シム」と記している。大友氏初代能直が12世紀末の建久年中に工座町に市蛭子を勸進し、一と六の日に市立を行った、という記述である。記載内容をそのまま信用するわけにはいかないが、能直によって市蛭子が勸進されたという工座町は、戦国期府内古図で万寿寺の北方、大分川西岸の町並みの中央部に確認でき、先の平安末期以来の河原市想定地区に一致することは注目に値する。

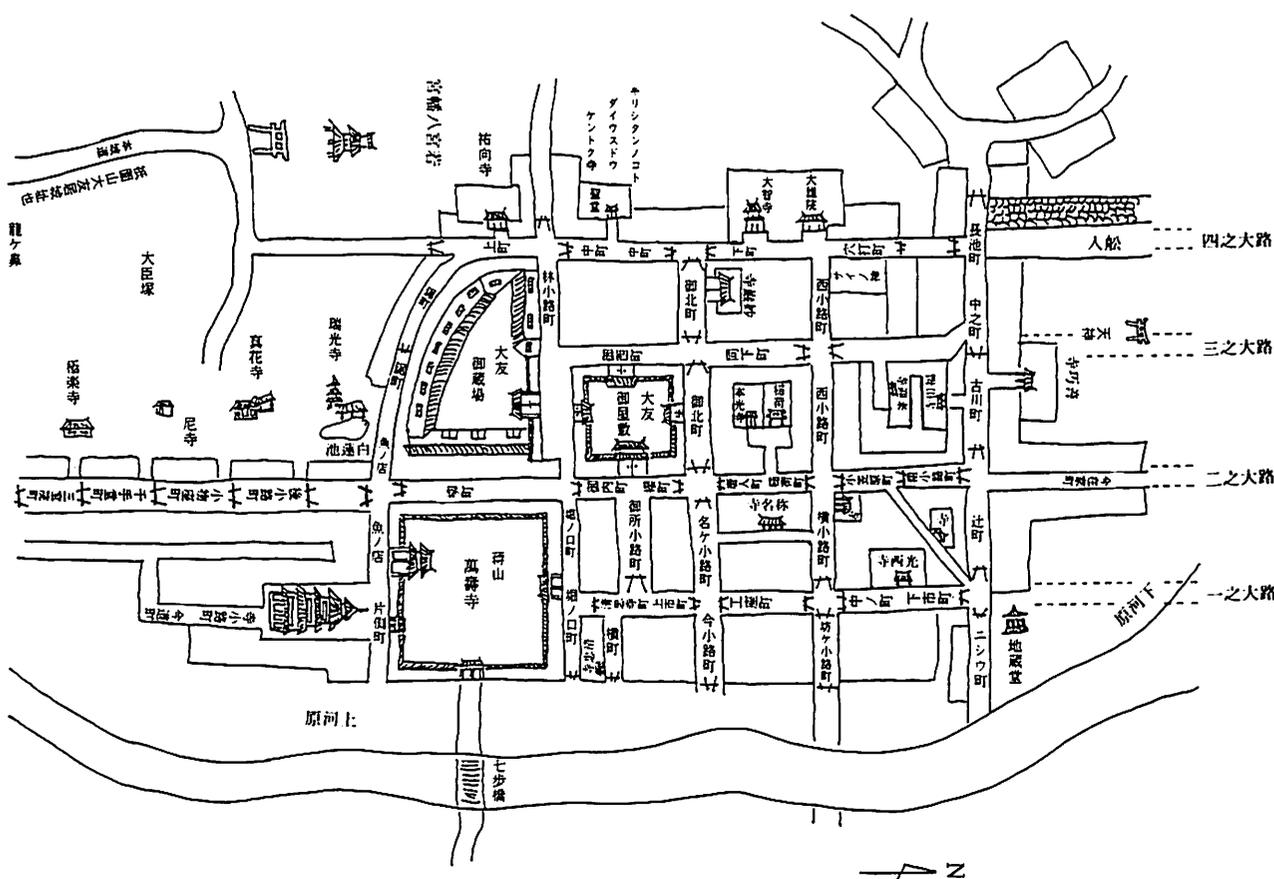
鎌倉期のこの府内河原市町に関する確かな史料として確認できるのは、仁治3（1242）年正月15日付「新御成敗状」<sup>（巻末 文献史料①）</sup>である。全27カ条のうちの9カ条分は、六斎日の殺生・済物納入の懈怠・道祖神社の建立・町での押し買い・指笠での往反・大路通行の妨害・産屋の建立・墓所の設置等々の禁止を定めた内容であり、大友氏が豊後の守護として発した府内（府中）禁制と考えられる。鎌倉期の府内の町において、守護公権力がこれらの禁制を出さねばならないほど、町人たちによる活発な社会経済活動が行われていたことに着目すべきであり、実はこうした法に抵触する人間臭い諸活動こそ、いかにも中世的な市町の実態と考えたい。

ところで府内河原市町の南方に位置する大友氏の菩提寺万寿寺は、徳治元（1306）年、大友氏5代貞親の再興とされる。文和4（1355）年の万寿寺首座智徹等の連署状によると、判多郷や植田荘光吉新開などと並んで「万寿寺北辺屋敷畠地」がその寺領に組み込まれており、14世紀半ばの堀ノ口町から清忠寺町にかけては町屋敷と畠地が混在する状況であったことがわかる。

## (2) 戦国都市府内の空間構造

古代末から鎌倉そして南北朝期にかけて、市の発生から六斎市やがて町屋の形成へと発展した府内は、更に戦国期の16世紀になると一段と大きな街区をもつ町へと成長していく。戦国期の府内古図によると、当時の府内の町は南北方向に伸びる4本の大路と、東西方向に伸びる5本の小路によって区画されていたことがわかる。ここでは、便宜上、町を南北に貫く4本の大路を大分川に近い東から順に一・二・三・四之大路と名付け、戦国都市府内における各町筋の特徴を描出したい。

まず最も東側の「一之大路」筋であるが、大分川に沿ったこの町筋が平安末期の河原市に起源をもつ中世都市府内の発祥の地である。特に上市町から工座町、中ノ町、下市町にかけてが鎌倉期から戦国期にかけて町人による経済活動が活発に行われた府内随一の商・職人街である。また「一之大路」筋南方にある万寿寺は、寺に南面する寺小路町一帯が門前町であったと想定できる。更に、古図中の万寿寺に築地堀が巡らされていることや、永正4（1507）年の柞原宮造嘗間別銭の徴収に際して、大友氏18代親治が「一間別五文定」の間別銭を「万寿寺寺内」には免除するとの文面があることから、博多で検証されている称名寺「官内」、聖福寺「関内」同様に、万寿寺「寺内」と称する寺家築地堀内町屋敷が存在していたと推測される。ガスパル・ピレラの万寿寺に関する「坊主百五十人を有し、収入多く、寺は建築後年を経たるが故に新しからざれども、地所甚だ広く」という記述や、「此僧院は豊後の諸王の墓所にして、之が為め収入豊なり」との記載にみえる「収入」は、この「寺内」や門前の町



高山氏蔵「戦国期府内古図」模式図

屋敷からの収益を含むものと予想される。

次に「二之大路」筋に目を転じると、北の今在家町から南の三宝院町まで町の中心部を縦断するこの大路が、言わば戦国都市府内のメインストリートである。町の中心に位置する大友館（大友御屋敷とも）は古図では東門を正面とし、その門前には御所小路町（館の門前町）が形成されている。また「二之大路」筋中央の唐人町は、その名の通り渡来系商・職人を中心とした町であった。大友館の南には大友氏の蔵場がある。古図では白壁瓦葺の土蔵がやや変形した敷地を取り囲むように建てられている。これは領国各地から大友氏のもとに運び込まれた段米その他の済物を保管する蔵である。<sup>(文献史料④)</sup>ちなみに、山口古図によると、大内氏の場合は館に隣接して「千石宛倉」10棟が確認でき、大友氏の蔵場にも同規模の蔵が同数程度経営されていたと推測される。大友氏は、この蔵場を近習から構成した蔵番に警固させ、また蔵方役人に蔵物を運用させて年毎の勘定状を提出させる、いわゆる蔵経営を行っている。

この「二之大路」を「一之大路」と比較すると、更に興味深い事実が指摘できる。「大分市史」では「戦国時代の府内復原想定図」を作製している。それは、明治期の字切り図をベースに、府内古図上の道、町名、施設等を現在の地形図上に比定したものであるが、興味深いのは「一之大路」と「二之大路」との間の町空間に歪みが生じていることである。元来、「一之大路」が貫く工座町等の町々は、大分川河口西岸で営まれた河原市に起源をもつものであり、その大路は南北の方位線を全く意識せず、川の流路に規定される形で形成されたいかにも中世的な道である。ところが「二之大路」は、大友館の東築地面に沿って南小路町から後小路町まで方位線に平行に伸びている。館を意識し、いかにも計画性をもって形成された道と言えよう。「一之大路」と「二之大路」の間隔が、北方は広く、南方は狭まるという、古図を現在の地形図上に比定して初めて現れる府内の町の空間構造の歪みは、実は、両大路とそれに沿った町屋の歴史的形成段階の差異を表しているのである。

次に「三之大路」であるが、この街路は大友館の裏通りであり、戦国最末期の形成であろう。

そして「四之大路」であるが、この大路を南に抜けた台地上に守護所上原館（もうひとつの大友館）がある。大路筋の町名も、上原館を意識しての上・中・下町との名称であり、「二之大路」や「三之大路」より古い街路と予想される。町筋の特徴は、サイノ神、大雄院、大智寺、ダイウス堂、祐向寺、そして若宮八幡等の各宗教勢力の楼閣が建ち並ぶ所にある。サイノ神は、府内町人の民衆信仰によって形成された道祖神社である。下町の大雄院は永正10（1513）年に大友氏19代義長、大智寺は嘉慶元（1387）年に大友氏11代親善の建立とされる。ガスパル・ピレラによると、大智寺には「古き仏像あり、門の入口には木造の甚だ大きく且恐ろしき巨像二箇あり。其一は口を開き又一は口を閉じたり」と、仁王像の存在を窺わせる記述がある。ダイウス堂は、大友氏21代義鎮がキリスト教宣教師に与えた教会堂及び住院のことである。後にこの教会堂と住院は祐向寺のある上町に移されるが、下町の旧教会堂跡では、癩病患者16人収容可能な個室病棟と、外科及び一般内科用の治療所兼医員住宅を備える病院がルイス・デ・アルメイダによって営まれた。

これら戦国期の府内に存在した40数町の町の大半は、文禄2（1593）年の大友氏の改易の後、近世府内藩の新しい城下町に町名ごと引き継がれている。しかし、この「四之大路」筋に属する4つの町は近世府内城下町には継承されていない。このことはこの町筋の居住者が大友氏の改易とともに府内か

ら離反する性格の住人であったことを示しており、府内における大友氏の家臣団武士の居住区であった可能性が指摘される。

### (3) 大友氏の府内の町政策

鎌倉期の府内河原市町が、室町・戦国期にかけてその経済機構を発展させるであろうこと、そしてそのことは町そのものの面的拡大を伴ったであろうことは想像に難くない。特に東を大分川で限られた府内河原市町は、街区を西方へ拡大するはずであるが、町の拡大発展に大名権力として統一性をもたせる目的で設けられたのが、町中心部に位置する大友館と蔵場である。

大友氏20代義鑑は、天文13(1544)年末に「土蔵之材木」を徴用しているが、この史料は府内の蔵場の建設を物語るものと思われる。また義鑑は、天文16(1547)年には「遠侍」(警固武士の詰所)の「引両戸」の建設と「役所」(文庫史料①)「台所」(文庫史料②)の上葺き、及び同年と思われる「乾屋敷」(館敷地北西部の屋敷)と「女中屋」(文庫史料③)の普請も行っており、古図に描かれた2町四方の館内部の諸施設は天文16(1547)年から翌年にかけて建設されたものと推測される。

更に、義鑑から家督を受けた21代義鎮(宗麟)の天正元(1573)年にも、土木事業関連のまとまった史料が確認される。「土圀廻屏」を豊後国内各郷荘に申し付けたので、天役免許は承知しているが今度は馳走奉公せよ、という内容であり、「諸郷」の言葉通り、同内容の文書が植田荘をはじめ安岐郷・笠和郷・荏隈郷・佐賀郷・直入郷の計6郷荘宛で検出されている。この「土圀廻屏」とは、建物の周囲に土塁を築き堀を巡らしたものと思われ、また、安岐郷に対しては付属する「小門」の建設も命じていることから、数ヶ所の小門をもつ非常に規模の大きな廻り土塁と堀であったことがわかる。府内古図には、まさに周囲を大きな築地堀で囲み四方に門をもつ大友館の姿が描かれている。

ところで、府内古図の築地堀周囲の街路及び町の名称を確認すると、「御所小路」「御北」「御内(門前)」等々、大友館に因んだ名前が付けられている。このことは、これらの街路と町の整備が大友館の建設に伴ってのものであり、時期的には館の築地堀が建設された天正元(1573)年以降に作られた街路と町であることを意味している。この館を基準とした町割事業の一環の史料と思われるのが、天正3~6(1575~78)年に比定できる大友氏22代義統の府内「外通」(一之大路)筋での「町人召移」事業である。義統は府内祇園会の山鉾町である「一之大路」筋の町を祇園神領町屋敷と位置づけて、祇園社の神主にその町割り事業を遂行させている。すなわち、府内の町では、天正元(1573)年に建設された大友館の四方の築地堀面を基本軸として、天正3~6(1575~78)年に新しい町割りがなされたと推測される。

なお、天正10(1582)年の義統袖判条々によると、大友氏が府内に代官支配制を敷いたことがわかる。条文からは戦国末期において依然として万寿寺が広大な寺領町屋敷を保有していることがわかるが、「万寿寺築地之内」(寺内町屋敷)や「万寿寺町屋敷」(門前町屋敷)の町人への安堵を、代官柴田筑前入道に管轄させている。更に、「西之屋敷」(大友館西方の御西町の町屋敷)も預け置かせていることから、この段階には館の裏通りの御西町にまで町屋街が拡大していたと推測される。

## 2. 府内の町の国際性

### (1) 大友氏の対外交流

東アジアに開けた九州を本拠とする大友氏とその家臣団は、海に生きる武士衆でもあった。室町幕府が主体となって行った15～16世紀の日明貿易に対し、15代親繁から20代義鑑までの歴代大友当主は何らかの形でそれに関与しており、そこに同氏の対外貿易に対する主体的意思が検出される。特に幕府からの輸出用硫黄の上納要求を受けた大友氏は、その恒常的需要に対応すべく、8代氏時から10代親世の14世紀後半期に、豊後国内の2つの硫黄産地とその搬出地の支配を点から線へと拡大していき、更に「春日丸」等の大型船を利用して門司、赤間関、兵庫等の瀬戸内海各港へ輸送する海上ルートも確立していった。

一方、大友氏自身による私貿易活動についても、宗氏を仲介とした対朝鮮貿易、種子島氏との友好関係を利用した対琉球貿易、中国人貿易商人王直等を相手とした対明貿易に加え、義鎮の「至南蛮被差渡候船」<sup>(文獻史料⑨)</sup>による対東南アジア貿易等、当該期東アジアの広域的流通経済機構のなかで極めて積極的な貿易政策を推進している。なかでも対明貿易においては、貿易の形式に固執する明政府や室町幕府に対し、大友氏の貿易政策はより実質的な商取り引きに重点がおかれていた。弘治2(1556)年の明政府に対する大友義鎮・大内義長兄弟の勘合貿易継承者承認交渉は、中国南方海岸で自らが行おうとする商取り引きに明政府の公認を求めようとするものであったが、その交渉に失敗しても、実質的に通常の私的商取り引き＝倭寇的密貿易を行うことは充分可能であった。そこには、東アジアの冊封体制の枠組みをかい潜って活動する九州の戦国大名の活動実態が検出される。

### (2) 府内に居住した外国人

14世紀後半期以来の大友氏による活発な対外交流活動と大航海時代の時代相を反映して、16世紀の府内には多くの外国人が訪れ、逗留し、居住した。例えば、今小路町には元龜2(1571)年に盧高と陽愛有という2人の中国人が居住していたことが、岡山県邑久町の余慶寺に伝わる梵鐘銘から明らかである。彼らの出身地は中国浙江省台州府と同省温州府平陽県と考えられるが、明のこの東南海岸地域と豊後とは、王直に代表される中国人海商と大友氏が結託して行った私貿易活動によって経済的に結び付いていた地域である。

大友義鎮が永禄年間に移り住んだとされる臼杵は、丹生島城下に9つの町をもつ都市として、16世紀後半に急速に発展した。大友氏の改易直後の文禄2(1593)年の検地帳によると、臼杵唐人町には、「常漢」「徳鳳」「元明」「三宦」「平湖」「二高」等の大陸系の名をもつ人物が居住していたことがわかる。このうちの「元明」は、豊臣秀吉の方広寺大仏造立の際に漆喰塗りの技術職人として馳走奉公した陳元明<sup>(文獻史料⑩)</sup>のことである。系図によると、陳氏は中国の長江(揚子江)の河口に近い江蘇省揚州府から、陳李長の代の永正3(1506)年に肥前に移住し、やがて子の陳覚明が同12(1515)年に「豊後国府内住居」と伝えられている。その後、覚明から義明、そして元明までの3世代73年間にわたって府内(恐らく唐人町)に居住し、天正16(1588)年に臼杵の唐人町に移住したとされる。覚明は智元仏師と呼ばれた仏像師であり、これらの渡来系の人物はかなり高度な技術をもった職人集団であったと推測される。陳元明の事例は、文禄の検地帳に検出される臼杵の町人のなかに、府内からの移住者が相当数含まれている可能性を示唆している。また、天正17(1589)年の府内唐人町には「ゑんはい」

「けんさん」、同19（1591）年には「ふくまん」「月山」等の人名が伊勢参宮者名簿によって確認できるが、彼らもまた陳氏同様の大陸からの渡来系技術職人であったと考えられる。

### （3）分銅の出土と「計屋」

府内の発掘調査によると、横小路町から天秤皿が、林小路町・御所小路町・名ケ小路町からは複数の分銅が出土している。この天秤皿と分銅という中世社会の計量具との関わりで注目されるのが「計屋」の存在である。

府内の上市町に岩田与三兵衛入道という計屋がいた。大友氏の重臣である田原紹忍（親賢）の書状によると、豊前の上毛・下毛郡から府内に訪れる「売買人」は、この計屋岩田氏のもとに荷卸しするよう指定されている。<sup>(文献史料⑨)</sup>計屋は、近世府内城下町では34軒が営業しており、そこでは穀物七嶋（蘭草）の計量を専らとしている。中世の豊後においては、臼杵唐人町に「計屋与三左衛門」、阿南荘の甲斐田市に「はかりや」、佐賀関に「斗屋」が確認でき、いずれも流通経済上の拠点で営業していることがわかる。また、肥後天草の上津浦の「斗屋」は、「小宿」機能を有している。

中世の地域社会における度量衡に関しては、既に荘郷や特定領主の支配領域のみで使用される秤や枴の存在が指摘されているが、大友氏の領国内部においても、国東・安岐・来浦の三ヶ郷内のみで規格統一された秤や、宇佐宮の御許山正覚寺衆から銀子を請け取る際に使用する秤などが確認され、また取り引きの公正化のために「テンヒン秤」に「両方相封ヲ成置」行為も行われている。特に外国船との交渉に際して、豊臣秀吉は長崎での「南蛮船」「唐船」との商取り引きにおいて「てんひん目かねて極置、互やりとり同てんひんたるへき事」との御触れを出しており、また毛利氏の赤間関代官高須氏は「大明国泉州府」の商船との取り引きにおいて「商売等、天平等、秤依天道不可有二家相違者也、白銀堅固無暗裏可定之」との盟約を結んでいる。いずれも商取り引きにおける天秤の公正な使用を規定したもので、売り手と買い手が同一の天秤を用い、規定の「てんひん目」（分銅）を用いることで、銀の公正な秤量を図ろうとしている。

このように、秤の規格の全国統一がなされる以前の中世社会では、流通上の拠点となる都市（市・町）において商取り引きの際の代銀の秤量機能を有する人物の存在が不可欠であった。豊後・肥後・筑後等において流通機構上その機能を担ったのが計屋であり、しかもその職掌の起源は、秤の製造を行う「秤屋」職人ではなく、「計る」行為を生業とする「計屋」商人であった。更に大友氏は、各地の計屋のなかでも、豊後の流通経済の中枢に位置する府内・臼杵・佐賀関の3町に御用計屋<sup>(文献史料⑩)</sup>を設置している。彼らの機能は、大友氏の大名権力膝下の地域経済圏（府内を中心に新都臼杵と港湾都市佐賀関を結ぶ三角経済圏）内で、周辺地域や海外から訪れる商売人が使用しようとする代銀を秤量する機能である。

都市の流通経済機構上、重要な位置と役割（周辺商人の荷卸場、問丸的宿機能、外国商人との商取り引きの窓口）を担う計屋商人は、やがて町の商人司（商人統括者）的な存在となり、仲屋乾通・宗悦のような豪商・貿易商に成長していくことも考えられる。

### 3. 報告③ 戦国時代豊後府内の貿易陶磁器

高 畠 豊 (大分市教育委員会)

#### 1. はじめに

戦国時代の豊後府内町の発掘調査は本年で6年目を迎える。調査の初期より貿易陶磁器が豊富に出土することに注意が向けられ、文献上で知られていた大友氏の貿易活動との関連で注目されてきた。とりわけ第3次調査で検出された大甕埋設遺構 (SX210) 出土遺物は時期推定が可能な一括資料であるばかりでなく、広く東南アジアにまで及ぶ地域からもたらされたものを多数含んでおり、その資料的価値は依然衰えていない。

そこで、ここでは改めて基礎資料としてSX210出土遺物を紹介するとともにその後の調査状況をふまえ、当該地域における貿易陶磁器の特徴的ありようについて現時点での見通しを述べてみたい。

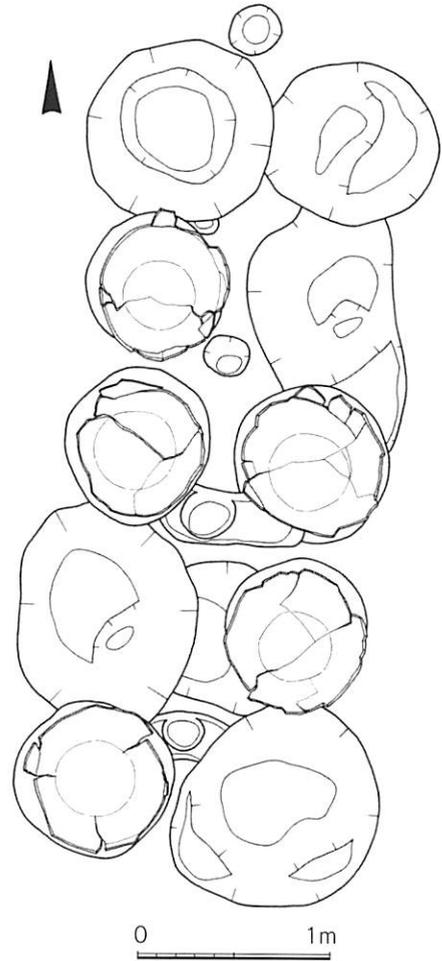
#### 2. 中世大友城下町跡第3次調査

##### 大甕埋設遺構 (SX210) について

中世大友城下町跡第3次調査では、狭い調査面積 (160m<sup>2</sup>) にもかかわらず、大甕埋設遺構 (SX210) や瓦質の井筒を有する井戸 (SE120) 等、16世紀後半～末を主体とする遺構群が多数検出され、調査区南端では、第1次・2次調査で検出された道路状遺構の延長にあたりとみられる整地遺構が検出されている。

大甕埋設遺構SX210は、南北に10基の円形・不正円形の土坑が2列に並行して掘られており、このうち5基には備前焼大甕が埋設されていたものである。甕が出土しなかった土坑も、大甕が出土した土坑と形状や深さがきわめて類似しており、本来は10基の大甕が埋設されていたもので、後に半数の5基の甕が抜き取られたものであろうと推定される。一定の屋敷地の中に所在したものと推定されるが、調査では明確な地割の検出にいたらなかった。大甕はすべて間壁編年V期に比定されるもので一部には「二石入」の刻銘を有するものが認められた。

大甕内からは多量の焼土と炭化物とともに多数の貿易陶磁器および国産陶磁器が出土したが、甕が存在しなかった土坑からも同様の遺物が同様な状態で出土した。これらの遺物には、表面が融解してスリガラス状になったり泡立ったりしたもの、他の陶磁器の釉薬が融着したものなど、二次的被熱の痕跡を明瞭に残すものが多数認められ、さらに異なる土坑・大甕から出土した陶磁器間で複雑な接合関係を有するものが多く認められた。こうした所見から、これらの陶磁器は、火災後に大甕の中と大甕の抜き取り穴とに一度に廃棄されたものである可能性が高いと考えられ、この遺構は最終的に火災処理に用いられたものと推定される。



SX210 平面図 (S=1/40)

### 3.大甕埋設遺構 (SX210) 出土遺物

#### 1) 中国産陶磁器 (第1図～第3図)

最も多いのは、中国産の陶磁器であるが、その中では青花が過半を占めている。供膳具の皿が多く、形態別には小野分類<sup>(1)</sup>皿E群が主体をなし、皿F群がこれに次ぐ。漳州窯系のものは青花の中では2割程度を占める。

青花以外では白磁が一定量を占めるが、この中には灰色～暗灰色の磁器質の緻密な胎土で、灰白色～灰色を呈して貫入の著しい白濁釉のかかる特徴的な一群があり(第1図9～12)、「灰色磁器」と仮称している。白磁14点中の6点を占め、碗には端反形のものと同型押し成形のものがあり、皿は型押し成形のものが確認されている。青磁は菊皿および瓶が出土している。

華南三彩陶器壺は施文方法により2タイプが存在し、各1個体以上出土している。一つは、文様部分を別に型で成形して貼付けるもので(第3図39～47)、いわゆる「トラディスカント壺」と称されるものである。体部に牡丹唐草文、底部付近には蓮弁状の文様が施されているが、一部剥落しており、施文手法を如実に示している。底部はほぼ平底で全面に施釉されている。肩部には縦方向の耳が付く。こうした特徴は、1600年にフィリピンで沈没したのサンディエゴ号積載品<sup>(2)</sup>にきわめて類似しているものである。また、これに伴うと推定される蓋も出土している(第3図48)。もう一つは文様を陰刻するもので、体部に蓮華様の文様を施し、底部付近には蓮弁状の文様を施文する(第3図49)。耳は無い可能性が高い。底部は無釉で、上げ底状を呈する。一部の破片はSE120から出土し、これとSX210出土の破片とが接合した。これら華南三彩陶器の出土破片の多くは、著しい二次的被熱により釉が失われたり、釉色が赤銅色あるいは黒灰色に変色している。

褐釉・黒釉陶器貯蔵具は5個体出土している。第3図52は六耳壺で、横方向と縦方向の耳が交互に貼付される。内外面に施釉され肩部には「五」と判読できる刻銘を有する。

焼締陶器播鉢(第3図51)は、口縁部が内湾し、端部が内側に向いた玉縁状となる特徴的な形態のもので、共伴する備前焼のものよりも器壁が薄く、11本を単位とする播り目が施されている。国産の焼締陶器の中に類例が無いことから中国産のものではないかと考えられる。

#### 2) 朝鮮王朝産陶磁器 (第4図)

白磁皿が8個体出土している。いずれも高い高台を有し、見込みに顕著な段を有する特徴的な形態で、口縁部が比較的直線的に開くものと口縁部全体が大きく内湾するものがある。畳付に細砂が付着するものはみられるものの、明確な目跡を有するものは無い。また、灰色あるいは灰黄色に発色する陶器質のものが主体であり、白色に近いものはわずかである。日本各地から出土した資料で、これまでいわゆる朝鮮王朝(李朝)白磁として認識されているものとは大きく異なる属性を持つものであるが、管見の限りでは韓国広州窯址出土の白磁に、器形においてきわめて類似するものが見いだされる。<sup>(3)</sup>

このほか、緑褐色釉の掛かる舟徳利かと推定される陶器瓶が1個体出土している。

#### 3) ベトナム産陶器 (第5図60)

焼締長胴瓶が出土している。外面黄灰褐色、内面灰褐色を呈し、胎土は灰色緻密で、黒色粒子を多く含み、内面には口クロ目が密に残っている。ベトナム中部で生産されたものと考えられる。

#### 4) タイ産陶器 (第5図61～63)

四耳壺が出土しており、口縁部形態のバリエーションなどから少なくとも9個体存在するが、器形では大きく2タイプある。一つは頸部と胴部の境界がはっきりせず最大径が胴部中央付近にある樽型を呈

するもので、61がこれにあたる。外面上半部には6本の凹線を巡らし、その上方に削出により凸線を巡らせる。口縁部は断面楕円形状の玉縁である。底部付近の外面に褐釉が施される。もう一つは63のように最大径が胸部上半にあり肩の張る器形で、胸部と頸部の境界が比較的明瞭なものである。頸部にのみ凹線を巡らせ、口縁部は断面隅丸方形形状の玉縁で外反している。黄褐色に発色した化粧土状のものが上半部に掛かっており、無釉の焼締陶器様の外観であるが、化粧土状のものは焼成が不十分であるため融解していない釉薬であると考えられる。これらはいずれもノイ川窯産のものと考えられるものである。

#### 5) ミャンマー産陶器 (第5図64)

黒釉陶器三耳壺が出土している。口縁部は直立する頸部から大きく外反し、端部には凹線を施す。点状あるいは線状の白色緻密土を器面に貼り付けて文様としており、肩部から頸部にかけて横方向の線と列点を巡らし、肩部から胸部にかけては、縦方向の2本線の間列点をおく文様を一定の間隔で巡らせている。文様貼付後、わずかに緑がかった黒釉を掛けているが、底部付近は無釉である。胎土には、特徴的な暗紫色の砂粒を多量に含んでいる。文様および耳の形状・取付方向に違いはあるが、サンディエゴ号の積載品に類似のものが認められ、国内では博多遺跡群での出土資料が知られている。

#### 6) 国産陶磁器等 (第7図)

国産陶器としては備前焼が大半を占め、わずかに信楽焼を伴う。備前焼水屋甕、信楽焼壺・鉢にみられるように茶器と考えられるものを多く含む。備前焼の播鉢は判明する限りにおいて、すべて交差する播り目を有するものである。特殊な器種としては備前焼の薬研が出土している。なお、瀬戸・美濃産陶器は出土していない。

土器は京都系土師器が主体を占めるが、小破片資料が多く、周辺遺構からの混入もあるとみられ、どの程度が火災処理の際廃棄されたものかは不明である。

#### 7) その他

このほか、動物骨あるいは角を板状に加工したものに、サイコロの目と同じような円形の凹みを彫り込んだ、ドミノ様の製品が3点出土している。(第6図)

#### 8) SX210出土資料の位置づけ

SX210から出土した陶磁器のうち青花の組成は皿E群が主体をなし、皿F群がこれに次ぐもので、漳州窯系青花を一定量含み、根来寺坊院跡(1585年焼亡)、大阪城豊臣前期(1582年~1598年)など16世紀後半から末に比定される資料に類似している。府内における当該時期の火災記録としては、良好な一次史料が未だ未発見ではあるが、天正14年(1586年)末の島津氏の府内侵攻に伴う火災がまず想起されるであろう。SX210周辺にはその後に再建されたものと考えられる遺構が存在しないことから考えても、この遺構が府内侵攻による被災後の伴う火災処理である蓋然性は高いと考えられる。したがって、SX210から出土した陶磁器類は府内侵攻後の1587年、もしくはそれにきわめて近い時期の一括資料である可能性が高いと判断しておきたい。

### 4. 中世大友城下町跡出土の貿易陶磁器

SX210出土の貿易陶磁器とりわけ東南アジア産陶器、華南三彩および朝鮮王朝産陶磁器のまとまった出土状況は、これまで6年に及ぶ府内の調査においても依然として突出したものであり、これに匹敵する資料は知られていない。そこにはSX210を含む屋敷地の性格といった場の要素が関与しているため、良好な一括資料ではあるが、この遺構にみられる陶磁器の数量データをもってこの時期の府内を

代表させることはやはり無理があるといわざるを得ない。しかし、量的な問題を別にして大友館を含む府内全域を概観すれば、そこに戦国時代府内における貿易陶磁器について他地域と比べて特徴的なあり方を見いだすことができるのではないと思われる。(第七章：主要輸入陶磁器一覧表参照)

すなわち16世紀後半から末の時期において、

- 1 東南アジア産陶器は府内においてある程度一般的にみられ、一部地点では多量に出土する。さらに府内近隣の下郡遺跡群や鶴賀城など、周辺地区にまでひろがりをもつ。
- 2 華南三彩陶器もかなり一般的に出土している。また1と同様にその分布が府内の外にまで広がっており、さらにその器種は壺・水注・水滴・盤など非常に多様である。

の2点をまず挙げることができよう。

このうち東南アジア産陶磁器については当時の国際貿易都市、とりわけ堺と共通する事象であると考えられる。また、華南三彩陶器については、九州中南部以南および沖縄にその分布が集中していることが既に指摘されているが<sup>(4)</sup>、府内での出土資料はその器種の豊富さ・量の多さが日本本土の都市遺跡でも際だっていると言え、その生産地(福建・広東)との交流の濃厚さを窺わせる。これらの点からは、豊後府内において16世紀後半から末には、華南および東南アジアとの直接的な交易が行われていた可能性を推定できよう。また、未だ把握が不十分ではあるが、中国(福建・広東)産の日常雑器と考えられる焼締陶器類(播鉢・鉢等)が散見されることもその傍証となる可能性がある。

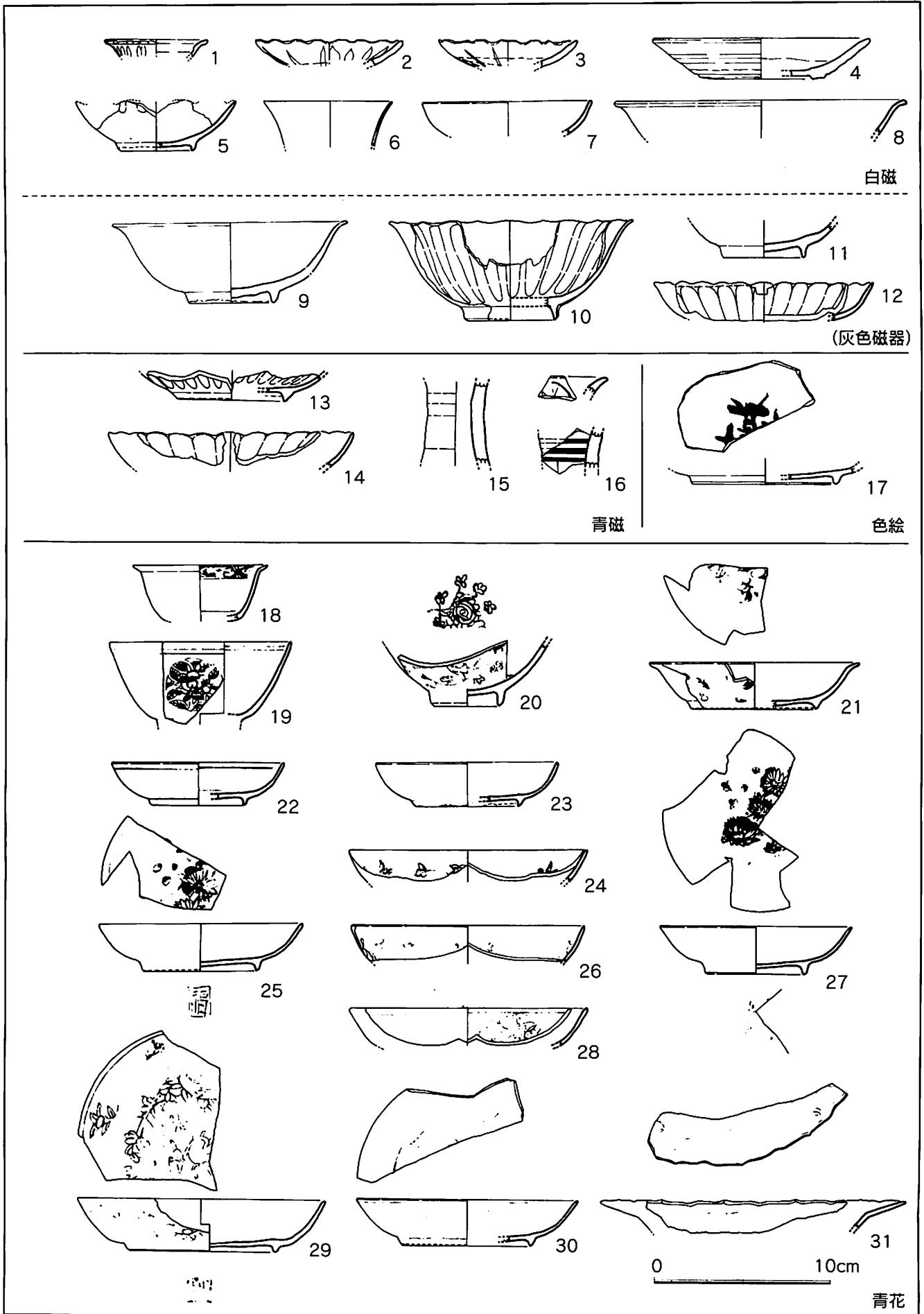
## 5. おわりに

豊後府内における貿易活動については、既に文献史学の側で研究が進められており、府内にはその担い手たる大商人や中国人が居住していたことも指摘され、これらの人々の居住域も推定されている<sup>(5)</sup>。豊後府内における貿易の実体については、こうした文献の研究をふまえた考古学的な調査により一層具体的に解明できると思われる。これまでの調査により、各調査地点間において遺物出土状況や遺物組成に違いが見出だされつつあるが、これが想定される居住者との関係において解釈できるようになることも期待される。

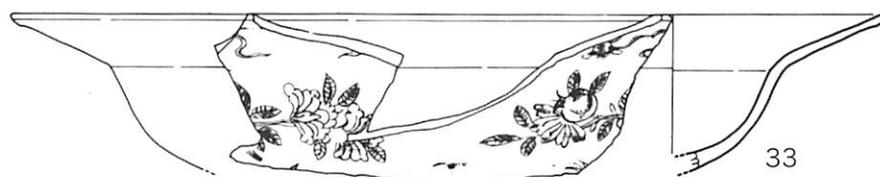
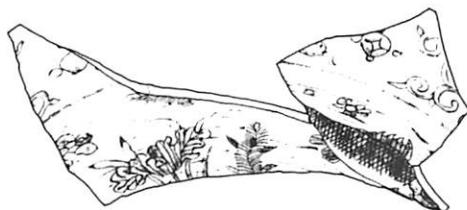
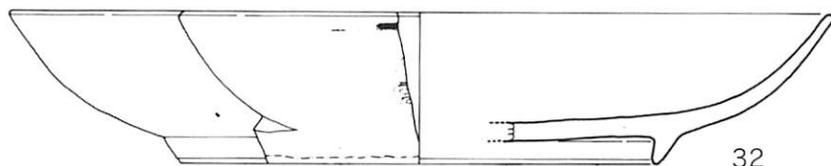
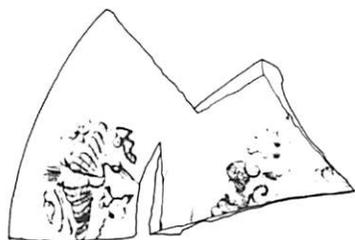
ところで、中世府内は博多や堺と異なり、都市域と外港である沖の浜との距離が離れているが、現在調査が進行しているのは、都市域のみである。「府内古図」によれば、沖の浜周辺にも多数の町屋が描かれており、今後貿易の実体を一層解明し、博多や堺など他の貿易都市との比較を行っていくためには、港湾地区そのものである沖の浜地区および府内町の舟入比定地付近などの考古学的な解明が次なる課題の一つとなるであろう。

### 【註】

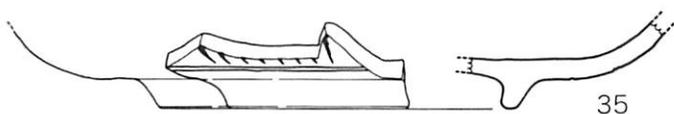
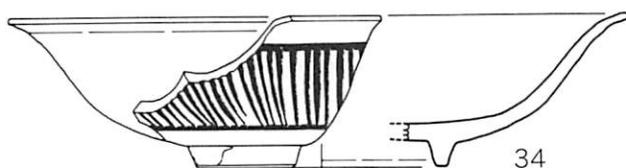
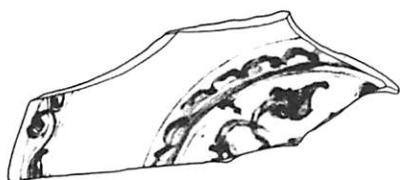
- (1) 小野正敏 1982 「15・16世紀の碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No2 日本貿易陶磁研究会
- (2) National Museum, Philippines 1993 『Saga of the San Diego』
- (3) 梨花女子大 博物館 韓国道路公社 1986 『廣州朝鮮白磁窯址 發掘調査報告-樊川里5號・仙東里2,3號-』  
羅善華 1994 『朝鮮前期 白磁古窯址考』『第4回九州陶磁研究会 資料』
- (4) 亀井明徳 1986 『明代華南彩釉陶をめぐる諸問題』『日本貿易陶磁史の研究』同朋社出版
- (5) 鹿毛敏夫 1996 『戦国時代豪商の存在形態と大友氏』『大分県地方史』第160号  
1999 『府内と臼杵から戦国の世界が見える～都市・貿易・民衆～』大分県立先哲史料館



第1圖 SX210出土中國產陶磁器① (S=1/3)

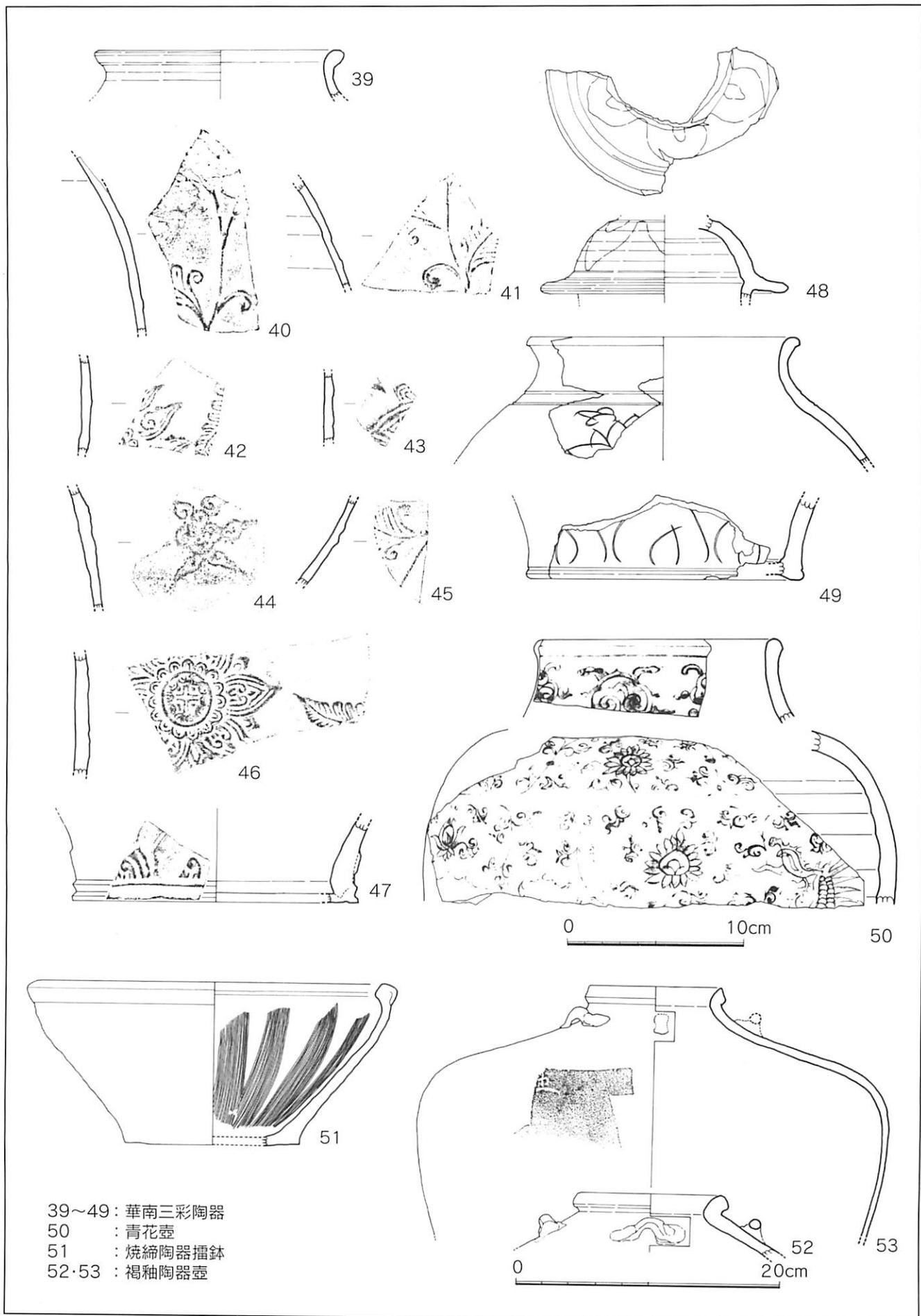


青花大皿



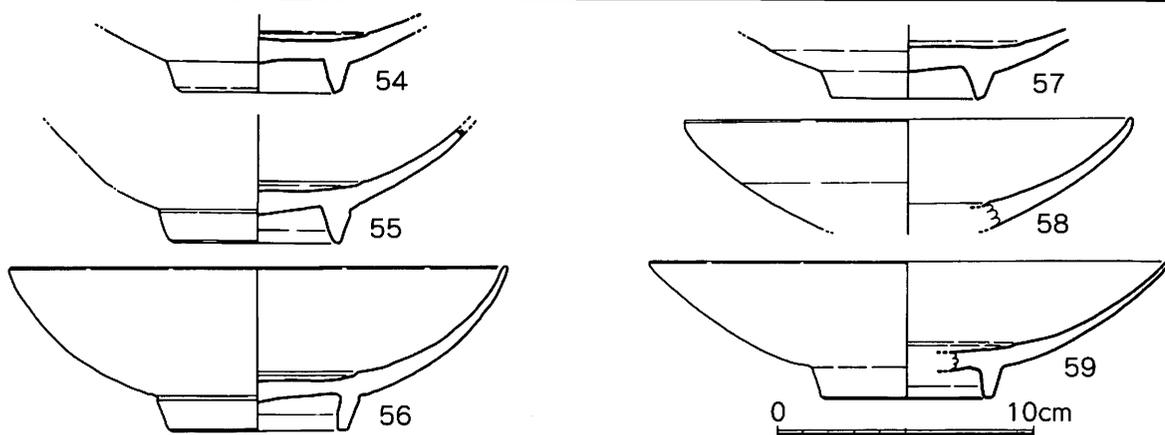
漳州窯系青花皿

第2図 SX210出土中国産陶磁器② (S=1/3)

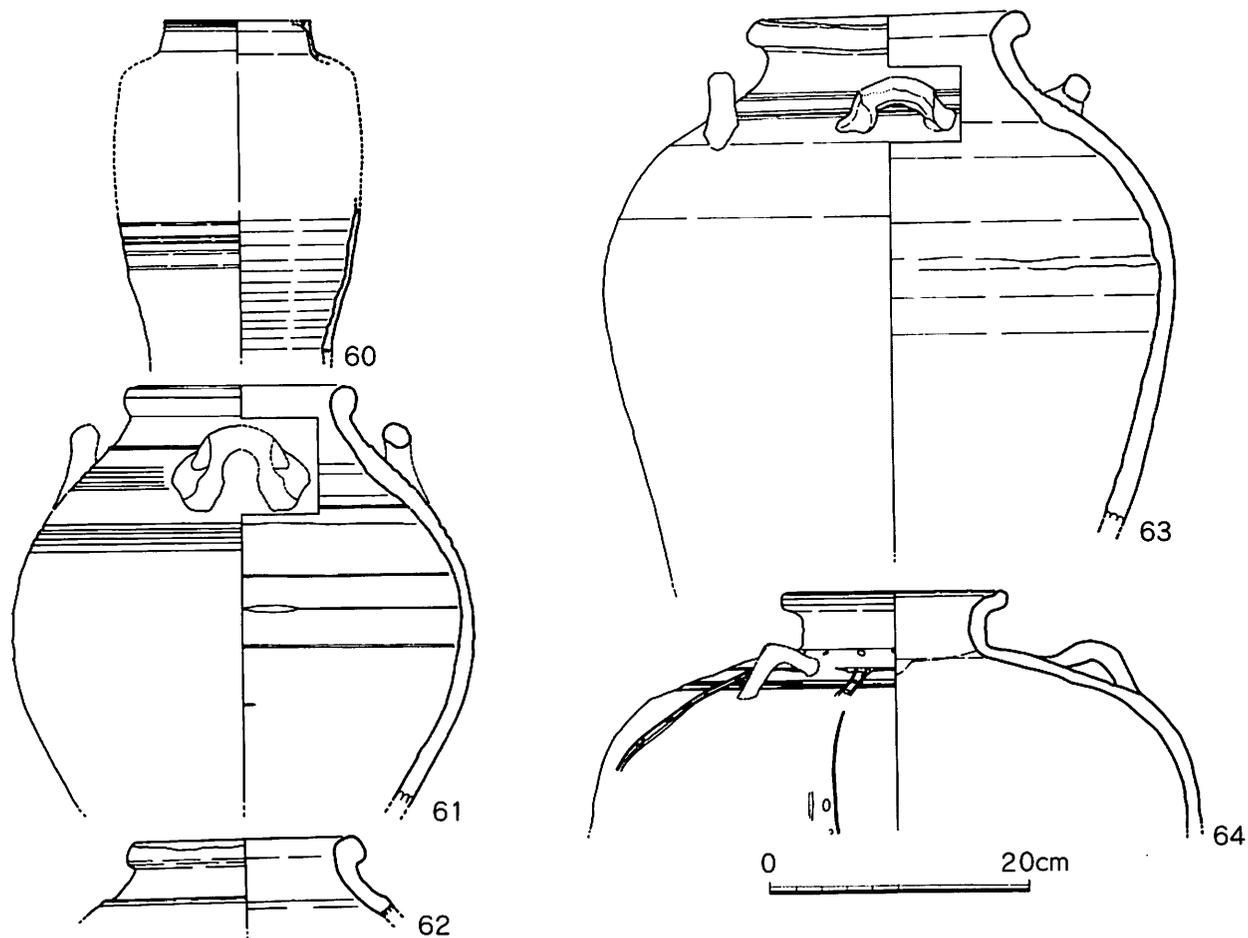


- 39~49: 華南三彩陶器  
 50 : 青花壺  
 51 : 燒締陶器插鉢  
 52·53 : 褐釉陶器壺

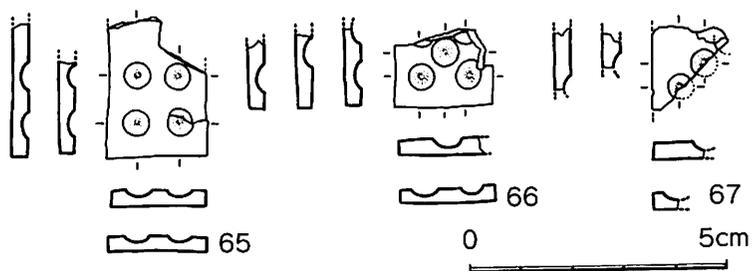
第3図 SX210出土中国産陶磁器③ (39~50 : S=1/3 51~53 : S=1/4)



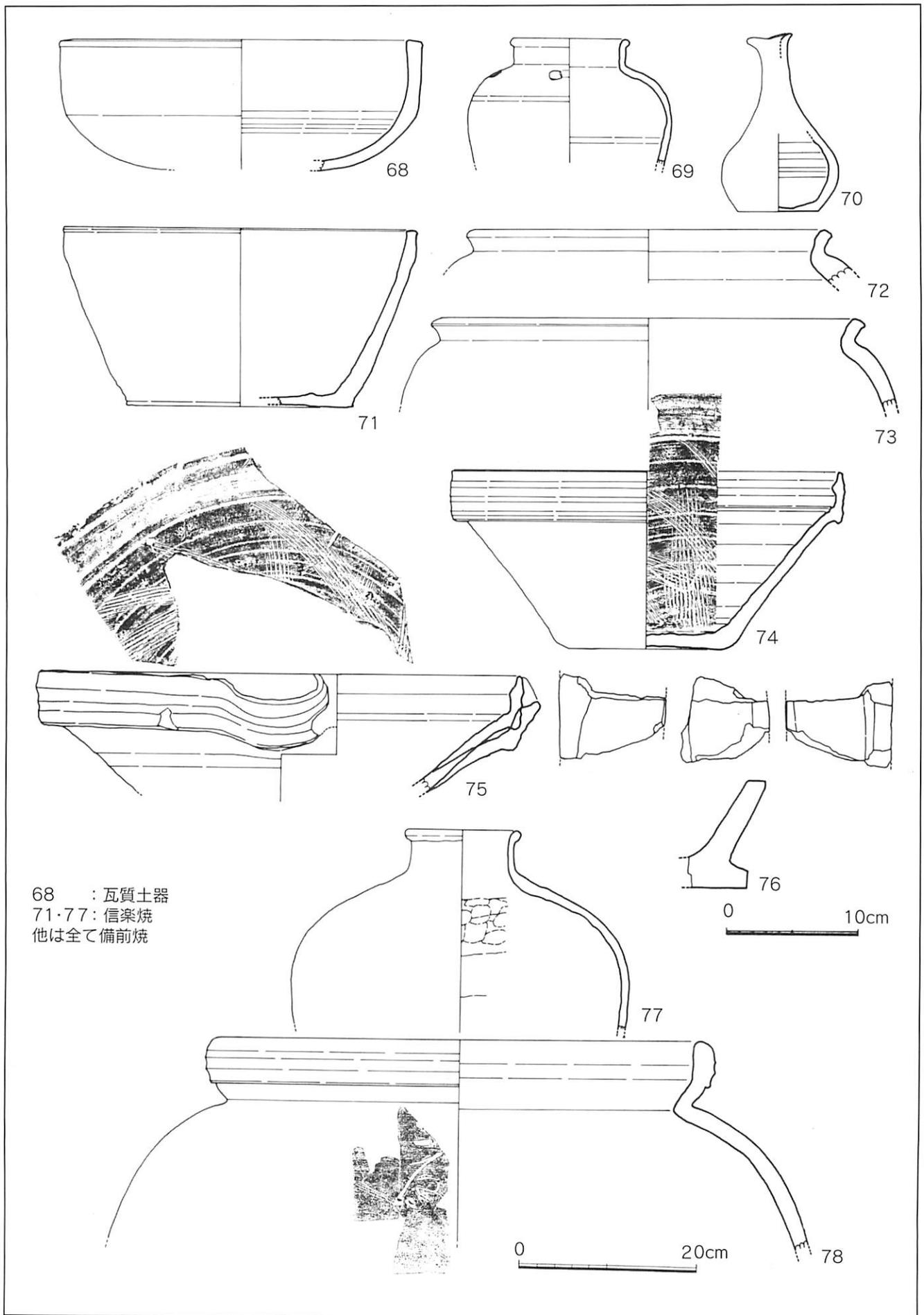
第4図 SX210出土朝鮮王朝産白磁皿 (S=1/3)



第5図 SX210出土東南アジア産陶器 (S=1/6)

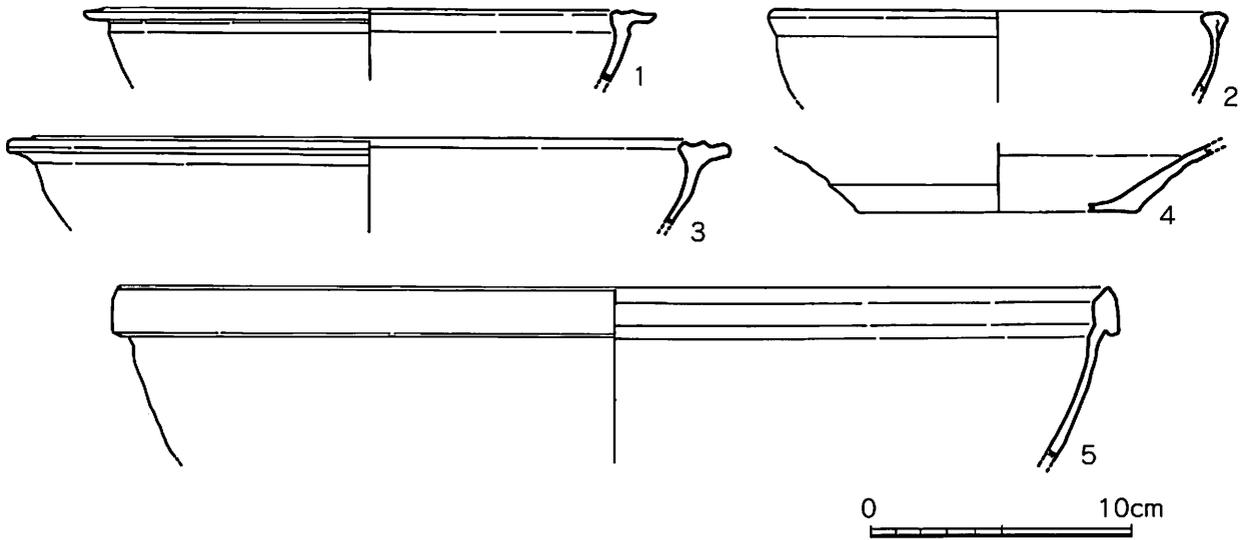


第6図 SX210出土ドミノ様骨角製品 (S=2/3)



68 : 瓦質土器  
 71・77 : 信楽焼  
 他は全て備前焼

第7図 SX210出土国産陶磁器 (68~76 : S=1/4 77・78 : S=1/6)



第8図 中国製ではないかと推定される焼締陶器鉢

これらは、鉢形態になるとされる陶器だが今のところ産地が不明で、中国製ではないかと推定されている。無釉の焼締陶器とみられるが、薄い褐釉を内面に施しているものも認められる。胎土はいずれも非常に緻密なものであり、砂粒等の粒子をほとんど含んでおらず、焼成により、淡褐色、暗赤褐色、黒灰色などに発色している。口縁部形態により、上面に凹線が巡る鐙状となるもの(A類:1・2)、内側に張り出した玉縁状になるもの(B類:3)、断面方形あるいは台形の縁帯状となるもの(C類:5)の3種類のヴァリエーションがある。

#### 【参考文献】

- 上田秀夫1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2日本貿易陶磁研究会  
 小野正敏1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2日本貿易陶磁研究会  
 森田 勉1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2日本貿易陶磁研究会  
 大分市史編纂委員会1987「大分市史 中」大分市  
 大分市史編纂委員会1987「戦国時代の府内復元想定図」『大分市史 中巻付図』大分市  
 木村幾多郎1993「研究ノート府内古図の成立」『大分市歴史資料館年報 1993年度』大分市歴史資料館  
 木村幾多郎1996「豊国府・勝津留考」『Funai 府内及び大友氏関係遺跡調査研究年報V』大分市歴史資料館  
 玉永光洋1997「豊後府内の形成と寺院」『中世都市研究4 都市と宗教』中世都市研究会  
 高島 豊1997「中世大友城下町跡第1・2次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報Vol.8』大分市教育委員会  
 高島 豊1998「中世大友城下町跡第3次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報Vol.9』大分市教育委員会  
 上野淳也1999「千人塚遺跡出土の土師質土器皿について」『千人塚遺跡』大分県緒方町教育委員会  
 高島豊・河野史郎・塩地潤一1999「中世府内の館と町-最近の調査事例を中心として-」『大分県地方史 第174号』大分県地方史研究会  
 塩地潤一1999「九州出土の京都系土師器皿」『中近世土器の基礎研究』XIV日本中世土器研究会  
 鹿毛敏夫1999「戦国に都市をつくる」『府内と臼杵から戦国の世界が見える～都市・貿易・民衆～』大分県先哲史料館  
 後藤一重1999「小路遺跡」大分県教育委員会  
 大分市教育委員会2000「大友館跡 発掘調査概報。」大分市教育委員会  
 河野史郎2000「上野大友館(上原館)跡下水道工事に伴う発掘調査報告書」大分市教育委員会  
 日本貿易陶磁研究会2000「城館出土の貿易陶磁器」貿易陶磁研究集会 四国大会資料集-織豊前夜の西国大名と貿易-日本貿易陶磁研究会  
 乗岡 実2000「備前焼播鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会

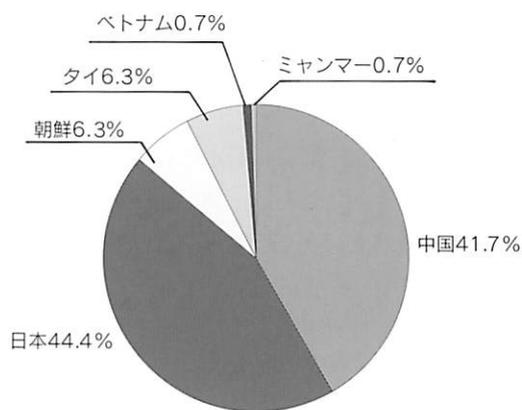
Tab1 SX210出土陶磁器の組成

貿易陶磁器

生産地	種別	器種	個体数	%	
中国	青花	碗C群	2		
		碗E群	2		
		皿B1群	2		
		皿C群	2		
		皿E群	11		
		皿F群	5		
		小坏	2		
		壺	1		
		漳州窯系青花	碗	3	
			皿	3	
	色絵磁器		皿	1	
			碗	8	
	白磁 (灰色磁器)		碗	5	
			皿	1	
	青磁	皿	2		
		瓶?	2		
		壺	5		
		壺	2		
	黒釉・褐釉陶器	壺	5		
		三彩陶器	2		
焼締陶器		1			
	小計	60	41.7%		
朝鮮	白磁	皿	8		
	緑褐釉陶器	瓶	1		
	小計	9	6.3%		
ベトナム	焼締陶器	長胴瓶	1	0.7%	
タイ	陶器	壺	9	6.3%	
ミャンマー	黒釉陶器	壺	1	0.7%	
	計	80	55.8%		

国産陶磁器・土器

生産地	種別	器種	個体数
備前	焼締陶器	搥鉢	8
		壺	2
		水屋甕	4
		瓶	2
		薬研	1
	小計	17	
信楽	焼締陶器	壺	1
		鉢	1
	小計	2	
在地他	土師質土器		39
	瓦質土器		6
	計		64



Tab2 中世大友城下町跡第4次調査 主要2遺構における遺物組成

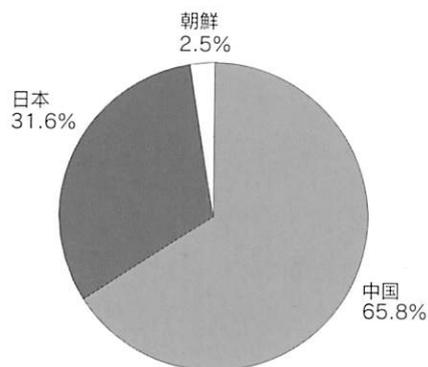
S160

生産地	種別	個体数	%
中国	青花	30	
	白磁	16	
	青磁	2	
	漳州窯系青花	2	
	天目	1	
	青釉小皿	1	
	小計	52	65.8%
朝鮮		2	2.5%
ベトナム		0	
タイ		0	
国内	陶器・土師器・瓦質土器	25	31.6%

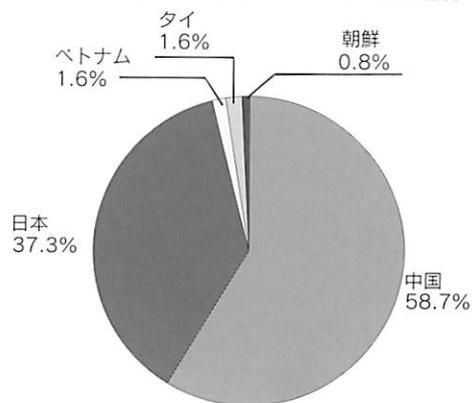
S064

生産地	種別	個体数	%
中国	青花	45	
	白磁	17	
	漳州窯系青花	9	
	青磁	3	
	小計	74	58.7%
朝鮮		1	0.8%
ベトナム		2	1.6%
タイ		2	1.6%
国内	陶器・土師器・瓦質土器	47	37.3%

16世紀後半の火災処理坑



16世紀末（1586年もしくはそれ以降）の火災処理坑



## 4. 報告④ 陶磁貿易からみた東南アジアと日本・豊後

大橋 康二（佐賀県立九州陶磁文化館）

16世紀から17世紀前半にかけて東アジアにおける陶磁貿易の主役は中国磁器であった。16世紀になると、中国の輸出磁器の主体は青磁から染付に代わる。それまでの青磁生産の中心は浙江省竜泉窯であったが、代わって染付生産の中心は江西省景德鎮窯になる。染付が貿易陶磁の主体になると、粗製の青磁生産を行い輸出していた福建南部地方でも、青磁に代わって粗製の染付生産を行うようになる。現在その地方の名をとって漳州窯と呼んでいるが、わが国では呉須手、呉須赤絵と呼んできた粗製磁器である。16世紀後半に粗製の染付を輸出し始め、景德鎮の染付を買えない人々により安い染付を供給したとみられる。

16世紀の陶磁貿易に従事者からみると、ポルトガルは、中国・琉球・東南アジアなどの中継貿易に従事したため、それまで中継貿易を行っていた中国・日本・琉球の商人は圧迫された。このポルトガル船は豊後にも度々来航した。こうして15世紀では中継貿易として活発な貿易を展開していた琉球が16世紀の後半になると、ポルトガルなどにより圧倒されていくためか、沖縄での16世紀後半の中国染付はそれまでの中国磁器の出土量より著しく減少する。

また、青磁から染付に貿易陶磁の中心が代わるのは、東南アジアではインドネシア・バンテン王宮遺跡、国内では16世紀の城館跡の調査などで裏付けられるし、豊後でもいくつかの城館などの例がある。

1592年に豊臣秀吉の朝鮮侵略が始まると、明は日本との直接的貿易を禁じたため、商船はベトナムに中継貿易地を求めた。また、1601年徳川家康により朱印船制度が始まり、西国大名や商人の朱印船が東南アジアにかけての地域で活発な交易を展開した。ベトナムのホイアンでは1590年代頃からの中国磁器が多量に出土するが、それ以前の16世紀の中国陶磁はみられない。このことはホイアンに日本町も形成されるなど国際貿易都市として急激な発展をみたことを裏付ける。

同じ日本町があったアユタヤなどは早くからシャム王国の都であったためにそれ以前の中国陶磁もみられる。

ホイアンをはじめ東南アジアで出土する中国磁器碗は日本出土の碗より大振りのものが多い。器種・器形や文様には東南アジア各地や日本での地域差がみられるが、景德鎮窯と漳州磁器のシェアの変移は大きな違いはない。つまり、16世紀末から17世紀前半の明末になると景德鎮窯と漳州窯の出土割合は同程度か、漳州窯の方がより多いケースもみられる。

日本ではこれに朝鮮の陶磁器がわずかに加わるが、東南アジアではそれはみられず、逆に東南アジアではベトナム製染付が少量加わる。この時期に東南アジアから日本の間で陶磁貿易を行ったのは、ポルトガルに代わってオランダであり、また中国船、日本の朱印船であった。しかし朱印船は1635年に終わり、日本は1639年鎖国に入る。

鎖国に入った日本は長崎で中国船とオランダ船のみ入港を許した。従ってなお、中国磁器の輸入は続いたが、1644年、明が清によって倒されると、明の遺臣が中国南部に逃れて清朝に抵抗を続けたため、中国の磁器生産地は内乱により疲弊し、中国磁器の輸出は激減する。わが国の磁器市場は1610年代に誕生した肥前磁器（伊万里焼）が一気に独占することになる。そして、1647年には中国船（明の遺臣鄭氏一派）によってインドシナ半島に向けて輸出を始める。オランダも1650年からインドネシア

のバタビアに肥前磁器を運び始め、1659年には西アジアからヨーロッパ地域へも大量輸出を開始する。東南アジアの磁器市場に肥前磁器が優位を占めていたのは、中国が台湾の鄭氏の降服によって国内統一を果たし、貿易禁止令を解く1684年までの間であった。この17世紀後半に東南アジアに流通した磁器は、貿易禁止令の中で密貿易された中国磁器、そして肥前磁器、それに加えてより粗製の安価であったとみられるベトナム製碗である。

1684年の展海令によって、中国磁器の輸出が本格的に再開されるとたちまち東南アジア市場は中国によって奪回されたとみられ、肥前磁器の東南アジア向けの製品やベトナム製碗は消える。肥前磁器が引き続き出土するのは東南アジアではインドネシアだけとなる。これはインドネシアが引き続きオランダの東洋貿易の根拠地であったため、オランダ船が運ぶヨーロッパ向けの肥前磁器がインドネシアでもおろされたからである。

日本の磁器市場は1640年代に肥前磁器が独占して以降、二度と輸入磁器が優勢になることはなかった。

#### 参考文献

脇田晴子「大系日本の歴史7 戦国大名」小学館、1993

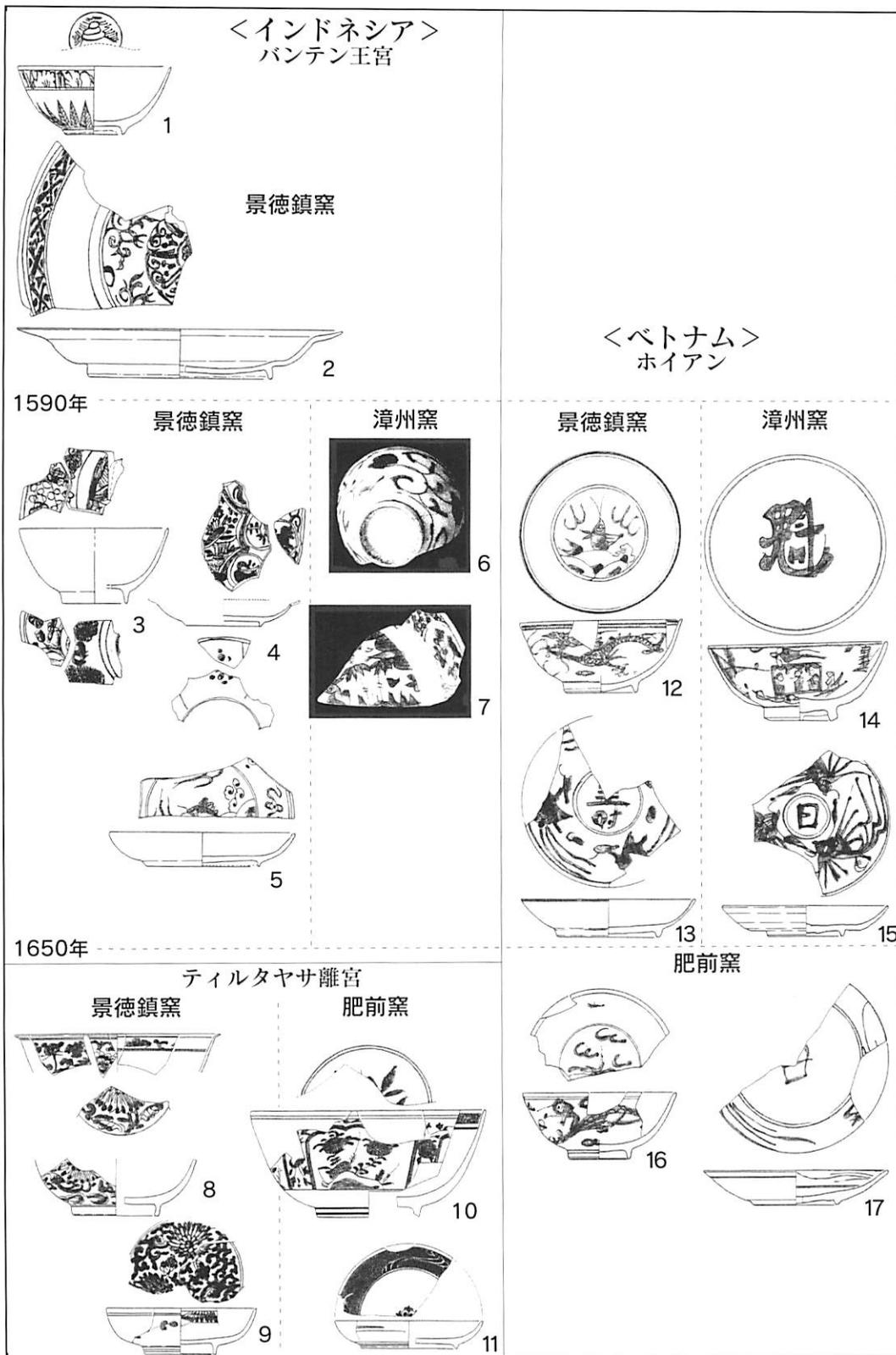
桜井由躬雄「南シナ海貿易の活況」週刊朝日百科 世界の歴史71, 朝日新聞、1990

大江一道「徳川幕府の幕開け」週刊朝日百科 世界の歴史76, 朝日新聞、1990

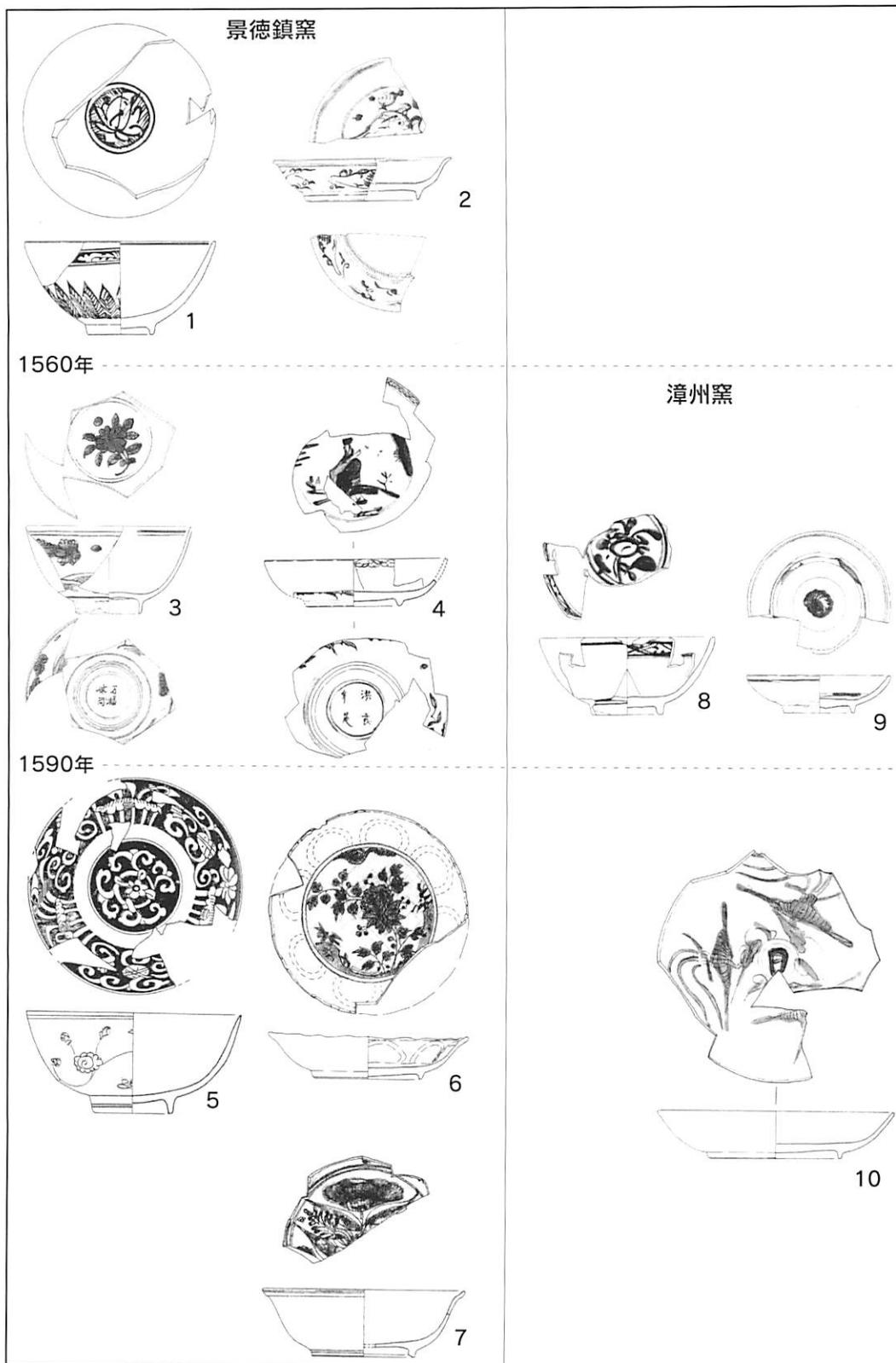
菊地誠一・大橋康二他「ベトナム・ホイアン考古学調査報告書」昭和女子大学国際文化研究所、1997

大橋康二・坂井隆「インドネシア・バンテン遺跡出土の陶磁器」『国立歴史民俗博物館研究報告』第82集、1999

バンテン遺跡研究会編「バンテン・ティルタヤサ遺跡発掘調査報告書」上智大学アジア文化研究所、2000

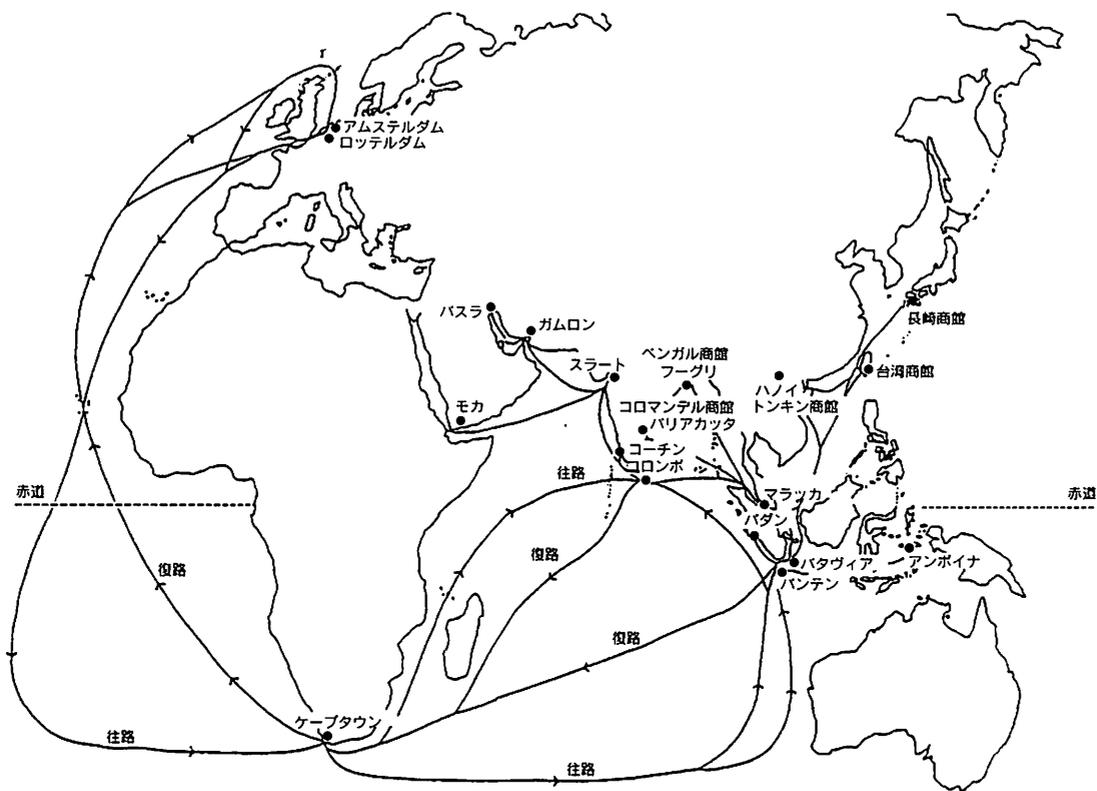


16・17世紀におけるインドネシア・ベトナム出土の中国・肥前磁器（各報告書より）

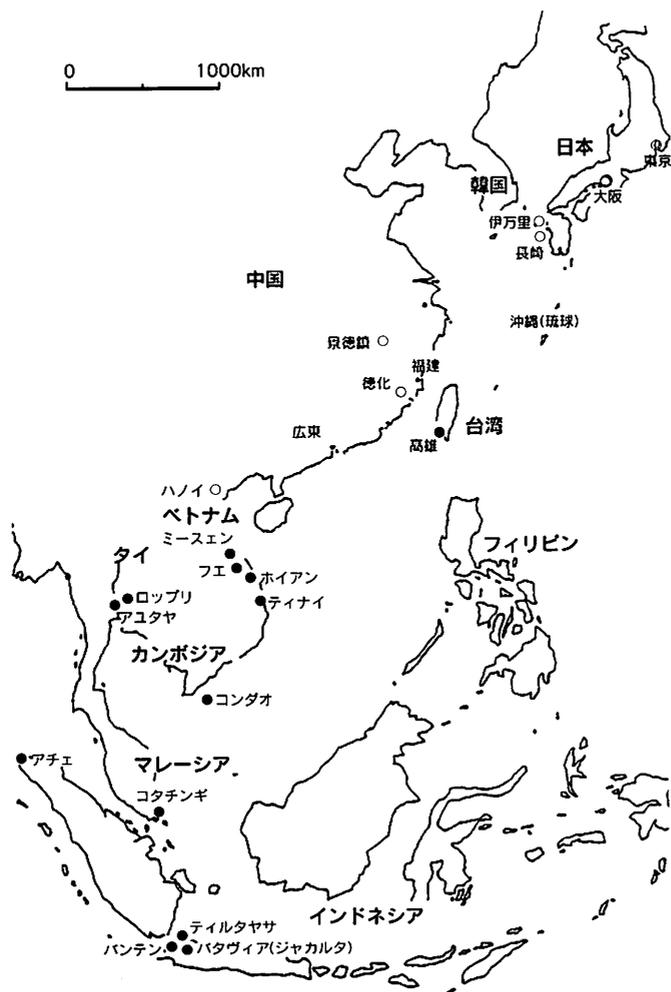


16・17世紀における豊後出土の中国磁器

1.尾漕遺跡、 2.3.9.安岐城 4.8.伐株山城 5.府内城・三ノ丸跡  
6.7.10 岡城 (各報告書より)



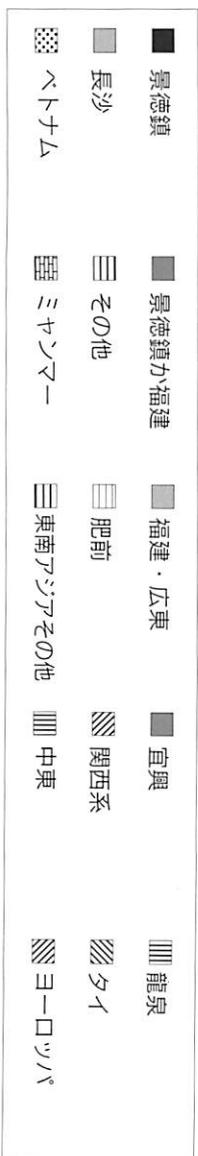
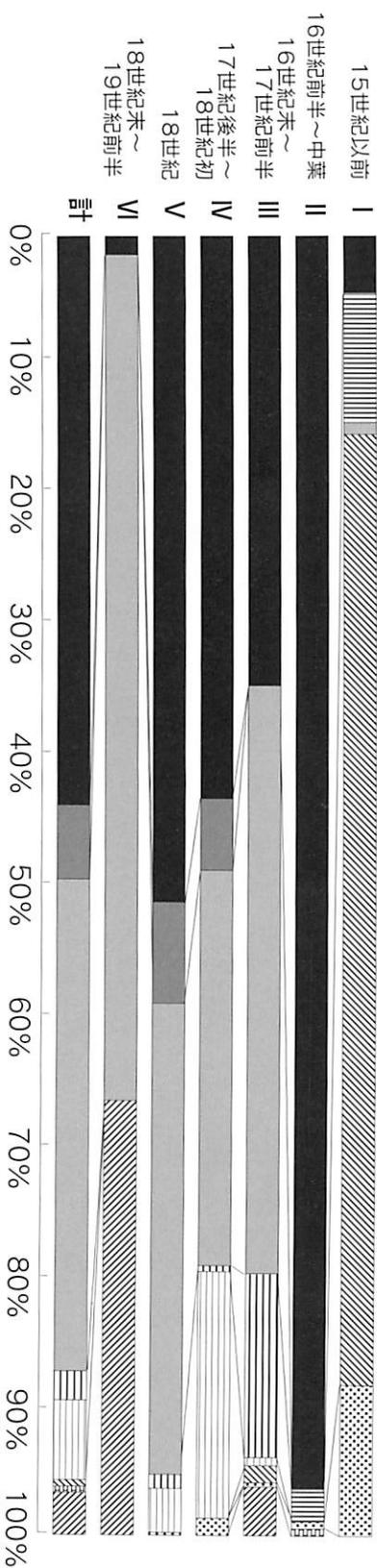
17~18世紀のオランダ連合東インド会社の海上交易路



東南アジアにおける肥前陶磁の出土分布図

	中 国					日 本			東南アジア					中東		ヨーロッパ		計													
	景德鎮	景德鎮か福建	福建・広東	宜興	龍泉	長沙	その他	肥前	関西系	タイ	ベトナム	ミャンマー	その他	中東	ヨーロッパ																
I	5	4.55%	0.00%	0	0.00%	11	9.91%	1	0.90%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	111													
II	354	96.20%	0.00%	1	0.27%	9	2.44%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%	3	0.81%	0	0.00%	0	0.00%	369											
III	834	34.92%	0.00%	1,071	44.83%	0	0.00%	0	0.00%	333	13.94%	14	0.59%	0	0.00%	33	1.39%	7	0.29%	0	0.00%	3	0.13%	1	0.04%	92	3.85%	2,389			
IV	2,349	43.55%	298	5.52%	1,624	30.10%	0	0.00%	0	0.00%	22	0.41%	1,017	18.85%	0	0.00%	0	0.00%	76	1.41%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%	7	0.13%	5,395		
V	7,488	51.40%	1,120	7.69%	5,241	35.97%	10	0.07%	0	0.00%	156	1.07%	501	3.44%	16	0.11%	0	0.00%	0	0.00%	27	0.19%	0	0.00%	10	0.07%	10	0.07%	14,570		
VI	36	1.60%	0	0.00%	1,462	65.07	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.04%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	747	33.25%	2,247				
計	11,066	44.13%	1,418	5.66%	9,399	37.48%	10	0.04%	20	0.08%	1	0.00%	511	2.04%	1,532	6.11%	17	0.07%	113	0.45%	97	0.39%	3	0.01%	30	0.12%	2	0.01%	856	3.41%	25,076

バンテン遺跡出土陶磁器の産地別・時期別個体数



インドネシア・バンテン遺跡出土陶磁器の産地別割合グラフ

第三章  
まち  
宗麟の都市

## 1.大分のまちの形成と特質

### 1.はじめに

大分市は、豊後国の政治、経済、文化の中核機関が設置され、古代・中世・近世そして現代へと、南大分から少しずつ北へ移動しながら都市（まち）がつくられ繁栄した。現在の市街地は、この三つの歴史遺産の上につくられており、全国的にも珍しい特質をもっている。

### 2.地方政治都市 豊後国府（奈良・平安時代）

豊後国の政庁であった豊後国府（今の県庁）は、南大分から上野丘陵にかけての地域であったと考えられており、南大分周辺は今でも古国府（ふるごう）と呼ばれ、きちっとした条里遺構とともに、国司（今の県知事）の権能を代表する国印と官倉の鍵を司ったとされる印鑰社などが所在しており、古くから豊後の国衙跡に推定されている。一方、上野丘陵は、高国府と書いてタカゴウと呼ばれる地域である。この古国府と高国府の関係については、国府が下から上の丘陵に移動したのではないかと考えられている。

この国府推定域の発掘調査は、今まで約20数年間にわたって行われてきているが、国衙跡に直接関連するような遺構・遺物は検出されていない。また、「豊後国風土記」大分郡の条によれば、「大分河郡の南にあり」と記されており、国衙の近くに大分郡衙が存在していたことがわかる。この郡衙跡についても、国衙推定域である大分川左岸では確認されていない。ただ、古国府西側の羽屋地区の羽屋井戸や羽屋園遺跡から7世紀後半から8世紀初頭頃に集中する建物群が広範囲に検出されている。方形



三時代の大分



竜王畑遺跡から出土した豊後国司館の復元想定図（高橋信武氏作画）

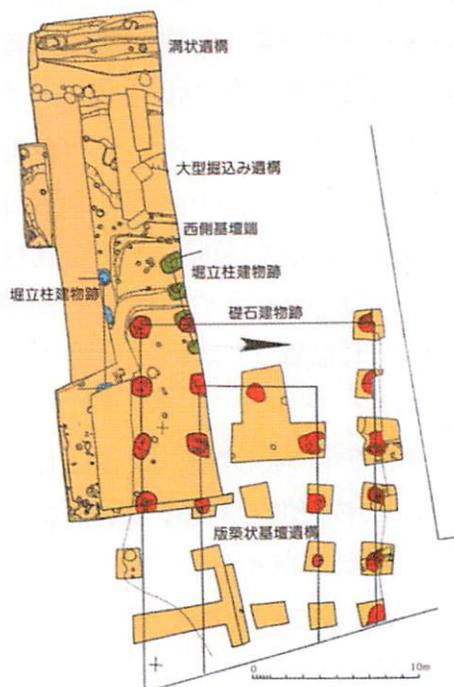
の掘り方をもつ掘立柱建物跡、総柱の掘立柱建物跡、大型掘立柱建物跡、門構造の掘立柱建物跡などがあり、しかもこれら建物の方向は条里跡の地割線とは異なっていることが明らかとなった。これらの遺構群は郡衙成立以前の「評」に関連する施設ではないかと想定されている。さらに、大分川右岸の河口周辺は、下郡（しもごおり）と呼び、区画整理事業に伴う長年にわたる発掘調査で8世紀中頃から9世紀の遺構・遺物が集中して発見されている。特に奈良から平安時代初めの遺構は、3つの地区から集中して見つかっており、掘立柱建物跡や総柱の掘立柱建物跡、真北方向に走る道路遺構、柵列などの遺構群とともに墨書土器、円面碗、帯金具、都でつくられた土器（都城系土師器）などの遺物群が出土しており、これら3地区の状況は、郡衙の政庁域とその周辺施設の可能性が極めて高く、大分川右岸への移動を示唆している。

次に高国府地区であるが、近年の上野丘陵の発掘調査で、注目される施設が見つかった。一つは丘陵東端部の上野字竜王畑において、9世紀代を中心とする掘立柱建物跡、築地塀跡、道路状遺構などとともに、円面碗、転用碗、鬼瓦、越州窯系青磁碗、緑釉陶器などが出土した。官衙的な様相を強くもつ遺跡（竜王畑遺跡）である。建物群は、その方向から大きくⅣ期（9世紀～10世紀前半）に分類され、築地塀を伴い庇をもつ後殿と前殿の建物配置や遺物などの全体的様相から国司の館の可能性が指摘されている。もう一つは、丘陵の西側北端部で上野字山下の一画から8世紀～9世紀にかけての版築基壇と礎石建物跡、多量の瓦などが検出され、この遺構が古代の寺院跡（上野廃寺跡）であることが確認された。出土瓦には、百済系の単弁軒丸瓦や上野廃寺特有の複弁七葉蓮華文軒丸瓦、均正唐草文軒平瓦とともに豊後国分寺の創建瓦が伴っており、豊後国の官寺との関連性が想定される寺院であったことが明らかとなった。

このように、上野丘陵には、国衙周辺の施設の存在がしだいに明らかになってきており、9世紀段階には国衙がこの丘陵上に移動してきた可能性が高まってきている。

さらに、この地域で忘れてはならないものに、岩屋寺石仏、元町石仏などの宗教遺跡がある。豊後における石仏は、国東半島から豊後の南の方まで分布しており、大分県は全国の約70～80%を占めていると言われている。南豊後地域では、この国衙に近接する石仏群と臼杵石仏群、大野川をさかのぼった大野郡にある。岩屋寺・元町石仏の成立については、一つには国庁に付属する寺院や石仏が形成され、その造営の母体として国衙の勢力、国衙に集う在庁官人によるとする考え方や、宇佐宮勢力、すなわち宇佐宮領であった勝津留畠に造顕された石仏の造立には初期円派仏師が参画したとする考え方などがある。

いづれにしても、古国府～上野丘陵一帯は古代豊後の中枢であり、地方政治都市としてきわめて繁栄を見たエリアである。



上野廃寺遺構配置図





治責任者)が置かれるなど、新しい政治体制が確立する。また、戦国大名が分国の直接的支配を強化するための基本である分国法が、まがりなりにも義長によって「条々」という形で定められた。義鑑から義鎮への家督の移譲は、大友家最後の内紛「二階崩れの変」によって実現した。義鎮が家督となった翌天文20年(1551)7月、ポルトガル船が日出沖に来航し、翌8月には義鎮の招きにより、フランシスコ・ザビエルが周防山口から府内に入った。義鎮の許可を得たザビエルは布教を始めるが、その最中に義鎮の弟晴英が内紛によって死亡した大内義隆の跡に迎えられ、大内義長を名乗る。6年後の弘治3年(1557)、義長は毛利元就に攻められ、短い一生を終える。義鎮は、父義鑑から継いだ豊後・肥後・筑後のほか、天文22年(1554)に肥前国を、永禄2年(1559)には豊前・筑前の両国を安堵され、6か国の大名として君臨する。永禄5、6年ごろ剃髪して宗麟と号し、臼杵丹生島城に移り、府内を嫡子義統に譲った。

豊後でのキリシタン布教は、住院の建設・育児院の設立・病院あるいは教会の建設が行われた外に、宗麟の二男親家や側近田原親賢の養子親虎の受洗など、しだいに定着するが、一方で奈多大宮司家出身の田原親賢と宗麟夫人のキリシタン圧迫を受けるようになる。宗麟は夫人と離婚後の天正6年(1578)受洗してドン・フランシスコと命名された。宗麟はキリスト教的理想国家建設を企て、島津氏に追われた伊東氏の本拠地の回復とキリシタン国家建設を目的に日向侵攻に踏み切るが、大敗を喫してしまった。以後、各地諸將の離反はもちろん国内の一族あるいは重臣たちの反逆などを招来してしまい、さらには天正14年(1586)の島津軍の豊後侵入を許すことになる。12月7日から12日におよぶ鶴賀城をめぐる激戦で大友方は大敗し、有能の将である利光宗魚・長宗(曾)我部信親らが戦死し、仙石・長宗我部・大友義統は府内を脱出する。危機は豊臣秀吉の援軍で切り抜けるが、大友氏は豊後一国を安堵されたに過ぎなかった。それとは別に、秀吉は大友宗麟に日向一国を与えようとしたが、宗麟はこれを辞退し、その直後の天正15年5月23日、津久見で没してしまった。文禄元年(1592)3月、大友吉統は6千名の士卒を率い、三番手黒田長政の指揮のもとに朝鮮に出兵するが、小西行長の援軍要請に対応できなかったという表面上の理由で知行を没収され、毛利輝元に預けられ、能直以来22代続いた大友氏の豊後支配は終わった。吉統は秀吉の没後赦されて大坂にとどまった。関ヶ原合戦では西軍について豊後に入るが、石垣原の合戦で敗北し、大友家再興の夢は消えた。江戸時代には幕府の儀式をつかさどる高家として、吉統の子正照血統が仕えた。

府内の町を描いた絵図は、現在10枚ほど確認されているが所在がはっきりしている絵図は4枚しかない。この府内の町絵図は、三種類に分類でき、その大半は写しで、幕末のころ写されたものをさらに現在写しているといった絵図などもある。その内の一枚が、昭和62年の大分市史編纂の段階で、新しく見つかри、中世府内町の存在が確実視されるようになった。絵図の描き方や現在の寺院等の施設と描かれている方位関係、周辺の諸施設等の成立年代等から見て、戦国時代の府内町の様子を忠実に伝える最古の絵図と考えられている。

この絵図の発見を契機に、昭和62年の大分市史編纂のとき、地籍図の分析を行っている。絵図に描かれている施設がそのまま現在もその位置に残っていることから、これを基本にそれぞれの地割りや実際の距離などを分析し、復原している。

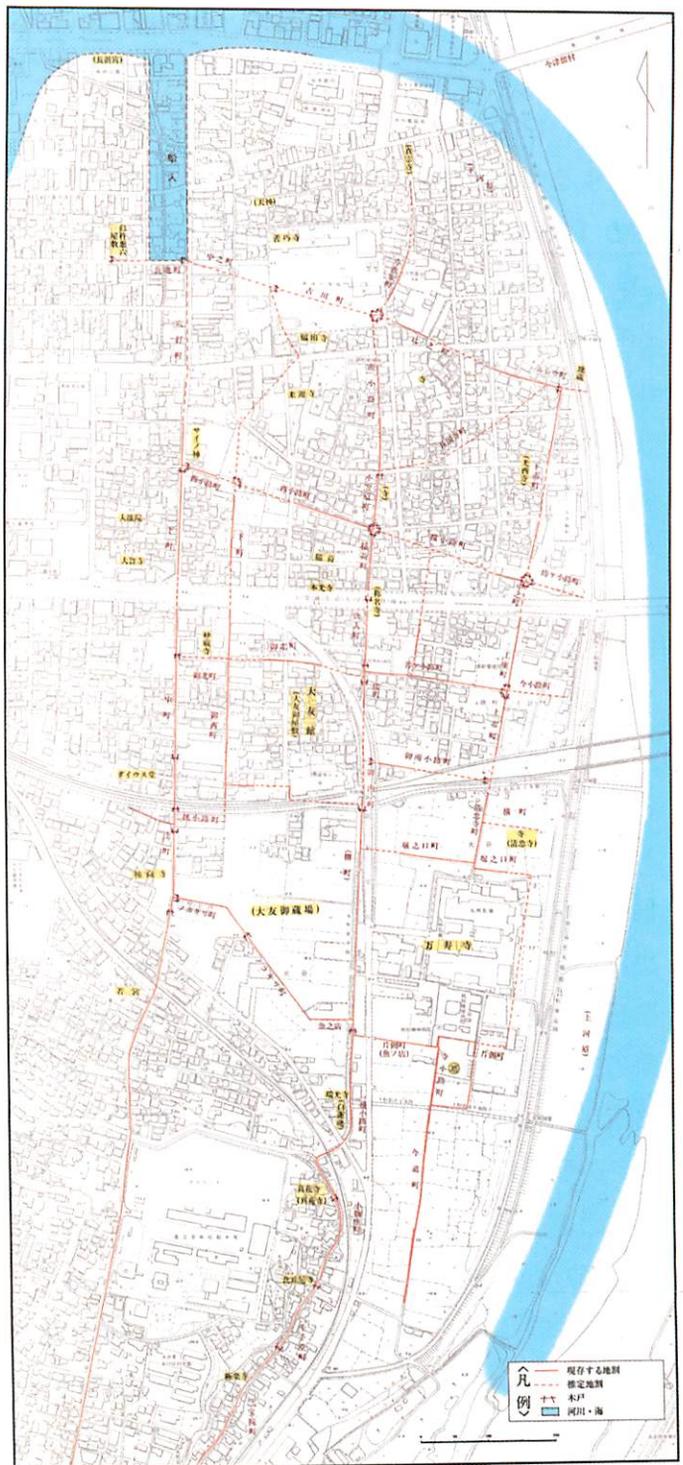
絵図に描かれている範囲は、元町・顕徳町・錦町一帯である。現在の大分市街地は、近世の城下町で

ある府内城とその城下からなっているが、塩九升町の南の東新町付近からダブるような形で、東南へ中世の町が展開していることになる。

次に地形環境と遺跡の立地との関係についてみると、古国府地域には微高地が点々とあり、その北は上野丘陵、さらに丘陵北側の特に住吉川流域あたりは湿地、東の大分川に接する後背湿地にも微高地が形成され、その周辺は湿地となっている。さらに、大分川や住吉川の河口周辺は、浜堤や埋め立て地といった環境になっている。これまでの発掘調査から遺跡は微高地や浜堤のところに多く分布しており、中世の町も大分川河口左岸の微高地を中心に形成され、最終的には周辺の湿地部分にも展開していったと理解される。その後北西部分を埋立て、近世城下町が築かれていった。大友氏の町は、このような地形環境のところに築かれているのである。

絵図に描かれた大友氏の町の特徴は、まず、南北筋に4本（大路？）、東西筋5本（小路）の街路がある。地形環境に制約されてか少しびつととなっているが、基本的には方形に区画された街区となっている。それぞれの方形区画の中には短冊地割りが街路を挟んで展開し、木戸で囲まれた両側町の形態をとっている。その町の中央に大規模な、二町ぐらいの大友氏館跡と、南側に一辺が200mを越す蔵場が並立する。特に注目されるのは、大友氏館跡周辺には、絵図や地籍図の分析からも武家屋敷らしき方形区画の空間が検出できない。また商工業を中心とする41ほどの町名が確認される。その中で、豪

商であった仲屋宗悦が大友宗麟のころに活躍するが、こうした豪商といわれている人々は、大友氏館の東側通りの桜町あたりに集中するのではないかとされている。その北の唐人町には、「ゑんはい」・「けいさん」・「ふくまん」・「月山」など中国人的な人名が、『天正十六年参宮帳』に見られ、今小路町に「慮高」・「陽愛有」といった中国人（大明）の名前も見られるとともに、大友氏館の背後の西側にはダイウスないしはコレジオといったキリシタン関孫の学校や教会、病院が見られる。寺社施設は、大友氏の菩提寺である万寿寺が館の南東側に建立されており、その他の寺院も館を取り巻く



戦国時代の府内復元想定図

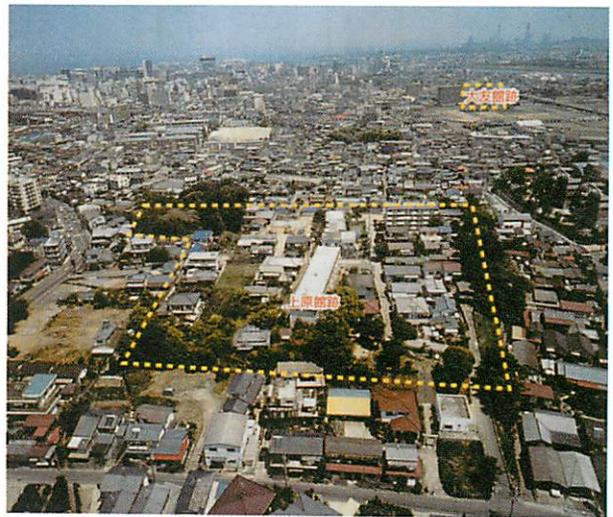
ように多数存在し、禅宗（臨済宗）を中心とした寺院が配置されている。さらに、鎌倉の鶴岡八幡宮を勧進した若宮八幡宮や悪霊の侵入を防ぎ境の神であるサイノ神などもみられる。

また、絵図は現在の春日神宮のあたりまで描かれており、ここにも神社と町が四町ほどあり、神社に対する市的なものから発展したと考えられる町も描かれている。ここを博多の「息浜」と同じ呼び名の「沖の浜」といい大友氏の外港が建設されていた。大分川河口は、大型船が入るような水深はない。だから、少し北側の湾の方に湊をつくり、そこから小舟で入っていくという状況であったと考えられる。この沖の浜は慶長元年の地震によって大打撃を受けた。これらから、府内の町はこのあたりまで展開している様子が伺える。

地籍図の分析等々から以上のようなことが読み取ることができ、絵図に描かれた大友氏城下町の中心範囲は、南北約2.2キロメートル、東西約700メートルほどの規模となり、沖の浜周辺の町も入れると、広大な町であった。

さらに、絵図には描かれていないが、上野丘陵には字御屋敷の地名が残っており、史料に記されている上原館跡（もう一つの大友氏館跡）と考えられている。

いわゆる大友氏館（守護所）の場所については、2ヶ所の居館跡が考えられるわけであるが、最初につくられた大友氏館及び守護所はどちらかはっきりしていない。上原館跡は、大友館の約2分の1の大きさで、方一町ほどの主郭と西の曲輪から構成される。主郭は幅約17m、高さが約2.5mの土塁で囲まれており、南を防御する堀は幅30mを超え、西曲輪の虎口は、食い違いの虎口に復原でき、戦国時代に特徴的な構造の館城といえる。ただ、最初の館（守護所）についてはこれまでの研究によると、上野の館跡を想定しているようである。しかし、近年の沖積地における館の成立から館廻りの屋敷や集落の展開（守護所から戦国城下町への発展過程）、大友氏の市立ての掌握や寺社配置、さらには寺領屋敷の展開などからみて、その中心に大友氏館（顕得町3丁目の大友氏館跡及びその周辺部を含めて）を置かなくては理解できないのではないかと考えられる。いずれにしても、戦国時代には、両者が並存していたことは間違いなく、両者の性格等についての十分な研究と発掘調査が必要となっている。



上野丘陵上空より上原館跡を望む

さて、豊後国の中心地府内の宗教文化についてであるが、衰退する国分寺は大友2代親秀により仁治元年（1240）修築され、岩屋寺石仏で知られる岩屋寺は鎌倉時代末期、6代貞宗によって上野丘に移され円寿寺として再出発する。開祖は関白近衛兼経の子道勇律師である。鎌倉時代には、浄土宗・臨済宗・浄土真宗・曹洞宗・日蓮宗・時宗などのいわゆる鎌倉新仏教が台頭してくる。3代頼泰が帰依した時宗、5代貞親の臨済宗万寿寺の創建、官寺制により十刹に万寿寺、諸山に勝光寺・大智寺・妙観寺・長興寺が列せられた。浄土真宗では九州における布教の起源をなす専想寺開基の天然の存在、浄土宗では二豊最古の開創とされる石生浄土寺がある。日蓮宗は11代親著の妻千葉氏によって豊後にも

たらされたのが最初で、親蓮寺が創建される。これら中世仏教文化を具体化する有形文化財としては、金剛宝戒寺木造大日如来坐像（文保2年・1318）・木造釈迦如来立像（鎌倉時代）、万寿寺丈六像（明徳2年・1391）、在銘石造宝塔（延文5年・1360）、在銘楠木生五重塔（応永6年・1399）、在銘中間石幢など特筆すべきものがある。

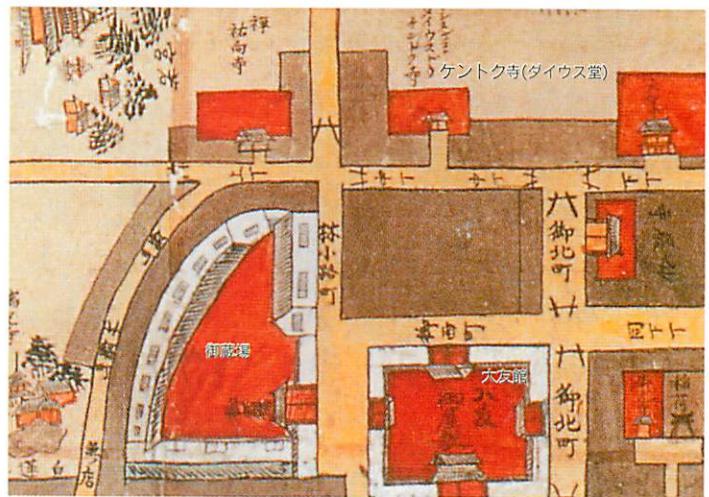
このように、大友時代、時宗・禅宗・浄土真宗など新しい宗教が次々に豊後府内(府中)に伝えられるなか、まったく新しい宗教が海外からもたらされた。それはキリスト教である。大友21代義鎮の厚い保護のもとに、府内とその近郊はじめ、臼杵・野津・朽網・由布院など豊後各地に広まった。特に府内では日本で初めて数々の西洋文化が、短期間ではあったが花開いた。キリスト教は初め、底辺階級に広まった。特に貧しい病人に受け入れられた。医療の未発達な当時、病気にかかった人々は宗教に救いを求めた。外人宣教師の報告には、病気を治した奇跡が語られる。どこまで信じられるかはともかく、眼病などは聖水(洗礼用の水)で洗うだけで、たちまちよくなったという報告は、案外信憑性があるかもしれない。苦行のムチ打ちで病気が治ったとか、キリストの画像のほこりを水で飲んだら熱が引いたとかの報告もあり、多分に精神的な心理療法で治ったと考えられる。そういう原始的医療とは別に科学的な西洋医療も府内で初めて行われた。商人で外科の心得もあった修道士ルイス・アルメイダが中心となった。初めアルメイダは府内で生活苦から赤ん坊の間引きが行われているのに心を痛め、弘治元年(1555)育児院を作り、大友義鎮に願い出て、赤ん坊を殺さず育児院へ連れて来るよう命令させた。育児院にはキリシタンの乳母と雌牛2頭、その他の設備があったという。南蛮人による日本で最初の社会福祉施設である。弘治2年暮れには、育児院を拡張して病院(いわゆる府内病院)が建てられた。病院は二分して、一つは豊後に多数いた癩病患者用、今ひとつはその他の病気に当てた。治療はアルメイダが担当し、1日2回治療した。このほか僧侶からキリシタンになった日本人のパウロが漢方医療に詳しく、府内や郊外の貧しい人々のため出張治療に当たった。病院の評判はよく、永禄2年(1559)五月には増築した。増築分は中央に祭壇を設け、両側に8室あり、各室に別々の戸を備えていて、多いときは16人を収容できた。この増築分は癩病患者以外を扱い、外科と内科があった。外科はアルメイダの担当だが、当時の日本人は外科治療を知らず、15年、20年も治らずにあきらめていた病気が外科治療で1か月余で全快したという。具体的にどういう病気をどうやって治したのか報告はないが、腫瘍などを切開手術で治したらしい。とにかく西洋医療が日本で初めて施されたのは府内病院においてだった。これは当時評判になり、京都や堺、比叡山でも話題になった。内科はパウロによる漢方医療で、中国の書籍を基に薬草から薬を作って治療したが、3日熱・4日熱はすぐ治ったという。病院は布教活動の一端で、貧しいキリシタンの病人を慈悲で治療したので、貧民病院、慈善施設とよばれた。広く一般から寄付を募るため善意の箱が置かれ、義鎮も病院に寄付している。だがこの病院も永禄3年(1560)、イエズス会の本部から治療活動に携わるなという通達がきて、アルメイダが布教活動に専念するようになり、廃れたようである。

キリシタン文化としていま一つ注目されるのは天正年間になって設けられた。府内のコレジオ(学院)である。コレジオは本格的な教育機関で、アカデミックな西洋文化を広めた。コレジオは巡察師バリニャーノが修練を終えたイエズス会員のため、さらに学問を修める場として、天正9年(1581)1月、府内に開校したが、初め司祭12人、修道士の13人の会員で始められた。講義は二つあり、一つは人文

科学、一つは外人宣教師のための日本語授業だった。コレジオで日本語辞書・文典・日常対話集・教理書などが編纂された。このコレジオはポルトガル国王ドン・セバスティアンによって設立され、毎年資金が送られてきた。コレジオの教師や生徒は、府内とその近郊のクリシタンのため、絶えず説教・洗礼・告白・ミサ・埋葬などの世話をした。天正13年(1585)には宗麟が学院で会食している。

こうした布教活動には音楽がつきものである。ミサのとき、オルガンが奏せられ、聖歌が歌われた。やがて聖歌隊(合唱隊)も結成された。すでに弘治3年(1557)3月の聖週のとき、府内教会で二つの合唱隊がオルガンの伴奏で聖歌を歌い、滞在中のポルトガル人数人が合唱に加わったという。教会で少年たちに教育が行われ始めると、少年合唱隊も結成される。永禄4年(1561)修道士サンチエスは、府内で15人の少年を選抜して歌とピオラ(弦楽器の一種で、バイオリンよりやや大型)を特別に教えた。少年たちの上達は早く、翌永禄5年9月、義鎮住院を訪れ会食したとき、少年たちがピオラを演奏して聞かせたという。永禄7年の復活祭では少年たちは白衣の胸に十字架を架け、手にろうそくを持って讃美歌を歌いながら府内教会の周辺を行進した。音楽とともに西洋の演劇や美術も府内へ伝えられた。演劇はクリスマスや復活祭のとき、教会で上演された。

南蛮文化の香る府内の町についてルイス・フロイスは、「およそ八千戸の家があり、臼杵の城から約12マイル離れ、この町は豊後の中心的町である。また、府内に近く三千(歩)離れたところに、沖の浜と言われる多数の船の停泊港があり、府内の外港として機能していた」と宗麟時代の府内のようすを記している。さらに、京・堺・博多の商人が来住して取引きを行う場所であったとも『イエズス会通信』は伝えている。宣教師の見た「府内の市」(町)はまさに物資の集積する港湾都市であった。



大友館とケントク寺(ダイウス堂)

このような府内の繁栄ぶりを裏付ける資料が今、大友氏館跡整備事業や大分駅総合整備事業に伴う埋蔵文化財調査で続々と発見され、西国最大の戦国大名大友氏に相応しい品々が出土している。それは中国の華南地方の陶磁器(三彩四耳壺)やタイ・ミャンマーの貯蔵用陶器(焼締四耳壺)など中国や東南アジアで生産された品々である。この地方はひろく「南蛮」と呼ばれ、大友氏が支配する「府内」は、中国やポルトガル商人などが行き交う国際貿易都市として遠く西洋まで知られていたのである。

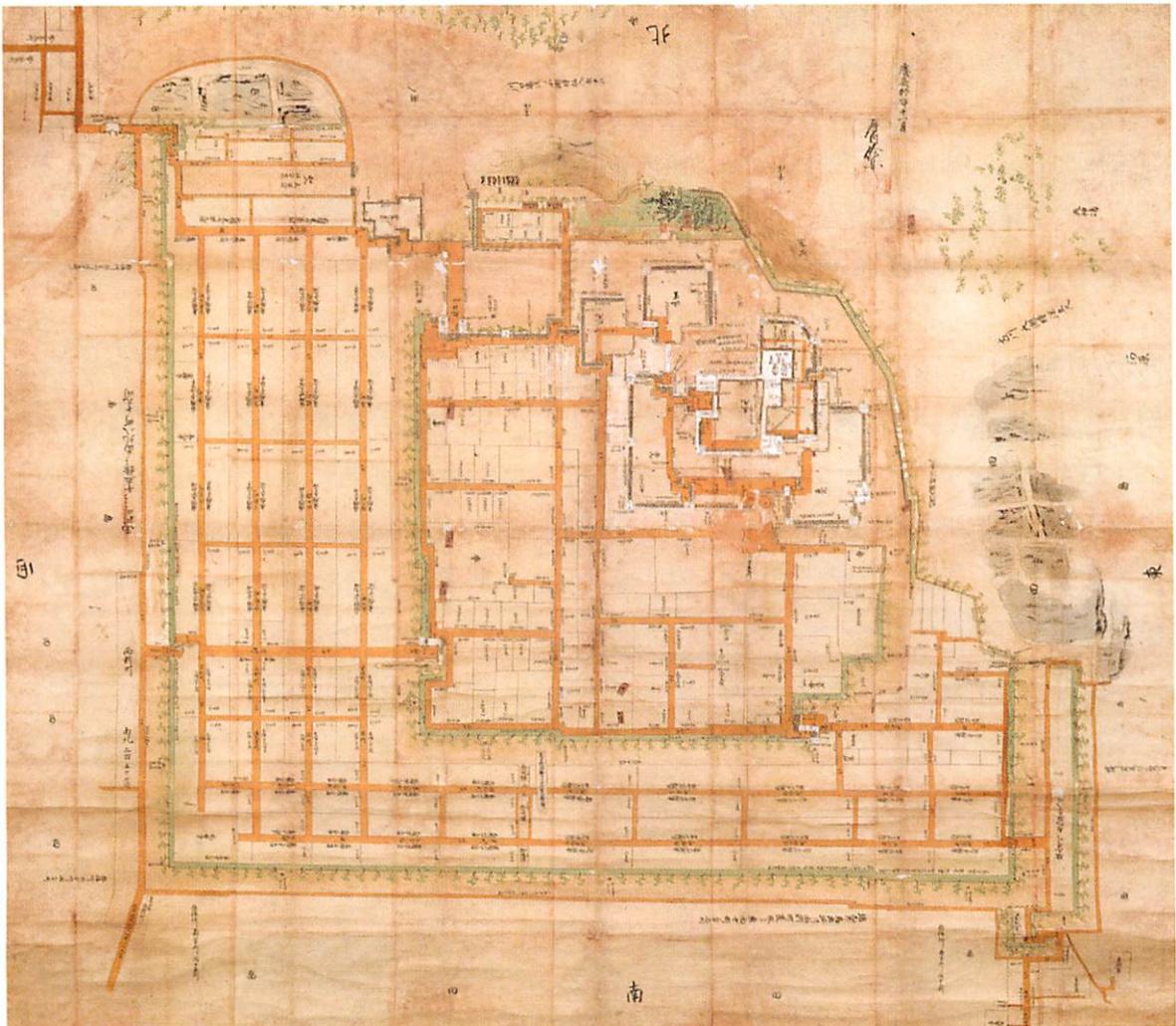
#### 4. 豊後の府 府内城下町(江戸時代)

豊臣秀吉は、文禄の役(1592)の後、失態を犯した大友義統を直ちに除国して豊後を馬廻衆に分け与え、この時豊後に入ってきた大名に城を築かせる。大分市府内城/上原館(早川氏)、竹田市岡城(中川氏)、臼杵市臼杵城(福原氏)、国東町富来城(垣見氏)、安岐町安岐城(熊谷氏)、日田市隈城

(宮本氏)、玖珠町角牟礼城(毛利氏)があげられる。

慶長2年(1597)府内城の築城が始まった。築城主は2代福原直高で石田三成の娘婿にあたる大名である。一説に12万石を受封して臼杵城主から府内に転じたという。府内城下町が2万石余の大名のものとしては規模が異常に大きいのは、このときの12万石に拠ったからだと考えられている。秀吉は、直高に「豊府は、豊後国のうちでは咽喉にあたる所、おまえらは自ら要害を見立てて築城にかかれ」と命じた。この命のもとに四神相応の好地であった荷落しの地に築城し、「落」の字は不吉として「荷揚城」と呼称された。それまでの府内の中心地は大友氏の館や城下があった現在の顕徳町・錦町・元町一帯であり、その戦国時代の府内の町を新しい地に移転させる形で近世城下町の建設が進められた。その城下町は現在の市街地にあたる。直高の失脚後、城づくりを続けたのは竹中重利である。慶長5年(1600)の関が原の戦い後、家康の命で2万石の府内城主に任じられた。築城の名人肥後の加藤清正の石工を請い、大阪の伏見からも職人を呼び寄せて、この2年後に石垣、天守諸櫓、武家屋敷などの主要施設を完成する。城下を囲む外堀ができたのがその3年後、次いでさらに3年後までに商船が出入りする堀江(京泊)を開削した。このように、直高の築城開始から完成まで11年間を要してようやく完成を見たのである。

大分川と毘沙門川の河口部に築かれた府内城は、本丸、二の丸、三の丸(武家屋敷地)と城下(町屋地)からなり、各々を堀で囲み、全体に女性的で優美な姿であるが、浮き島の馬出し曲輪(西の丸・



府内絵図 (大分大学付属図書館蔵)

東の丸・北の丸)を重ね合わせるなど、防御的にも最高の構えであり完成度の高い城である。四重の天守は寛保3年(1741)に焼失。現存する建築物は人質櫓(本丸北西隅)と宗門櫓(南側)。他は復元されたものである。高石垣に築かれた白壁、その姿は春の桜とともに水堀りに映し出され、訪れる人々を楽しませる。白壁を白い雉(鳥)に擬して白雉城ともいわれる。

町人たちの町は、東西10町(約1000m)南北は9町の距離をもち、中堀と外堀との間につくられた48町の町が町人町である。長方形区画に短冊形に割り振られた両側町には、細工町、大工町、塗師町、鍛冶屋町、革屋町などの職人町、京町、桜町、万屋町、米屋町などの商人の町などがあつた。

近年の発掘調査において、「寺町かじや」・「寺町仕立屋」・「西町長右衛門」など町名を記した「焼き継ぎ」された陶磁器類などの生活品が多量に出土し、町人の生活の様子がしだいにわかってきた。商家の数は245軒、質屋、計屋、塗師屋、金具屋、研鞘屋、仕立屋、油屋、檢物屋、桶屋、鍛冶屋、革屋、揚酒屋、魚屋、柄巻屋、紺屋など実に多様であつた。他に町医が7人、針医が3人、外(外科?)1人などもいた。

昭和30年代に進められた町名改正によって、旧城下町名も町区もほとんど姿を消し、今はガレリア竹町に残るにすぎない。しかし、府内城跡を中心に、町の隅々には府内の町を育ててきた歴史の営みの跡がまだまだ残され、一部であるが、往時の景観をとどめている。

今から約300年前、福岡藩医で儒学者、「養生訓」の著で有名な貝原益軒が府内を訪れた。その時の益軒の感想は、「府内の町の西と南とには堀がある。これは城の要害となっている。東と北とは海になっている。城は町の東北の方に位置しており、すこぶる大きな構えである。天守があつて、城の出入り口は三ヶ所となっている。町もまたすこぶる広い。この町ではたくさんの商品が揃っている。城主は松平対馬の守(近禎)殿、二万一千石の領地を持っている。ここ府内の地は、豊後の府だ」と(「豊国紀行」より取意)。この益軒が「豊後の府」と称した府内は、今も県都の中心街として繁栄をつづけている。

## 5. おわりに

「府」という語意には、政務の中心と言う意とともに、人や物資が集散する所という意味がある。大分のまちの特質については、つまるところ「府」という語源に集約されると考えられる。すなわち、かつて奈良の昔には地方政府の国府が置かれ、「古国府」の地名が伝わっている。鎌倉~室町時代には上野丘から顕徳町、錦町、元町一帯は「府中」と呼ばれ、戦国時代には「府内」と称された。江戸時代、新しい城下町が造られるとその地名を「府内」と呼んで、それが今に連続しているのである。まさに、この地は古来から「豊後の府」という位置にあり、東九州の玄関口として発展をとげた。このことが大分のまちの特記すべき特質である。

(玉永 光洋)

## 2. 府内と府内古図

### 1. 府内(府中)

中世大友時代に守護所がおかれた現在の**大分市**は、江戸時代までは**府内**と呼ばれていた。府内(府中)は中世以来ここに守護所が置かれた事に由来する事は他の例にもれない。文献上の府中の初見は、文暦1年4月10日(1234)賀来大宮司法橋上人位定文写で、大友氏が豊後国守護に任ぜられた後であるが、実際に入国したと推定されている1254~60年頃以前となる。

大友氏が最初に守護所を構えたと思われる**高国府**(大分川左岸自然堤防上地域、高国府の本来は上野台地上)に、入国以前から大分川の水運を考慮した**国府市(町)**が存在していた可能性は高い。大友氏が実際に入国したとされている年より前の仁治3年(1242)1月15日に、町の存在を前提とした、『新御成敗状』が出されている。

### 2. 府内古図

府内古図は現在三種類12点(写真・印刷図のみでしか確認できない絵図も含む)が確認されている。原典(近代の模写も含む)は6点の所在が確認されているが、その内江戸時代の写図と思われるものは3点のみである。

府内古図に描かれた範囲は三種類とも同じで、その内容の相違は、一つの原典から写図され変化した事を示している。その範囲は、大友時代府内町の範囲を示し、大分河左岸自然堤防上(高国府の一部)の大友館を囲む町から外港としての沖の浜(春日神社周辺、現在の勢家付近)までである。

◎ 府内古図の成立 府内古図に年号の書き込まれたものは、B類(天保5~14年1834~1843)・C類(文政12年1829)古図のみで、何れも写図者自身の自分なりの考証を加えた古図である。一番古いと推定されるA類古図に紀年の入った古図はない。古図の信憑性さえ疑われていた事もあったが、渡辺澄夫氏や、大分市史の編纂によってその信憑性は確かめられている。

古図の成立時期については、幕末の府内藩学者安部淡斎がその編纂書『雉城雑誌』で述べており、寛永年中(旧府内町が慶長7年(1602)に移転してから30~54年程)に、藩主日根野吉明(寛永11年(1632)~明暦2年(1656))が、旧府を偲び、移転させられた旧府住民の情報を元に描かせた絵図であるとす。それによってさらに範囲を限定すると、寛永13年(1636)発見の大臣塚古墳(大臣塔)が記載されている事からこれ以降のことである。府内古図A類の記載内容から充分妥当性のある説。B類・C類には後世の考証が書き込まれている(特にC類古図)。

◎ 府内古図の分類 府内古図は大きくA・B・C類の三種類に分類できる。

**府内古図A類** (第1図) 原典又はそれに近いと考えられる。寺院はその境内を囲み門のみを描き、神社は鳥居・拝殿・本殿を画一的に描く。街路に面した町屋部分は黄色にベタに着色するが、郊外の家は家屋を描いている。絵の情報・地図の範囲はB・C類と同じであるが、文字情報は少なく、全体に描きこみは丁寧である。旧家蔵の古図以外に、それを写したと思われる古図が3点確認されている。

**府内古図B類** (第2・3図) 描かれた範囲、文字情報はA類と類似するが、絵は極めて粗雑であり(B2類)、文字情報も漢字をカタカナで表現し、また発音は同じでも別の漢字に置き換えてしまった物がある。

B1類はB2類に文字情報や基本的な街路の書き方が類似している。A類にありB類1・2にもあるが、C類に見られない点は、1.大友館の門が東に面し、礼門と通用門が描かれる。2.所謂“蔵場”に名称が無く、他と同じ空白地表現。3.称名寺に東と南に門がある。他に、A類→B・C類の関係にある事項は、大友館→大友御屋敷、大臣塔→大臣塚、比丘尼寺→尼寺がある。

B1類は一点、B2類は旧日名子太郎蔵の後藤碩田写の古図と、それを写した古図が何点かあるが、後藤碩田写図は所在不明である。後藤碩田写図(B2類)には天保5年に樵溪が萱嶋蔵本(上ノ原金剛宝戒寺付近の農家より出て、府内町人が写した絵図)を写し、同年それを後藤碩田が写し、さらに天保14年碩田が園田氏本を持って色彩等を校訂したと記入されている。

**府内古図C類 (第4図)** A・B類に比較して絵・文字情報が多く、後世の注釈的記述も多い。一番の違いは、椎迫(堀切峠)への道、上原への道(本城道)描かれている点、慶長元年の地震津波で沈んだという瓜生島または沖の浜にあって地震後、移されたとされる町・神社等が描かれている。本図には別に、春日神社周辺部分のみの絵図が添付されたものがあり、その絵図はA・B類のその部分と同じである。A・B類にはない瓦葺白壁土蔵の蔵場が描かれ、大友館(大友御屋敷)の四方に門が描かれるなど大きな変化がある。本類は若宮神社の位置・大臣塚・蔵場などの情報変化からすれば、A類からC類への直接の変化は考えにくい。牧在氏写図2点、その他2点、合計4点が確認されているが、原典が確認できるのは牧在氏の2点のみである。牧在氏の絵図には「当御本丸有之 元府内之図 文政十二己丑年皐月吉辰 牧在氏写焉」とある。

府内古図は以上のように三種類存在するが、その成り立ちからして旧府内町を復元的に研究する資料としてはA類古図を優先的に使用すべきで、B・C類はあくまでも参考程度に留める必要がある。A類とC類に齟齬がある場合は、C類に描かれた事が何らかの方法(新しい史料の発見、考古学的検証)で確認されるまでは、A類を優先することが肝要である。

### 3. 府内古図と字図から見る府内町の構造

府内古図を字図に落した府内町は、町筋の主(仮称=大路)と従(小路町)、各町の面積の推定が可能である。字図による復元図は基本的には竹中重利が府内町民を移転させた慶長7年までの状態を示していると思われる。(第5・6図)

その復元図から以下の事が読み取れ、その町割は天正年中の頃の京都の町割に類似している。

南北道路(主)大路 仮称(市町筋 大路筋 寺町筋) (3本)

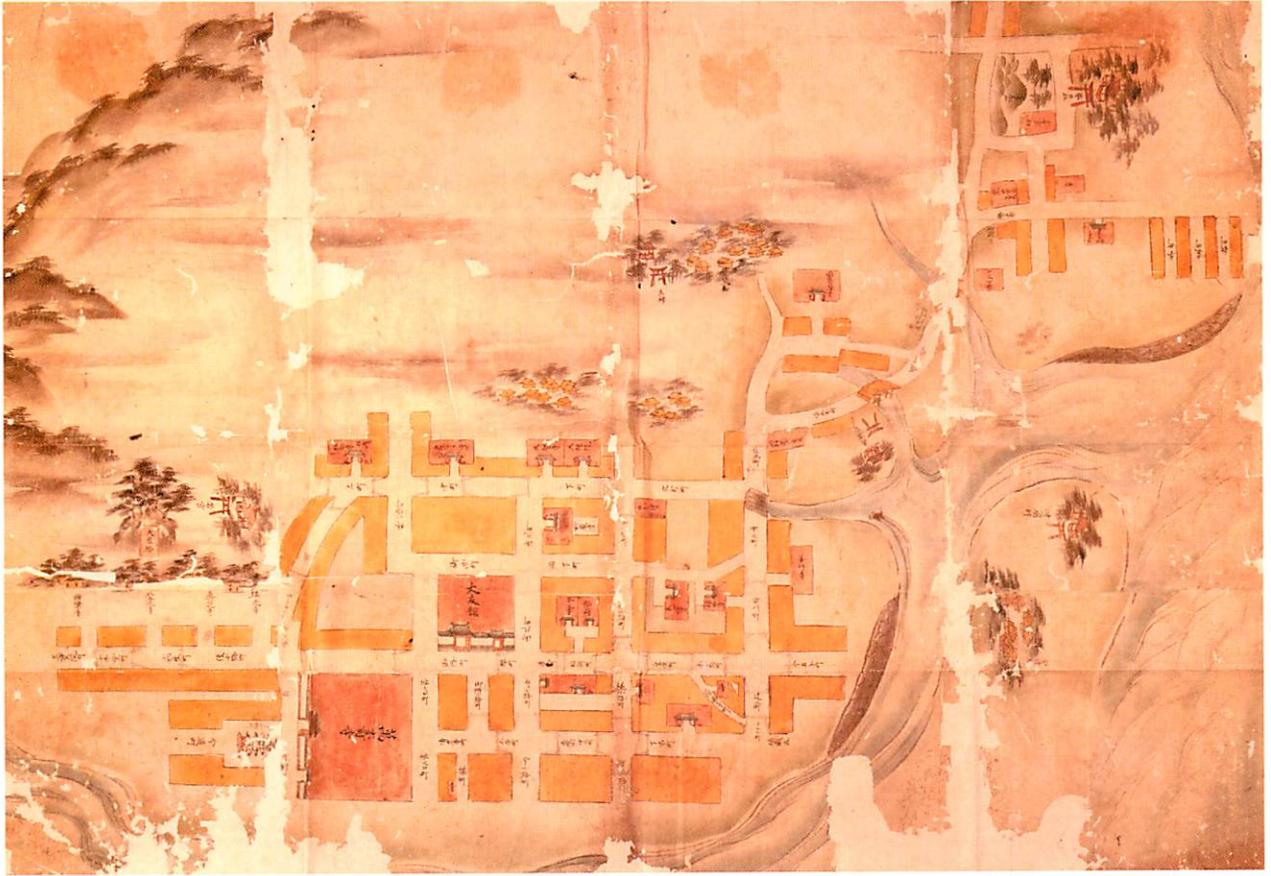
基本的に町屋の類(面)が交差点まである。

東西道路(従)小路町(横小路・名ヶ小路・御所小路・西小路・今小路) (3+1本)

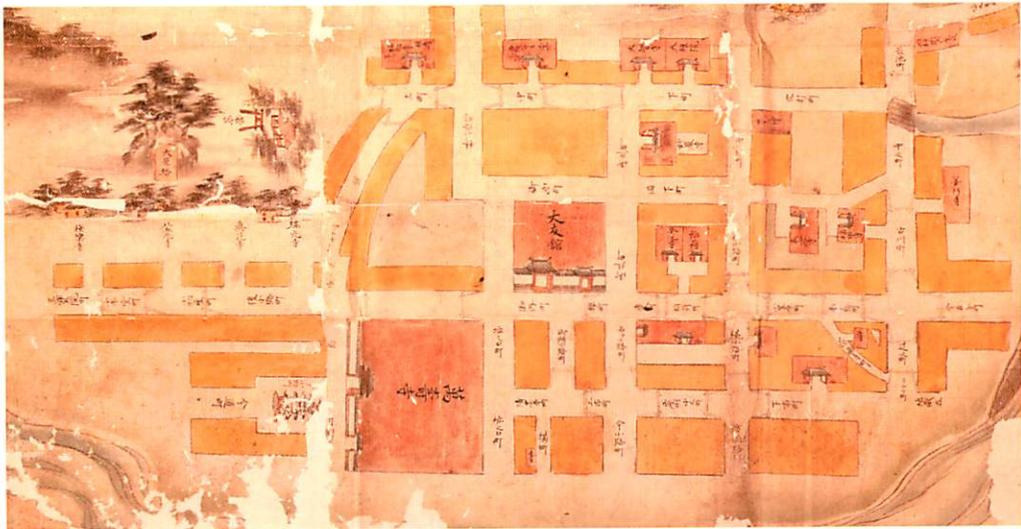
基本的に町屋の類(面)は交差点より内側にある。

しかし、辻之町～古川町は東西道路であるが交差点まで町屋の類(面)があり、小路町とはなっていない。反対に交差点南の南北道路の南小路町は類(面)が交差点より内に入り、小路町となっており、古河町筋が骨格を形成する町並みとなっている。古川町(古河)が骨格を成す町となっているのは、府内が「古河、即府内也」(『日本一鑑』)とされたり、「風流計古河の者各別に仕候」(『当家年中作法

第1図 府内古図A類

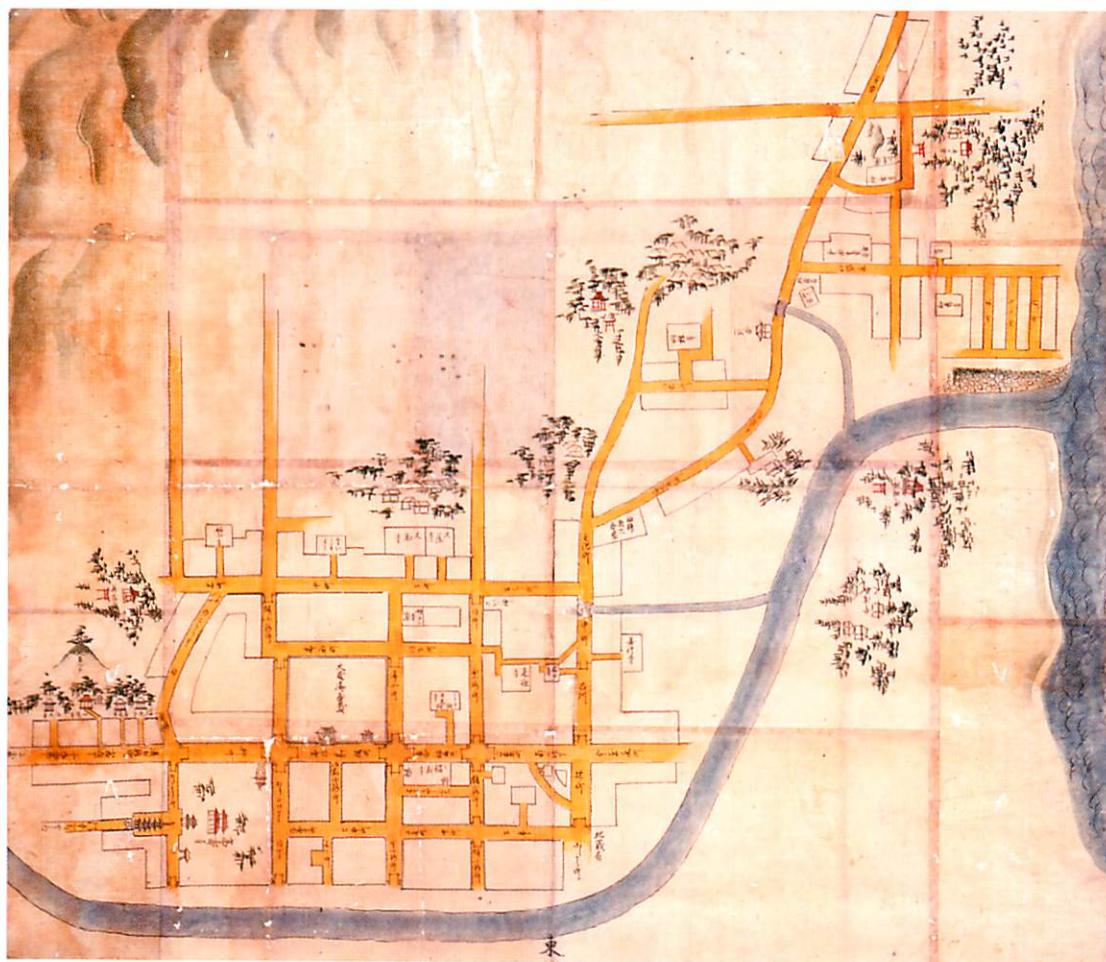


府内古図A類（個人蔵）

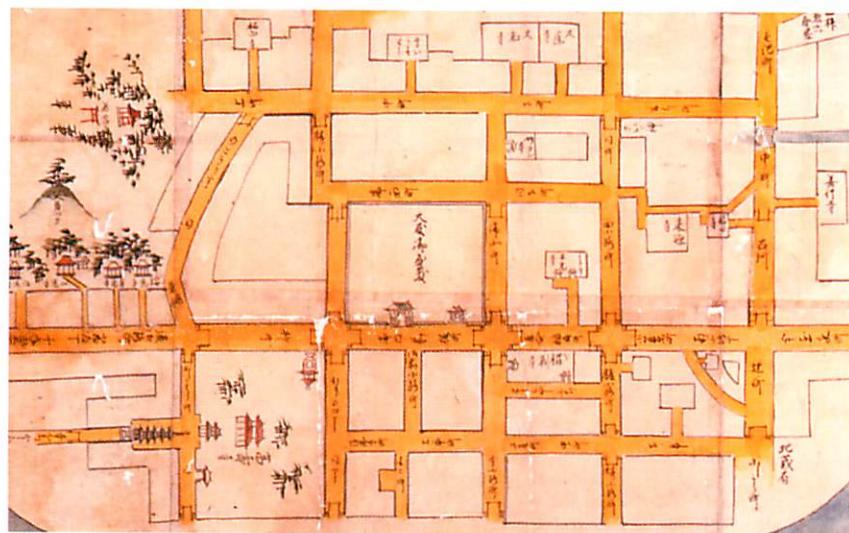


[部分]

第2図 府内古図B-1類

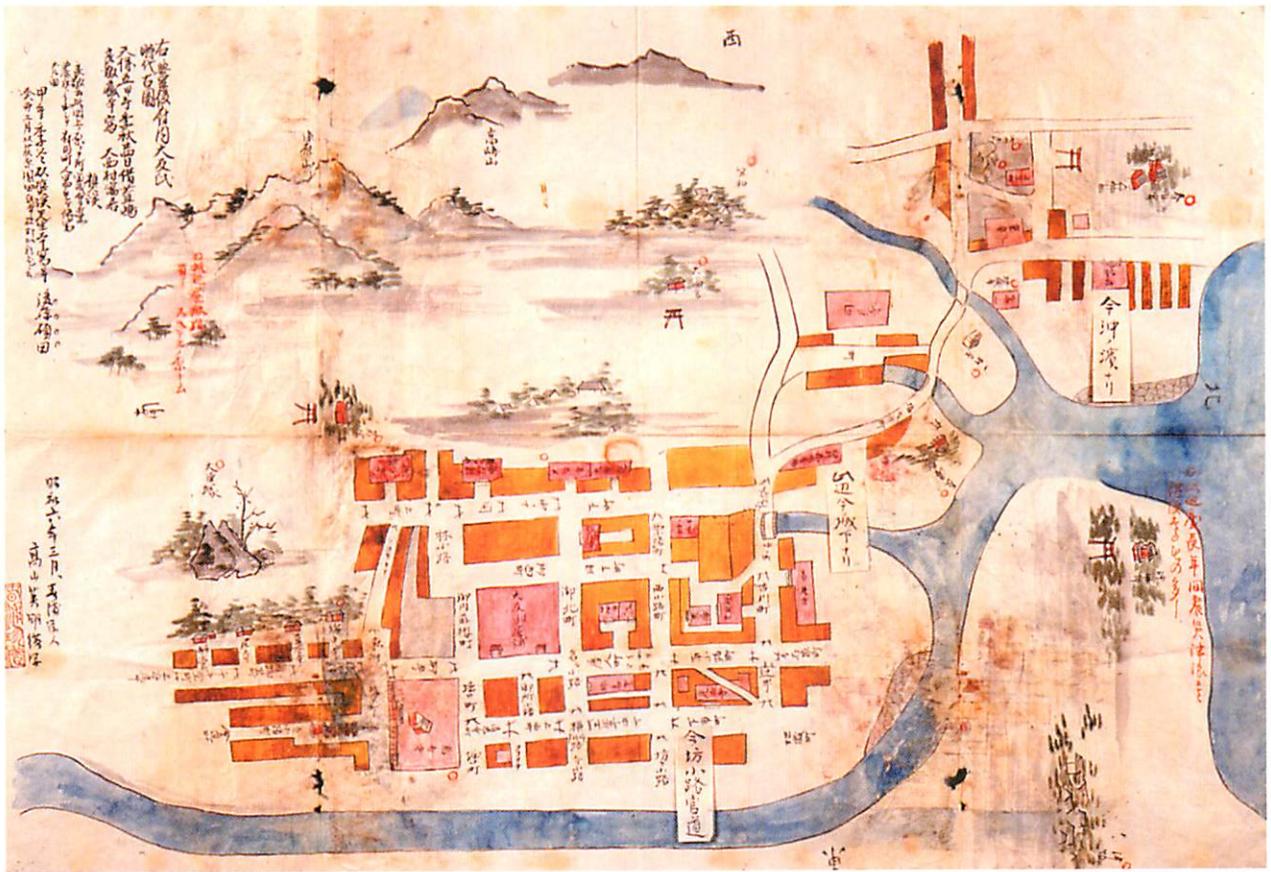


府内古図B-1類 (大分市歴史資料館蔵)

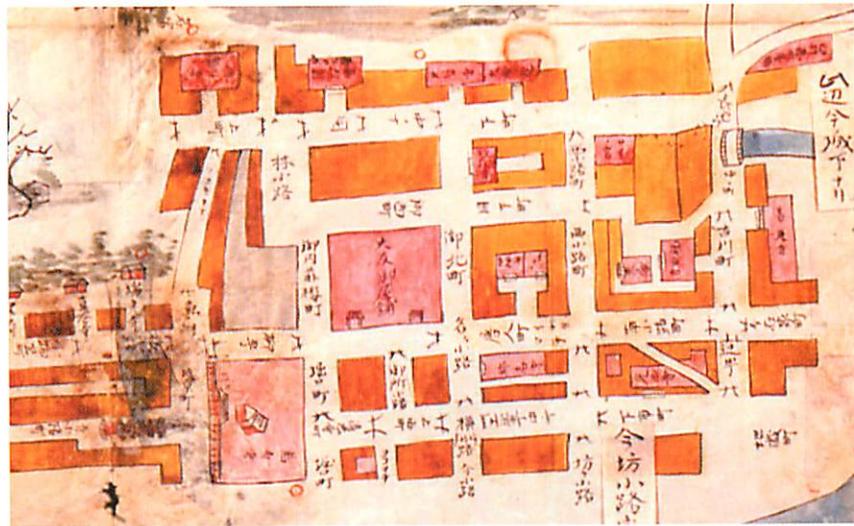


[部分]

第3図 府内古図B-2類



府内古図B-2類 (高山家蔵)



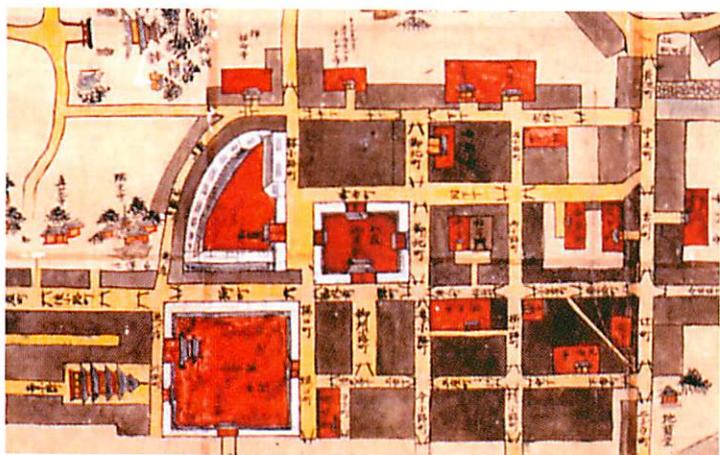
[部分]

第4図 府内古図C類

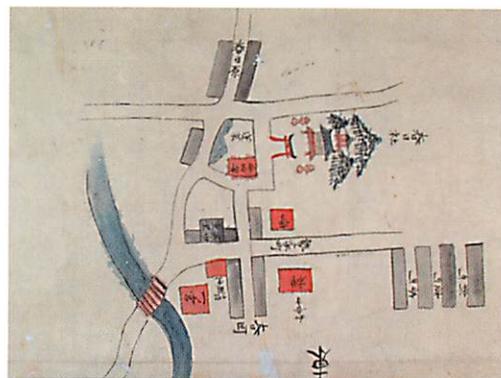
a



府内古図C類 (大分市歴史資料館蔵)



[部分]



a' (上図aに接続する)  
別添付 (春日神社周辺部)

日記』)とされていることと関係のある事と思われる。また、この道が町の東(大分川以東)西(笠和・沖の浜)を結ぶ道路となっている事も重要である。従って主要街路は古河町筋、市町筋、大路筋、寺町筋となり、それに東西街路の小路町で構成される町となる。

以上の事と街路軸線の方位の違いから推定すれば、まず市町筋(南北路)、古河筋(東西路)が存在し、大友館等とともに、大路筋・寺町筋(南北路)・横町筋(東西路)などの街路が整備されていったと推定される。

#### ◎府内に四町あり?

新しい府内城下町に移転した町は、興味深い事に府内・松末・千手堂という旧府内町の地名をとった町組みに編成された(第5図3)。他に新城下町には、笠和・同慈寺という大友時代からほぼその場所にあった町の町組みも設置された。先の三町組内の町を旧府内町に戻して見ると、概路北から松末・府内・千手堂の町組みが南北に長い旧府の町を輪切りするように並ぶ(第5図2 第6図)。以上の点からすれば、旧府内町に町組の存在の可能性を読み取る事ができる。この仮称町組の推定範囲からはみ出す町が幾つか存在する。その内、今在家町は府内に属すにも拘らず、町の北外れ=松末の北側に存在するが、その名称からして、府内から新たに分離した町である事がわかる。

文禄4年(1595)に幽閉中の大友義統が書き留めた『当家年中作法日記』に「十五日祇園会(中略)山八四町ヨリ四本、万寿寺大工ノ山、山崎一本、惣大工一本、右七本八相定候。(中略)(七月)又十二日、廿六日大風流有。…中衆の風流…。市衆、町衆、と申候て、殿中衆二ツ仕候。…惣而、四町にて候へ共風流計古河の者各別に仕候。」とあり、祇園山鉾を四町からも出していたという。江戸時代に行われた祇園祭りの山鉾は、二つの町が合同で一つの山鉾を交代で出している例が多いが、よく見ると、一つの町組み内に固まることなくそれぞれバランスよく各町組みから出している(山鉾が一基の場合はこの限りではない)。通常この四町は、例えば上市町とか唐人町とかいう個々の町から出したと考えられようが、江戸時代に残る伝統からして、町組み単位であった可能性も考えられよう。その場合の四町とは先の町組みの三町と府内古図に見られる外港としての沖の浜が候補となる。

また、『大友公御家覚書』に「一、元日三日まで、府内の町より、松ばやし参るなり。(下略)

一、同(正月)十一日、府内より松ばやし参り、右同断。又同日上の原より獅子参る。(下略)」とあり、この場合の“府内”は、同一文脈に“上の原”があることから、町組みとしての府内の範囲と考えるのが適当である。

町組の府内と、豊後府内と言った場合の府内は、おのずとその範囲は異なる事になる。『当家年中作法日記』等に「一府」という用例がいくつかあり、その幾つかは地域が推定され、町組としてのの府内の範囲内の事のように思われる。『天正十六年参宮帳』では、府内として旧府内町は勿論の事「西植田」「金剛宝戒寺」「津守」が入っている。しかし、萩原・戸次・賀来は大分郡となっている。府内には幾つかのレベルが存在するようである。

#### ◎字図からの復元図と発掘結果との整合性

旧府内町の発掘調査が進み、府内古図から復元した図と、整合性のある地域と不整合の地域の存在が明らかになった。その理由は、結論的に云えば、古図作成時の情報量の差(移転住民の有無)によるものと考えられる。

## 第5図 府内古図と字図から見る府内町の構造

### 府内古図(A類)に見える町名

#### 【府内】

- 1.桜町
- 2.唐人町
- 3.名ヶ小路町
- 4.工座町(→櫓物町)
- 5.上市町
- 6.清忠寺町
- 7.御北町(→於北町)
- 8.御西町
- 9.櫓町 (A類に記載なし)  
(“やなぎかうち”の事か?)
- 10.魚之店(端光寺町→魚町)
- 11.西小路町
- 12.今在家町  
(新府では千手堂町に入る)
- 13.御所小路町
- 14.御内町
- 15.堀之口町
- 16.今小路町
- 17.横町
- 18.林ノ小路町
- 19.上町
- 20.中町
- 21.下町
- 22.御西下町
- 23.片側町
- 24.ノコギリ町
- 25.寺小路町

#### 【松末】

- 26.下市町
- 27.稲荷町
- 28.中之町
- 29.辻之町
- 30.ニシウ町
- 31.小笠原町
- 32.南小路町
- 33.長国寺町
- 34.横小路町
- 35.穴打町
- 36.長池町
- 37.古川町  
(新府では千手堂町に入る)
- 38.坊之小路町

#### 【千手堂】

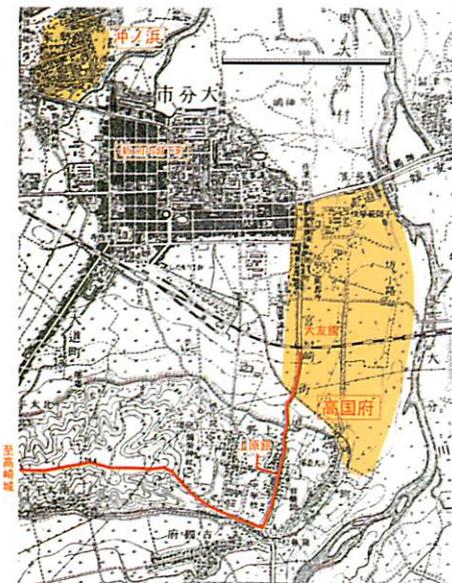
- 39.今道町
- 40.後小路町
- 41.小物座町
- 42.千手堂町(→天神町)
- 43.三宝院町

■ 伊勢参宮帳にてでくる町名  
— 新府内城下町に移転した町

### 古図に見える社寺

- |          |                       |
|----------|-----------------------|
| あ.大友館    | て.蔵場 (府内古図A-B類に記載なし)  |
| い.万寿寺    | と.光西寺 (府内古図A類に記載なし)   |
| う.祐向寺    | な.称名寺 (府内古図A類に記載なし)   |
| え.ダイウス堂  | に.清忠寺 (府内古図A-B類に記載なし) |
| お.大智寺    |                       |
| か.大雄院    |                       |
| き.妙巖寺    |                       |
| く.サイノ神   |                       |
| け.本光寺    |                       |
| こ.稲荷     |                       |
| さ.来迎寺    |                       |
| し.善巧寺    |                       |
| す.福田寺    |                       |
| せ.瑞光寺    |                       |
| そ.真花寺    |                       |
| た.比丘尼寺   |                       |
| ち.極楽寺    |                       |
| つ.白杵悪六屋敷 |                       |

■ 金剛宝戒寺 (古図外)



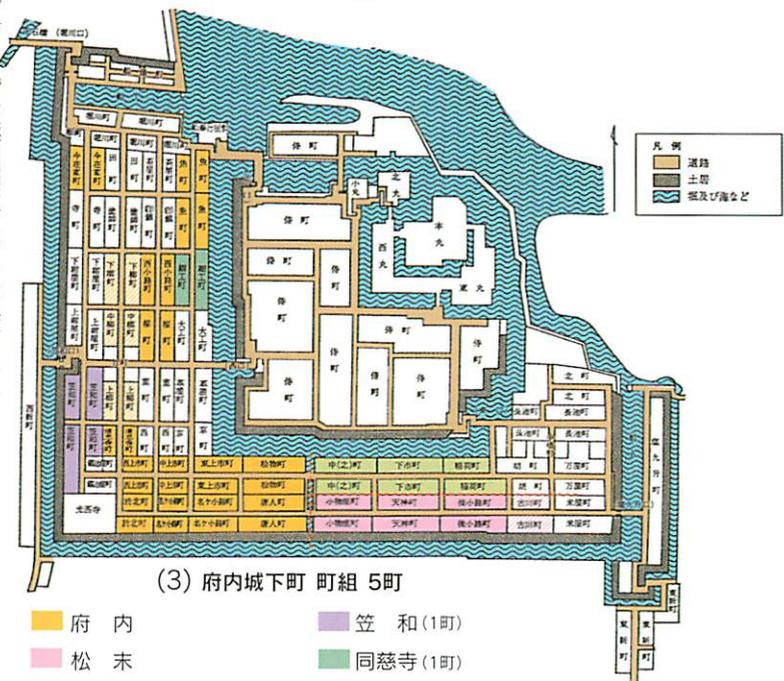
(1) 大正7年大分市街図

■ 府内古図に見られる  
主要な町の範囲



(2) 旧府内町(慶長7年以前)  
(原図: 大分市歴史資料館1992)

0 300m

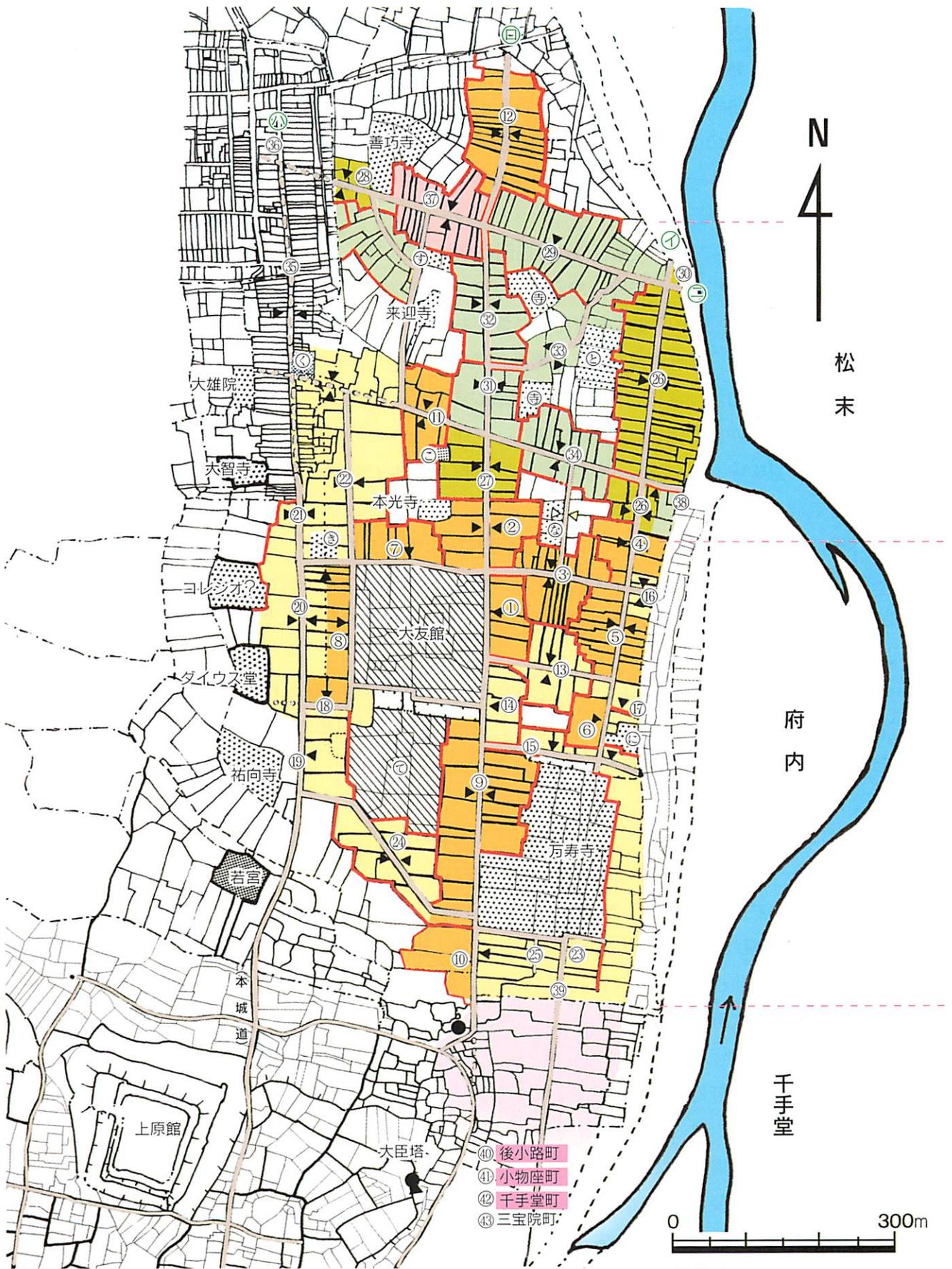


(3) 府内城下町 町組 5町

- |       |           |
|-------|-----------|
| ■ 府内  | ■ 笠和(1町)  |
| ■ 松末  | ■ 同慈寺(1町) |
| ■ 千手堂 |           |

(各町組色塗りは旧府内町より移転した町)  
(笠和・同慈寺は元々在った町)

新府内城下町(慶長7年以降)  
(原図: 大分市史(中)1987に加彩)



便宜上の主要道筋名 (仮称)

- ① 市町筋(南北路)
- ② 大路筋(南北路)
- ③ 寺町筋(南北路)
- ④ 古河筋(東西路)

■ 新府に移転し、松末町組となった町  
 ■ 松末の推定範囲

■ 新府に移転し、府内町組となった町  
 ■ 府内の推定範囲

■ 新府に移転し、千手堂町組となった町  
 ■ 千手堂の推定範囲 (一部)

第6図  
**中世府内町**

(歴史資料館1992の一部に  
 加筆・加彩したもの)

ある程度整合性のある地域は、大友館、横小路町、上市町、桜町、唐人町、御所小路町、名ヶ小路、清忠寺町付近で、新府内への移転住民のいた町またはそれに近い地域である。それに反し相違が見られる地域は、移住住民のいなかった地域=例えば寺町筋、大友館南部地域(所謂“蔵場?”)付近である。これらの地域は地割の区画も市町筋等と比較すると大きめで、移転住民もいない事などから、未だ家臣団の集住については問題点が存在するようであるが、家臣団などの居住地域の可能性が考えられる

#### ◎所謂“蔵場”と柳町

蔵場名称はA・B類古図に、柳町はA類古図に書かれていない。「参宮帳」に“柳かうぢ”とでてくるのが柳町であるとする、復元図からすればB・C類古図にある柳町は所謂小路町ではなく、柳町は“柳かうぢ”とは別である可能性も考える必要がある。「当家中作法日記」に「(五月)十五日祇園会の事、六月朔日より、宿老奉書を以、棧敷奉行衆被申付候。近年八、大津留大和入道、田吹山城入道、松崎左京入道、木付治部丞にて候ツ。屋形棧敷のむかふ八蔭山也。十間の棧敷也。左右八宿老をはしめ、分限通之衆、次第次第也。諸寺家同前に、うらむかへ二かけて、うち候。少身に候へ共臈、筋目之衆、多分、打申候。」とあり、所謂蔵場側に十間(18.2m)の屋形棧敷が設けられた事がわかる。蔵場側に棧敷を設置するだけの空白地があった事になり、A類古図で柳町に相当する部分の町屋表現としてのベタ塗り部分の一部は、B・C類でいう柳町でない可能性がある。また、大友館の前でなく、C類古図で“蔵場”とされる空白地(A類古図の他の部分の空白地と同じ描き方)の前に屋形棧敷を設けた事に、“蔵場”だけでない何らかの意味(例えば軍事的な意味(祭礼動員も軍事訓練の一つ))を持っていた可能性がある。

#### ◎天正14年(1586)島津侵攻後の府内町の復興 伊勢参宮帳に見られる旧府の町名

番号は「天正十六年参宮帳」での初出順で、見方によっては町の復興順ともいえる。(括弧[ ]内は当該年度に再度参宮者を出した町)

天正16年—①たつ市、

天正17年—②たう人町・とうちん町(唐人町)③みなり町(稻荷町)④桜町⑤寺小路

天正18年—⑥いまさいけ(今在家)⑦市之町、[桜町]

天正19年—⑧古川⑨千手堂⑩うしろかうじ(後小路)⑪はやし殿かうじ(林小路?)⑫下市

⑬柳かうぢ(柳町?)、[いなりまち、唐人まち、市之町、桜町]

それを、町組毎にまとめると、天正16~19年迄に復興した町は

府内—②たう人町12人 ④桜町23人 ⑥市之町12人 ⑫柳かうぢ3人 ⑩はやし殿かうじ1人

(名号小路、於北町、魚町、西小路町、清忠寺町、今在家町、工座町)

松末—③みなり町7人 ⑪下市1人 (北町)

千手堂—⑤寺小路2人 ⑦古川2人 ⑧千手堂2人 ⑨うしろかうじ1人 (小物座町)

※人数は参宮帳に見える数(合計)。

括弧内は慶長7年迄に復興した町(参宮帳に見られないが、府内城下町に移転している町)

#### 4.大友氏の府内防衛の三層構造 大友館(守護館)—上原館(里城、府内城)—高崎城(詰城)

本稿は、絵図情報と史材の検討作業の結果であって、現時点では仮説の範囲を出ない事項がある。

#### [参考]

木村幾多郎 1996「高国府勝津留考」『Funai府内及び大友氏関係遺跡総合調査研究年報』V

木村幾多郎 1997「豊後府内の都市建設」『大分・大友土器研究』21

木村幾多郎 2001「府内古図再考」『Funai府内及び大友氏関係遺跡総合調査研究年報』IX

### 3.上原館について

#### 上原館～もう一つの大友氏館～

上原館は、四方に土塁をめぐらす南北156m、東西112～130m、北西隅に30mほどの張り出しを有する堅固な構造の方形館で、府内古図に描かれた大友館とは別にもう一つの大友氏館として上野大友館（史料に登場する「上原館」）が周知されてきた。（以下、府内古図に描かれた「大友館」「大友御屋敷」＝大友館、周知遺跡「上野大友館」＝「上原館」と呼称）

この二つの大友氏館に対して、これまでの研究では<sup>1)</sup>、上原館を3代頼泰が豊後に入国し最初に守護所として以来の大友氏の本拠地と考え、大友館については、大友役所ともあるように、大友氏の執務の場として、その成立時期は不明であるとしながらも、上原館に後出するかたちで、併存するとされてきた。これに対して近年、頼泰が豊後に入国した際に守護所の地として割譲を要求した勝津留についての考察<sup>2)</sup>から、むしろ先に守護所がおかれた場所を絵図に描かれた大友館とし、上原館の成立を南北朝期とし、高崎城（詰城）－上原館（本城）－大友館（守護館）の3層構造を指摘した研究成果<sup>3)</sup>も存在し、この二つの大友氏館の位置づけが注目されてきた。

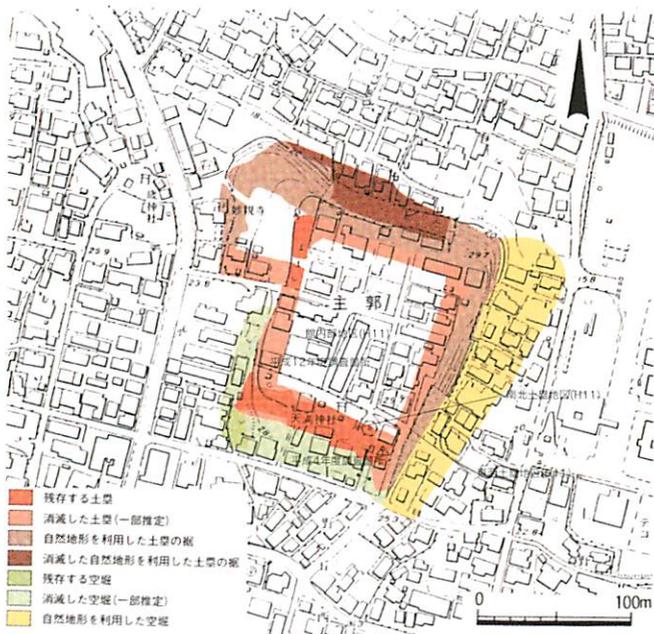
このような状況下、上原館においてこれまで行われた土塁部分の発掘調査<sup>4)</sup>の結果は、共通して2時期にわたる土塁の積み土の単位が確認されている。即ち、版築状積み土と斜め方向の締まった積み土による古段階の土塁を覆う形の礫を多く含む荒い斜め方向の積み土による新段階の土塁の2時期である。これら新旧2時期の土塁の時期的な位置づけについては、その出土遺物等から、古段階の土塁が15世紀後半～16世紀前半（？）に、新段階の土塁が16世紀後半にそれぞれ位置づけられている。（なお、現存する土塁状の地形は、この新段階の土塁に起因するもので、北西部の張り出し部もこの新段階土塁構築時つくられた可能性が高い）さらに、この土塁以前の状況については現状で、古代（8世紀後半～9世紀）の遺構及び遺物包含層の存在が確認されるのみで、3代頼泰が豊後に入国する段階の遺構は確認されていない。

これらの発掘調査の成果は、少なくとも、16世紀後半段階において大友館と明確な機能差をもって併存しているという、古文書研究の両説を裏付けるものである一方で、その成立時期に関すること（大友館と上原館のどちらが先行して成立するのか？）については、いまだ明確な答えを出せない状況である。今後の大友館及び、上原館の内部の詳細調査が待たれる所である。

（河野 史郎）

註

- |   |          |      |  |
|---|----------|------|--|
| 1 | 渡辺澄夫     | 1974 | 「古代中世の大分」大分県地方史73                                  |
|   | 〃        | 1982 | 「豊後国府と守護所」『増訂豊後大友氏の研究』                             |
|   | 大分市      | 1987 | 『大分市史 中』ではこの立場をとる。                                 |
| 2 | 木村幾多郎    | 1996 | 「高国府・勝津留考」『Funai 府内及び大友氏関係遺跡 総合調査研究年報』V            |
| 3 | 〃        | 2000 | 「大友館と戦国時代の府内～二つの大友氏居館と中世府内町～」<br>大分県考古学会第16回大会発表資料 |
| 4 | 大分市教育委員会 | 1998 | 『大分市文化財調査年報vol.9 1997年度』                           |
|   | 〃        | 2000 | 『上野大友館（上原館）跡～下水道工事に伴う発掘調査報告書～』                     |



上野大友館（上原館）縄張り図・調査区位置図  
（大分市史より転載・一部改変）



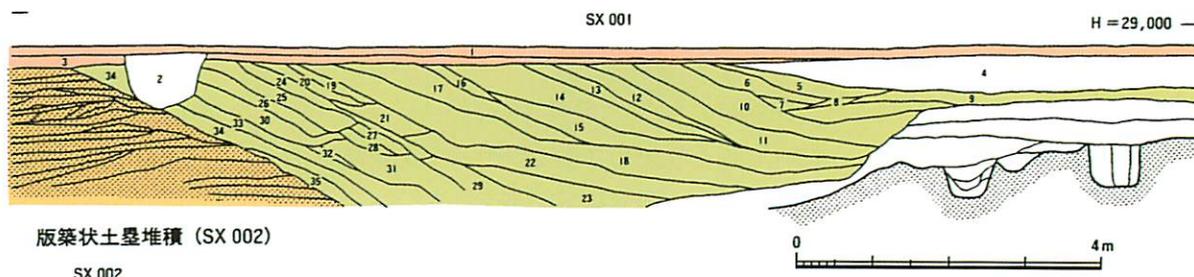
H12年度調査 古段階埋土出土遺物



H12年度調査 土壘 写真（新段階）



H12年度調査 土壘 写真（古段階）



版築状土壘堆積 (SX 002)

SX 002

H11年度調査 土壘 土層断面図 (S = 1/100)



上原館跡現況地形図 (1/1500)



上原館周辺地籍図 (1/4800)

## 4.高崎城跡

別府湾を見下ろすように、標高628mの山塊が海からせり上がり、天然の要害である高崎山は、瀬戸内海国立公園の特別保護地区に指定され、豊かな森には天然記念物の野生サルが生息する山としてよく知られる。「高き山の出崎」という山容にちなみその名がついたと言われ、また山頂から四方が見渡せることから別に「四極山」とも呼ばれる。大友氏は、この天険の地勢をもつ高崎山の山頂に城を築いた。そのはじまりは14世紀の南北朝の頃である。そして戦国の世には堅固な山城へと拡充され、今も往時の姿を良好にとどめている。昭和61年、大分市史編纂事業に伴って500分の1の地形図及び縄張図が作成され、また平成元年には、新設登山道工事に伴う畝状空堀群（豎堀）の発掘調査等が行われている。これによって、城の構造・規模（全長約600m）がほぼ把握され、大友氏の山城では筑前の立花城につぐ大規模な城郭であることがわかった。



山頂部東側の南斜面に分布する豎堀遺構の発掘調査（平成元年の9月～11月）では、測量調査段階では8条の豎堀が確認されていたが、詳細な現地踏査の結果、新たに10条の豎堀遺構が発見され、合計18条となった。豎堀は、山頂部の曲輪直下（標高580m～530m）に位置する群とやや下位（標高約540m～480m）の群があり、大手口正面のやや西側から東側の南斜面全域に分布することが確認された。規模は、幅約3m～9m、全長約16m～90mである。断面は、V字、U字形をなし、深さ約0.7m～2mである。両豎堀間には土塁（多量の礫混入しており、石塁状をなす）を築き、堀底との比高差を増すことによって、起伏にとんだ地形を造り出している。これらの豎堀は、ほぼ等間隔に配置されているが、緩傾斜部に位置するところでは大規模な豎堀間に小規模な豎堀が畝堀状に配置され、いわゆる畝状空堀群となっている。また、急傾斜地では豎堀の規模は大きく、豎堀相互の間隔も広くしているのに対して、緩傾斜地では小規模な豎堀を数多くするといった特徴が認められる。遺物には、山頂部東部の出曲輪直下の豎堀内及びその周辺から、かわらけ片約300点、備前甕片数点、瓦器質すり鉢片1点など比較的多くの遺物が出土した。また、山頂部の曲輪内から多くの備前大甕片が採集された。年代は16世紀中頃から末である。



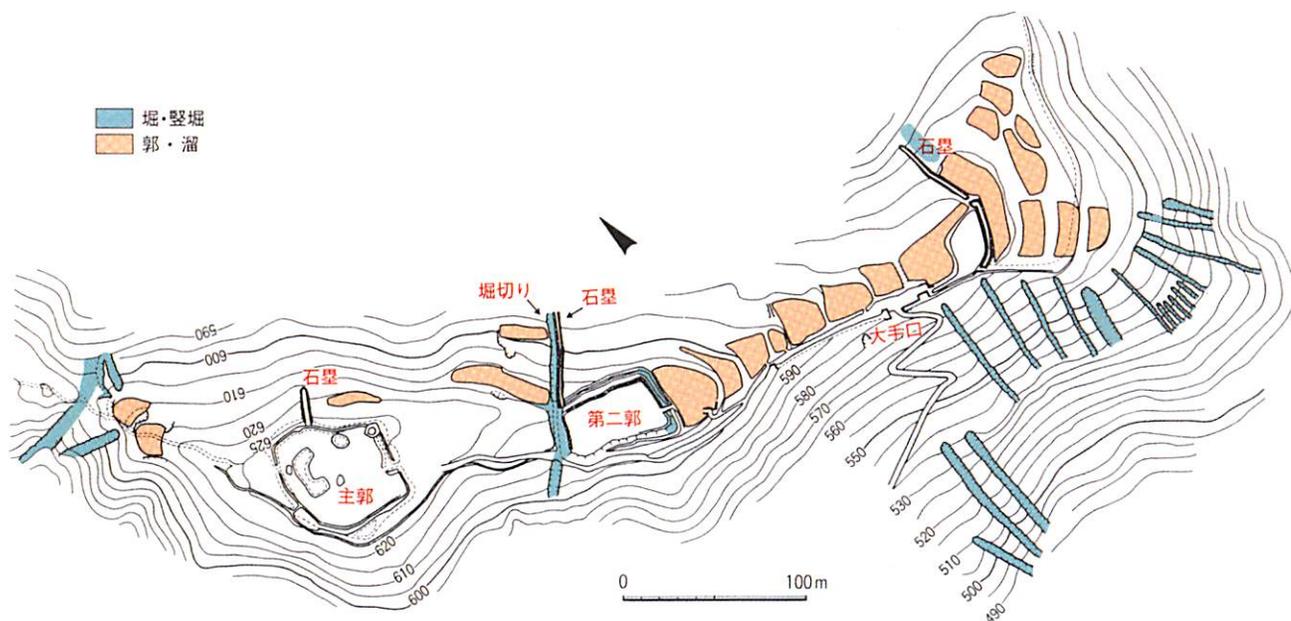
第10号豎堀状況

縄張りには、最高所の曲輪に連なるように曲輪群が重層的に並ぶ、いわゆる連郭式の山城であるが、よく見ると最高所の曲輪の東側で、大規模な堀切に接し、横堀と石塁を廻した長方形の曲輪は、空堀に石橋を渡し、虎口（出入口）の両側に巨石を建てるなど他の曲輪に比べて特段に配慮された造

りとなっている。これは、本来最高所の曲輪が主郭であったものが、最終段階には主郭を移動させたと理解される。つまり、西の堀切と東の石塁を新しく築いて、左右のラインを決め、大手口から登っていく城道土塁を設け横の守りを固めて、城域をコンパクトに約2分の1の規模に集約し、東南部の緩斜面には畝状空堀群を設け、外縁部の防備を完璧に固めた城に改修したと考えられる。大手口や櫓台など主要部分における石（石積み）の採用や大手虎口の枡形空間、主郭虎口の多重性と横矢掛けなど曲輪外縁部とともに内部の装置にも十分配慮された構えで、当時の最先端の技術を駆使して築かれた山城の様子は、戦国大名大友氏の拠城に相応しい内容である。

(玉永 光洋)

注：高崎山城として周知されているが、同時代史料に見える「高崎城」の名称を使用した。



高崎城跡 遺構配置図 (S = 1/4000)

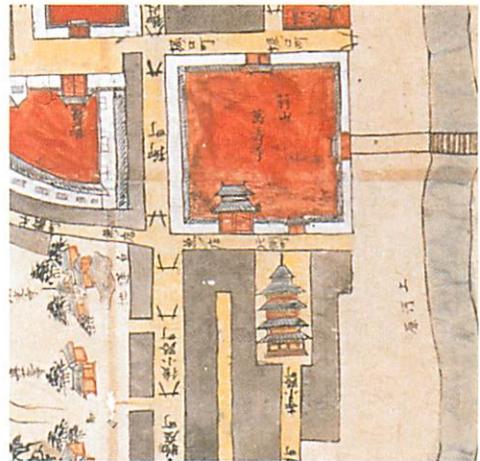
## 5.大友氏関連遺跡・名所

### 大友氏の菩提寺「万寿寺」 まんじゅじ

大友時代を通じて武士階級の信仰を集めたのは禅宗である。万寿寺は、府中（府内）で最初の禅寺で、大友5代貞親が建立した。『大友家文書録』によると、徳治元年（1306）大友貞親は府中に万寿寺を建てて、直翁を招いて開基したという。万寿寺は臨済宗の道場として栄えた。貞親が万寿寺を建てたいきさつについて『豊筑乱記』は貞親が嘉元三年（1305）鎌倉に上った時、時の将軍平貞時（北条貞時は将軍ではなく前の執権）は深く仏教に帰依していたが、貞親に「大友殿はさぞかし出家（僧）を供養（敬う）されていることだろう。どのような僧衆を供養されているのか」と聞いた。貞親はつねに僧を供養してなかったので困った。ありのまま答えれば貞時の期待に背くし、うそをいうのもどうかと思ったが、「筑前博多の承天寺と申す寺に、直翁という僧を申し請け、百余人の僧を供養しています」と答えた。貞時は大いに感心し、「直翁は都の東福寺聖一国師のお弟子だ」といって、以来、貞親が鎌倉滞在中、社寺に参拝するときは貞親を召し連れた。貞親は内心、恥ずかしく思い、暇を願い出て徳治元年（1306）豊後に帰り、直翁を招いた。直翁は招きに応じて府中の万寿寺に入った。貞親は直翁について禅宗に傾倒し、貞時にいったとおり万寿寺に百余人の僧を供養し、千余貫の寺領を寄付したので、仏法は大いに栄えたと記している。

万寿寺は現在、東新町にあるが、当時の万寿寺の位置は、現大分市元町付近で、一説には荒廃していた寺を貞親が再興したのだともいう。4町（約436m）に6町（654m）、あるいは8町（約872m）四方の寺域に、南に開いた山門、開山直翁禅師の常楽院、十門（直翁禅師の弟子10人）の諸院が本殿に続く大伽藍で、内に4閣、外に通じる4橋があったといわれている（『禅余集』）。開山の直翁智侃は足利泰氏の子で、蘭溪道隆（宋の禅僧、鎌倉建長寺の開山）に師事し、のち入宋、帰国後は博多の承天寺に住していた。

直翁智侃寂後、万寿寺には多くの名僧が来ている。大友氏という強力な外護者（俗人の援助者）のいた豊後万寿寺は、日本を代表する禅刹のひとつとなっていくのである。禅宗の官寺制度である五山・十刹・諸山の制では、建武年間（1334～36）に豊後万寿寺は十刹に列せられており、暦応4年（1341）には足利直義によって「第十豊後万寿」として坐位が定められている。延文3年（1358）には「第八豊後万寿」と改定され、康暦2年（1380）には「第九豊後万寿」となっている。十刹の下には諸山があるが、中世末には全国で230ヶ寺にも及ぶ。このように隆盛を極めた万寿寺であるが、文明18年（1486）・明応元年（1492）・永正11年（1514）・天正14年（1586）の4回にわたる火災を受けており、天正14年の島津氏侵入による火災では、山門と釈迦如来が残るだけの状態であったという。



府内古図の中の豊後万寿寺

（坪根 伸也）

## 府内の防衛拠点「鶴賀城」<sup>つるがしやう</sup>

鶴賀城は大分市上戸次利光に所在し、府内周辺の城郭としては高崎城に次ぐ大規模な山城である。

この城は大野川下流の平野部への出口に位置しているとともに、大野川沿いの狭い隘路となって通過する日向道を直下に望む位置に所在しており、大友氏にとっては府内防衛のため戦略的にきわめて重要な拠点であったと推定される。

山麓との比高約170mの標高最高点にある主郭は、檜台を伴う土塁を有し、周囲の斜面には27条の豎堀からなる畝状空堀群が設けられている。これに加えて、南側には尾根を遮断するように3本の土塁が連続して築かれており非常に堅固な縄張りとなっている。主郭から東に延びる尾根上には総延長約230mにわたって土塁と横堀からなる防塁が設けられ、その東端に13条の畝状空堀群を付設した曲輪が造られている。北側には、主郭から北側に約400mの地点および北西側に約350m離れた地点に堀切が掘られ、そこまでの間にある尾根の平坦部分が曲輪になっている。とくに主郭に最も近い曲輪には17条の畝状空堀群が設けられて堅く防御されており、この北東斜面には階段状の小規模な曲輪も多数造られている。さらに、主郭の南側および西側にも曲輪が設けられており、西側の曲輪には小規模な畝状空堀群が設けられている。以上のように、鶴賀城の遺構は主郭を中心にその周囲の尾根上、とりわけ北および東に向かって長く展開しており、これらをあわせると東西約500m南北約550mの範囲に及んでいる。しかし主郭以外の曲輪群の多くは削平が不十分なものであり、元来主郭のみの単郭であった山城を急遽大規模に拡張整備したものであることが強く窺われる。こうした拡張・整備は島津氏の豊後侵攻（天正14年：1586年）の直前に行われたものと推定される。

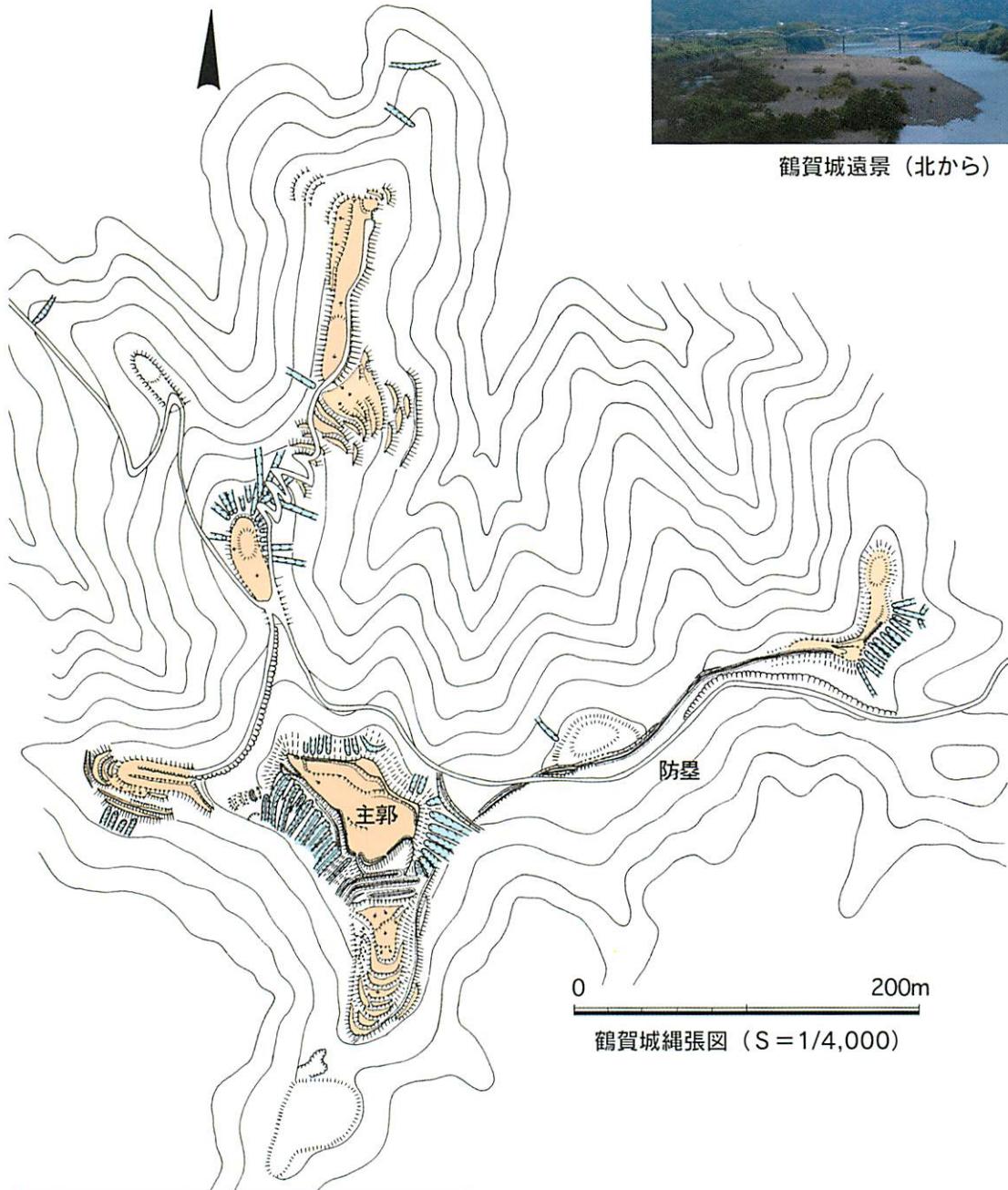
鶴賀城の各曲輪からは多数の遺物が採集されているが、ベトナム産白磁印花文碗や華南産の青釉稜花皿・褐釉陶器を含む貿易陶磁器が数多く確認されており、府内の遺跡で出土する貿易陶磁器の様相と大差ないといえる。また、備前焼を主体とする国産陶器や瓦質土器火鉢も多くみられるが、土師器杯・皿は糸切りのものが少数存在するのみで、京都系土師器は今のところ知られていない。

天正14年12月、鶴賀城は豊後に侵攻した島津軍の攻撃を受け、利光宗魚を守将とする約3000名が籠城戦を展開したとされる。これを救援しようとした大友氏と秀吉から派遣された仙石秀久などとの連合軍は、12月14日戸次河原で島津軍と戦って大敗し、この結果島津軍は府内に侵攻することとなった。これまでに鶴賀城で採集された遺物の中には二次的に被熱したものも多く確認されており、この城をめぐる攻防戦の一端を物語っている。このように、鶴賀城は大友氏の歴史の終末を画する豊薩戦争の舞台として、きわめて重要な遺跡であるといえよう。

（高島 豊）



鶴賀城遠景（北から）



鶴賀城縄張図 (S = 1/4,000)



鶴賀城 採集遺物



左：ベトナム白磁印花文碗  
 右：青釉稜花皿  
 (二次的に焼けて赤銅色に変色している)

## 豊後国一宮「ゆすはらはちまんぐう柞原八幡宮」

柞原八幡宮（由原宮）は大分市の北西部、八幡に鎮座し、平安時代終わり頃の12世紀半ば以降、豊後国の一宮に位置付けられた神社である。古くは由原宮、由原八幡宮、賀来社とも称され、柞原となったのは明治以降のことである。国指定重要文化財「柞原八幡宮文書」に収められた由緒書「大宮司平経妙申状案」（鎌倉時代・1289年）によれば、同宮は平安時代初め頃の



柞原八幡宮本殿

827年、比叡山延暦寺の僧・金亀和尚が宇佐八幡宮に千日間宮ごもりの修行をした際、八幡神が豊後国に垂迹するとの神託を得たことに始まる。その験である八幡大菩薩の初衣が宇佐八幡宮から賀来社へ飛来したため、朝廷は豊後国司に命じ、社殿を造営させた。

以後、豊後国の国役として祭礼が行われ、国司の着任のたびに大神宝を調進し、参拝が行われるようになった。さらに、平安時代中頃の998年には宇佐八幡宮と同じく33年毎に社殿の造営が行われるようになったことが伝えられている。

事実、豊後国司は由原宮造営のために賀来荘を寄進し、各種神事を国役として負担していた。また、同宮最大の神事である放生会には在庁官人等も参加していたことが知られている。

すでに、国家神として位置付けられていた宇佐八幡神を勧請した由原宮の保護は豊後国司にとって重要な任務だったのである。その後は、豊後国一宮の遷宮に際して「国君」が社参し、太刀3腰と馬3疋を祝儀として奉納することが慣例となった。

豊後国守護大友氏と由原宮との接点は、大友氏が豊後国衙機能を掌握した南北朝時代から始まる。大友氏は遅くとも南北朝中期までに在国司、税所等主要な在庁官人職を掌中に収め、国衙機能を掌握し、豊後国唯一の支配者としての地位を確立した。

この新しい権力構造は由原宮の遷宮に際し、守護大友氏が「国君」として参詣することによって明確に周知されたのである。

その意味から、由原宮は守護大友氏にとってその地位を示す格好なセレモニーの場であり、鎌倉時代まで豊後国衙が果たしていた保護者としての責務も引き継ぐことになったのである。

南北朝時代より大友氏の歴代当主は立願成就のため田地や武具類などを寄進しており、今日まで伝来しているものも存在している。同宮にはこれらをはじめ、太刀や甲冑、さらに古文書や絵巻物などの重要文化財が数多く所蔵されている。

毎年9月14日～23日まで行われている「浜の市」は放生会に起源をもつ同宮の祭礼市であり、「志きし餅」などで有名な祭りとして現在も親しまれている。

（塩地 潤一）

※柞原（八幡）宮は、基本的に明治時代以降現在まで使用されている名称である。

参考文献 長田弘通 1996「中世後期における守護大友氏と由原宮」

「Funai 府内及び大友氏関係遺跡総合調査研究年報V」大分市歴史資料館

## 6.戦国期都市臼杵について—もうひとつの大友戦国都市—

### 1.大友義鎮と臼杵一宣教師たちの記録などより

#### ・戦国期都市以前

臼杵市は現人口3万7千人ほどの、東を速吸瀬戸に面する地方小都市である。臼杵市街地は臼杵市の南・西・北を取り囲む、標高500~300mほどの低山地帯に源を発する、臼杵川・末広川・熊崎川・海添川の4河川が合流する河口低地部に占地するが、この母体は16世紀半ばに大友義鎮によって整備された戦国期城下町である。

それ以前の臼杵の「都市」としての成長は、12~14世紀には臼杵荘の中核施設があったと推定される野村台を、15世紀~16世紀前半には大友宗家である親繁・政親の居館があったとされる戸室台やこの時期の臼杵荘の地領的存在であった臼杵氏の居館があったとされる田篠台を核とする、臼杵川中~下流域にてなされていたことが、近年の発掘調査によって判明しつつある。おそらく義鎮以前の町場はこの周辺に存在していたものと思われる。弘化4年(1847)に臼杵在住の加嶋英国が作成した中世後期の臼杵川下流域の推定復元図「本多家御館旧跡絵図」には、現在の中市浜あたりに、「京泊湊」という港湾・「万貫町」・「唐人市場」という町場の姿が描かれていることも、その想定をさらに具象化するものとも言えるが、残念ながら加嶋英国がこうした描写をどんな史料に基づいて復元したかが不明なままであり、その扱いには慎重な検討も必要となろう。

#### ・丹生嶋城と都市の形成

義鎮の丹生嶋城(臼杵城)築城年代については、弘治年間説と永禄年間説の2説がある。前者はガスパル=ピレウの書簡中にある(1557年10月29日)「城のような島」が、義鎮が築いた丹生嶋城(臼杵城)に比定されることや、永弘文書中の「某手日記」弘治三年五月二十一日の項の、「大友殿御座ス入ウスキ焼失候、」により、このころにはある程度の丹生嶋城整備がなされていたとする見解である。後者は「大友家文書録」・「豊後国志」「稲葉家譜」などの近世史料にみる、丹生嶋城築城完了時期をその論拠としている。

しかし、城下の中核機能を持つ町場で、フロイスが「町」として表現する城下町の形成開始年代については、未だに判然としない。ただ、アルメイダの永禄8年(1564)の書簡にある、「豊後のキリスト教徒の大部分は臼杵の町に移ったとし、彼らの依頼で教会建設用地の交付を義鎮に請うたとする記事は、少なくともこのころに他所から移入してきた住民がおり、彼らが臼杵のいずこかに町場もしくは居住区を形成していたことを想像させる。これ以前の宣教師の書簡等に描かれる臼杵の姿は、「臼杵の城」もしくは「邸宅」内における事象のみであり、町場の描写は見当たらず、むしろ、町場に先行して「城」「邸宅」が存在していた印象さえうける。ちなみに永禄12年の臼杵についてのフロイスの記録には「国主の政庁」という表現がはじめて登場する。元亀元年(1570)のアルメイダの記録にも「政庁の所在地である臼杵」という表現がなされており、この時期には実質的な大友領国支配の政治中枢機能が臼杵に存在していたことを垣間見ることができる。

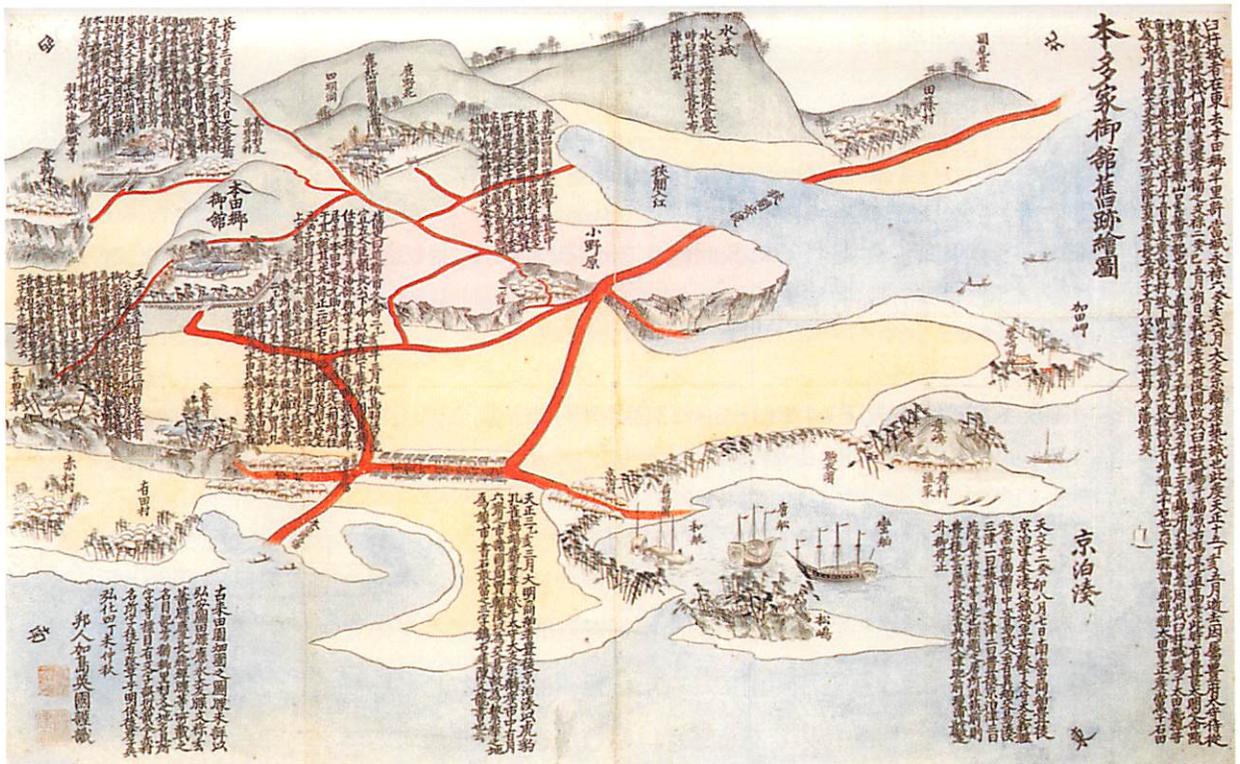


图1 本多家御館旧跡繪圖 (白杵市立白杵図書館蔵)

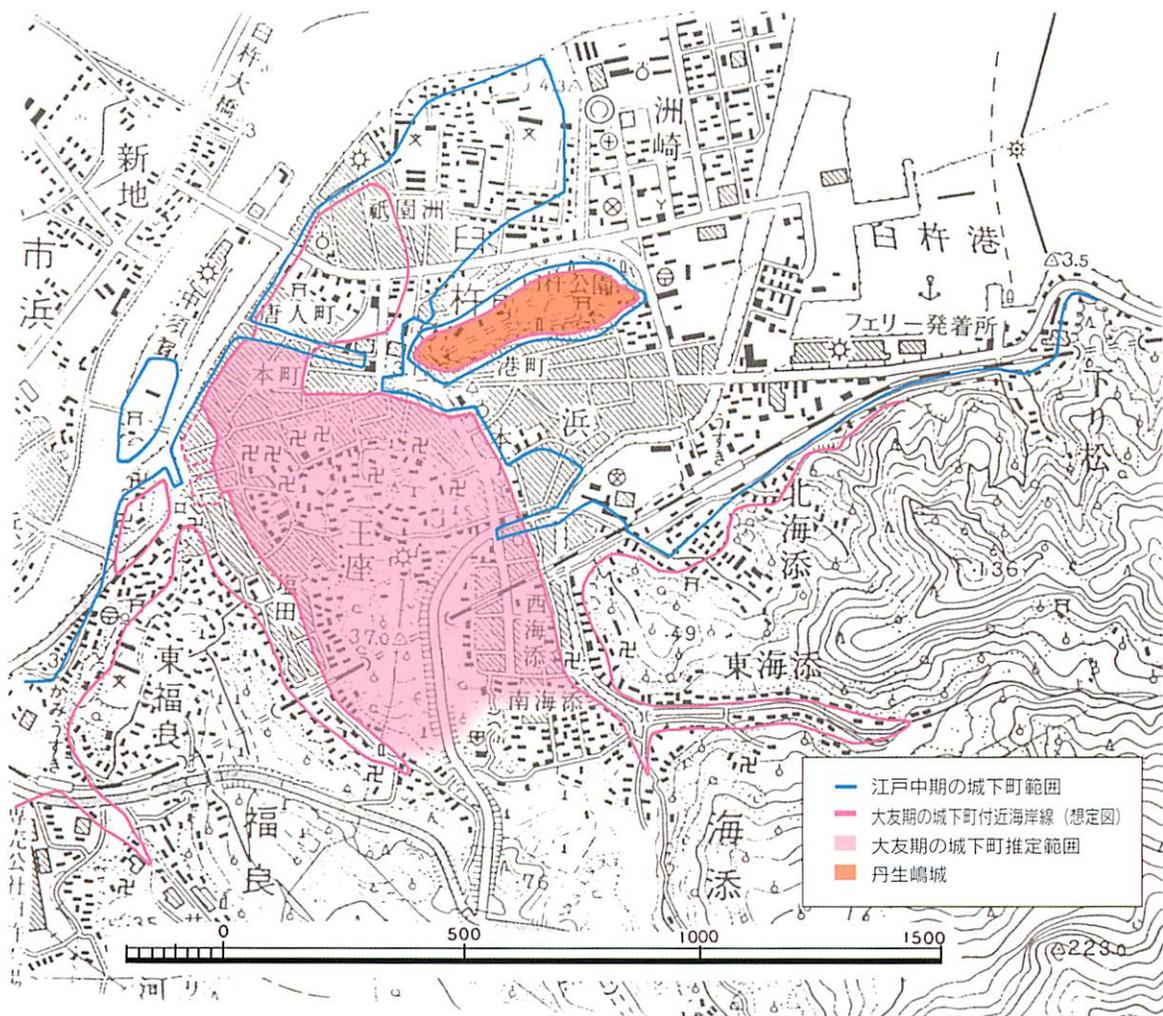


图2 白杵城下町

## ・都市の住人

宣教師たちの書簡・記録類に、町場の住人たちの姿が徐々に活写されるようになるのは、永禄8年以降のことである。ことに天正5年(1577)の、田原親虎(洗礼名シモン)のキリスト教入信に端を発する「シモン事件」前後には、「異教徒」とされる仏教信者たちとの反目が臼杵の教会付近であったことが記されており、「町」もしくはその周辺地である「村落」において、思想・宗旨のことなる住民が混住している様子が窺える。

「日本史」第68章における天正14年(1586年12月4日)の、島津軍臼杵侵攻時の記事はさらに具体的である。その日の午前中から正午にかけて「町」と「その周辺」の「(下層階級に属する非常に貧しい)住民」や修道院の人々が大学して丹生嶋城に避難するが、「町」と「周辺」の住民との間に、居住区による区別はなされず、平等に領民としての扱いがなされている様子が窺える。また、この避難ののち、もしくは同時に、義鎮は「町」に敵兵が籠って、ゲリラ的市街戦を展開することを防ぐために「町」への放火を命じるが、周辺村落については島津軍侵攻直前にこれらの処置は行われておらず、この避難が放火に際してのものではなく、戦闘の危険回避のためであることは明らかで、丹生嶋城自体が当時、有事の際の「町」および「周辺」住民の避難所としての性格を有していたことが想像される。同時期・同状況下の府内住民が「ある者は船で逃げ、他のものは死に物狂いで深い山の中に逃れた」という情況と好対照を成し、「城」に対する義鎮の概念を垣間見ることができよう。飛躍しすぎるかもしれないが、臼杵においては、「町」も「周辺」も城下として概念される都市の範疇に属し、その中核たる「町」が城下町と概念される存在であり、城と城下の、住民を介在させた関係がこのようなかたちで成立していたのではないかと考えられるのである。

現在でも、江戸期に城下町として概念されていた地域の周辺に、戦国期の大友家臣が屋敷を設けていたと思われる地名、あるいはその伝承が市内に残されている。たとえば大字福良の「温井」地名の起こりは、大友家臣団の一人でキリシタンである、奴留湯主水正の屋敷地であったことによるという説(臼杵小鑑)があるし、そこより500mほど西の地点には、字名として「志賀殿屋敷」という、加判衆の一人たる志賀氏屋敷の存在を彷彿させる地名が残されていることなどである。「町」中において、武家衆と町衆が混住していたかどうかを明確に示す史料はないものの、大友勢力の実質的な首都としても、また、離反者が続出していた当時の情況打開のためにも、積極的な家臣団の集住策がとられていたであろうことは想像に難くない。

なお、天正16～19年にみる伊勢参宮帳には、当時城下町を構成していたであろう「海添町・唐人町・横町・浜町・横浜町・かけや(屋号か?掛町か?)」の町名が認められる。

## ・戦国期城下町から近世城下町へ

義鎮は天正15年5月23日(1587年6月28日)津久見でペストのために没しているが、島津侵攻によって丹生嶋城を残して荒廃した臼杵城下は、国主である大友義統と住民の努力によって「当初の規模と外観におとらぬほど」の復興を遂げるに至ったと、フロイスは記録する。しかし島津侵攻のほぼ1年後の天正15年12月4日(1588年1月2日)の正午近く、臼杵城下町で大火災が発生し、丹生嶋城も全焼するという事件が「日本史」にあり、臼杵城下町は再び壊滅状態に陥いたことがわかる。この火災ののちの復興情況につ

いては記録に乏しいものの、伊勢参宮帳や文禄2年(1593)臼杵荘惣町屋敷検地帳に見るように、城下町住民の生活は短期間で旧に復したものと認められる。この背景には、2度の火災を経ても、屋敷地所有者の変動がほとんどなかったことに由来するであろう。近世期には武家居住区であった仁王座はこの検地帳にその名を顕さないが、あるいはこの地区が大友期より武家居住区として成立しており、石盛の対象外であったと考えれば、その後もこの地区がその性格を残したまま近世に受け継がれたということもできよう。海添についても中町のみが石盛対象となっていることは、必ずしも中町のみが海添に存在したことを意味するものではなく、それ以外にも武家地として存在していた区域(町)があったろうことを想像させるものである。

その後、文禄3年(1594)に福原直高が、慶長2年(1597)には太田一吉が相次いで臼杵に入封する。彼らの臼杵城下整備についての記録は皆無に近い状態だが、太田氏の時期に丹生嶋城の三の丸が形成され(三の丸は丹生嶋西側の祇園洲を埋め立てたもので、これ以降の丹生嶋城を「臼杵城」と呼ぶことにする)、粟島口に大手門が設けられたとする記録があり(臼杵小鑑など)、また、慶長5年(1600年)の稲葉貞道臼杵入封時の臼杵城受け取りの際には31櫓7櫓門があったとされ、これら近世的城郭整備は太田氏時代に行われた可能性が濃厚である。

稲葉氏は入封直後から城下町の拡大をふくめた再整備に努め、ことに17世紀前半における新町・田町の開発や、惣構えを意識した仁王座丘陵における空堀の開さくが特徴的である。慶長5年から元和元年(1615)にかけては城下町での火災が相次いでいるが、このたびごとに大友期より定住していたであろう町衆の屋敷は逐次整理され、新たに稲葉氏とともに臼杵に入った美濃系などの町衆が新たに屋敷を整備してきたであろう。菊屋町が廃され、新たに城下町の西に田町が開かれた寛永4年(1627)ごろには、町割りのあり方も大友期の要素がほぼ払拭されるに至ったのではないかと想像される。

## 2. 戦国末期臼杵の発掘調査から

### ・丹生嶋城の発掘調査

県指定史跡臼杵城跡の保存整備事業に伴い、発掘調査を継続して行っているが、稲葉氏以前のものとみられる遺構が確認されたのは、着見櫓跡調査区と、大門櫓跡調査区の2箇所である。

#### a. 大門櫓跡調査区

大門櫓復元工事に伴う発掘調査では、近世期の大門櫓遺構下層から4基の礎石が確認されている。この礎石遺構は東西方向スパンが2.4m・南北方向スパン3.3mで、西側列と東側列で約0.7mほどの高低差を持つものである。これらは図のように東西3.3m・南北1.8mほどの楕円形土坑を2基、地山から掘り込んで据えられており、土塁をまたぐようにして建てられた櫓状建物の礎石と考えられるものである。遺構に伴う遺物が認められないので形成時期は不明だが、17世紀初頭の、稲葉氏の大門櫓構築以前の遺構であることは確かである。

#### b. 着見櫓跡調査区

近世期着見櫓台石垣の解体修理の際に石積み撤去したところ、石垣裏込整地層断面に土塁遺構とみられる遺構断面が確認された。この土塁とみられる遺構は、北に向けて傾斜する地山上に茶褐色土を盛って

整地(1次整地)した上、阿蘇溶結凝灰岩を砕いた盛土によって土壘状遺構を形成するものである。土壘状遺構は基底部幅で約1.8mほど、高さは現状で0.8mほどである。土壘状遺構の北側には幅2.5mほどの平場が形成されている。また、着見櫓台上面からの平面トレンチ調査によって、この土壘状遺構の南(裏)側に接して、高さ・幅ともに0.9mほどの切石を置く石列が確認されている。土壘状遺構1次整地層から出土した京都系土師器は臼杵地方編年で16世紀半ばに比定されるものであり、石列遺構に伴うとみられる整地層出土の京都系土師器と糸切土師器は16世紀後半～末のものと思われる。整地層中の出土遺物を見る限り、石列遺構が土壘状遺構に後出するものと考えられる。

#### ・稲葉氏以前の臼杵城

大友期の丹生嶋城は、3方(北・東・南)を海に囲まれ、唯一干潮時に砂州によって陸続きとなる丹生嶋上に築かれたものであった。フロイスにより、城中には御殿のほか正室奈多氏の居住区である建物、義鎮が洗礼前に立てたとされる黄金の茶室、礼拝堂などがあったとされるが、これらがどのように配置され、郭の構成がどうであったかは判然としない。

稲葉氏の受け取り時の臼杵城郭配置は、近世期のものとはかなり異なっていたものとみられ、主郭へと通じる城道も、古橋口から鎧坂を通過して、現西の丸北側にめぐる帯郭を回り、現在の北側空堀あたりから登るルートであったと稲葉家譜に記録されている。これらは大友期以降に改変されたものである可能性も考えられるが、大友期の郭配置を考える上での一つの参考ともなろう。

また、近世期には丹生嶋の西半部が二の丸(西の丸)とされ、東半の臼杵湾に面した位置が本丸となっているが、現在でも本丸と二の丸最高部の比高差が2~3mほどで二の丸が高くなっているという状況を呈している。戦国期の一般的な郭配置が、主郭が最も高い位置に占地するものと単純に考えるならば、あるいは稲葉氏以前に、現二の丸位置が主郭であった可能性も考えられよう。「日本史」には島津進攻時に、宣教師たちが修練院から丹生嶋城に避難する際、「海沿いの側にある擬戸」から「長い登り坂」を上がって泥濘の道を「足を滑らせ」ながら歩く件がある。少なくともこのころ、城の中核部分に海側から上がるためには、ある程度長い距離の帯曲輪を登る状況であったろうことは確かで、戦国期段階丹生嶋城の縄張りや渦郭式的要素を含んでいた可能性も考えられよう。

#### ・臼杵城下町遺跡

本町地区において、平成12年度(第1次調査)、平成13年度(第2次調査)に発掘調査を実施している。

##### a. 第1次調査

臼杵ケーブルテレビ本社屋建設に伴う調査である。この調査では5度にわたる火災痕跡が確認されている。この火災層は文献と各層出土遺物の組成検討から、上から順に1863年、1615もしくは1610年、1600年、1588年、1586年という年代が推定されている。推定1586年火災層直下の整地層(30層)下の、現地表下270cmの位置には石敷遺構があり、これが地山である礫混じり砂土上に簡便な整地を行った上に形成されていることから、大友期城下町初現段階、もしくはそれ以前の時期が考えられる。30層からは京都系土師器が1点出土しているが、これは着見櫓1次整地層出土遺物と同形態のものであり、16世紀半ばの時期に比定されるものである。なお、その前段階の土師質土器である「ダンダン土師器」と通称される在地系糸切土師器はこの調査では確認されていない。1586年火災層から1600年火災層にかけての層中

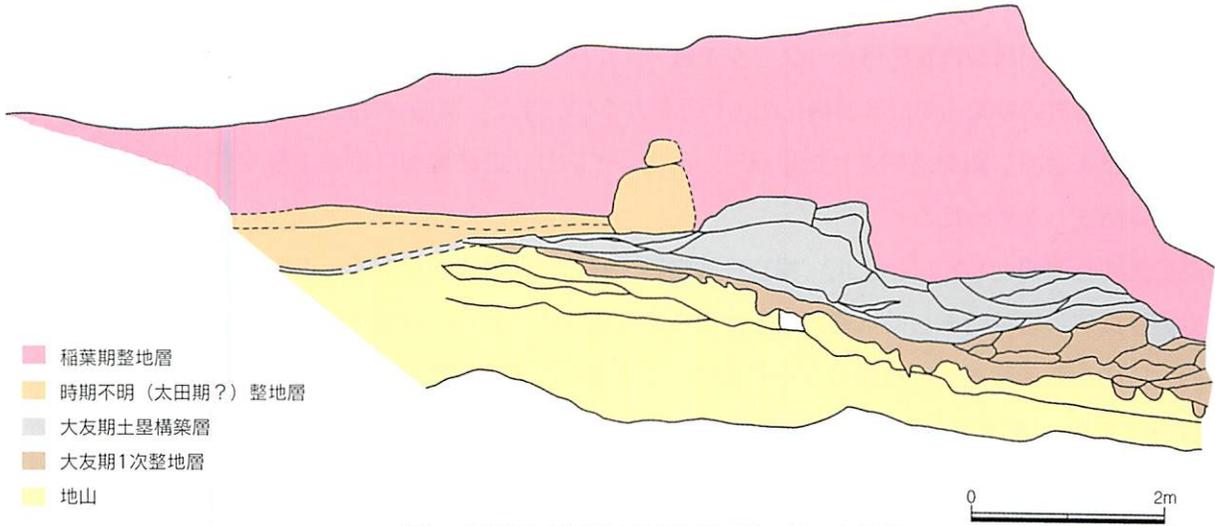


图3 着見櫓台断面土層図(合成)(S=1/80)

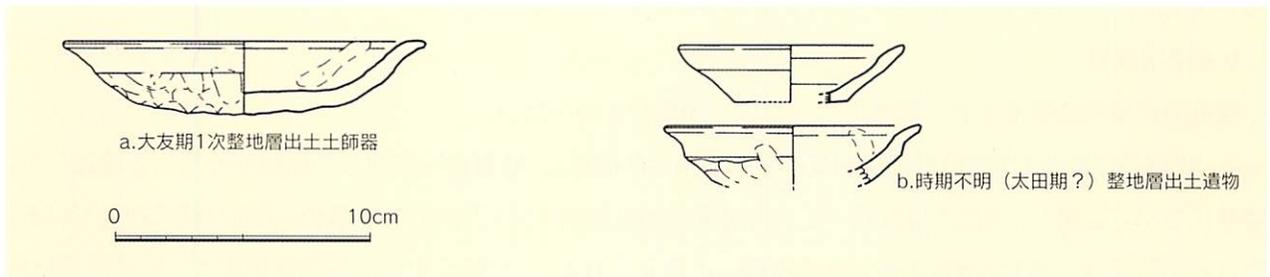


图4 着見櫓跡出土遺物(S=1/3)



图6 近世末期白杵城縄張図

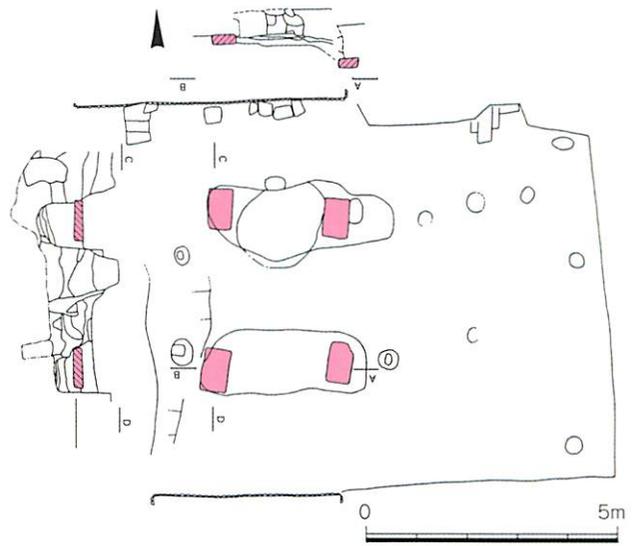


图5 大門櫓跡戦国期遺構図(S=1/150)

から、景德鎮製・漳州窯製青花のほか、スコタイ甕(?)片1点、華南青磁小皿2点等の貿易陶磁片が出土している。中でも景德鎮製・漳州窯製青花の占める量が多い。また、戦国末期に比定される遺構面からは、鹿角製品および未製品、銅を溶解させた坩堝等が出土しており、この位置に飾細工を生業とするものが居住していた可能性も考えられる。

戦国期に属する遺構としては、土坑・掘立柱建物跡・礎石状遺構などがある。これらの遺構はいずれも現・本町通りに対して平行もしくは直行するかたちで形成されており、街路に伴う遺構は確認されなかったものの、この街路を意識して町割りが行われていた可能性を窺わせている。「日本史」第68章の島津進攻時の記述により、「教会から城に通ずる真直ぐな街路」が当時存在していたことがわかるが、島津軍が臼杵城下町へ進攻を開始したのが平清水口で、そこから直線に丹生嶋へと向かう街路は本町通り以外にはなく、「日本史」第68章に言う「真直ぐな街路」を本町通に比定することに難はないであろう。また、同第74章にある「主要な街路」も、これを指すものであろうか。

#### b.第2次調査

現在調査資料の整理中で、詳細については次の機会に述べたい。

第2次調査区は第1次調査地の東側にあたる近接した位置に、本町通りに対して直行する方向で設定した。層序については第1次調査とほぼ同一で、火災面も明治10年(1877)のものを含め、6面が確認されている。これらの時期は、第1次調査の推定時期と同一と考えられる。1586年火災以前の整地層は、現地表面から2.7m下である。

調査区の北端部、現在の新町と本町の境界付近では、本町方向(南方向)から延びる1588年火災層以下が途切れ、新町側には砂土層が堆積している状況が確認されている。その直上の1589~1600年相当層にはこの層断は認められず、本町方向から新町方向にかけて均等に堆積している。

### 3.まとめ—戦国期臼杵城下町の空間構成

日本側・ポルトガル側の諸史料を見る限り、戦国期の臼杵城下町は「まず、城ありき」から始まる印象を免れ得ない。大友義鎮が丹生嶋に入った初現であろう弘治・永禄初頭期には、丹生嶋は城郭としての体裁を整えつつあったものの、その足下の町場自体が「城下町」の体を成してくるのは、おそらく臼杵に司祭館が建立される永禄8年ごろの感もある。丹生嶋城築城時期には、久多良木儀一郎氏の弘治2年説、柳井弘幸氏の永禄5年説、「大友興廢記」の永禄6年説、「両豊記」の永禄9年完成説があるが、むしろこれらは、大友家臣の田北、本庄氏の抗争に端を発する家臣の謀反に対する警戒から、義鎮自身が臨時的に府内から臼杵へ脱出をはかった後、府内へ帰らずにそのまま丹生嶋に在したため、自然的に政治的機能を臼杵に移さざるを得なかったこと、また、義鎮の庇護を求めた豊後のキリシタンたちが臼杵に集住し始めた結果、町場が形成されるに至り、それに伴って永禄年間に丹生嶋も城郭としての再整備が行われたこととして解釈できることともいえよう。この立場に立てば、戦国期臼杵城下町というものが義鎮自身の構想や計画に基づくものではなく、多分に当初、自然発生的に町場が形成され、のちに必要に迫られてなんらかの計画のもと整備がなされたという図式が考えられることになる。

少なくとも元龜2年までには丹生嶋城のほか、御殿(政庁)とされる大友館・教会と司祭館といった施設

があったことは確かで、実質的に臼杵が大友勢力の首都的機能を果たす存在であったことが窺える。また天正4年段階には、大友の有力家臣であった田原氏の居館が臼杵のいずこかに設けられていたことも「日本史」より窺え、有力家臣団の臼杵集住もこのころまでにはかなり進んでいたことも想像される。しかし、名目上であれ、臼杵(荘)自体の統治権は、大友加判衆の一人で15世紀段階より臼杵荘の領主であった臼杵氏にゆだねられていたことが「日本史」第55章の「当地全域の領主である臼杵殿」という件で判明する。「国主」たる義鎮と在地領主たる臼杵氏の関係は、県庁所在地における県知事と市長の関係にも比定される側面であろう。そして天正後期から文禄2年の間には確実に中屋宗悦や、中国人・陳元明に代表される豪商が活発な経済活動を行っていたことも明らかである。

以上のことから、戦国期臼杵城下町にはその末期段階までに、政治的ブロック、宗教的ブロック、経済的ブロックが、これらに携わる人々の居住地を伴い城下町の都市空間を構成していたことが考えられる。これらが現在のどの位置に存在していたかは、文禄検地帳において判明するものを除けば、想像でしか語るることのできない状況であるものの、現段階で用意されている資料をもとに、あえて考察してみたい。

#### ・政治的ブロック

丹生嶋城と大友館、さらに有力家臣団の居住地がこれと考える。有力家臣団居住地については、文禄検地帳に記載のない仁王座と中町を除く海添地区が有力であるほか、城下町の周辺地がこれにあたろう。大友館については「日本史」第33章の、諏訪地区に存在した寿林寺が「城と御殿に向かいあった」位置となることから、諏訪地区から城と同時に展望され、城下町の推定範囲の中心にある仁王座に比定するのが妥当であろう。さらに絞り込めば、現在は墓地となっているものの、ほぼ100メートル四方の平場を残し、城下のほとんどをみわたせる現在の月桂寺上に想定してみたい。

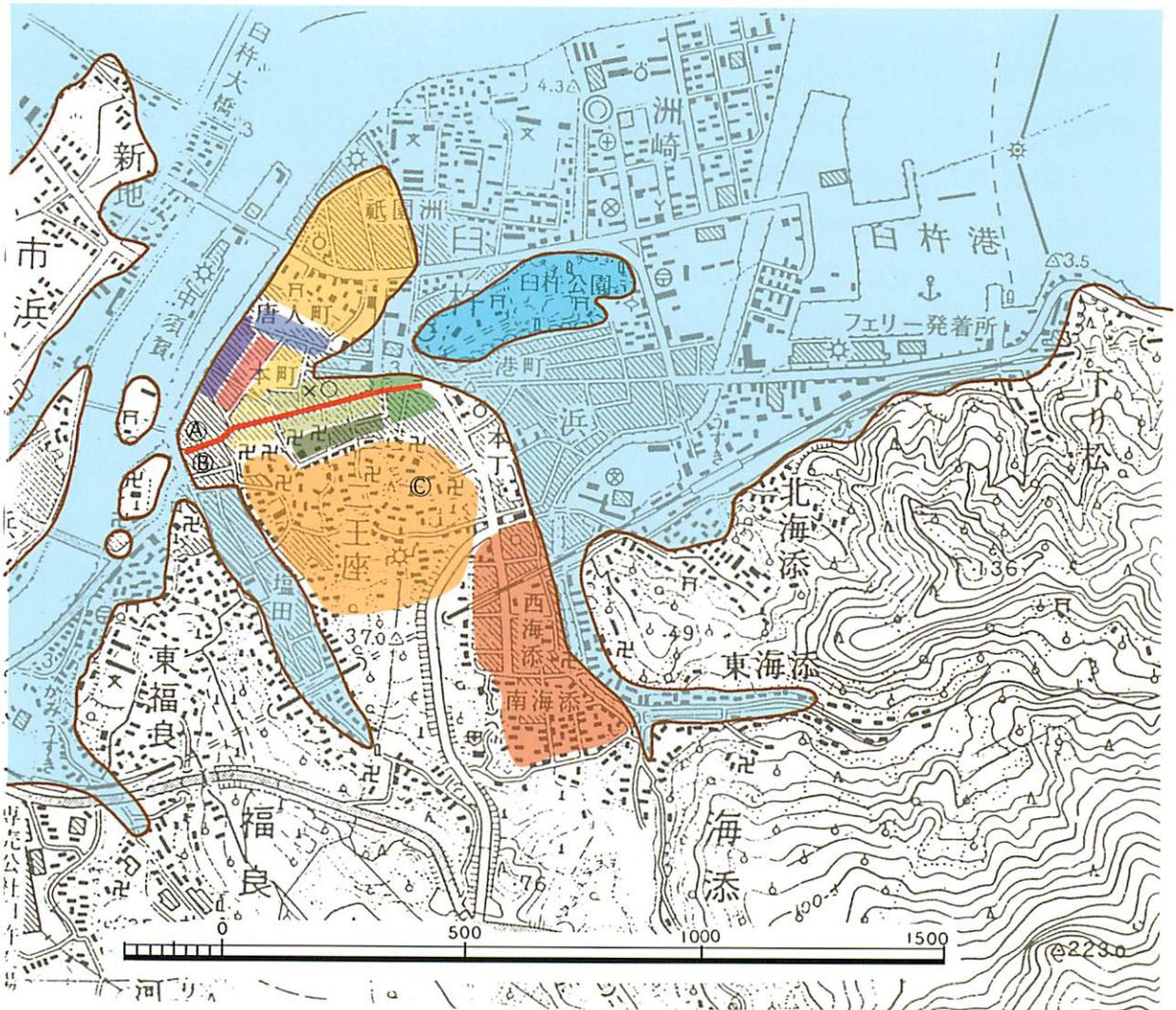
#### ・宗教的ブロック

キリスト教関係施設についてのみ考える。永禄期の教会と、天正期の教会は程近い位置にあったとされる。また、「日本史」68章の「街路」が現在の本町通りであったとすれば、その平清水側起点の位置にあったものであることは疑い得ない。この位置は現在の畳屋町西部もしくは田町にあたるが、田町は寛永4年に開かれた町場で、塩田川流域の湿地帯であるにも関わらず、江戸期の記録に埋め立て等の造成を行ったとする記述が認められず、それ以前から造成が行われていた感がある。田町は現在、ほぼ90m四方の区画を有し、畳屋町西部の倍ほどの面積をもつことから、天正期教会施設群の敷地としてふさわしく、畳屋町西部は永禄期教会施設群の位置とするのは、「日本史」の臼杵教会に関する記述とも矛盾しないといえよう。

#### ・経済的ブロック

商業地という意味においてこの名称を用いる。文禄検地帳によれば、文禄年間までに唐人町に中国系商人、掛町(唐人町掛ノ町)に中屋宗悦に代表される有力商人が居住していたことがわかる。三重野誠氏はこの2町と浜町の石盛が他の町に比べ高いことに着目し、水運の利便性など、商業活動の有効性をその理由としている。

当時の水運については、唐人町・掛町の西方を流れる臼杵川の利用が考えられるほか、丹生嶋方向から町中に入り込んでいたであろう舟入の存在が考えられる。慶長13年に成立した新町は、それ以前の潮入を



- |                |       |       |             |
|----------------|-------|-------|-------------|
| — 本町通り (真直な街路) | ■ 浜町  | ■ 片町  | ■ 丹生嶋城      |
| ■ 祇園洲          | ■ 横町  | ■ 菊屋町 | Ⓐ 永祿期教会     |
| ■ 唐人町          | ■ 畳屋町 | ■ 仁王座 | Ⓑ 天正期教会     |
| ■ 掛町 (唐人町懸ノ町)  | ■ 横浜町 | ■ 海添  | Ⓒ 大友館       |
|                |       |       | × 本町地区第1次調査 |
|                |       |       | ○ 本町地区第2次調査 |

图7 大友期白杵城下町(末期) 推定復元図

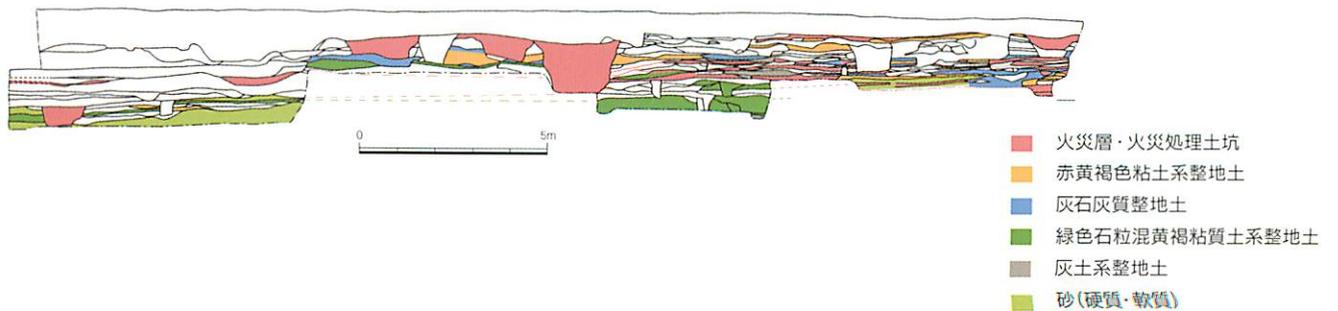


图10 本町地区第2次調査区東壁土層図 (S = 1/200)

a. 1588~1600年

b. 1586年火災時

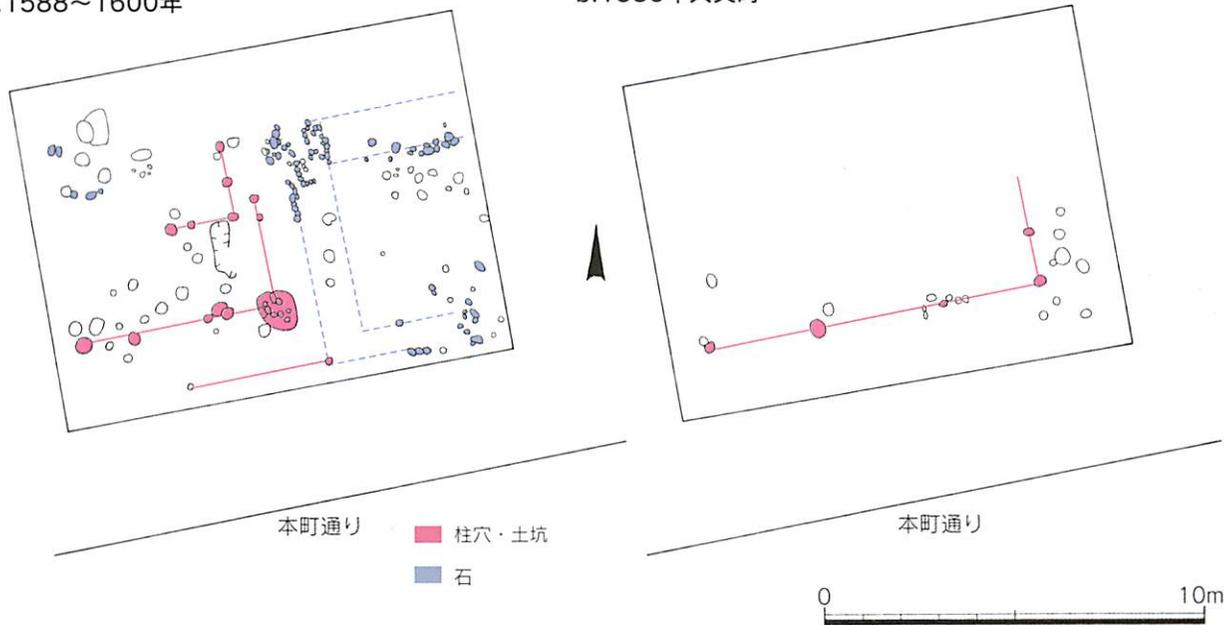


図8 本町地区第1次調査区戦国末期遺構配置図 (S = 1/200)

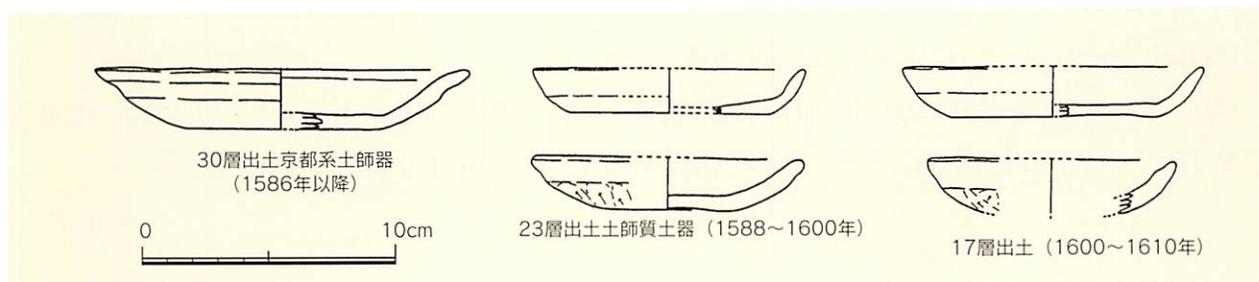


図9 第1次調査区出土遺物 (S = 1/3)



写真2  
27層出土坩堝



写真1 27層(1588年火災層)出土 用途不明鹿角?製品



写真3 本町地区第1次調査区土層堆積状況

埋め立てて形成されたもので、「稲葉家譜」に記録される臼杵城修築の記事から、慶長以前は臼杵湾方向から新町周辺まで潮が引き込まれていた様子が窺え、舟入として活用されていたことは想像に難くない。また、この延長線上に横町が位置するが、三重野氏の指摘する横町の石盛の低さが、大友の何らかの施設の存在に由来するのであれば、あるいは当初、横町あたりまで舟入が引き込まれ、文禄2年直前に埋め立てられたことも考えられないだろうか。本町地区第2次調査で検出された、調査区北端の整地層断絶部分の意味は、あるいはこの舟入と推定される施設を埋め立てたものとも想像されよう。大友府内町の港湾施設である沖の浜舟入が、町場の北端に存在するのと好対照を成す。

いずれにせよ天正年間段階で、臼杵城下町はその心臓部とも言える位置に港湾施設と商業区域を有する都市であったことが想像され、これが正鵠を射るものであれば、戦国末期における戦国大名の城下町としては、多分に近世的な色彩を帯びているという点でも、特筆される存在であることは確かである。更なる精密な検討が必要となろう。またその成立も、中世都市から戦国都市へと展開した府中とは対照的に、むしろ偶発的に登場し、さまざまな都市の要件を加味しつつ展開したという点で、戦国都市臼杵は特徴付けられよう。

以上のことから、戦国期臼杵城下町が多分に近世的要素を帯びたものとして終焉している状況を考えてみた。この町場が自然発生的に形成をはじめ、その終焉期には極めて充実した姿として想像しつつ、大友義鎮の新たなる側面の解明が必要となることを痛切に感じる。

また、戦国末期から現在にかけて、同一の場所で時代の流れとそこにかかわる人々の思惑によって変遷を遂げた臼杵城下町と臼杵城の歴史的価値を見直す時期が、今、訪れていることも確かである。

(神田 高士)

#### 参考文献

- |           |      |                                     |       |
|-----------|------|-------------------------------------|-------|
| ルイス=フロイス著 | 1982 | 松田毅一・川崎桃太 訳「日本史」6～8巻                | 中央公論社 |
| 臼杵市史編纂室編  | 1990 | 「臼杵市史(上・下)」                         | 臼杵市   |
| 渡辺澄夫編     | 1988 | 「豊後国荘園公領史料集成6」                      |       |
| 三重野誠      | 1998 | 「戦国時代末期の臼杵」(大分県立先哲史料館編「史料館研究紀要第3号」) |       |
| 稲葉家譜      |      | (臼杵図書館蔵)                            |       |
| 旧貫史       |      | (臼杵図書館蔵)                            |       |

## 第四章

# 発掘調査概要

# 1.大友氏館跡の調査概要



大友氏館跡の調査地点

## 大友氏館の変遷

これまでの大友氏館跡の調査によって次のような変遷が明らかとなっている。

### 第0段階

第6次地点に盛土整地による高まりが存在する。その下部には14世紀後半～15世紀前半の掘り込み地業を伴う可能性のある整地事業が認められ、その上部に15世紀末～16世紀前半に位置づけられる盛土整地地業がなされている。

### 第1段階

第2次調査地点にL字状に屈曲する土塁遺構が構築される。土塁構築には掘り込みが伴い、基盤の整備がおこなわれる。積土埋土内に京都系土師器皿を内包していることから、土塁構築は16世紀の早い段階であるものと推定される。土塁によって区画された空間の中には2基の井戸跡の存在を確認できる。また、第5次調査において、土塁内側にピット状の遺構を土層断面状に確認することができる。

### 第2段階

土塁は削られ、整地が行われる（第1期整地）。土塁遺構による区画は消滅し、第2次調査北側に確認できる巨大な東西溝等、新たな区画（地割）が施行される。第2次調査地点では次期の整地に伴う掘削により、確認することはできないが、第5次調査地点の土層観察から、土塁の削平部の両側に整地土が確認され、フラット面を形成する。この面から掘り込まれる遺構の存在を確認できる。特に第5次調査の土層断面観察から、整地土は土塁遺存部の凸部上面を基準とし、その両側に展開していることを明瞭に観察することができる。この点は第1段階で構築された掘り込みを伴う積土構築物が地上に凸部をもつ、土塁状の構築物であったことを物語る貴重な所見といえる。

さらに、同種の整地土が土塁状の積土構築物の両側に展開している点は、この段階で、土塁状構築物によって区画された空間をさらに西側に拡大した可能性を示唆するものであり、方二町相当規模への拡大段階であることも考慮される。

この段階の確実な遺構には、第2次調査区の東西溝、調査区南側の井戸跡、第4次調査の南北溝などが相当する。

第3次調査地点で検出された第Ⅰ期庭園は、遅くともこの段階には造られているものと考えられる。

### 第3段階

第2次調査地点、第4次調査地点、第5次調査地点、第8次調査地点で確認できる大規模整地が行われる（第2期整地）。16世紀後半前後のものと考えられ、整地層上面には第2次調査の南北溝、第5次調査の掘立柱建物跡、井戸跡、第8次調査の廃棄土坑などがこの時期に相当する。第2次調査の南北溝の存在から、新たな地割が一部に施設された可能性を指摘できる。

第1次調査・第2次調査で検出された第Ⅱ・Ⅲ期庭園はこの段階にはすでに整備されている。

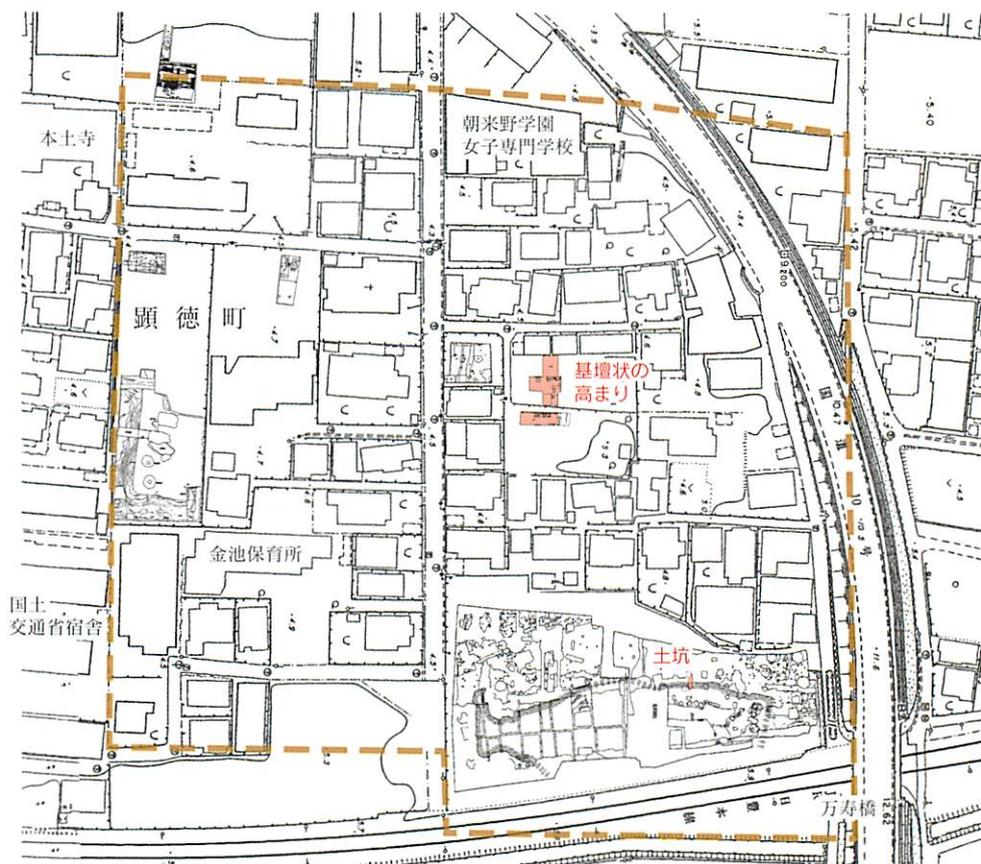
また、第7次調査の北辺区画施設の最後の段階、最も北側に位置する区画施設が機能している。この前段に位置づけられる二つの区画施設は、所産時期を明示できないが、第1・第2段階に相当する可能性もある。この段階に第6次調査の基壇状の高まりには、礎石を有する大型の建物遺構が存在していたと考えられる。

#### 第4段階

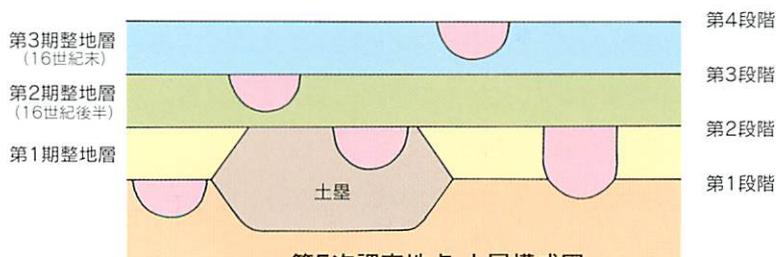
館の最末期に相当する。第2次調査地などで、整地が行われる。(第3期整地)

庭園の池状遺構は埋められ、第3期整地上面には、明確な遺構は認められない。この部分から古手の唐津焼が出土する。館北辺の区画施設もすでに機能していない。

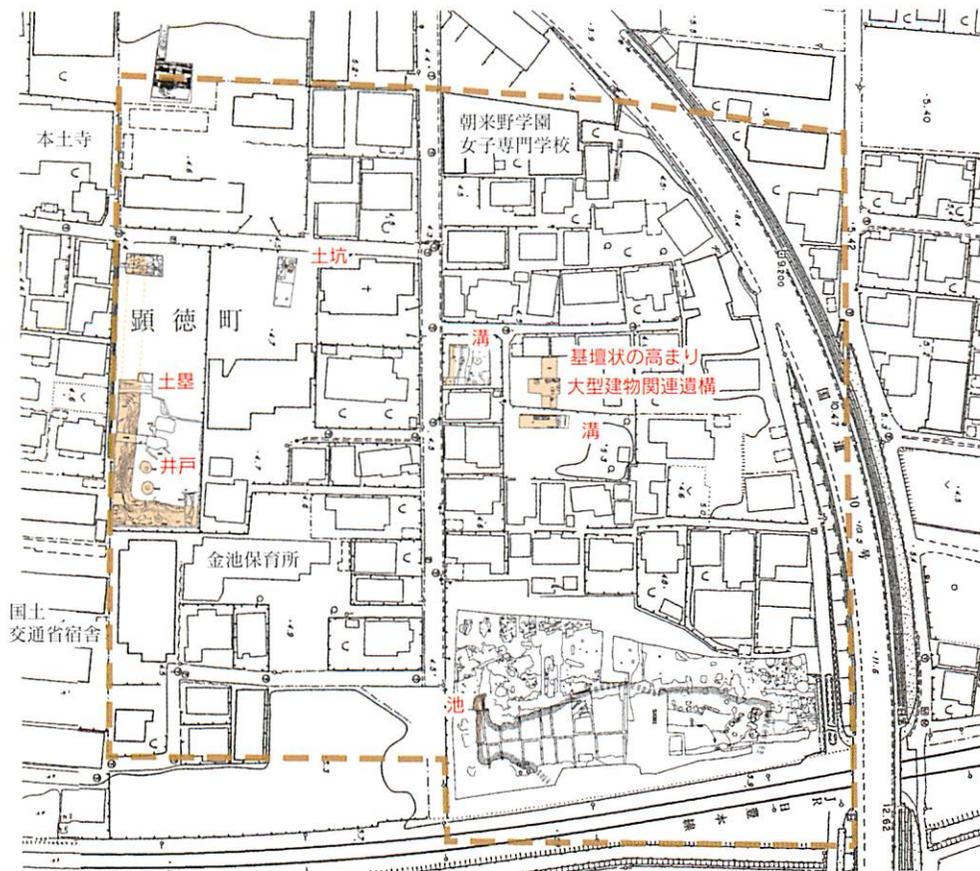
(坪根 伸也)



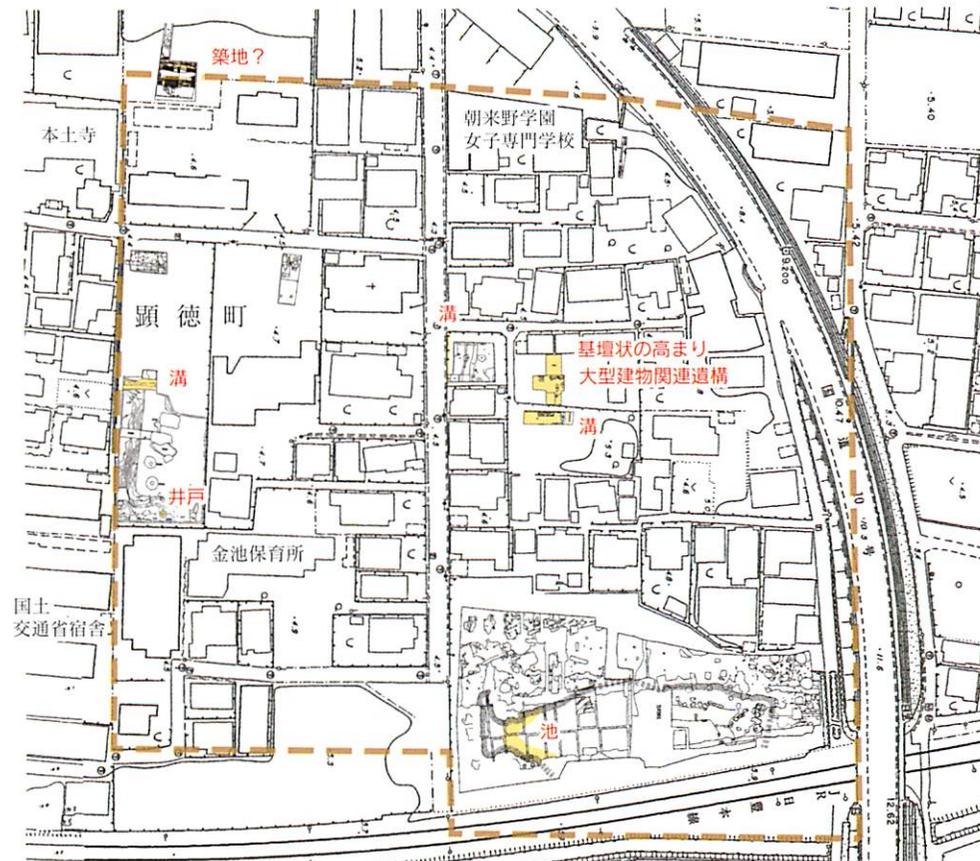
大友氏館跡 0段階



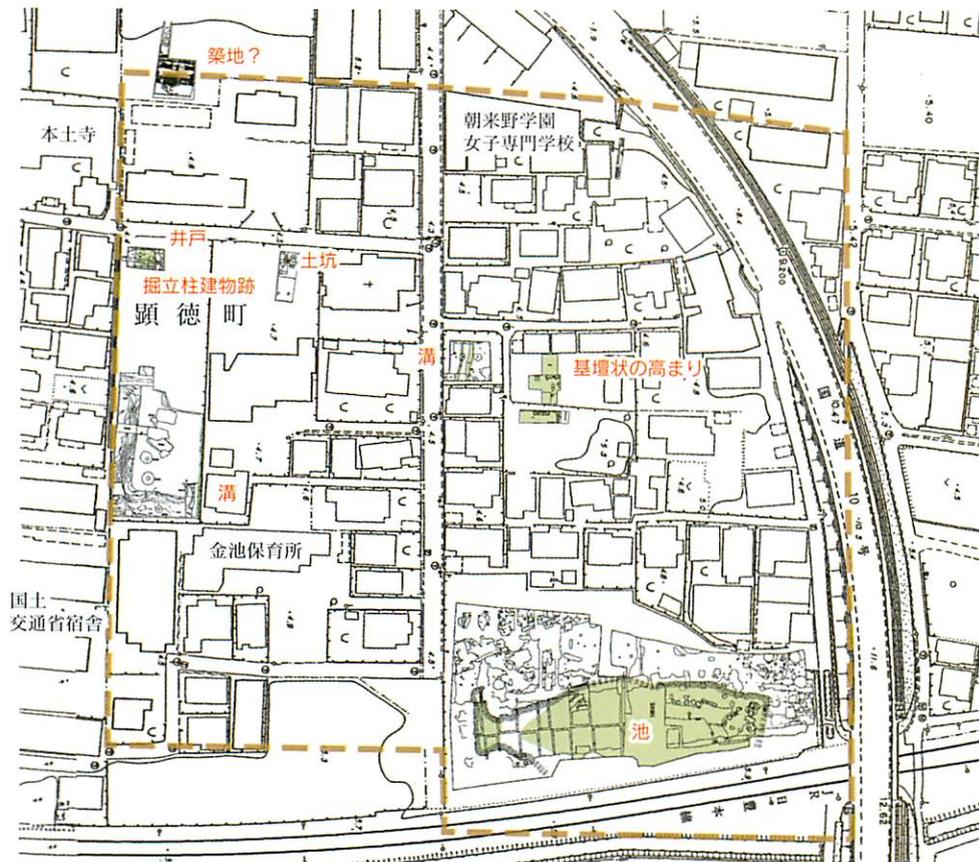
第5次調査地点 土層模式図



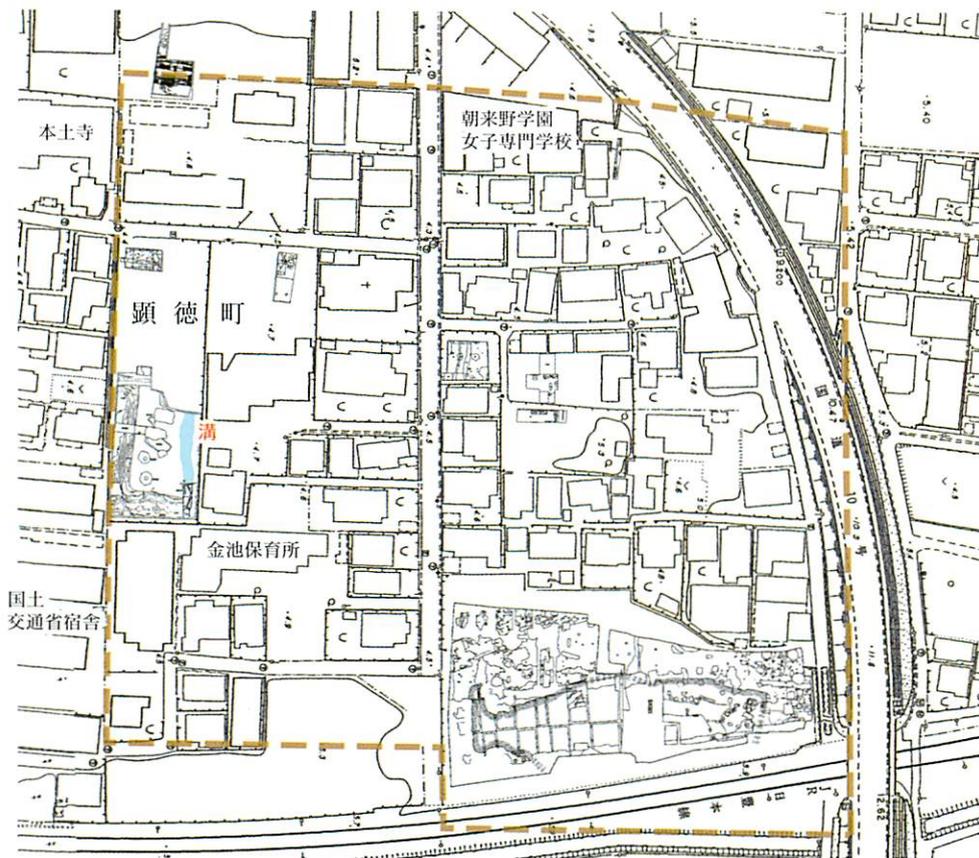
大友氏館跡 1段階



大友氏館跡 2段階



大友氏館跡 3段階



大友氏館跡 4段階

## 第1・3次調査 (大友氏館跡)

調査主体	大分市教育委員会	調査場所	<small>げんとくまち</small> 大分市顕徳町3丁目／大友館
調査期間	1998.07～1999.05 (1次) 1999.12～2000.03 (3次)		
調査面積	2200m <sup>2</sup> (1次)2300m <sup>2</sup> (3次)	検出標高	4.0m
遺跡の時期	15世紀後葉～16世紀末葉		
主要遺構	15世紀末葉～16世紀前葉…Ⅰ期池状遺構 16世紀中葉…Ⅱ期池状遺構 16世紀後葉…Ⅲ期池状遺構		

### 遺跡の概要

大友氏館跡第1次調査及び第3次調査の主要遺構は、池状遺構である。以下、この池状遺構を中心に第1次・3次調査の概要について記す。

第1次調査及び第3次調査の調査区が設定されたのは、館推定地の東南部にあたる。

調査の結果、東西約83.6m、南北16m以上、長靴状の平面形態が確認された。池状遺構の内部の状況については、第1次調査の行われた東部の状況と、サブトレンチによる部分調査が行われた第3次調査によってその概要が確認されている。特に3次調査のサブトレンチによる土層観察の結果、池状遺構に切り合いが存在し、大きく3時期存在することが確認された。このことは、前述した特徴的な平面形態が遺構の切り合いに起因するものであり、西から東側への池状遺構の移転・拡大・改修等の状況を示している。以下、各時期別に池状遺構の概要を記す。

最も古く位置づけられる西端部分のⅠ期池状遺構は、南北方向に主軸を持つ楕円形状を呈する平面形態である。その内部構造については、サブトレンチによる調査により、その南東部を中心に第1次調査で確認されたものと比べやや小振りな石による護岸石3基とその抜き取り痕跡1カ所が確認、その中央部やや西北部において、集石が確認された。集石の性格については、築山の基壇部や景石等が想定されるが、サブトレンチによる調査のため詳細は不明である。出土遺物には、大量の糸切土師器皿がある。この土師器は内面にらせん状の段成形が施された赤色系胎土のもので、大小さまざまな法量が存在する。

続くⅡ期池状遺構については、東側をⅢ期池状遺構に切られ、西側についても攪乱やⅢ期の不明遺構に切られておりその全容は不明であったが、Ⅰ期の南北方向から東西方向に主軸を変え、よりⅡ期池状遺構に近い形及び範囲になっていることがわかる。サブトレンチによる内部の状況確認では、護岸石や景石は確認されなかったが、東側にテラス状の段を有し、このテラス部分から大量の京都系土師器の出土が確認された。京都系土師器の大量廃棄地点は他にも、サブトレンチNo6の最深部付近でも確認されており、A地点と同様の古い京都系土師器の一群が法量分化した状況で出土している。このような京都系土師器の出土状況の違いは、館内における京都系土師器の使用方法に関わる貴重な情報といえよう。

最後にⅢ期池状遺構については、その最深部付近を囲む形で巨石が配されるもので、東西約66m、南北16m以上、深さ2.0m強を測る。その内部構造に関して、巨石による石組みについては、その東側部分で良好に残存しており、東に向かって集束し、石の高さも次第に高くなるよう立体的に配置された状況から、滝石組みの存在した可能性が考えられる。一方、西側部分についても、サブトレンチによる調査でその詳細は不明であるが、やはり西にむかって集束する巨石の配置が確認されている。最深部が一定期間湛水していたと判断されることから、これらの石組みの中には、護岸の

機能を有したものもあると考えられる。その他、サブトレンチNo9の南部の土層観察では、台形状に盛り上がった土層が確認された。特にこの台形状の土層を抜いたNo9サブトレンチ東部分では、その下層から墨書による梵字の記された凝灰岩製の宝塔の一部を含む集石が観られた。この集石がなんらかの基壇であるとするならば、その上層にみられる台形状の高まりについては築山である可能性を示すものと考えられる。最後に、池状遺構の導排水に関して、現状では検出されていないが、調査区外となる池状遺構の南端部にあることが想定されるが、池底のグライ層のレベルから判断される地下水位から、自然湧水によって水を得ていた可能性も考えておきたい。

#### 主要遺物

Ⅰ期池状遺構…糸切土師器皿・少量の青磁小片・磁州窯系の壺片他

Ⅱ期池状遺構…京都系土師器皿他

Ⅲ期池状遺構…京都系土師器・ベトナム産長胴瓶・華南三彩壺、同水注・同鳥形水注他  
タイ四耳壺、タイ鉄絵小壺、備前花入、平鉢、花入他

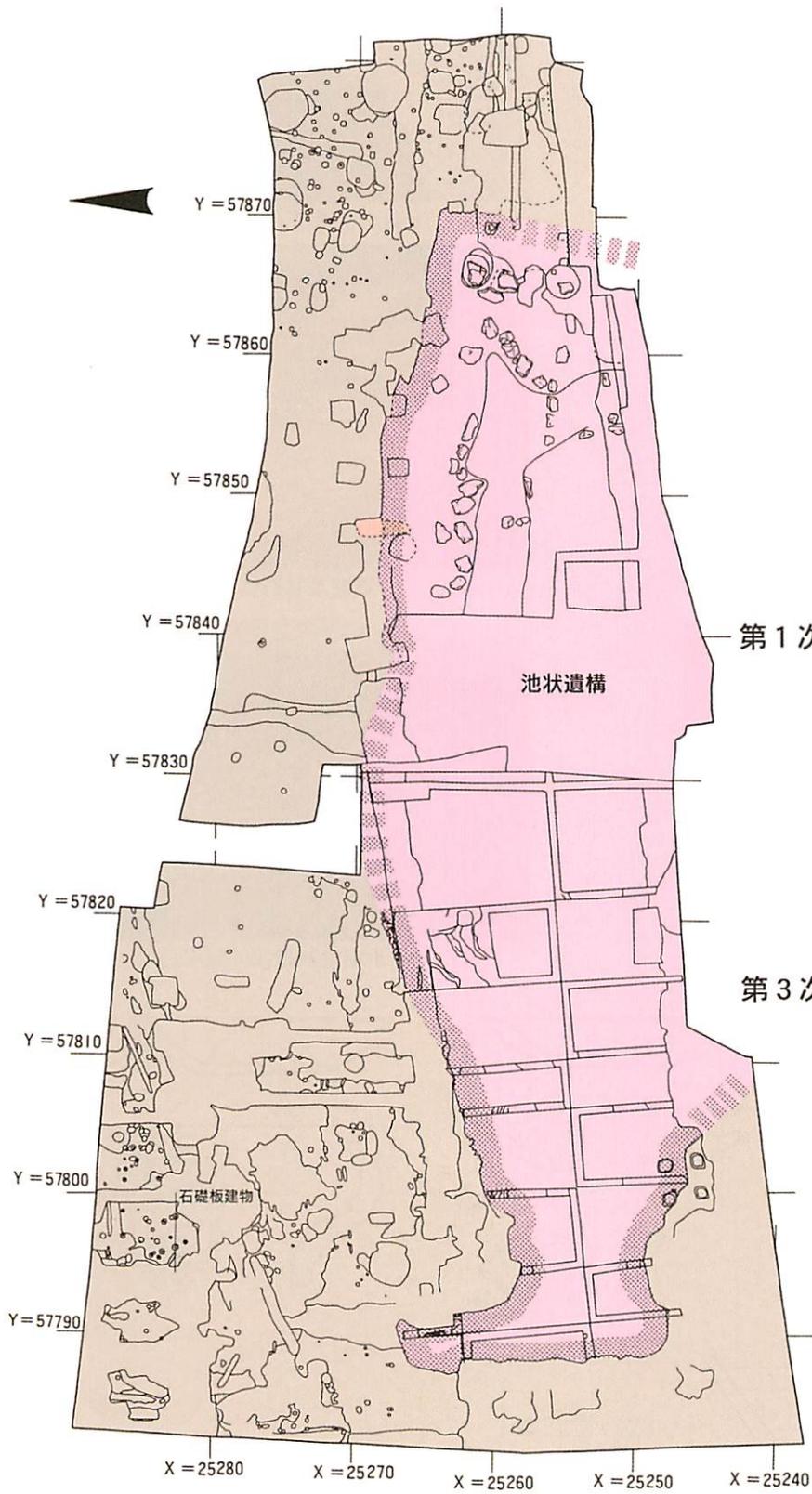
#### 特記事項

遺構では、15世紀末～16世紀後葉（Ⅰ～Ⅲ期）にわたる池状遺構の変遷の確認。出土遺物では、京都系土師器出現以前のⅠ期池状遺構より出土した法量分化した糸切土師器の存在から、式三献等の武家儀礼導入にも関わる問題が注目される。

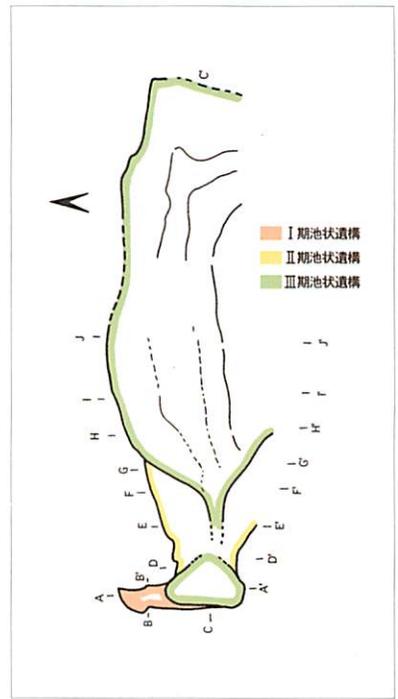
(河野 史郎)



第1次・3次調査区全景（デジタル合成）



遺構配置図(S=1/500)



池状遺構切り合い概念図





I期池状遺構 護岸石 (東面)



I期池状遺構 護岸石 (北面)



III期池状遺構 景石近景 (東部)



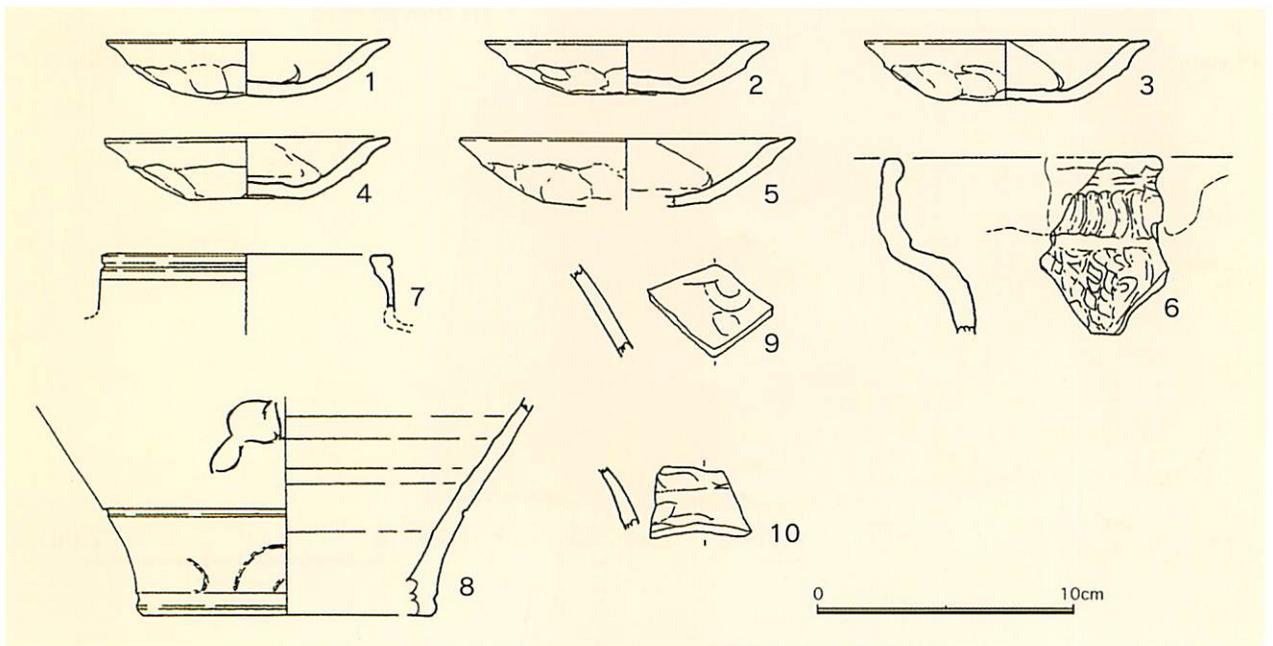
III期池状遺構 全景



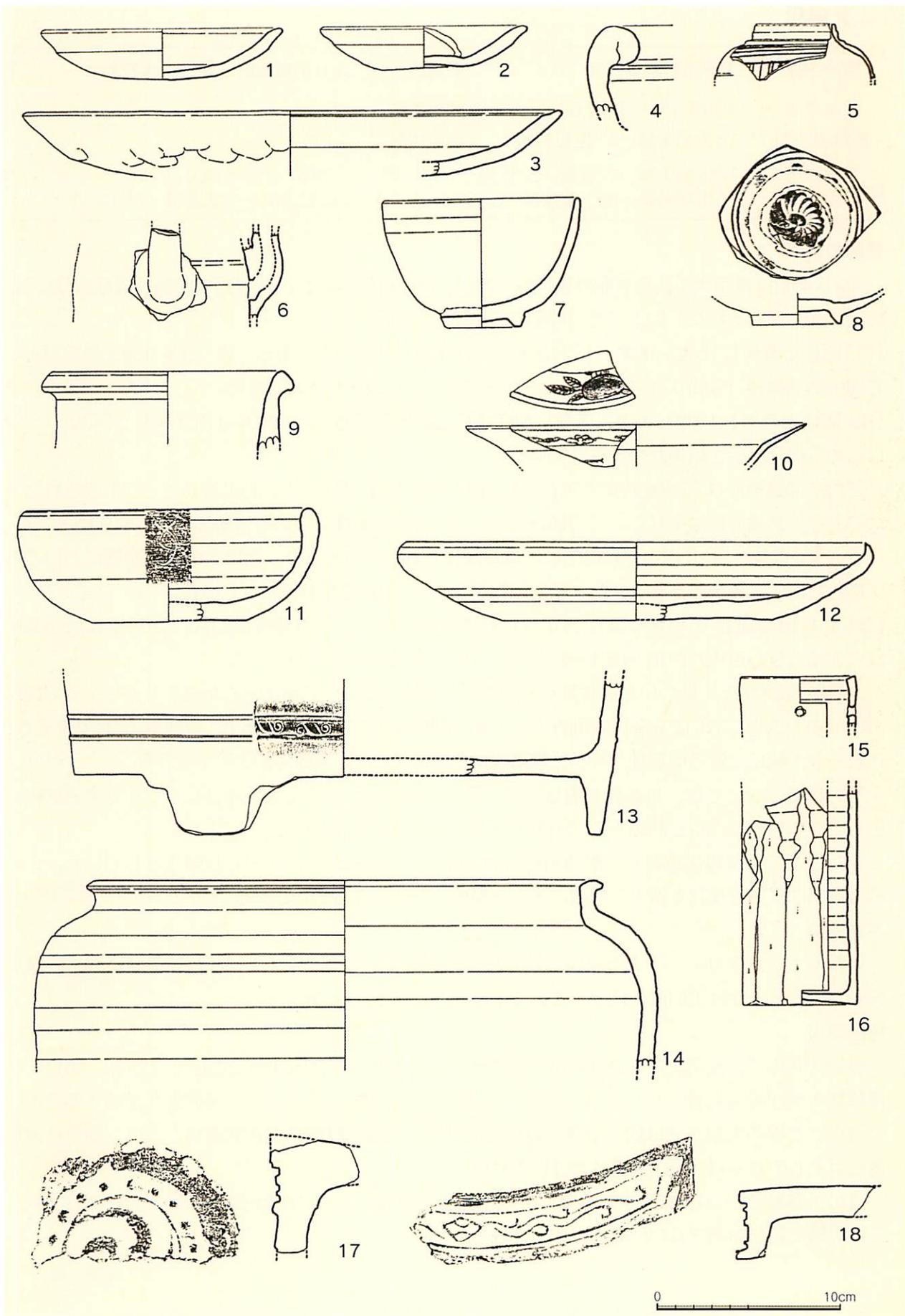
III期池状遺構 近景 (西部)



III期池状遺構 護岸石



第3次調査 池状遺構 (III期) 出土遺物実測図(S=1/3)



第1次調査 池状遺構（Ⅲ期）出土遺物実測図(S=1/3)

## 第2次調査 (大友氏館跡)

調査主体	大分市教育委員会	調査場所	大分市 <small>けんたくまち</small> 顕徳町3丁目／大友館 <small>おおともやかた</small>
調査期間	1998.11～1999.04	調査面積	557m <sup>2</sup>
遺跡の時期	16世紀中葉～17世紀初頭	検出標高	4.0m
主要遺構	16世紀中葉…土塁跡 (SX035) ・井戸跡 (SE045・050・060) 16世紀後葉…盛土整地層 (SX065・070) 16世紀末葉…南北溝跡 (SD001)		

### 遺跡の概要

第2次調査は推定大友氏館西側外郭地点において行われたもので、16世紀代の整地層ならびに3面の文化面が確認された。以下にその概要についてまとめる。

【第1面検出遺構】16世紀末葉～17世紀初頭に比定される遺構群である。第1次整地層を基盤面として浅い南北溝跡 (SX007) をはじめ、一定量の溜まり状遺構が確認できる。

【第2面検出遺構】16世紀後葉～末葉に比定される遺構群である。大規模な南北溝跡 (SD001) をはじめ、柵列跡や土坑等が検出されている。

これらの遺構群は16世紀後葉と考えられる第2次整地層 (SX065) を基盤面として形成されたものである。遺構密度は少なく、この段階の館の外郭を示す遺構については検出されていない。

この第2次整地層 (SX065) については最深部で約80cmを測り、調査区のほぼ全面において確認された大土木事業である。また、第2次整地に伴って掘削地業も行われている。

【第3面検出遺構】16世紀中葉に比定される遺構群である。土塁跡をはじめ、大規模な東西溝跡 (SD030) ならびに井戸跡 (SE045・050・060) などが検出されている。

土塁跡 (SX035) については推定大友館西側外郭線上において検出されたものであり、その範囲のほぼ中心地点においてL字状に屈曲する。その規模は現状で南北幅約5m、東西幅約6mであるが、これらを大幅に上回る可能性が高い。基底部から頂部までの比高差は約30cmを測る。

その構造については、基盤層を掘り込み、そこに茶色ブロック土と灰色ブロック土を大きな単位として、中央部に向けて斜め方向に積み上げている状況が看取される。

また、この土塁跡に重複して東西溝跡 (SD030) と井戸跡 (SE060) が形成されている。これらは遺構の変遷を検討する上で見過ごせない現象と考えられるものである。

### 主要遺物

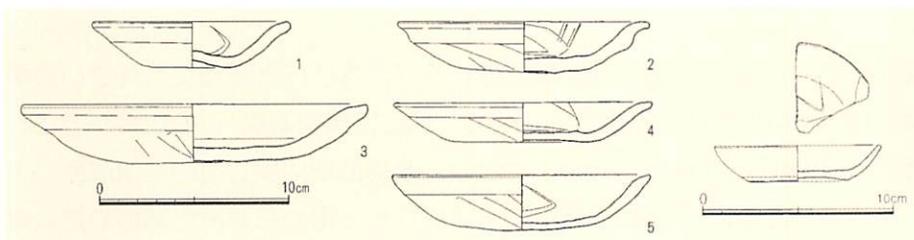
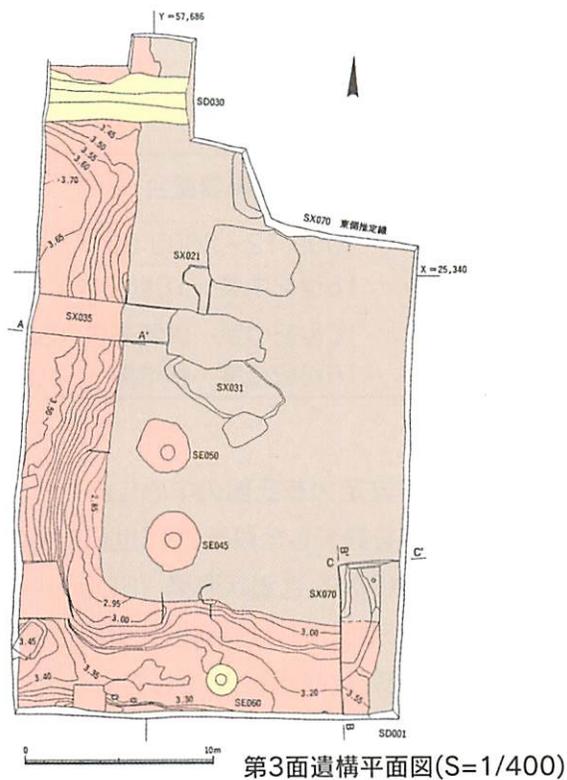
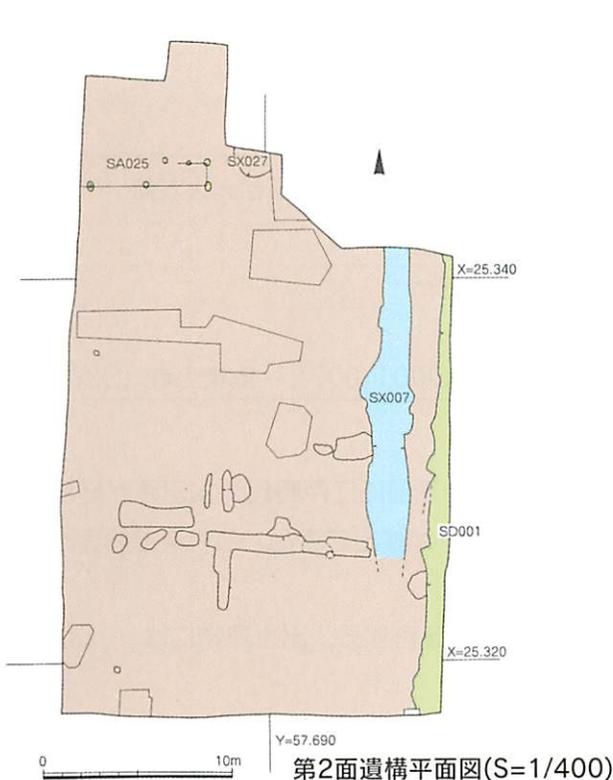
京都系土師器をはじめ、ガラス製小皿や鉄砲弾 (鉛玉) の他、タイ・ノイ川窯産焼締陶器、華南三彩鳥形水注、朝鮮王朝産白磁碗、青磁掛花入などが出土している。

### 特記事項

今回の調査では推定大友氏館西側外郭地点において土塁跡を検出することができたが、16世紀中葉段階の館が絵図を基にした方2町プランとは異なった様相を呈していた可能性を指摘することとなった。土塁の構築方法は館の庭園状遺構ならびに中世府内町跡の道路状遺構と同様、掘り込み地業によるものであり、その関連性が注目される。

この土塁跡については16世紀後葉に大規模な盛土整地によって埋められたことも判明しており、この段階に館が拡張された可能性が想定される。

(塩地 潤一)



1~3 第2次整地層(SX031) 4~5(SE045)出土  
SX031・SE045出土遺物実測図(S=1/4)

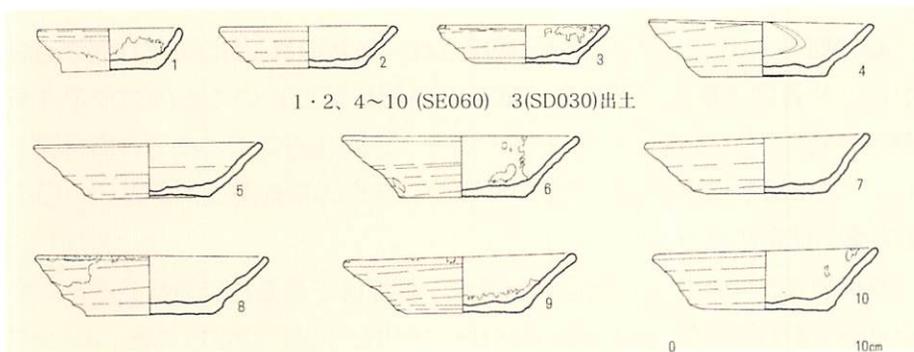
ガラス製小皿  
実測図(S=1/4)



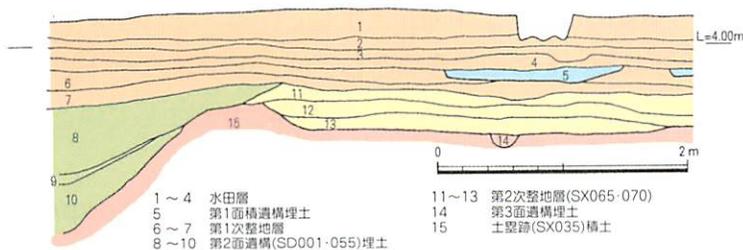
華南三彩鳥形水注片



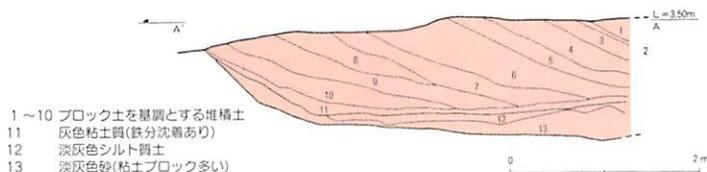
鉄砲弾



SD030・SE060 出土遺物実測図(S=1/4)



調査区南側壁土層図(S=1/60)



土塁跡(SX035)土層図(S=1/80)



第2次整地層土層(北より)



土塁跡(SX035)断面土層(北より)

## 第4次調査 (大友氏館跡)

調査主体	大分市教育委員会	調査場所	大分市 <small>けんたくまち</small> 顕徳町3丁目/ <small>おおともやかた</small> 大友館
調査期間	1999.12～2000.02	調査面積	132m <sup>2</sup>
遺跡の時期	16世紀中葉～16世紀後葉	検出標高	4.3m
主要遺構	16世紀中葉…溝状遺構 (SD003・006) 16世紀後葉…整地層 (SX002) ・溝状遺構 (SD001・007) ・廃棄土坑 (SX004)		

### 遺跡の概要

調査区は、推定大友氏館の中心にあたり、地表から約25cm下部に江戸時代の水田層が堆積しており、その層を除去した段階で16世紀後葉の整地層 (SX002) が検出できた。これを基盤面とする廃棄土坑 (SX004) と溝状遺構 (SD001・007) を確認した。

廃棄土坑 (SX004) は調査区北東側で検出され、直径1.7mを有する。出土遺物には、16世紀後葉の京都系土師器が多量に出土している。

2本の溝状遺構 (SD001・007) は整地層 (SX002) を基盤面として掘削されており、2m間隔で平行に南北 (N-8°-E) に延びている。遺構の性格として館内を分けていた区画溝や道路側溝の可能性が高い。

整地層 (SX002) は、調査区の中心から西側全面に確認されるが、さらに周辺部に及んでいる事が観察できる。整地層は厚さ約20cmの堆積が確認でき、その下部には溝状遺構 (SD006) とこれより古い時期の溝状遺構 (SD003) が検出された。このことから、遺構の埋め戻し後の地盤改良による整地事業と考えられる。整地堆積土中には16世紀中葉に比定される多量の京都系土師器や池状遺構で見ついている白い玉砂利 (石英) が出土しており、周辺部に存在していた遺構を削平したことを窺い知ることができる。

溝状遺構 (SD006) は、整地層 (SX002) の下部から検出され、溝状遺構 (SD003) が埋め戻された段階に掘り込まれたことが確認できた。遺構は、調査区外側に延びているものの推定で幅1.5mを越え、深さは整地層下から0.75mを有し、N-6°-Eに振って南北方向にそれぞれ真っ直ぐに延びている。遺構の年代は、堆積層から出土した多量の非口口成形の京都系土師器と口口成形の土師器により、16世紀中葉に比定される。

溝状遺構 (SD003) は、整地層 (SX002) の下部から検出され、調査区で最も古い遺構である。推定で幅5mを越え、深さ1.6mの規模を有する。出土する遺物から16世紀中葉に比定される。

### 主要遺物

出土遺物には、整地層 (SX002) から多量の京都系土師器が出土している。これらは、整地段階で削平を行った際、混入したものと考えられる。その他の遺物としては、中国産の五彩や青花、瀬戸美濃産の折縁皿や天目碗、備前産の播鉢、建物の存在を窺わせる平瓦などが出土している。

### 特記事項

調査区内で確認された大規模な溝状遺構 (SD003) は、2町四方の推定大友氏館跡の中心を二分する状況にあり、16世紀中葉～後葉にかけては、館内において改修・拡張等の整地事業が行われたことが各調査区で確認されている。また、当該地は他の調査地点の遺構検出面よりも標高が高く、当時館の中心部に向かって遺構形成面が高くなっていくことを窺い知ることができる。なお、調査区の東側の立地は今調査区の標高よりもさらに高くなっている。

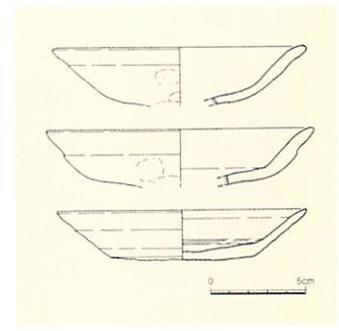
(池邊 千太郎)



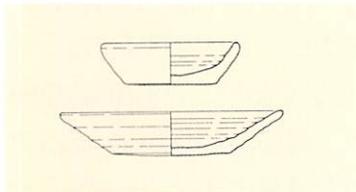
全景(北より)



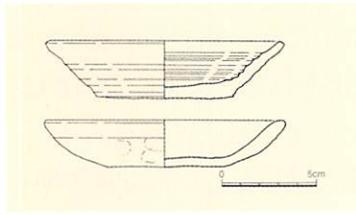
廃棄土坑(SX004)遺物出土状況



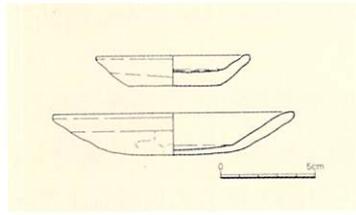
SX004出土遺物(S=1/4)



SX002出土遺物(S=1/4)



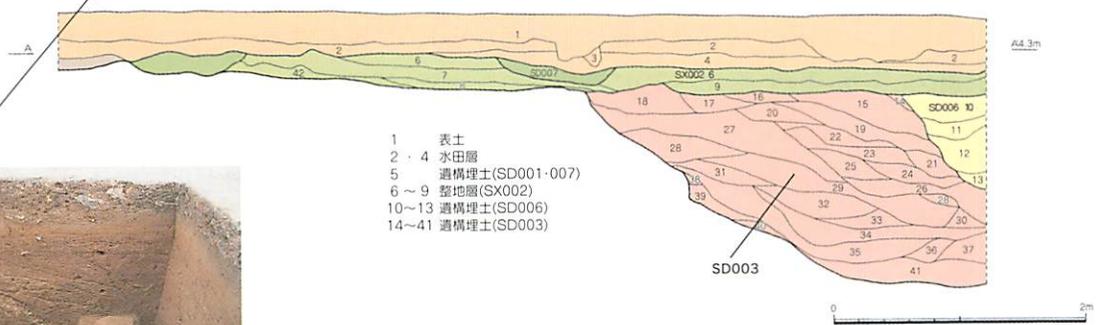
SD006出土遺物(S=1/4)



SD003出土遺物(S=1/4)



遺構平面図(S=1/125)



SD001 · SX002 · SD003 · SD006 · SD007土層図(S=1/60)



整地層(SX002)・  
溝状遺構(SD003・006)断面

## 第5次調査 (大友氏館跡)

調査主体	大分市教育委員会	調査場所	大分市 <small>けんたくまち</small> 顕徳町3丁目/ <small>おおともやかた</small> 大友館
調査期間	2000.01～2000.02	調査面積	60m <sup>2</sup>
遺跡の時期	16世紀中葉～後葉	検出標高	3.8m
主要遺構	16世紀前葉～中葉…土塁跡 (SX020) 16世紀後葉…土坑 (SX026)・整地層 (SX019)・井戸跡 (SE011) 掘立柱建物跡 (SB001)		

### 遺跡の概要

この調査区は、整地層 (SX019) を基盤面として遺構が形成されており、大型の掘立柱建物跡1棟 (SB001)、井戸跡1基 (SE011)、溝状遺構1条をはじめ不定形土坑やピットが確認できた。

特に掘立柱建物跡 (SB001) は、現状で2×2間の建物の東側に庇が付いており、建物配置はN-2～3°-Eである。規模は桁行間隔が2.2～2.4m、梁行間隔が1.9mあり、直径約30～60cmの柱穴で構成されている。柱穴にはそれぞれ柱痕がはっきりと確認でき、焼けた建物の壁材の一部や炭化木が大量に含まれていることから、建物は火災によって消失したことが窺える。時期的には、時期を比定できうる遺物の出土が少ないものの、近世段階の遺物が含まれないこと、整地層に含まれる遺物が16世紀後葉を下るものがないことから、16世紀後葉の範疇に比定される。火災については、天正14～15年 (1586～1587) の島津軍の府内侵攻による原因も可能性として注目される。

また、井戸跡 (SE011) も同じく16世紀後葉と考えられるが、建物と共存していたかは不明である。掘り方の直径は2.5m以上になり、深さは検出面より1.95mを有する。埋土状況は、2重に堆積状況が確認できることから本来は井筒が存在していたものが、廃棄段階で抜かれたものと考えられる。

整地層 (SX019) は、掘立柱建物跡 (SB001) や井戸跡 (SE011) の基盤面となる面である。SX019は、土塁 (SX020) の上面を削った後に整地した層で土塁上面から厚さ10cmを確認し、土塁裾部からは、約40cmもの堆積状況が見受けられる。出土遺物より16世紀後葉の大規模な土木事業の一部であると思われる。なお、この整地は第2次調査の第二次整地層 (SX065) と同一である。

整地層 (SX019) の下位においては、南北方向に延びる土塁跡 (SX020) が検出された。土塁跡は、逆台形状に掘り込まれた中に質感の異なる土を左右から内側に向かって斜めに堆積させ、その中心でやや締まった土を水平に堆積させた積み方を行っている。法面の高さは、上面が削平されており、現状で約30cmほどが残っているにすぎない。その規模は、現状で頂上部幅4m、裾部幅7.3m、底部幅3.3m、積土の高さは掘り込み面から1.3mを有する。この土塁跡は、南に30m離れた第2次調査のL字状 (東西・南北方向) に確認された土塁 (SX035) の延長線上にあたる。

### 主要遺物

遺物は、京都系土師器を主体として、土塁の堆積層や井戸跡から出土している。京都系土師器以外には、中国産の青花碗や瓦質火鉢が出土しているにすぎない。

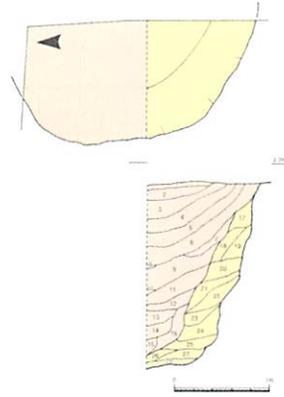
### 特記事項

16世紀前葉～中葉の土塁を確認することができた。なお、規模と構造は明らかになったものの、堀などは確認できなかった。また、16世紀後葉段階には土塁を削平した上面に建物や井戸を形成しており、この段階における館を区画する土塁や堀などの施設は確認できていない。

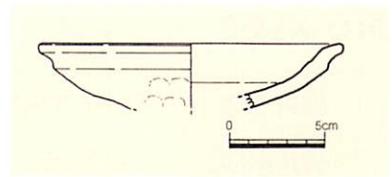
(池邊 千太郎)



全景(東より)



井戸跡(SE011)平面・土層図(S=1/80)



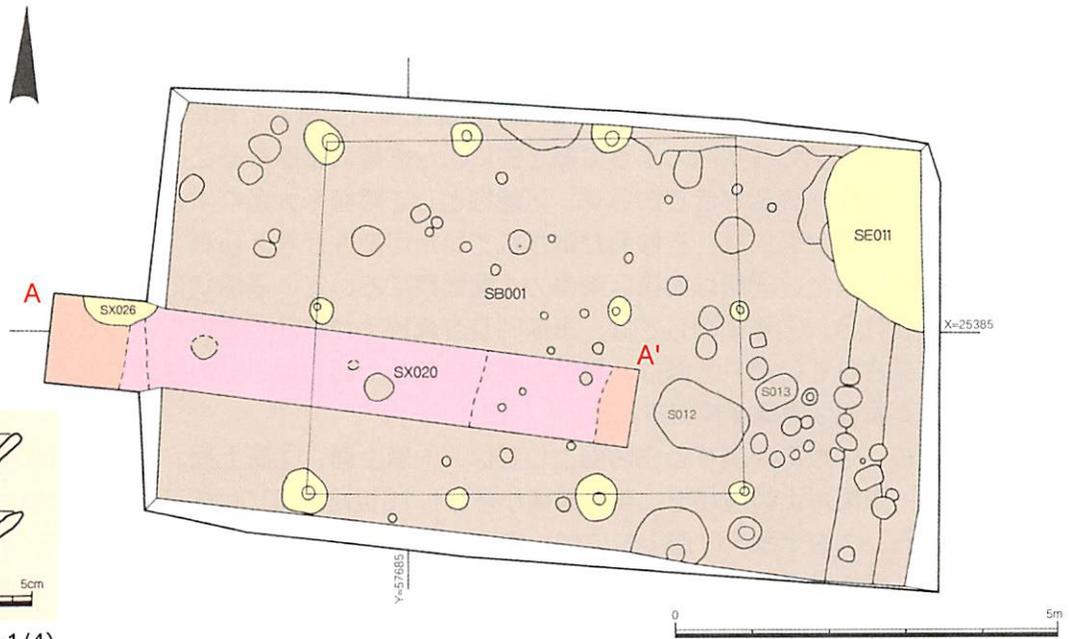
SE011出土遺物(S=1/4)

1~16 最終埋土層

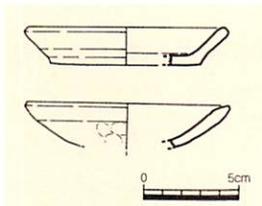
(上層は主にやや硬質で下層にいくにつれて粘性を強めていく。また上層は灰色ブロックを少量含む。下層にいくにつれて炭化物が主に含まれるようになる。鉄分の沈着が見られるようになる。)

17~28 表込め層

(上層は主にやや硬質であり、下層にいくにつれてやや粘質と粘性を強めていく。上層下層共に灰色ブロック、黄色ブロックを含む。)



遺構平面図(S=1/100)



SX026出土遺物(S=1/4)



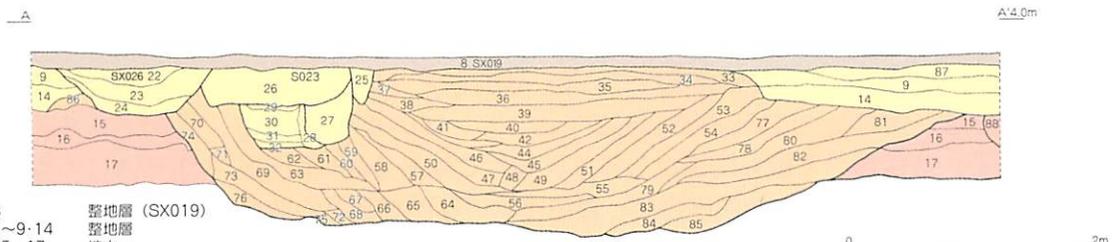
土塁跡(SX020)断面



土塁跡を北から望む



掘立柱建物跡(SB001)柱穴断面



- 8 整地層 (SX019)
- 7~9・14 整地層
- 15~17 地山
- 22~24 遺構埋土 (SX026)
- 26~32 遺構埋土
- 33~86 土塁跡 (SX020)

土塁跡(SX020)土層図(S=1/60)

## 第6次調査 (大友氏館跡)

調査主体	大分市教育委員会	調査場所	大分市 <small>けんとくまち</small> 顕徳町3丁目/ <small>おおともやかた</small> 大友館
調査期間	2000.05～2001.03	調査面積	283m <sup>2</sup>
遺跡の時期	14世紀後葉～16世紀後葉	検出標高	盛土段上5.1m／盛土段下4.2m
主要遺構	15世紀末葉～16世紀前葉…盛土整地跡 (SX009) 16世紀中葉…SX045・055・077・088・090・091		

### 遺跡の概要

第6次調査区は、推定大友氏館跡のほぼ中央部に相当し、微高地にあたる。現行の地割から、南側をA地点、北側をB地点と設定した。調査地点の面積は、A地点約205m<sup>2</sup>、B地点約78m<sup>2</sup>の合計約283m<sup>2</sup>を測る。(第5図)

A地点は、土層観察のために開けたサブトレンチにおいて複数の整地層を確認した。整地層群は、1m程の厚みを持ち、土層観察から、基壇状に盛土整地を施した段階が確認された。(第3図) A地点の層序は、第1図の柱状図のように概念的に①～⑨層に整序することができる。③・④層に関しては、明瞭な遺構が確認できておらず、可能性として織豊系大名による埋め立て整地であることが考えられる。⑤層上面には、玉砂利が敷かれていた可能性が考えられ、玉砂利の混入した複数の遺構が展開する。また、⑤層は調査区東側の土層観察において、基壇状に盛られた盛土整地であったことが指摘される。⑦層に関しては、玉砂利及び真砂土が敷かれていたようで、この上面でも複数の遺構が確認されている。⑧層は、地盤を安定させるための掘り込み整地である可能性があり、その下の⑨層上面では遺構が検出される。

すなわち、中世に帰属する生活面としては、⑤層上面、⑦層上面、⑨層上位が考えられる。⑤層上面には、京都系土師器が出土する遺構が存在し16世紀前葉には生活面として機能していたことが想定される。⑦層上面・⑨層上位に関しては、15世紀代には生活面が展開していたことが考えられる。また、盛土地業の下段と推定される地点において、溝状遺構 (SX018) と、それに切られる長土坑 (SX030) が確認されている。これらの遺構は、区画性を示唆するものと考えられる。長土坑からは、土師器の大量廃棄行為が確認されている。出土土師器は、ロク口成形土師器を少量含むが、そのほとんどを京都系土師器皿が占める。

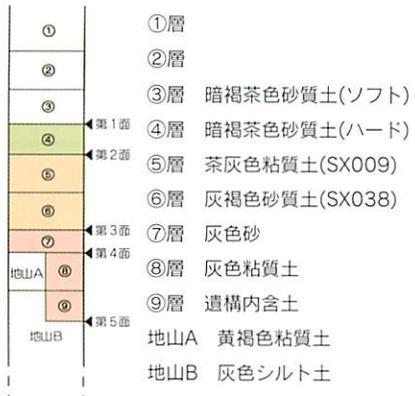
注目されるのは、B地点で確認された礫の詰った土坑群である。この遺構群は、東西を軸に3基が、南北を軸に2基と、それぞれが東西軸・南北軸に並ぶ。東西3基には、直径10cm程の楕円礫が、南北2基には長軸20～30cmの角礫・楕円礫・石臼片が詰まっていた。何らかに規制された遺構配置である可能性が考えられる。また、東西3基からは、いずれも廃絶期に帰属すると考えられる16世紀中葉の京都系土師器皿の碎片が大量に検出された。また、周辺に遺構が少ないこと、盛土整地上に位置するということから、大型建造物跡の一部である可能性も考えられる。

### 主要遺物

他の調査地点と比較して、土師器の出土量が圧倒的に多く、本調査地点が館内の中枢施設の一部であった可能性を示唆する。また、土層観察に基づく遺構の時期判定から、土師器の相対的時期設定に成果を得ることができた。これらの資料に、層位学的検討を加え、京都系土師器が少なくとも盛土整地以後に出現することが確認されている。(第2図)

貿易陶磁では、中国産染付碗E群が最も多く出土し、次いで染付皿E群、同B1群、白磁E1群という順序である。注目される貿易陶磁としては、破片ではあるが華南三彩水注をはじめ素三彩袋物、赤絵大皿・碗、青白磁梅瓶、青白磁合子、青白磁水注など威信財的要素の強い容器類の出土が注目される。他にも、龍泉窯系青磁碗B1・B4群、白磁E2群、中国産染付碗B・C群、中国産染付皿B2群、粉青沙器、絵唐津、折縁ソギ皿、瓦質土器等の出土品が挙げられる。

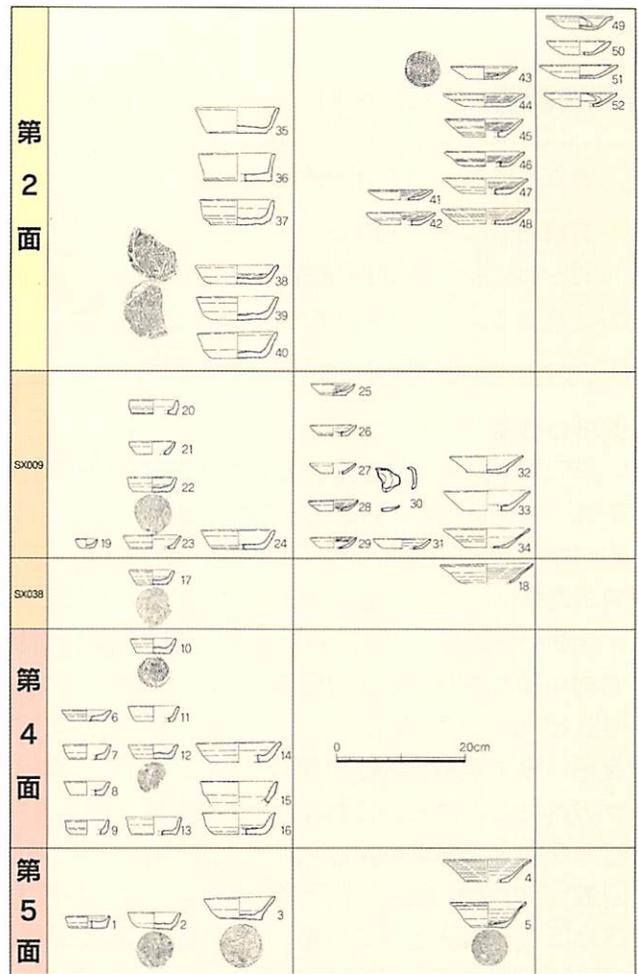
(上野 淳也)



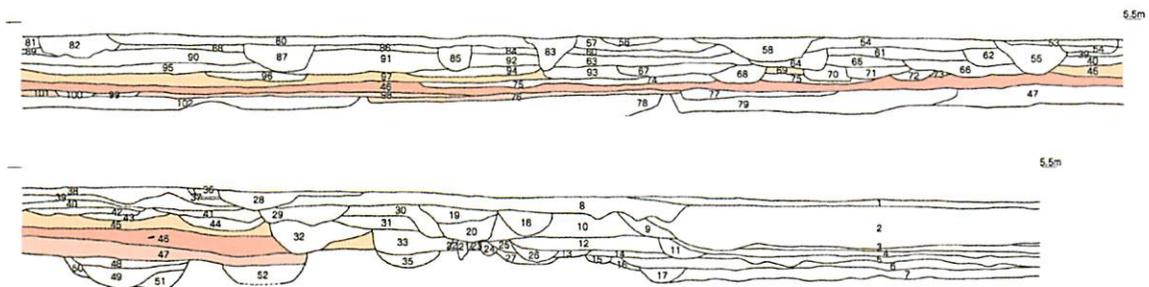
第1図 基本層序柱状模式図



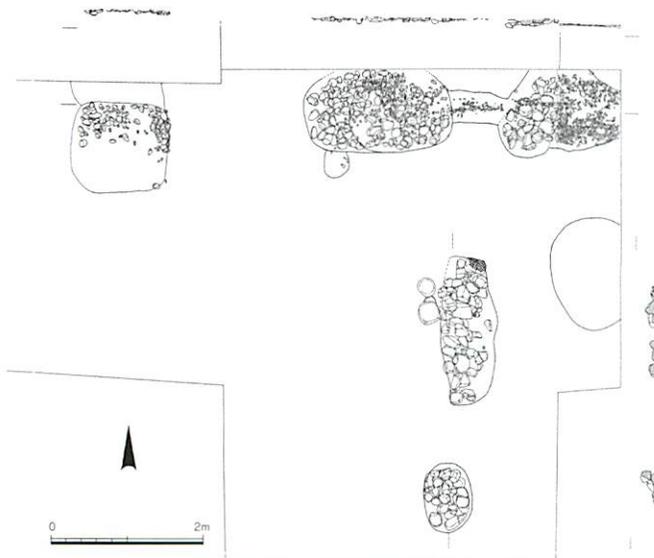
B地点遺構検出状況(西より)



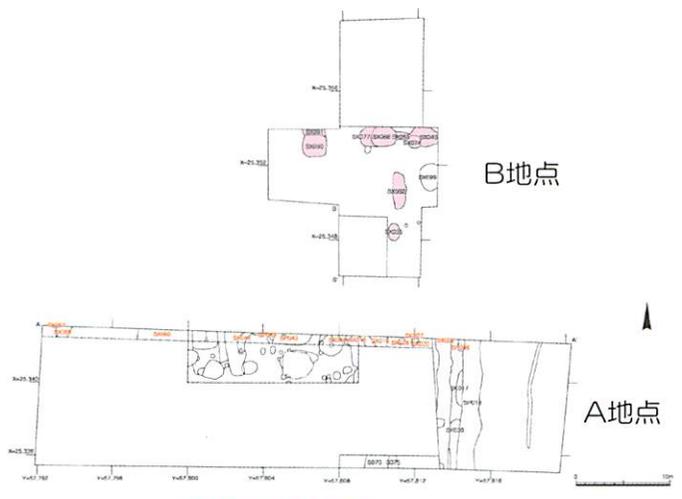
第2図 出土土師器基本層序対応表(S=1/12)



第3図 A地点サブトレンチ土層図(S=1/100)



第4図 B地点遺構配置図(S=1/100)



第5図 遺構配置図

## 第7次調査（大友氏館跡）

調査主体	大分市教育委員会	調査場所	けんたくまち おおともやかた 大分市顕徳町3丁目／大友館
調査期間	2000.07～2001.03	調査面積	121m <sup>2</sup>
遺跡の時期	16世紀後葉	検出標高	推定3.8m
主要遺構	16世紀後葉…溝状遺構（SD006・033・035・040・041・050） 積土遺構A・B		

### 遺跡の概要

第7次調査区は、推定大友氏館北限の北西部分に位置し、調査面積は121m<sup>2</sup>を測る。調査地点からは、北側に3本、南側に3本と、東西方向に平行して延びる6本の溝状遺構が検出された。（第1図）北側から順に、SD041・SD040・SD035・SD006・SD033・SD050と遺構番号を付している。溝状遺構は、全て断面V字あるいはY字の形状を呈する。

北側のSD041・SD040・SD035の3条の溝状遺構は、その切り合い状況により、南側から順次北側へ移築された状況が把握され、(旧)SD035→SD040→SD041(新)という新旧関係が認められる(第2-3図参照)。SD035には、南側に地山直上に灰色土を版築状の工法で積み上げた積土遺構(積土遺構A)が付随していたようで、溝内には積土遺構の存在する南側からの灰色シルト質土の流れ込みが確認された。SD035は、出土遺物が僅少で時期比定には至っていない。また、人為的に埋め立て整地地業が行われたようで、整地面直上で次段階のSD040に付随する積土遺構(積土遺構B)が築かれる。SD040の南側には、砂質土と粘質土を交互に積み重ねた積土遺構が付随していたことが確認されている。溝内には、積土遺構の存在する南側から砂質土の流れ込みが確認され、16世紀代の所産と考えられる土師器片が確認されている。SD041は、16世紀後葉に比定される遺物と多くの礫が詰った状態で検出された。

南側のSD006・SD033・SD050の3本の溝状遺構も同様に(旧)SD050→SD033→SD006(新)の順に移築された状況が確認されている。(第2-2図)SD050の溝底には、灰色シルト質土の堆積が確認され、上層は人為的に埋め立てられたようである。なお、SD050からの出土遺物は僅少で時期特定には至っていない。SD033は、上面プランの大半がSD006と重複する為、遺物が少量で埋没時期が不明瞭ではあるが、16世紀代には存在していたものと考えている。SD006は、調査区西側で、溝が途切れる状況が確認されている。埋没状況は、下層部には自然堆積層が確認され、その上層部は人為的に埋められている。溝底付近からは、16世紀後葉の遺物群が確認されている。

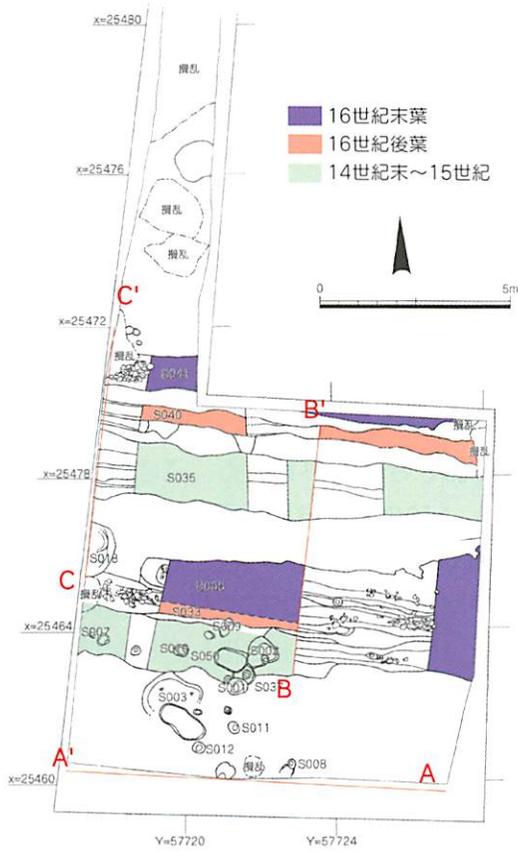
土層観察において連続面としての確認はなされていないが、それぞれSD041とSD006、SD040とSD033、SD050とSD035が、断面形状や堆積状況、遺物出土状況などで共通する部分が多く、切り合いによる変遷過程においても一致する為、本来、二本で一对として機能していたことが推察される。すなわち、SD041・積土遺構A・SD006→SD040・積土遺構B・SD033→SD050・SD035といった変遷過程が想定される。

調査区南壁の土層観察から、上中下3層の整地層が確認された。(第2-1図)中層上面の遺構は、京都系土師器を出土し、中層の整地が16世紀後葉には形成されていたことが判明する。従って、上層も以降の所産である。

### 主要遺物

SD006からは、口く口成形土師器、京都系土師器、中国産染付皿、白磁皿、焼締め陶器播鉢、瓦質火鉢、土師質鍋等が、SD041からは京都系土師器、備前焼播鉢、東南アジア産或は中国南部産と思われる焼締陶器や施釉陶器壺、瓦質鍋・火鉢などが出土しており、双方16世紀後葉の埋没時期を考えている。貿易陶磁に関しては、白磁D群・E2群、中国産染付碗E群、龍泉窯青磁碗IV類、青磁稜華皿A、青白磁梅瓶、五彩袋物、青釉陶器が出土している。その他、軒丸・軒平瓦、獣骨などが出土している。

(上野 淳也)



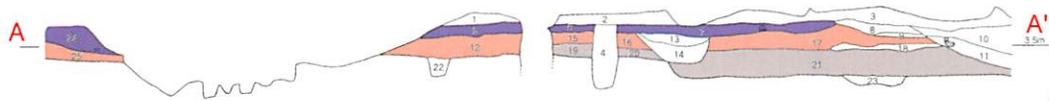
第1図 遺構平面図(S=1/200)



調査区全景(東より)



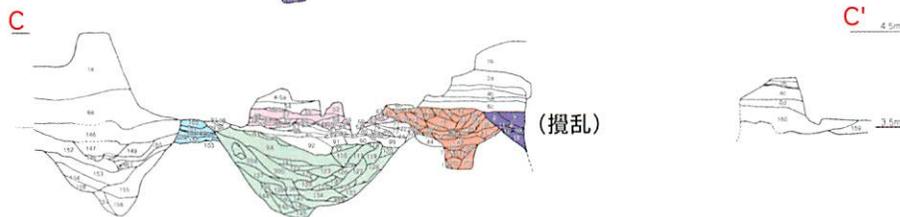
SD006・SD033・SD050(東より)



第2-1図



第2-2図



第2-3図

第2図 土層図(S=1/80)



SX027・SX028 遺構検出状況



SD006・SD033・SD050断面(東より)



積土遺構断面

## 第8次調査 (大友氏館跡)

調査主体	大分市教育委員会	調査場所	大分市 <small>けんたくまち</small> 顕徳町3丁目/ <small>おおともやかた</small> 大友館
調査期間	2000.08 ~2001.03	調査面積	60m <sup>2</sup>
遺跡の時期	16世紀前葉~16世紀後葉	検出標高	3.8m
主要遺構	16世紀後葉…廃棄土坑 (SK003・004)		

### 遺跡の概要

調査の結果、昭和30年代の造成土と、それ以前の標高約4.2m付近で検出される水田耕作層を除いた直後に、16世紀後葉~17世紀初頭の遺物を含む遺構検出面が確認された(第2図参照)。この面においては、不定形プランのグライ層的溜り状遺構が確認できたのみである。この所見に関しては、第2次調査の調査所見との整合性が確認できた。しかし、この面における不定形の溜り状遺構の掘り下げ時に16世紀代の土師器や中国産染付・胎土目唐津や瀬戸・美濃陶器とともに江戸時代の遺物も出土することから、この遺構の形成が水田開墾の影響によるグライ化なのか、耕作時の混入品であるのかを判断することはできなかった。大友氏除国後、早い段階で水田化していたことも予測されるが、この面における不定形の溜り状遺構の形成が水田開墾の影響によるものなのか、それとも水田開墾以前のものであるのかを明瞭にし、16世紀末葉における盛土整地地業の存在を究明してゆくべきであろう。

第2図6層上面、標高約3.8mにおいて、検出される遺構群が存在する。(第1図)これらの遺構群SK004・SX007・SX008は、16世紀前半以前に比定され、SK004からは、薄手の京都系土師器が出土している。方形プランを呈するSX007・SX008は、必然的に、これに先行する。

平面プランにおいてSK004を切るSK003からは、16世紀後葉代に比定される京都系土師器が出土する。SK003以西は、遺構密度が高く、明瞭な整地層は確認できなかった。第2次調査区の所見と同様に16世紀後葉の整地地業を行うにあたり、基盤地業としての削平を行った可能性も考えられる。

### 主要遺物

第8次調査出土遺物からは、16世紀を主体とした土器や貿易陶磁が出土しているが、中でも注目されるのが、獣骨と推察される骨片が多数出土した点にある。骨片は、遺構の検出時に遺構内から出土することが多く、各遺構に帰属するものと推察される。

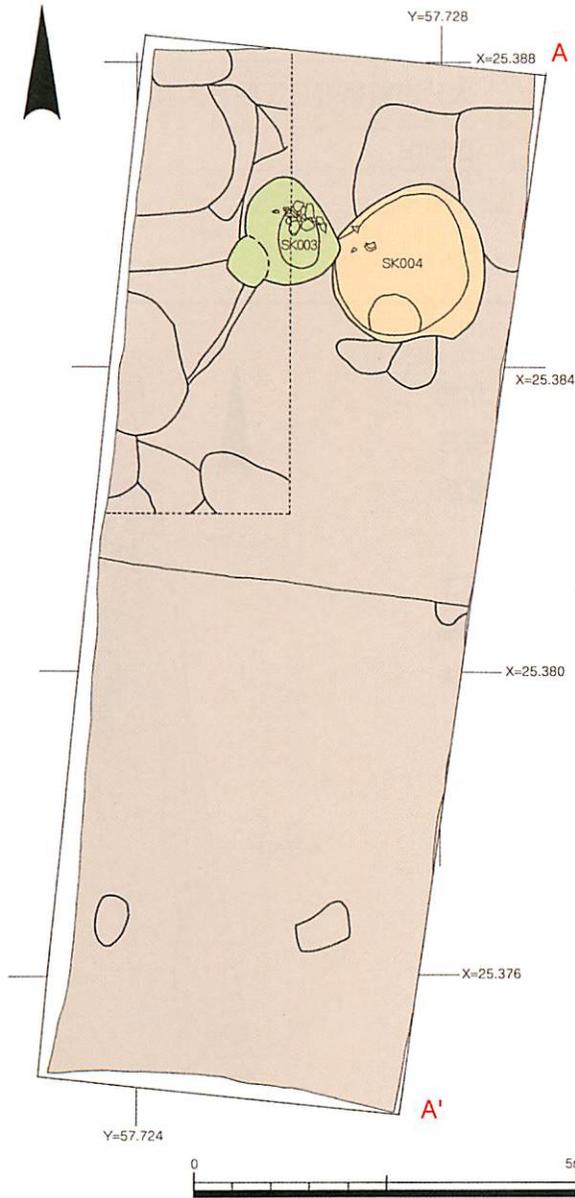
貿易陶磁に関しては、中国産染付を中心として、青磁や白磁が数片出土している。小片ではあるが、華南三彩も1片確認されている。最下の水田層からは、比較的まとまって、胎土目唐津や瀬戸・美濃陶器などの16世紀末葉~17世紀初頭の遺物が出土する。

土器に関しては、遺構検出時に多数の土師器が出土した。京都系土師器の割合が最も高く、16世紀後葉に帰属するものが多い。出土土師器の内、口径10cm前後の京都系土師器には、灯明芯痕を有するものが多いことが注目される。また、瓦質鍋や瓦片も少量ではあるが出土している。

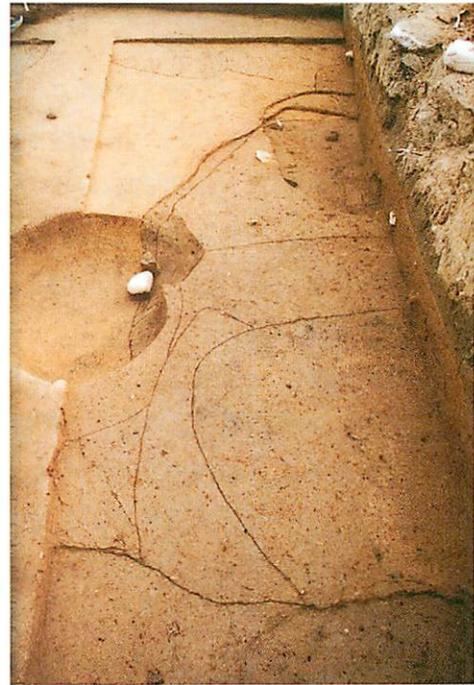
遺構内出土品としては、前述のSK003・SK004の出土品が挙げられる。SK003からは、京都系土師器皿と口縁部にへう彫り装飾を有する青磁碗が出土している。SK004からは、京都系土師器皿が出土した。京都系土師器皿は、3~4法量が確認できる。比較的薄手のものが多く、口縁部内面や内底面に沈線を有するものが確認される。

検出された遺構は、性格不明土坑が多いが、①土坑内に獣骨が多い点、②切り合いが著しい点、③出土土師器に意図的な埋納的行為が見受けられない点などから、廃棄土坑的な性格が推察される。

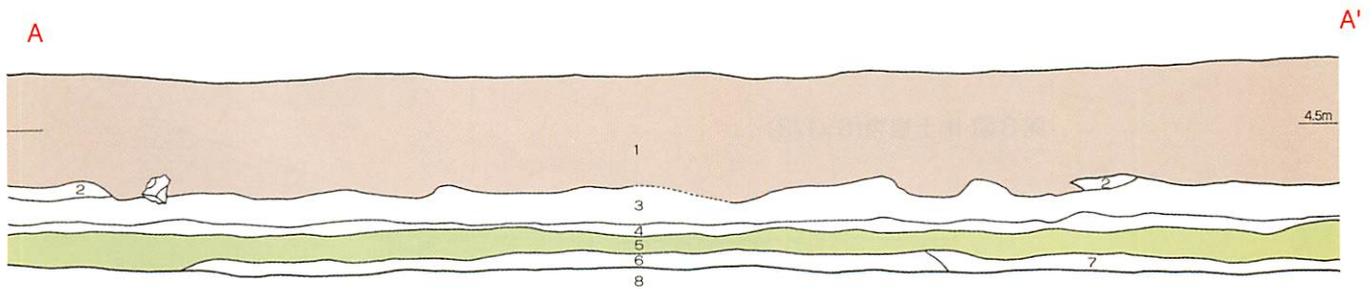
(上野 淳也)



第1図 遺構平面図(S=1/100)



遺構検出状況(北より)



- |    |              |    |            |
|----|--------------|----|------------|
| 1層 | } 昭和30年代の造成土 | 5層 | 16世紀後葉の整地土 |
| 2層 |              | 6層 | 16世紀中葉の整地土 |
| 3層 | } 近世～近代の耕作土  | 7層 | 16世紀前葉の遺構  |
| 4層 |              | 8層 | 地山         |

第2図 調査区東壁土層断面図(S=1/40)

## 第9次調査 (大友氏館跡)

調査主体	大分市教育委員会	調査場所	けんたくまち おおともやかた 大分市顕徳町3丁目/大友館
調査期間	2001.02 ~ 2001.03	調査面積	6.5m <sup>2</sup>
遺跡の時期	16世紀後葉	検出標高	3.8m
主要遺構	16世紀後葉…埋納遺構 (SX007)		

### 遺跡の概要

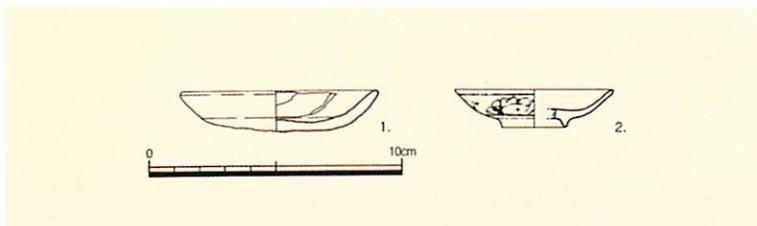
第9次調査地点は、大友氏館跡の北東地点に設定した。北側外郭線に近接することから、区画性を示す遺構の検出が期待された。調査としては、時間的な制限から、1本のトレンチを設定した。(第1図) 調査面積は、約6.5m<sup>2</sup>である。

遺構としては、調査区北側において、掘り込みを伴う砂混土層による硬化面SX004を検出した。この硬化面は、道路状遺構である可能性が考えられる。また、硬化面に切りこむ16世紀末葉に比定される埋納遺構SX007が確認されている。SX007は、人頭大の礫の下に、京都系土師器を伏せた状態で埋納したものである。また、平面プラン上の切り合い関係で最古となるのは、南北に走る溝状遺構SX003である。(第2図)

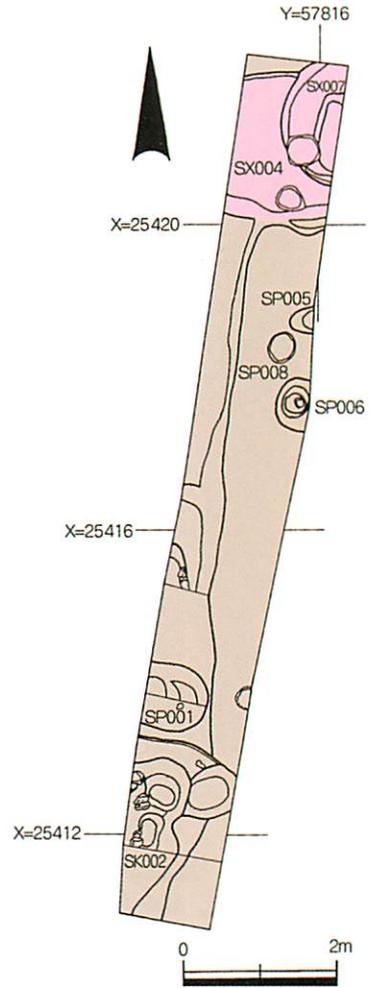
### 主要遺物

第3図1は、SX007出土の京都系土師器で、完形品である。口径は12.2cmを測る。2は、遺構検出時に検出した中国産染付である。16世紀後葉の製品と考えられる。

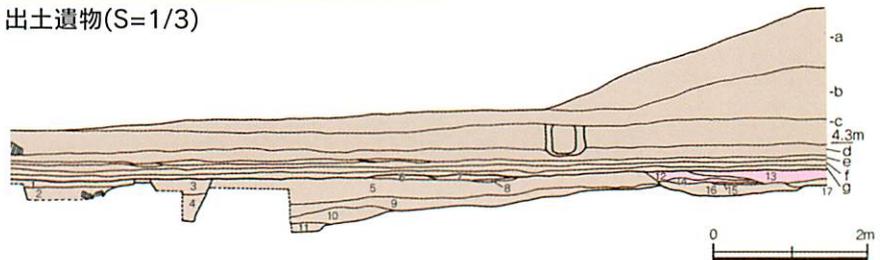
(上野 淳也)



第3図 出土遺物(S=1/3)



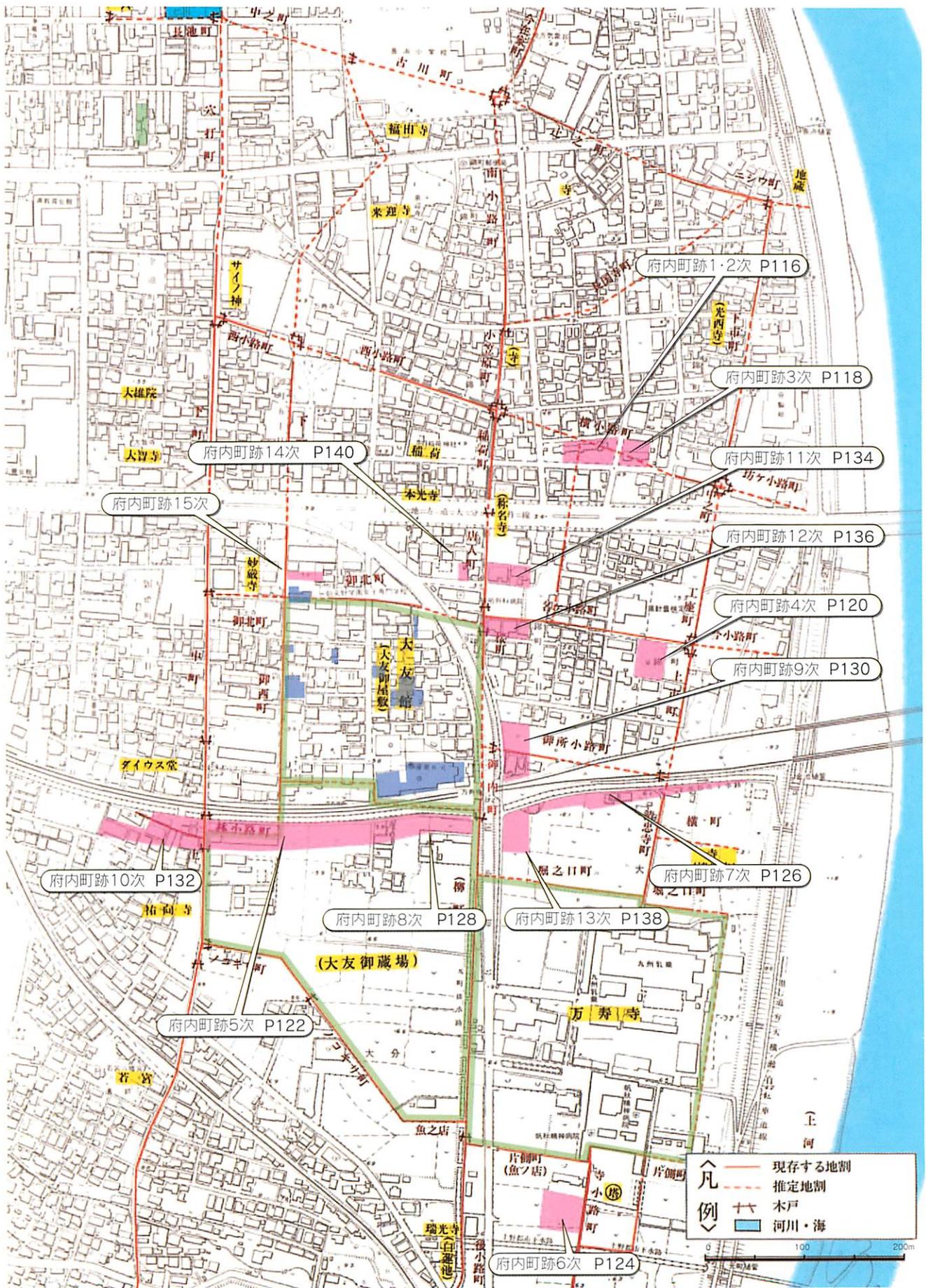
第1図 遺構平面図(S=1/100)



- |  |  |
|--|--|
| 1 淡灰褐色砂質土 砂、炭化物を多量に含む 焼土、白色粒子含む          | 11 黄灰色砂質土 砂を多量に含む                        |
| 2 茶褐色砂質土 1より炭化物混入は少ない 凝灰岩質の礫含む           | 12 灰茶褐色砂質土 やや粘性があり硬質 白色、黄褐色粒子含む 小玉砂利若干含む |
| 3 灰褐色砂質土 白色粒子、炭化物含む 1より炭化物の混入は少ない 白磁高台含む | 13 暗灰茶褐色砂質土 12と同じ状況 炭化物、焼土含む             |
| 4 暗茶褐色砂質土                                | 14 淡黄色砂質土 砂が多い サラサラであるが硬質                |
| 5 暗褐色砂質土 砂を多量に含む                         | 15 淡褐色粘質土                                |
| 6 淡黄灰色砂質土 白色粒子を多量に含む 硬い                  | 16 茶褐色砂質土 サラサラしている 微粒の白色粒子含む             |
| 7 淡茶褐色砂質土 土器片含む 硬くやや粘質あり                 | 17 暗褐色砂質土 硬質 黄、白色粒子含む                    |
| 8 淡茶褐色砂質土 土器片含む 硬くやや粘質あり                 |  |
| 9 暗黄褐色砂質土 5ほど硬くなくサラサラ気味                  |  |
| 10 黒褐色砂質土 炭化物、瓦、礫含む                      |  |

第2図 西側壁土層図(S=1/100)

## 2. 中世大友府内町跡の調査概要



中世大友府内町跡の調査地点

## 第1・2次調査 (中世大友府内町跡)

調査主体	大分市教育委員会	調査場所	にしきまち まごころじまち 大分市錦町3丁目／横小路町
調査期間	1996.05～1997.08	調査面積	820m <sup>2</sup>
遺跡の時期	15世紀後葉～16世紀後葉	検出標高	4.0m
主要遺構	15世紀後葉～16世紀前葉…溝跡(SD970・SD978) 井戸跡(SE400・SE460) 16世紀中葉～後葉…道路状遺構・土坑(SK137・SK139・SK155)		

### 遺跡の概要

中世大友府内町跡で最初に行われた本格的な発掘調査で、調査地点は、中世の「横小路町」に比定される地点である。

調査の結果、戦国時代に築造された大規模な道路状遺構と多数の土坑・井戸等が検出された。

道路状遺構は掘り込み地業により、砂・粘土・小石等を版築状に突き固めて築造されており、調査区中央でN-64°-Wに斜行して検出された。両側には側溝としての機能が考えられる溝も確認されており、路面の最大幅は約10mにも及ぶ。これらの溝から出土した遺物により道路状遺構の廃絶年代は16世紀後葉から末葉と考えられる。道路状遺構周辺には多数の遺構が認められ、一部の柱穴列からは道路状遺構と直交する地割の存在も窺われるが、明確な建物遺構や石列等は検出できていない。

道路状遺構よりも下から検出された遺構の分布は、推定路面中央部付近が疎になっており、道路の地業が複数の時期にわたって行われたか、あるいはこうした地業によって築造される以前にも道路が存在したことを示すものと思われる。これらの遺構のうち井戸跡(SE400・SE460)はいずれも結桶を井筒として用いたものである。またSD970は深さ1.4mにも及ぶ断面V字形の溝で何らかの区画溝と考えられ、道路状遺構とわずかに主軸方向を異にするが、道路状遺構築造以前にも類似の地割が既に存在したことを示している。土坑SK155からは多量の鉄滓・炉壁片・ふいごの羽口などが出土しており、調査地付近に鍛冶関連遺構が存在したことを窺わせるものである。これらの遺構は遅くとも16世紀中葉までには埋没しておりこれが道路状遺構の築造時期を示すものと判断される。

### 主要遺物

京都系土師器を含む土師器、備前焼を主体とする国産陶器、東南アジア産のものを含む貿易陶磁器が豊富に出土している。このうち東南アジア産陶器としては、ベトナム焼締陶器長胴瓶5点とタイ陶器四耳壺片2点が確認された。これらは確認できる限りでは16世紀後葉から末葉に位置づけられる遺構からの出土である。また、中国産と思われる焼締陶器鉢や、華南三彩水注も出土している。また、SD970からは天秤の皿と推定される青銅製品が出土しており、はかりを扱う商人が周辺に居住していたことを示しており、注目される。

### 特記事項

本地点の調査では、『戦国時代の府内復元想定図』(「大分市史」中巻付図2)で比定された位置とほぼ一致して道路状遺構が検出され、比定作業の正しさが考古学的に初めて検証されることとなった。

しかし、道路南に取り付くはずの南北路は検出されていない。

調査の結果、検出された遺構は15世紀以降のものであり、とりわけ16世紀中葉から後葉・末葉にかけてが最盛期であるとみられる。14世紀代あるいはそれ以前にさかのぼる遺物は出土しているもののこの時期に比定できる遺構は検出されなかった。

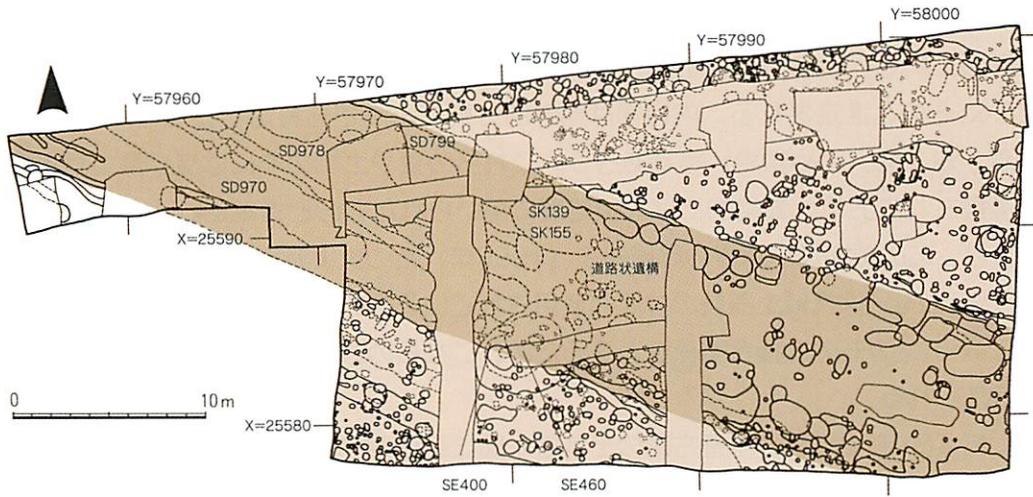
(高島 豊)



調査区全景(西から)



SE460(上)・SE400(下)



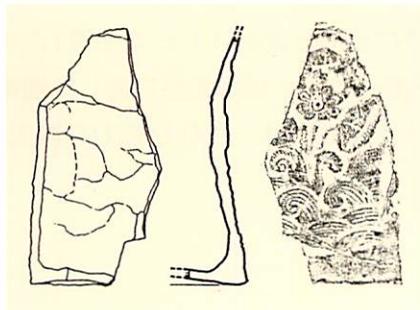
遺構配置図(S=1/400)



出土遺物



道路状遺構の整地層と下層の溝状遺構(SD970)



華南三彩水注片(S=1/3)



天秤の皿(青銅製)

### 第3次調査 (中世大友府内町跡)

調査主体	大分市教育委員会	調査場所	大分市錦町3丁目／横小路町
調査期間	1997.8～1997.12	調査面積	160m <sup>2</sup>
遺跡の時期	15世紀後葉～16世紀後葉	検出標高	4.5m
主要遺構	16世紀後葉…大甕埋設遺構 (SX210) 井戸跡 (SE120) 石積み土坑 (SX176)		

#### 遺跡の概要

中世の「横小路町」に比定される地域に所在し、第1次・第2次調査地点の東側に隣接する地点にあたる。調査の結果、16世紀後葉を中心とする遺構群が検出された。

特に注目されるのが大甕埋設遺構 (SX210) で、南北に2列並行して掘られた10基の円形もしくは不正円形の土坑で、うち5基に備前焼大甕が埋置されていたものである。本来は10基の大甕が埋設されていたものと推定される。内容物は科学的分析によっても特定することができなかったが、おそらく酒・油・藍 (染め物用) 等であろう。これらの甕や土坑の中には炭や焼土とともに多量の陶磁器が廃棄されており、最終的には火災処理に用いられたものと推定される。出土した陶磁器の年代観により、この遺構は島津軍の豊後侵攻 (1586年) 後の火災処理に比定できる可能性が高い。

井戸跡 (SE120) は瓦質土器製の井筒が使用されているものである。井筒中から出土した華南三彩壺はSX210出土のものと接合関係を有するため、これらの遺構は同一の屋敷地内であった可能性が高いと考えられる。

石積み土坑 (SX176) は、不整形の土坑で一部に石組みが残存していた。銅滓の付着したトリベが多量に出土しており、鑄造関係の遺構が周辺に存在することを窺わせる。

このほか調査区南端で第1次・第2次調査で確認されたものと同様の版築状の整地層が検出されておりその検出位置から、同じ道路状遺構と判断された。

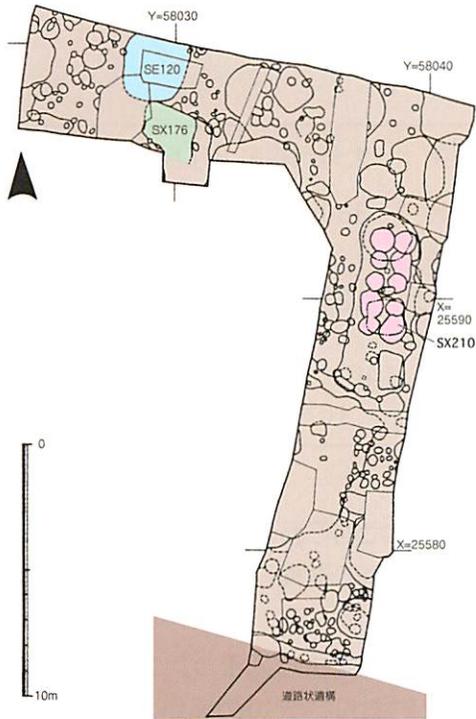
#### 主要遺物

SX210を中心として、多量の貿易陶磁器が出土しており、その産地は中国・朝鮮・ベトナム・タイ・ミャンマーと東アジアから東南アジアにまで及んでいる。とりわけタイ陶器四耳壺はSX210のみでも9個体、朝鮮王朝白磁皿は8個体確認され、華南三彩壺も2個体以上確認されている。国産の陶磁器等では備前焼のほか信楽焼の壺、水差し、畿内産と推定される瓦質風炉など茶道具が多数出土していることが注目される。

#### 特記事項

本調査地点はSX210を中心に、隣接する第1・2次調査地点と比べても遺物の量および質において大きな隔たりが認められ、その後の調査事例が増大したにもかかわらず、依然として各調査地点の中で群を抜いた豊富さである。SX210の主軸方向をみると調査区南側に存在する東西道路の方向とはややずれが認められ、調査地点東側に比定される南北道路 (もしくは第1次・2次調査で未発見の南北道路) の方向とより合致していることが注意される。東西道路に面した通常の町屋とは異なる1つの屋敷地内である可能性が高く、出土遺物・遺構からは、かなり有力な商工業者の屋敷地ではないかと推測される。

(高畠 豊)



遺構配置図(S=1/300)



井戸跡・井筒 (SE210)



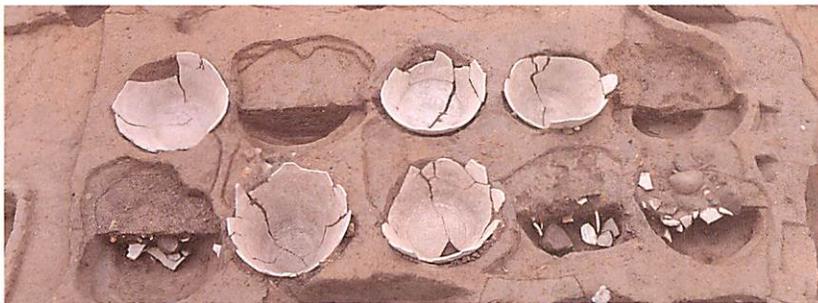
出土遺物 (SE210)



石積土坑 (SX176)



華南三彩盤 (SX176)



大墓埋設遺構 (SX210)



穽内遺物出土状況 (SX210)



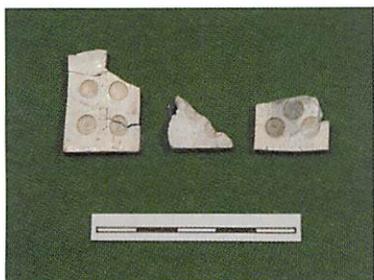
朝鮮王朝白磁皿



華南三彩壺



タイ四耳壺



ドミノ様骨角製品



中国産磁器



ミャンマー三耳壺

▼ SX210出土主要遺物

## 第4次調査 (中世大友府内町跡)

調査主体	大分市教育委員会	調査場所	大分市錦町3丁目／上市町
調査期間	1998.12～1999.03	調査面積	330m <sup>2</sup>
遺跡の時期	15世紀後葉～16世紀末葉	検出標高	4.3m
主要遺構	15世紀後葉…井戸 (SE175,195) 不明土坑 (SX196) 土坑 (SK173) 15世紀末葉～16世紀前葉…土坑 (SK101) 16世紀中葉…土坑 (SK181) 溝跡 (SD140) Pit (S061) 16世紀後葉～16世紀末葉…土坑 (SK160) 16世紀末葉…土坑 (SK064)		

### 遺跡の概要

中世大友府内町跡第4次調査の調査地点は、「上市町」推定地である。調査の結果、大きく16世紀末葉・16世紀後葉～末葉・15世紀後葉～16世紀中葉の3面の遺構面が確認された。これらの遺構面の中には火災の痕跡も認められるものもあり注目される。

16世紀末葉の遺構面からは、火災処理と考えられる焼けた壁土が詰まった土坑や、焼けた石が詰まった土坑(SK064)、集石遺構、井戸跡等が検出されており、火災の痕跡が認められる。特に、SK064については、焼けた石が大量に詰まった大形の土坑で、東南アジア産の陶磁器や、備前の茶器等注目される遺物が出土している。

16世紀後葉～末葉の遺構面からは、焼土の入った土による整地層が調査区の北東部を中心に確認されており、第1面同様火災の痕跡が認められる遺構面である。この遺構面から検出された遺構には、井戸跡、溝跡、土坑(SK160)等があり、SK160については、その形態及び周辺遺構から出土する遺物等から最終的に廃棄施設とされたこの土坑が当初、鑄造に関連した遺構であったことが推定される。

15世紀後葉～16世紀中葉の遺構については、調査区東側に面する南北道路から離れた西側に整地層を伴わない地山に直接掘り込まれるものもある。検出された遺構については、土坑、溝、井戸などがある。特に、京都系土師器の導入期に関わる遺物が出土するSK101、SK181、SX061、15世紀後葉に遡る可能性を有する遺物を出土するSE175、SE195等がある。

道路状遺構 (SF190) については、上市町と工座町を画する東西道路 (名ヶ小路町) が調査区の北辺部で検出されており、サブトレンチによる断面調査等から掘り込み地行を伴う道路で、複数時期の路面を有することが確認された。特にその最終面を切る火災処理土坑の存在は、中世府内町の終焉に関する良好な資料であると考えられる。

### 出土遺物

SK064…京都系土師器皿、糸切り土師器皿、埴塙 (取瓶)、唐津系陶器碗、瀬戸・美濃窯産皿・天目碗、備前焼 (茶器を含む)、信楽焼壺、中国産染付碗・皿・白磁皿、タイ産焼締陶器四耳壺、ベトナム産焼締長胴瓶、ベトナム産白磁印花文碗等

SK160…糸切り土師器皿、京都系土師器、瀬戸・美濃窯産皿・天目碗、中国産染付皿・碗、備前焼播鉢、赤間碗

### 特記事項

今回の調査区である「上市町」及び「工座町」周辺を、中世府内町のルーツとなる平安時代末に河原市が開かれた市河とする説があるが、調査の結果、当該期の遺構は確認されなかった。しかしながら、各遺構には少量ながらこの時期の遺物が混入しており、今後の周辺地区の調査の課題となった。

(河野 史郎)



タイ四耳壺 (SK064)



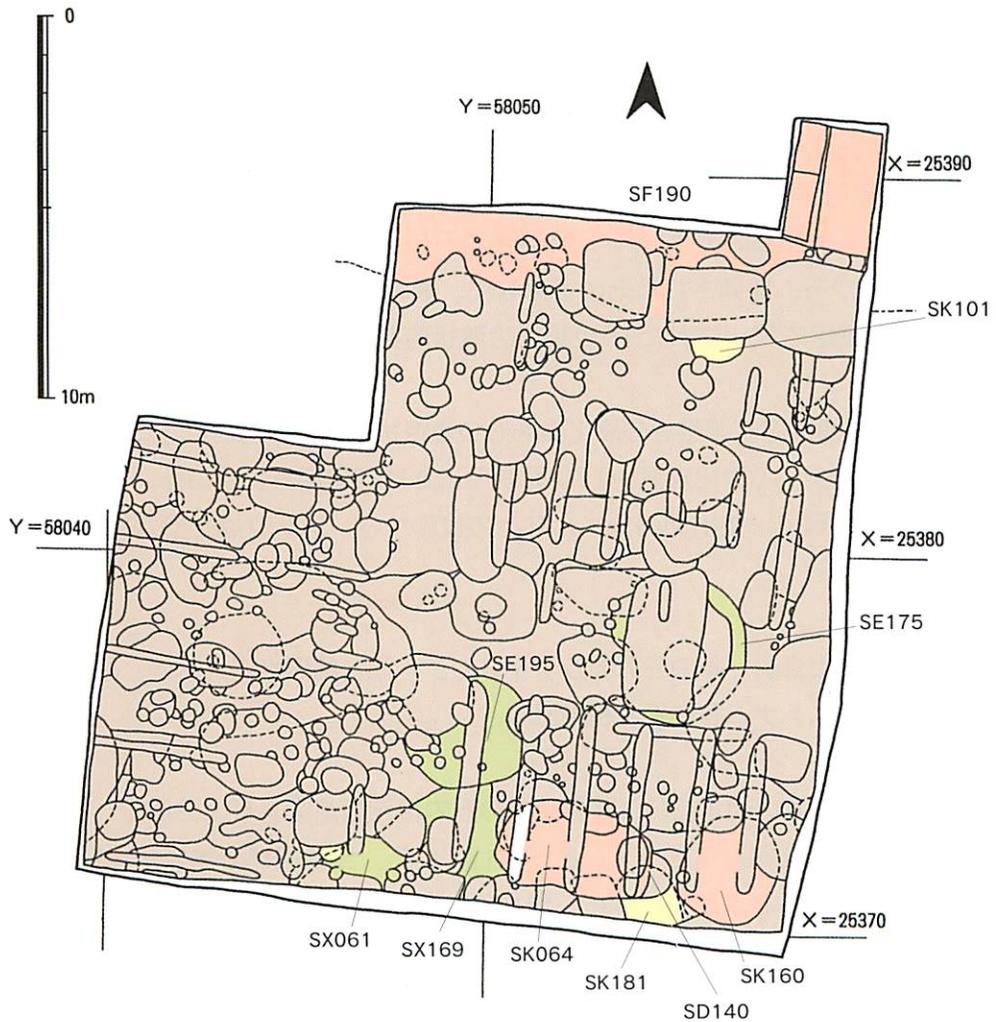
京都系土師器碗 (SK160)



遺構全景 (SK160)



道路状遺構 (SF190) 断面土層



遺構配置図 (S=1/200)

## 第5次調査 (中世大友府内町跡)

調査主体	大分県教育委員会	調査場所	大分市上野六坊北町／林小路町・大友御蔵場
調査期間	1999.09～2001.07	調査面積	4,300m <sup>2</sup>
遺跡の時期	15世紀後葉～16世紀後葉	検出標高	3.8m
主要遺構	16世紀中葉～後葉…土壘状遺構 溝状遺構 16世紀後葉…井戸		

### 遺跡の概要

本調査区は大友氏館跡の西南側に位置し、調査区のほぼ中央に位置する里道を挟んで西側をA地区、東側をB地区と呼称している。この地点は戦国時代の府内の様子を描いたとされる「府内古図」によると、林小路町および大友御蔵場の一画に相当する。本調査区でメインとなる16世紀後葉では、A地区の南側およびB地区南西隅付近にて、土壘状遺構(以下土壘と呼ぶ)とそれに付属する溝状遺構が調査区を斜めに横断するように検出された。土壘は基底面1.2～2.0m前後、高さ10～50cm前後を測り、砂質土と粘質土を交互に数cm単位で帯状に積み上げる版築状の工法によって形成され、総延長は東西約120mにおよぶ。土壘の南北には幅20～50cm、深さ20～80cm前後を測る溝が付属しており、土壘上に築かれた構築物の雨落ち溝としての機能を有していたことが想定される。さらにA地区南西隅付近では南側付属溝が南方向に屈曲していることが確認され、当該部分が土壘の北西隅部と思われる。土壘の北側には多数の柱穴群や井戸、廃棄土坑などが集中し、これらの遺構のあり方は町屋的な状況を示すと考えられる。また、町屋の区画遺構の可能性のある南北方向の石列や溝状遺構も構築されている。

土壘の下位にはA地区で16世紀前葉、B地区で15世紀後葉および16世紀前葉の溝状遺構が検出されている。16世紀前葉の溝状遺構は意図的に埋められている部位が認められ、その埋土中から人骨頭骨が出土した。人骨頭骨の出土はA・B両地区で5体を数え、いずれも下顎骨が付属しない頭蓋骨の出土であることから、埋葬されたものではなく、骨の状態で溝の埋土中に廃棄されたものと考えられる。また、B地区で検出された15世紀代の溝状遺構はA地区とB地区の境界付近で北側に屈曲している。

このほか、A地区西端部で礫敷きの硬化面をもつ道路状遺構が検出されている。この道路は現状で6m以上の幅員をもち、16世紀末葉～17世紀前葉にかけて使用されている。この道路は土壘と重複が見られることや、層位・検出面のレベルなどの検討から、現状では土壘が廃絶した後に構築されたものと考えられる。

### 主要遺物

金箔貼りの京都系土師器、華南三彩トラディスカント壺・鳥形水注・水滴、絵高麗獅子形燭台、タイ産陶器四耳壺、ベトナム産白磁、長胴瓶など

### 特記事項

16世紀後葉に比定される土壘は、「戦国時代の府内復元想定図」(『大分市史 中巻 付図Ⅱ』)によると、大友御蔵場の北側推定区ラインと一致している。当該遺構の規模が比較的大型であることや総延長が120m以上におよぶことから、現状ではこの遺構が大友御蔵場の北側築地堀などの区画遺構である可能性が高いと考えられる。また、土壘状遺構の西北に位置する町屋関連の遺構群は林小路町の一画に比定されよう。

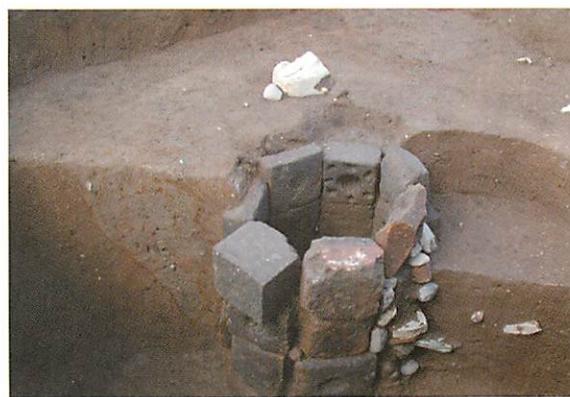
(吉田 寛・槇島 隆二)



中世大友府内町跡第5次調査全景（空中写真 西から）



御蔵場土壘 土層断面



五輪塔で組まれた井戸



溝に捨てられた頭蓋骨



金箔土師器片（3cm×6cm）出土状況



銅銭埋納遺構

## 第6次調査（中世大友府内町跡）

調査主体	大分市教育委員会	調査場所	大分市大字大分字上井東 <small>かみいひがし</small> ／寺小路町 <small>てらこうじまち</small>
調査期間	2000.01～2000.04	調査面積	1,600m <sup>2</sup>
遺跡の時期	8・9世紀 14世紀～ 16世紀・18世紀	検出標高	5.1m
主要遺構	8世紀…井戸跡（SE297）	14世紀…溝状遺構（SD043）	

### 遺跡の概要

今次の調査は、葬祭場建設に伴う事前調査として実施した。調査対象地域は徳治元（1306）年に建立された推定万寿寺跡の南面地域に位置している。

調査の結果、奈良時代から中世末期におよぶ遺構・遺物が確認され、5段階の遺構変遷を認めることができる。以下には各段階の概要について略述する。

#### 第Ⅰ期 8世紀から9世紀

井戸跡1基、土壇1基を確認した。井戸跡（SE297）は上部に簡便な石組をおこない、水溜部に曲物と思われる筒状の木製品を埋置する構造をもつ。井戸跡、土壇とも8世紀後葉から末葉に比定されるものであるが、出土遺物の中には、中世遺構埋土に混在する状態で、越州窯青磁碗底部破片、9世紀に位置づけられる土師器坏などが一定量出土しており、近隣に当該期の遺構が存在する可能性は高い。これまでの中世大友城下町跡の調査においてもこれらの時期の遺物の出土は知られていたが、遺構は確認されておらず、今回の発見が初例となった。

#### 第Ⅱ期 14世紀

一辺約30mの方形区画が形成される。この区画の北辺に位置する溝状遺構（SD043）は現存深度2m、幅3mの規模を有し、断面V字形を呈する巨大なものである。このSD043は基盤土層が砂質土であることもあり、その恒常的維持は困難であったと考えられ、埋没するたびに掘り返されている。そのうち溝様態としての改修はおこなわれないようになり、連続した長土坑を配置する形に変化する。

この段階の特徴的なものとして、区画内南東部分の大規模な掘り込み跡がある。これは、同一場所を数十回掘り返し、埋め戻すというもので、その具体的な性格については現状では不明であるが、ランダムな掘り痕は、土取りを目的とした掘り込み跡である可能性が高い。この段階の出土遺物が最も多く、土師器坏・小皿・土師器鍋・瓦片（鬼瓦含む）・古瀬戸（おろし皿・瓶）・輸入陶磁器（青白磁梅瓶・龍泉窯青磁碗Ⅰ-5類・枢府系白磁碗）・滑石加工品・畿内産土師器・常滑焼甕など多彩な内容を有している。

#### 第Ⅲ期 15世紀から16世紀中葉

基本的な地割プランは前代のものを踏襲する。調査区内には、東西幅約20mの区画が設けられ、これを南北方向に区切る小区画が設けられる。この区画も東西方向の区画プランについては、第Ⅱ期で認められたものを踏襲する。第Ⅱ期に機能していたSD043は完全に埋まっている。

#### 第Ⅳ期 16世紀後葉から末葉

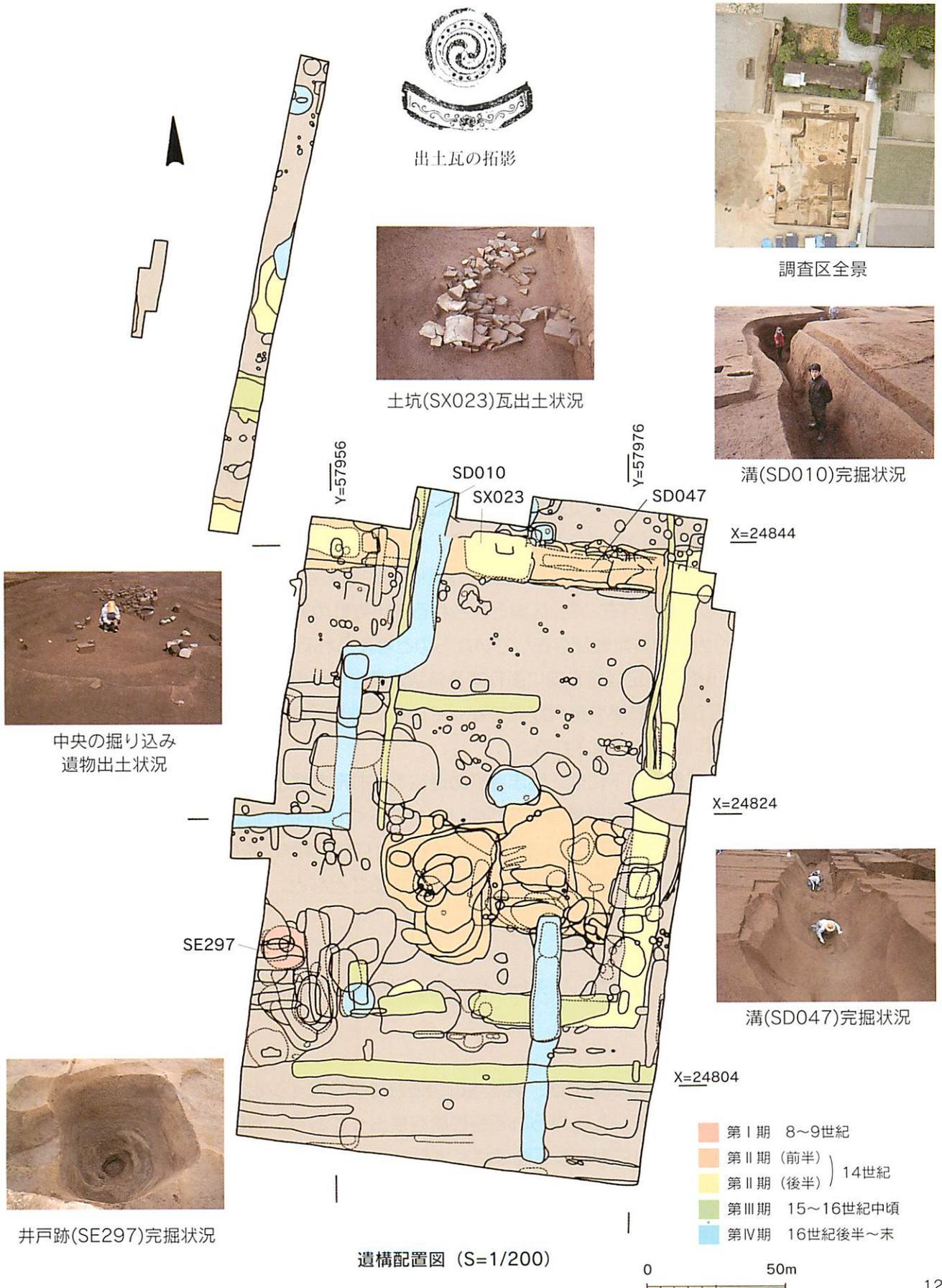
遺構埋土に京都系土師器皿を内包するようになり、これまでの区画を大きく改変する段階である。深さ2m近くあるような深い区画溝を掘削する。溝の配置から想定すると幅約12mの空間が、北上するに従い段階的に幅を狭めていくかのような状況を看取することができる。この段階に帰属する遺構埋土はほぼ共通した特徴をもち、暗茶褐色土を基調として、小礫を多数含むものにより構成される。埋土観察から、最終段階には一気に埋め戻された状況が想定される。また、溝形状は薬研堀状を呈し、その機能に高い防御性を感じさせる。出土遺物には、京都系土師器皿・中国青釉陶器片・ベトナム陶器蓋・朝鮮陶磁・備前焼薬研・備前焼播鉢・不明青銅製品・朱書き文字入り天目茶碗（「大□□」と判読）・茶入れ・石臼などがある。

#### 第Ⅴ期 18世紀中葉から後葉以降

第Ⅳ期に連続すると考えられる遺構・遺物は認められず基本的に江戸中期まで空白期間が続く。江戸中期以降は水田化が進んだとみられ、数枚の水田層から当該期の遺物の出土が認められる。

以上が今回の調査における主要な成果であるが、各期の時間変遷の中で注目されるのは、戦国末に認められる都市プランの大枠が、少なくとも今回の調査対象地点で見る限り、遅くとも14世紀段階には成立していた可能性を指摘できた点をあげることができよう。

(坪根 伸也)



## 第7次調査（中世大友府内町跡）

調査主体	大分県教育委員会	調査場所	大分市元町 <sup>もとまち</sup> ／清忠寺町 <sup>せいちゆうじまち</sup> ・御所小路町 <sup>ごしょのこうじまち</sup>
調査期間	2000.04～2001.08	調査面積	2,000m <sup>2</sup>
遺跡の時期	8～9世紀、14世紀～17世紀	検出標高	3.8～5.0m
主要遺構	8世紀後葉…大型掘立柱建物群 15世紀…溝状遺構、道路状遺構 16世紀…道路跡、町屋の区画溝、掘立柱建物跡、井戸、廃棄土坑		

### 遺跡の概要

本調査区は大友氏館跡の東側に位置して、東西に長く、大分川の旧河道に達する。調査区は東側からA～G地区の7ヶ所に分かれている。A・B地区は旧河道となり、遺跡は存在しなかった。「府内古図」によると、C・D・E地区は清忠寺町、F・G地区は御所小路町の一面に相当する。

16世紀代では、清忠寺町の道路が「府内古図」で推定された位置から検出された。幅員は約6mで、一旦掘り窪めた後に砂を敷き、その上に貝殻を混ぜた三和土風の路面を形成する。そのような路面が10単位以上観察される。道路面は数年から10年ほどで更新されて、嵩上げが為されている。その道路に面した東側では、道路面上昇に対応して整地がなされた生活面を5面確認している。そのうち3面には火災の痕跡を示す焼土層が認められた。各生活面上には礎石や多数の柱穴群・廃棄土坑・炉・土取り穴などが集中し、これらの遺構のあり方は町屋的な状況を示すと考えられる。また、町屋の区画遺構の可能性のある東西方向の石列も検出されている。一方道路の西側に面した部分は大規模な整地が行われ、柱穴や火災処理土坑の他に便所と考えられる方形の石組み土坑がある。整地層の範囲が建物の建っていた部分と推定される。その奥には井戸が集中し、中には井筒の下部に桶を据えた後、凝灰岩の加工石を6枚ずつ回した大型の井戸もある。その奥に廃棄土坑が集中し、さらに1基の桶を利用した墓が存在した。区画とみられる清忠寺町の道路と平行する溝を発見しており、その規模からかなり大規模な屋敷が存在していたものと考えられる。

E・F地区では御所小路の推定道路方向に直行する溝状遺構が4条20mおきに検出され、区画内には、廃棄土坑・井戸や掘立柱建物跡や柵列が見つまっている。地割りの規模と御所小路に面する点などから、武家屋敷群の可能性も指摘される。

以上、16世紀代の遺構群の下には、清忠寺町の道路を挟む形で検出された2条の大型のV字溝以外に15世紀代の遺構はなく、町屋遺構は存在しない。おそらく15世紀代には清忠寺町は町屋ではなかった可能性が高い。さらにその下から8世紀代の大型掘立柱建物群が柱筋を揃えて発見された。円面硯の出土、床面積が50平方mを越える建物が2棟存在することなど、官衙的性格を有する遺跡と考えられる。

### 主要遺物

出土遺物は、銅製錠前、かんざし、茶臼、金箔貼り土師器、華南三彩・魚形水滴、円面硯（奈良時代）などがある。

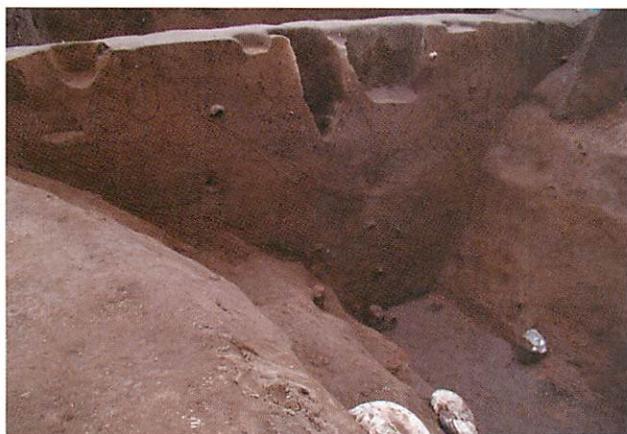
### 特記事項

16世紀代に比定される道路状遺構は、清忠寺町の道路の推定ラインと一致している。その両側では道路に面して建物が建っていたと見られる整地層を検出しており、両側町を形成していたものと見られる。いっぽう御所小路に面する区画は武家屋敷地の可能性がある。また15世紀段階にはこの付近には町屋などの屋敷地は存在しておらず、堀で区画された大規模な施設の存在がう窺われる。

（田中 裕介）



清忠寺町 道路土層断面状況 (16世紀)



大溝 (15世紀)



井戸跡・井筒検出状況



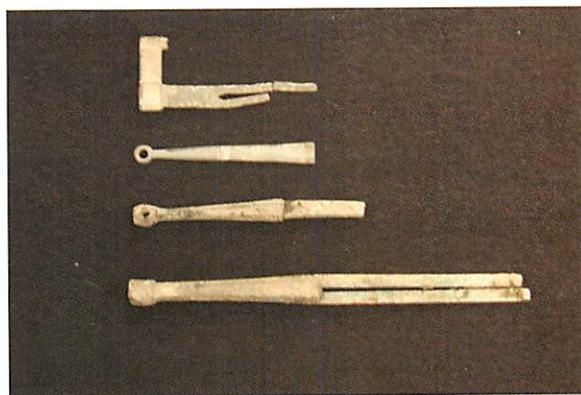
F地区 屋敷墓



C・D・E調査区 全景



F地区出土 魚形水滴



第5・7次調査出土 銅製錠前

## 第8次調査 (中世大友府内町跡)

調査主体	大分県教育委員会	調査場所	大分市六坊北町 <small>ろくほうきたまち</small> ／大友御蔵場 <small>おおともおくらば</small>
調査期間	2000.04～2001.03	調査面積	2,000m <sup>2</sup>
遺跡の時期	14世紀～16世紀末葉	検出標高	4.1m
主要遺構	14世紀…大形土坑群 15世紀前葉…大形溝状遺構 15世紀前葉～後葉…井戸跡 16世紀後葉…大形溝状遺構、土壘状遺構、不定形土坑		

### 遺跡の概要

調査区は、大友氏館の南外郭線の外にあたる。調査の結果、大形の溝状遺構や土壘状遺構、大形の土坑群や、火災処理土坑群、井戸跡やピット群などを検出した。

溝状遺構は、SD01が調査区内を東西に、SD03が南北方向に延びる。SD01は幅3～4m、深さ1.5m、SD03は幅4～5m、深さ1.9mを測る。いずれも「薬研堀（やげんぼり）」状の形態を呈し、「堀」の可能性が高い。SD01は館の外郭ラインとは並行せず、やや軸線を北に振り、SD03は、ラインにほぼ直行する。出土した遺物から、SD01は15世紀前葉、SD03は16世紀後葉の遺構と考える。また、SD01の南ではSD01にほぼ並行するSD07Aや、外郭ラインとほぼ並行するSD06やSD07Bを検出した。出土した遺物やSD01との並行関係から15世紀前葉以降の遺構と考えるが、糸切り土師器や京都系土師器は検出しなかった。

土壘状遺構は遺跡東端に位置し、南北方面に延びている。地山層を成形して基盤とし、斜めに積み土しながら法面を形成している。土層断面には2～3回の改修の跡が認められ、現状で確認できる規模は、幅4.5m、高さ0.6mを測る。積土から検出した遺物により最後の改修はSD03とほぼ同時期と考える。

不定形土坑群は土壘状遺構の西側に位置している。出土した遺物から天正14～15（1586～1587）年の島津軍による府内侵攻時の火災処理土坑の可能性が強い。大形土坑群は調査区内西よりやや北側に位置しており、出土した小皿や坏からほぼ14世紀の遺構と考える。

井戸跡は調査区西側南より2基検出した。いずれも掘り方は3.5mを超え、深さは検出面から約2.5mを測る。円形の井筒が使用されており、SE02には井筒の上部に方形の枠が残存する。出土した遺物は少なく時期の比定は難しいが、いずれも15世紀前葉以降の遺構と考える。

### 主要遺物

14・15世紀代の土師器坏、火災処理土坑やSD03出土の京都系土師器、16世紀後葉の整地層から出土したコンタ、SD03出土の地蔵菩薩像、SD02出土の礎石などが出土している。

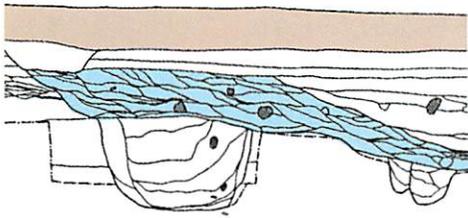
### 特記事項

今回の調査で検出した大形の堀状の遺構や土壘状の遺構は、大友氏館に隣接することから、大友氏館と何らかの関係があると考えられ、今後大友氏館の成立や規模を考えていくうえで重要なポイントとなってくるであろう。また、本調査区から出土した「コンタ」は中世大友府内町跡では初めてであり、当時の府内の様子を知るうえで重要な遺物であると言えよう。

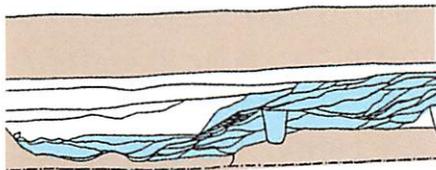
(甲斐 寿義)



土壘状遺構



土壘状遺構土層断面 (南壁)



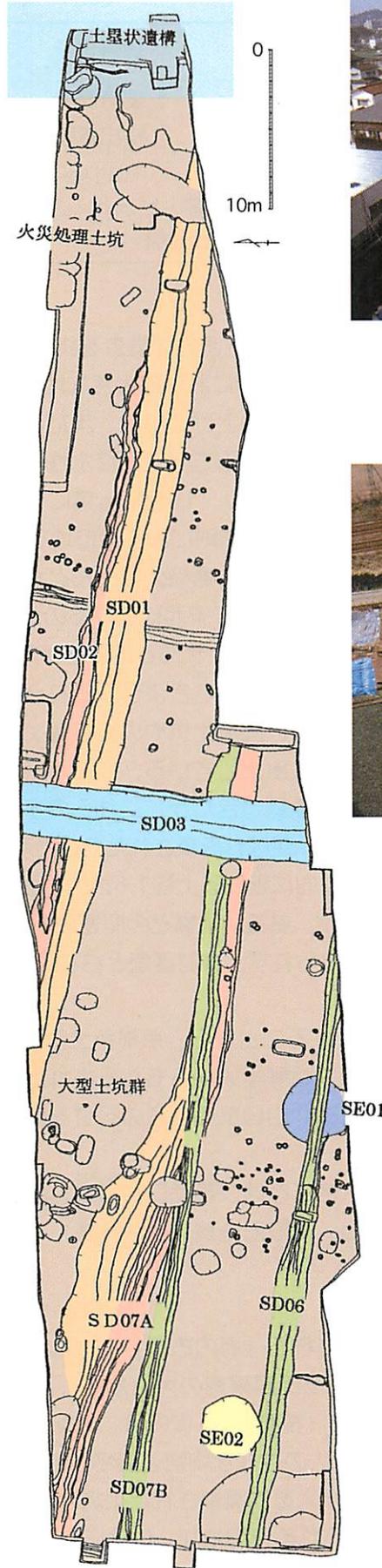
土壘状遺構土層断面 (北壁)



出土したコンタ



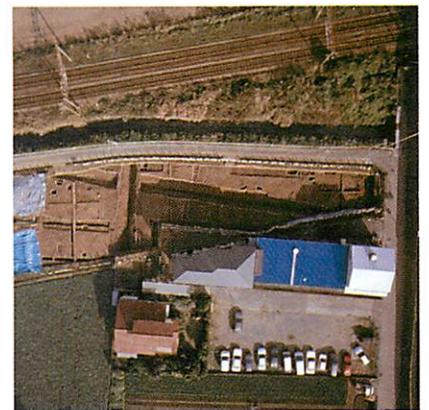
出土した地蔵菩薩像



遺構配置図 (S=1/400)



遺跡全景 (東より望む)



遺跡東側 (上空より)



遺跡西側 (上空より)

## 第9次調査 (中世大友府内町跡)

調査主体	大分県教育委員会	調査場所	大分市錦町3丁目／御所小路町・桜町・御内町
調査期間	2000.06～	調査面積	1,250m <sup>2</sup>
遺跡の時期	16世紀中葉～後葉	検出標高	2.8～4.3m
主要遺構	15世紀前葉…土坑・井戸 16世紀中葉…土坑・ピット・落ち込み状遺構 16世紀後葉…土坑・井戸跡・ピット・土器溜まり状遺構・溝状遺構・ 整地層・敷石遺構		

### 遺跡の概要

調査区をⅠ～Ⅳ区に分け、現在、Ⅲ区までの調査を終えている。

まず、16世紀中葉には、Ⅱ・Ⅲ区東側において大きな地形の落ち込みがみられ、この低地部分を短期間で整地することにより平坦地に仕上げていた。また、Ⅱ・Ⅲ区において土取りによるものと考えられる不定形の落ち込み状遺構が確認でき、底に水性堆積層である青灰色シルト層が堆積しているため、掘削後、一時、滞水状態があり、16世紀後葉に平坦地に造成した整地層が確認できた。

本格的な遺構の形成は、このように整地による平坦地を確保して以降、16世紀後葉に至ってから一気に行われたようであり、本調査区の遺構のほとんどがこの時期に属する。Ⅲ区東端では柵列と考えられるピット群が4m強の幅で3列、東西に延びるのが確認できた。掘立柱建物はほとんど確認できず、礎石状の自然石が1基据えられた状況で確認できたため、柵列で区画された空間に奥行の長い礎石建物が建てられていたものと推測できよう。これらの建物の背後には、倉庫と考えられる方形竪穴遺構や井戸が営まれており、廃棄土坑や火災処理土坑が多く見られ、火を受けた川原石をはじめ、土壁片・土器片等が大量に出土している。Ⅱ・Ⅲ区では京都系土師器が大量に廃棄された土坑・整地層等が4箇所において確認できたが、これらの多くは、下部に落ち込みや大型土坑が存在し、軟弱地盤を克服するために、運ばれ廃棄されたものと考えられる。

Ⅱ区南端においては、東西方向に延びる上幅1.5mの断面V字形の溝が確認でき、この位置が「御所小路」推定地に近接するため、道路状遺構との関連において側溝の可能性が考えられる。しかし、南を限る位置に同様の施設は見られず、検討課題とされよう。

### 主要遺物

遺構が16世紀後葉を主体とすることから、京都系土師器がきわめて大量に出土しており、このほかにも中国南部・東南アジア・朝鮮半島からもたらされた輸入陶磁器が多く出土している。国内外の多様な器種の中には、天目碗や山口県赤間産の石材を使用した茶臼など、茶の湯の流行を物語る遺物も少なくない。

また、本調査区で特筆すべきことは、鞆羽口や坩堝、さらには大量の金属滓など、鍛冶職人の存在を物語る遺物や、繭形分銅・太鼓形分銅や権（銅錘）など商人の存在を物語る遺物が見られることである。

### 特記事項

中世末の府内町を表したとされる「府内古図」によれば、本調査区は大友氏館東側の町屋部分にあたる。「府内古図」では、大友氏館東側の大路から「御所小路」が西に延び、この両側に広がる「御所小路町」や大路に面した「桜町」・「御内町」の記載が見られるが、本調査区はこれらの町屋部分にあたる。幸い、職人・商人の存在を物語る遺物が出土し、町屋を想定できる遺構群も把握できた。なかでも、京都系土師器が大量に廃棄された土坑等は、千枚単位の枚数が確認でき、儀式・宴会に使用されたであろうと考えられる使用地が、付近に存在することは推測するに難くない。

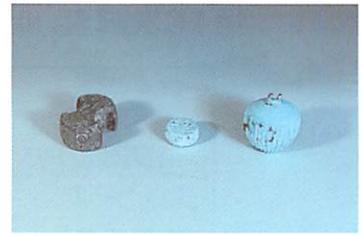
(原田 昭一)



III区全景（東から）



III区出土鑊羽口・坩堝



III区出土分銅・権(銅錘)



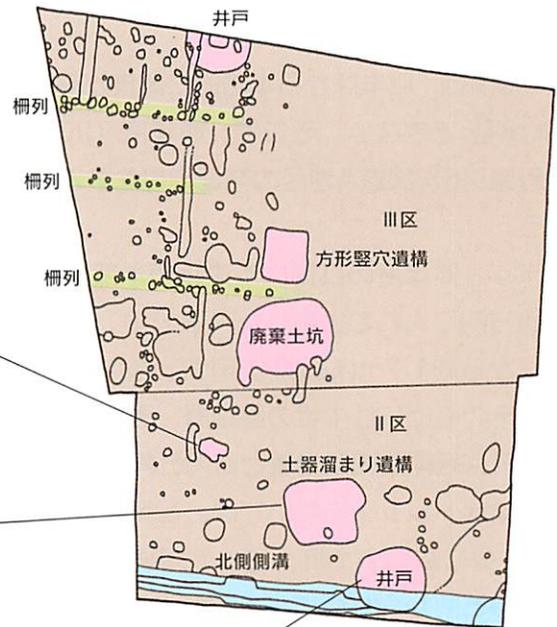
火災処理土坑（II区）



土器溜まり状遺構（II区）



井戸跡（II区）



遺構配置図 (S=1/400)



II区全景（西から）



I区全景（南から）

## 第10次調査 (中世大友府内町跡)

調査主体	大分県教育委員会	調査場所	大分市上野六坊北町／上町・祐向寺
調査期間	2001.07～	調査面積	2,500m <sup>2</sup>
遺跡の時期	15世紀後葉～16世紀後葉	検出標高	—
主要遺構	16世紀代…溝状遺構 柱穴 土坑(墓塚?) 井戸跡		

### 遺跡の概要 (2001年7月現在)

本遺跡は7月半ばから本格的に調査が実施される予定であり、現段階では遺跡の性格についての詳細は明記できない。そこで、昨年度(2000年10月)に実施した試掘結果及び、東側に隣接する府内町跡第5次調査A地区の発掘成果を参考にして、今後得られるであろう成果について検証したいと思う。

まず、昨年度の試掘は本遺跡西半部で約3m×42m、北半部で約3m×4mのトレンチをそれぞれ東西方向に入れて実施した(第1図)。北半部のトレンチの所見によれば、客土の堆積が厚く、現地表面から約1.7mほど掘り下げた地点で16世紀代の遺構面が検出できることが確認されている。そしてその直上には中世の整地層、更にその上層には中世のものと思われる水田層が確認されており、府内町存続期間の整地層と府内町廃絶後の水田層が面的に確認できる可能性がある(第2図)

西半部トレンチにおいては、石列をもつ円形の土坑が東隅で1基、西側隅では方形を呈する土坑が1基、更に数基の土坑、ピットが検出された(第3図)。東隅で検出された円形土坑は、その規模と環状の石列から井戸になる可能性があり、西側隅の方形土坑は骨片が出土していることから墓塚となる可能性がある。特に方形土坑については、この遺跡の北側に祐向寺の存在が推定されていることから、当寺院との関連が推察され、仮にそうであれば今後の本調査で更に墓塚の検出、或いは寺域の確定が望めるかもしれない。

次に、遺構内東半部は試掘を実施していないが、東側に隣接する府内町跡第5次調査A地区の発掘成果から、連続する遺構の検出が想定される。府内町跡第5次調査A地区の西端、つまり本遺跡との隣接部では16世紀前葉の溝状遺構が北東部から本遺跡に向かって伸びており、その延長が検出される可能性がある。この溝状遺構の性格は、府内町跡第5次調査A地区の所見では不明であるが、その規模の大きさから何らかの区画を呈するものと思われる。前述の祐向寺の存在と、後に触れるが祐向寺の北側に道が絵図で描かれていることなどから、それらに関係する遺構である可能性が示唆される。また、府内町跡第5次A地区の西端北側では南北に伸びる道路と思われる遺構が検出されている。この道路状遺構の幅員は不明だが、これに伴う側溝等が本遺跡でも検出される可能性がある。

### 主要遺物

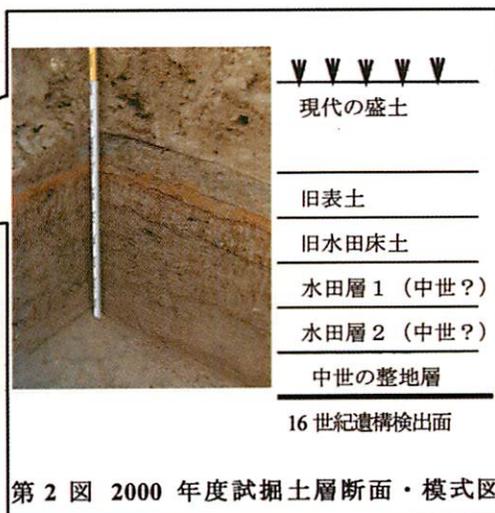
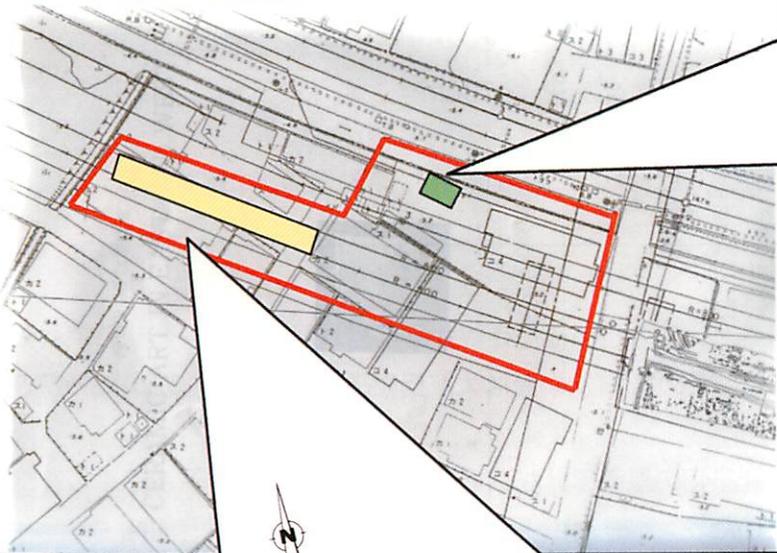
昨年度試掘時に、石塔が1点出土しており、前述の祐向寺との関連で興味深いものである(第4図)。その他土師器片、陶磁器類等が若干出土している。

### 特記事項

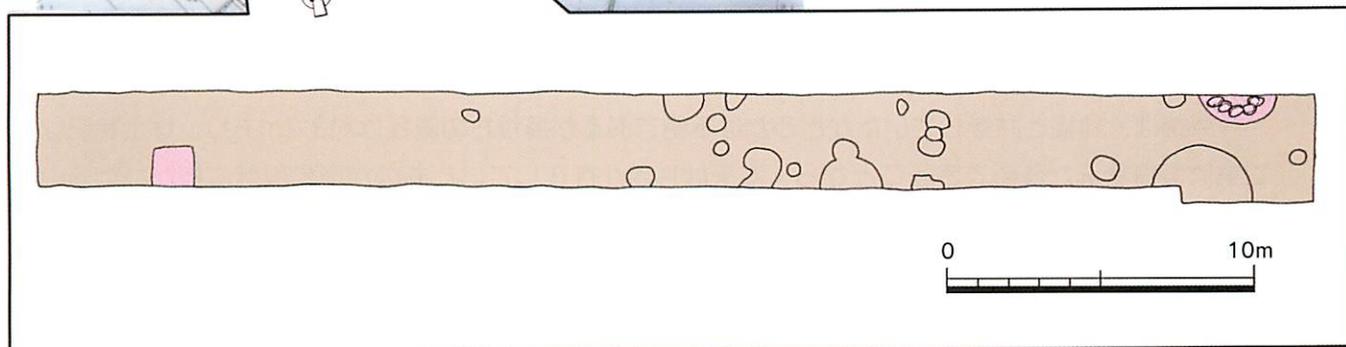
本遺跡の立地する場所は、第5図に示す府内古図(元府内之図)の○で囲った部分に該当すると思われる。特に祐向寺とダイウス堂の間を東西に延びる道及び、上原館へ通ずる西側の大路が本遺跡で検出される可能性がある。

(後藤 晃一)

第1図 発掘調査区位置図



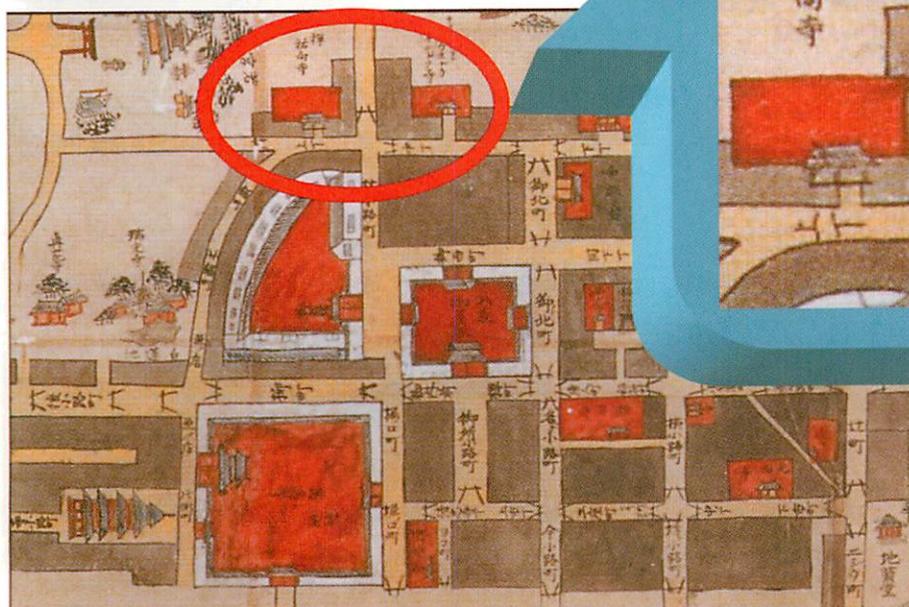
第2図 2000年度試掘土層断面・模式図



第3図 試掘時遺構配置図(S=1/125)



第4図 石塔検出状況



第5図 府内古図C類 (大分市歴史資料館蔵)

## 第11次調査 (中世大友府内町跡)

調査主体	大分県教育委員会	調査場所	大分市錦町3丁目／称名寺
調査期間	2000.05～	調査面積	700m <sup>2</sup>
遺跡の時期	16世紀	検出標高	4.1～4.3m
主要遺構	16世紀後葉…土坑 井戸跡 ピット群 道路状遺構 溝状遺構 土壘状遺構		

### 遺跡の概要

「府内古図」によれば、府内は万寿寺・大智寺といった寺院から若宮八幡宮などを有する宗教都市としての性格を持っていた。その中で、この第11次調査は大友氏館の北東に位置していた称名寺と推定される場所である。

また、調査区は病院跡地であるため建築物の基礎部分が遺構検出面の数十センチ下まで達しており、検出面積の約40%に攪乱を受けていた。

遺構検出面（2001年6月現在）からは、井戸跡・土坑・ピット群・道路状遺構・溝状遺構・土壘状遺構がみられた。

井戸跡は、建物と共存していたかどうかは不明であるが掘り方の直径は約3.2mあり、埋土状況は二重に堆積状況が確認できることから、本来は井筒が存在していたものが廃棄段階に抜かれたものと考えられる。

道路状遺構は、調査区の西側で南北方向に延びており砂層・マンガン層・灰色のシルト層が交互に堆積している層を確認している。また、遺構の上面は後世の水田層による削平を受けている。溝状遺構は道路状遺構の東側に沿う形で、南北方向へと延びている。溝幅は4.5～4.8m、深さは約2m、長さは約19mあり、調査区外へと続いている。土壘状遺構は、溝状遺構の東側に沿う形で南北方向に延びており、遺構の上面は後世に削平されており、現在上面より約40cmを確認している。遺構の幅は検出面上では約1.5mあり、質感の異なる土を左右から交互に堆積させていったことがわかる。

この3つの遺構は調査区西側より道路状遺構・溝状遺構・土壘状遺構の順で南北方向に並行して走っており、相互に何らかの関連があると思われる。

また、溝状遺構の底部からは貝類・獣骨・木片・京都系土師器等が出土している。

### 主要遺物

調査区北東壁の土坑より多量の瓦（平瓦・軒丸瓦）が出土している。また、他の土坑やピット群、また溝状遺構の底部からは、貝類・獣骨・木片・京都系土師器等が、井戸跡からは、瓦以外に京都系土師器や銅銭等が出土している。

### 特記事項

遺跡全体が後世の削平を受けており、現段階では称名寺跡であるとの確認には至っていない。また、道路状遺構に関しては第12次調査との関連性を今後とも検証して行く必要があると思われる。

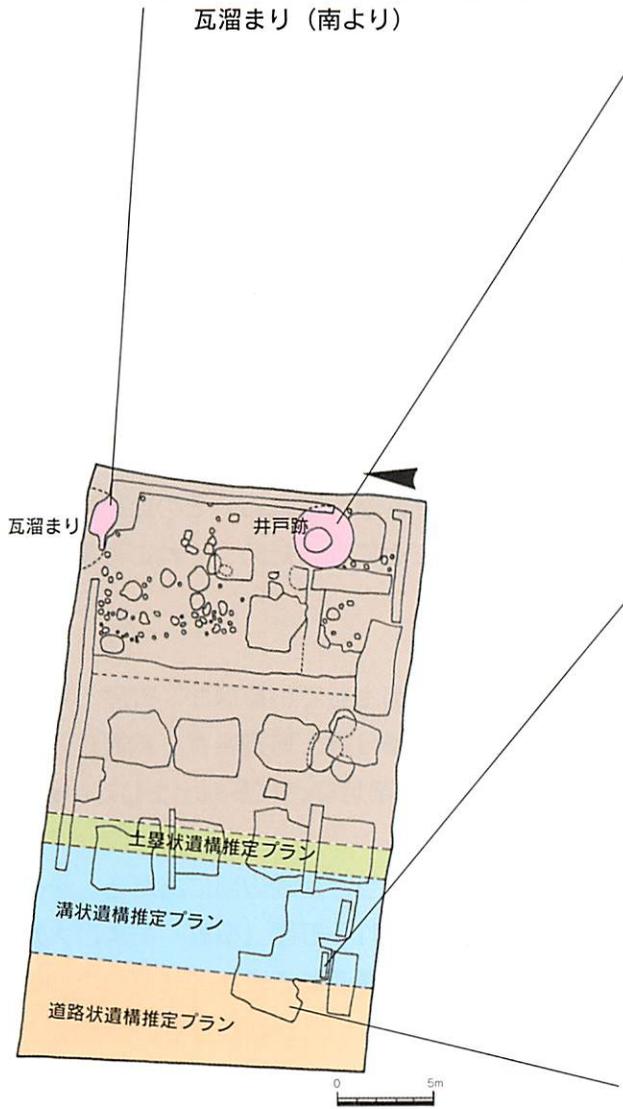
(山本 恭弘)



瓦溜まり (南より)



井戸跡 (東より)



溝状遺構の西側 (北より)



道路状遺構 (北より)

第11次調査区 遺構配置図 (S=1/400)

## 第12次調査（中世大友府内町跡）

調査主体	大分県教育委員会	調査場所	<small>にしきまち さくらまち みょうがこうじまち</small> 大分市錦町三丁目／桜町・名ヶ小路町
調査期間	2001.05～	調査面積	約700m <sup>2</sup>
遺跡の時期	16世紀中葉～16世紀末葉	検出標高	4.2～4.3m
主要遺構	16世紀後葉～16世紀末葉…道路状遺構 礎石建物跡 柵列など		

### 遺跡の概要

当調査区は、府内古図および字図から推定される「桜町」およびそれに面する東西道路「名ヶ小路町」とされる範囲にあたる。現状では調査区北側に東西道路、調査区中央に南北道路が検出され、それらに面した南東部の範囲一帯は焼土が面的に広がり、一部その直下から建物跡と考えられる礎石の並びや柵列状に柱穴が並んでいる様子が見られることから町屋跡と考えられる。焼土面は焼土細粒を含む層に覆われており、火災をうけた後に整地されたものと思われる。その層より掘り込まれた遺構は確認することが困難であったものの、数は少ないが焼土を切って掘り込む柱穴など検出しており、火災にあった後にも何らかの建物が建っていた可能性が高い。道路については、焼土を含む整地層の上面に灰色砂層が薄く覆い硬化面を形成していることからすると、火災後に整地され、復興していたことが窺われる。焼土面の時期については直上で検出した遺物などから16世紀後葉～末葉に比定され、天正14・15年（1586～1587年）の島津軍府内侵攻による可能性が考えられる。道路状遺構は、灰色シルト層、灰色砂質土層および酸化マンガン沈着層の互層が厚さ約80cmで堆積しており、各層に対応して溝あるいは堀を持つことが確認できる。南北道路については、絵図等から推定して、大友氏館に面した南北筋の大通りにあたる可能性が想定される。そのため東西および南北道路に面する西北部の区画は大友氏館の東北隅にあたることになるため、それに付設される堀あるいは土塁などの施設の検出が期待できる。

### 主要遺物

道路辻周辺において、緑色鉛ガラス製の玉類が路面にからんで出土しているほか、町屋と推定される範囲の焼土面直上からは犬形土製品や鉛製および青銅製の各種分銅、青銅製こうがい筭、鉄製短刀、京都系土師器、瀬戸・美濃系天目茶碗、景德鎮窯染付、華南三彩、備前焼などが多数出土している。

### 特記事項

当調査区は名ヶ小路と推定される東西道路および南北道路のちょうど辻周辺部にあたる。そのため道路の変遷を層位ごとに追えるだけでなく、それによって区画される町屋（桜町）および大友氏館についても同時に把握できる可能性を持つ。また、かつて大友関連遺跡で道路の辻部分の調査例はなく、絵図にある木戸が存在していたかどうかや辻祭祀が行われていたかどうかなどを知る上でも重要な地点といえる。

（恒賀 健太郎・幡上 敬一）



ガラス製品各種（路面辻周辺出土）  
上：ソーダガラス製 下：鉛ガラス製珠



鉛ガラス製珠 出土状況



各種分銅（焼土面直上）



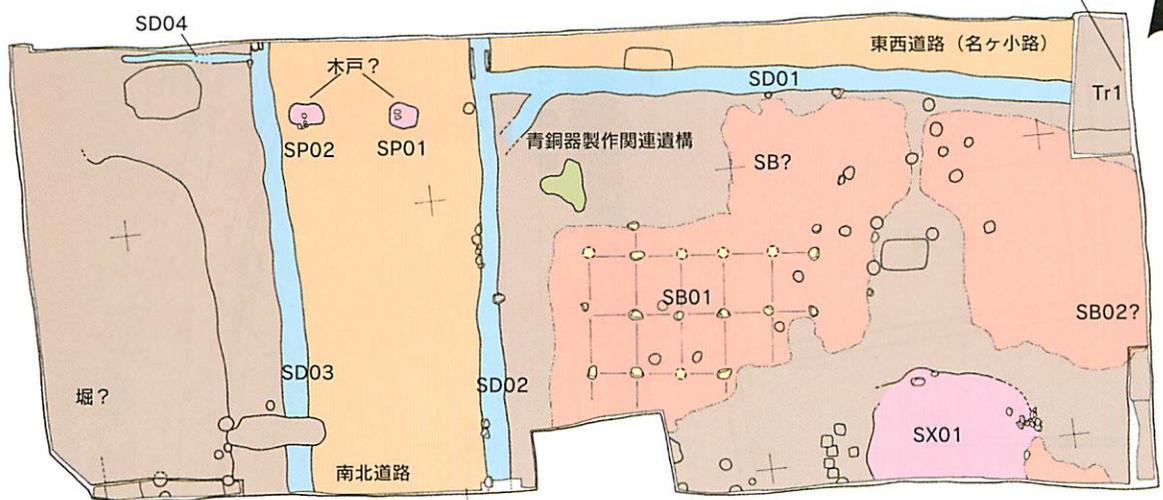
青銅製筈（焼土面直上）



犬形土製品（焼土面直上）



トレンチ1東壁土層断面（道路状遺構）



遺構配置図(S=1/250)



## 第13次調査 (中世大友府内町跡)

調査主体	大分県教育委員会	調査場所	大分市元町／御内町・堀之口町
調査期間	2001.06～	調査面積	750m <sup>2</sup>
遺跡の時期	～16世紀後葉	検出標高	4.8m
主要遺構	16世紀後葉…土坑・井戸跡・整地層		

### 遺跡の概要

第13次調査区は、府内古図によると大友氏館の南東に位置し、御内町・堀之口町にあたる箇所である。ここからは16世紀後葉段階の整地層が確認され、その上は水田層、昭和時代の造成土、さらに現水田層が存在する。そして、この整地層を基盤面として、土坑・井戸跡・ピット群が掘り込まれている。他の調査区で見られる16世紀後葉段階の焼土面は、火災処理土坑としてはあるが、その後の水田耕作等で削平され、面としての広がりを確認することはできない。

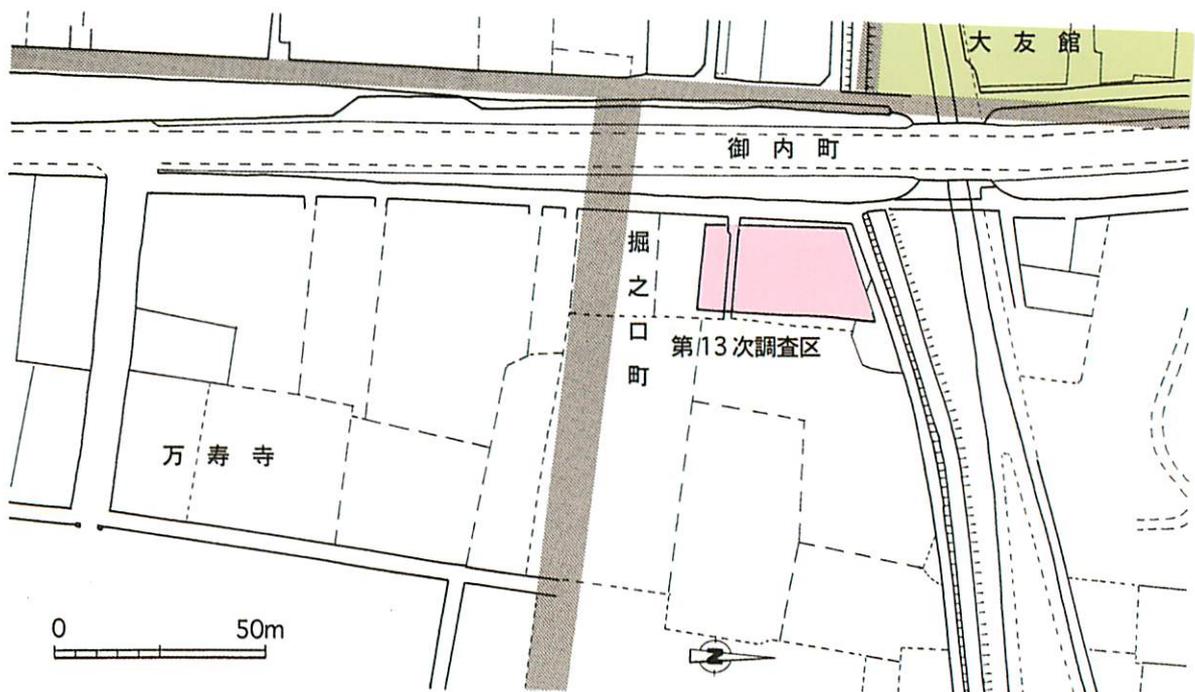
### 主要遺物

整地層から、16世紀後葉の京都系土師器を主体として、備前焼播鉢・銅銭・繭型分銅等が出土している。また、土坑からは華南産翡翠釉小皿やメダイが出土している。メダイは直径2cmの円形で、図柄は片面にイエスを抱いた聖母マリアの絵、もう一方の面にイエスと思われる顔を描いている。

### 特記事項

今後、本調査区は南に延びていくため、堀之口町の町屋、東西に走る道路、さらには禅宗寺院である万寿寺の北域を限ると想定される大溝が確認されることが期待される。

(松本 康弘)



調査位置図



万寿寺の北限の溝と思われる水田から寺域を臨む



発掘調査風景



繭型分銅出土状況



「メダイ」出土状況



「メダイ」(聖母子像)



「メダイ」(イエスの顔?)

## 第14次調査 (中世大友府内町跡)

調査主体	大分市教育委員会	調査場所	大分市 <small>けんたくまち</small> 顕徳町3丁目／ <small>たうじんまち</small> 唐人町
調査期間	2001.05～	調査面積	104m <sup>2</sup>
遺跡の時期	16世紀後葉	検出標高	4.2m
主要遺構	16世紀後葉…井戸跡 (SE100・SE149) 土坑 (SK137)		

### 遺跡の概要

中世大友府内町跡第14次調査は、「府内復元想定図」において、唐人町に比定される地区に位置する。調査面積は、約104m<sup>2</sup>を測る。遺構検出面としては、2面が考えられる。1面においては、16世紀後葉の遺構が検出される。井戸跡が3基確認されており、その内のSE100・SE149からは廃絶期の混入遺物と考えられる交叉播目をもつ備前産播鉢や瀬戸・美濃産天目茶碗等の16世紀後葉に帰属する遺物が出土している。

注目すべき事象として、調査区の中央付近において南北で整地土の境が確認できる点が挙げられる。北側の整地土が良質な整地土で均一に整地されているのに対し、南側、中でも南西側に関しては、焼土混じりの荒い雑な整地が単位をもって施されている。また、その整地境に沿った形で柱痕が明瞭に確認されるピット群が並列する点も、整地の境が土地境であることを支持するものであると考えられる。井戸跡に関しても、北側・南側にそれぞれ確認されており、一区画ごとの生活圏の異なりを表すものと考えられる。調査区南辺においては、断面観察において整地土が幾重にも重複した状態で確認されており、戦国期における土木地業行為の一端を垣間見ることができる。

なお、明治初期の地籍図を参照すると、調査区中央付近に短冊状の地割境が存在していたことが推定される。

また、調査区南西側の整地層と同じく、確実に焼土を多量に含む土で埋没した柱穴が確認されており、可能性として島津侵攻時の火災処理痕跡である可能性が考えられる。

### 主要遺物

注目すべき遺物としては、装飾製品の一部と考えられる青色透明のガラス部品が出土している。ガラスは、ソーダガラスで、成分としてケイ素・カリウム・カルシウムが主体で、青色の着色成分である鉄分を少量含む。

貿易陶磁としては、青花を主体としながらも、華南三彩や中国南部の染付製品、朝鮮舟徳利などが出土する。

### 特記事項

『天正十六年参宮帳』には、「ゑんはい」、「けんさん」、「ふくまん」、「月山」などの大陸系の人名が確認される。

周辺の調査地点と比較して、土師器皿の出土量が少ない状況が特徴的である。

(上野 淳也)



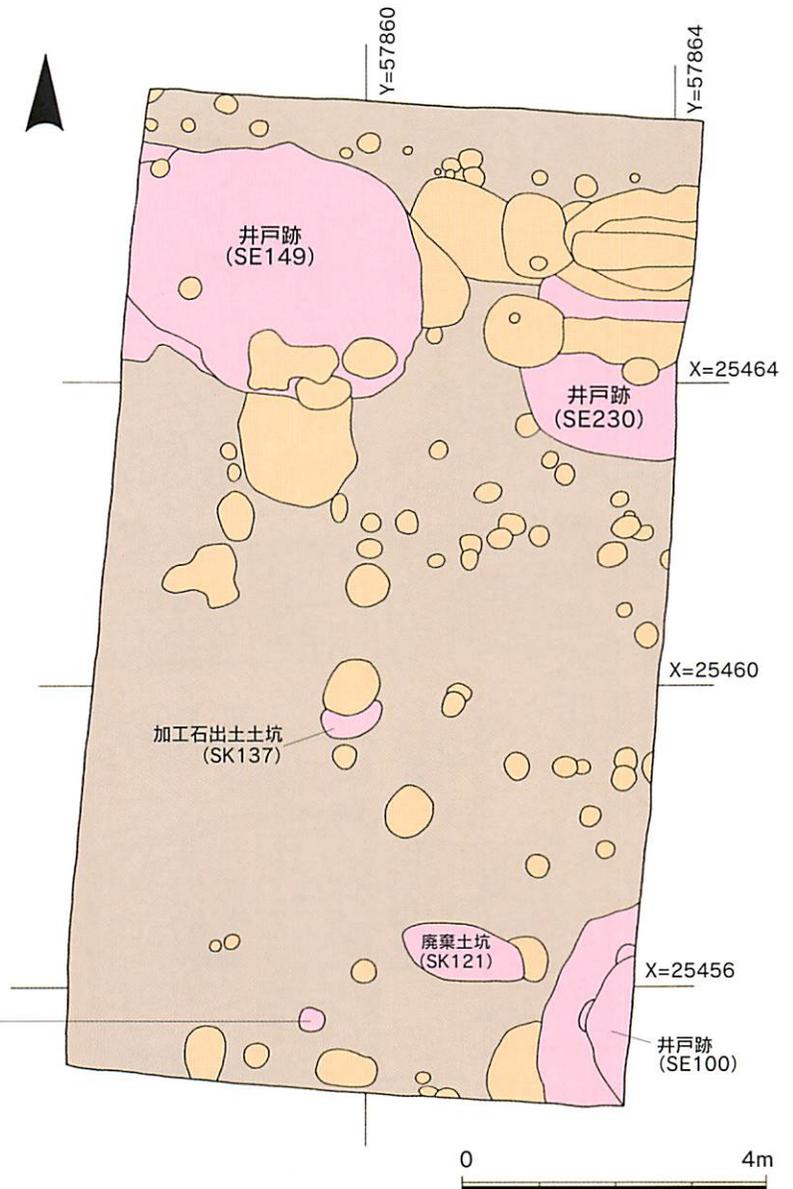
井戸遺構 (SE149) 掘り下げ状況 (東から)



井戸遺構 (SE149) 出土遺物



ガラス製品



遺構配置図 (S=1/100)

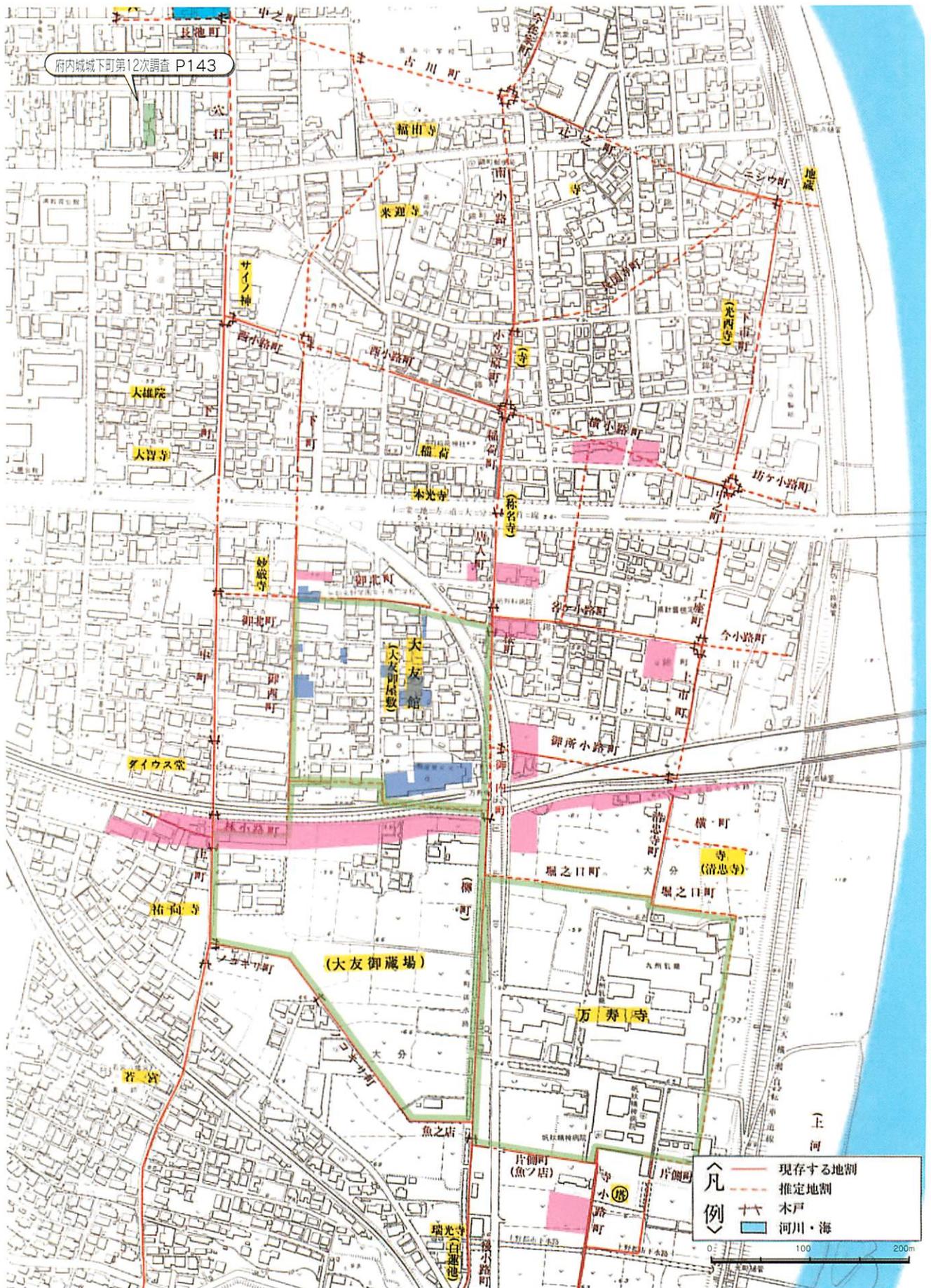


加工石廃棄土坑 (SK137) 検出状況 (北から)



華南三彩 (SK121)

### 3. 府内城・城下町跡第12次調査の調査概要



## 第12次調査 (府内城・城下町跡)

調査主体	大分市教育委員会	調査場所	大分市大手町1丁目 <small>おおてまち</small>
調査期間	1999.07～1999.09	調査面積	298m <sup>2</sup>
遺跡の時期	16世紀中葉～	検出標高	4.2m
主要遺構	16世紀中葉～末葉…溝跡 (SD201・203)		

### 遺跡の概要

近世の府内城とその城下町は、中世府内町の北西に建設されており、両者は平面的に僅かしか重複していない。府内城・城下町跡第12次調査は、この重複部分で発掘調査が行われたものである。

調査地は、近世府内城外曲輪の東南隅付近、旧米屋町に位置し、中世には舟入付近で、長池町の南、穴打町の西に比定され、中世府内町と町外との境界付近であったと推定される。

調査の結果、近世府内城築城時（16世紀末葉～17世紀初頭）の整地層直下で幅約2m、深さ約1mの溝を2条検出した。溝は芯々間約6m、調査区南端から約9mまで平行してN-6°-E方向に延びているが、東側の溝（SD203）はそこで切れ、西側の溝（SD201）のみ調査区を貫通している。何らかの区画溝と考えられるが、溝と溝の間に版築等の地業は認められないものの道路の可能性も考えておきたい。SD201には複数の掘り返しが認められるが、溝を覆っている府内城築城時の整地層は溝の中央部で厚くなっていることから、近世府内城築造時までには完全に埋まりきっていなかったことが推定できる。

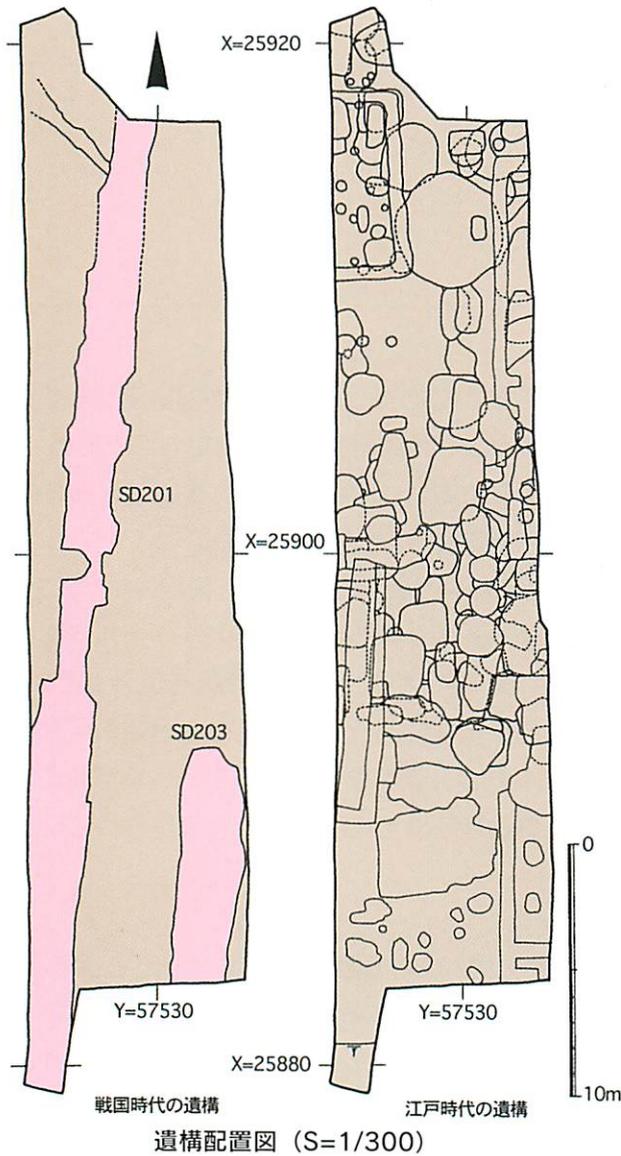
### 主要遺物

これらの遺構からは京都系土師器皿や東南アジア産のものを含む貿易陶磁器などが出土している。SD201埋土下層から一括出土した墨書土器（1～3）は、16世紀中葉に比定される3点の京都系土師器の底面に「さい良」「光盛」「さかい罫」とそれぞれ墨書されているものである。また1点の糸切り土師器にも「右」（「〇〇すけ」と判読できるものの一部である可能性がある）と墨書されているもの（4）が確認されている。これらのうち1、2、4は、人名の可能性が高いが、大友氏の家中に該当する人物が確認できないことから、付近に居住していた職人等であろうと推定される。墨書土器としては府内で初の出土であり、その性格が注目される。東南アジア産陶器としてはベトナム産長胴瓶（5）が出土している。また、中国産ではないかと推定される焼締陶器としては、口縁部が内側に張り出した玉縁状になる特徴的な形態の播鉢（6）のほか、鉢（播鉢以外）と推定される口縁部（7）および底部（8）が出土した。このほか染付碗C群、E群も出土しており土器と陶磁器の年代観により、16世紀中葉～末葉の存続年代が考えられる。

### 特記事項

この地点で検出された戦国時代の遺構は溝のみであり、戦国時代の遺構が高密度で検出される中世府内町の中心部分とは全く異なった様相であった。この場所が中世府内町の北西端付近と推定されることから、調査結果を積極的に評価すれば、溝の掘削時期と推定される16世紀中葉になって初めて、この地域まで府内町の領域が拡大したと解釈することもでき、中世府内町の成立と変遷を考える上で貴重な資料となろう。墨書土器の意味やこれらが出土した溝の性格づけについても、調査地点が当時の町境付近に比定されることと関連する可能性もあり、重要な検討課題である。

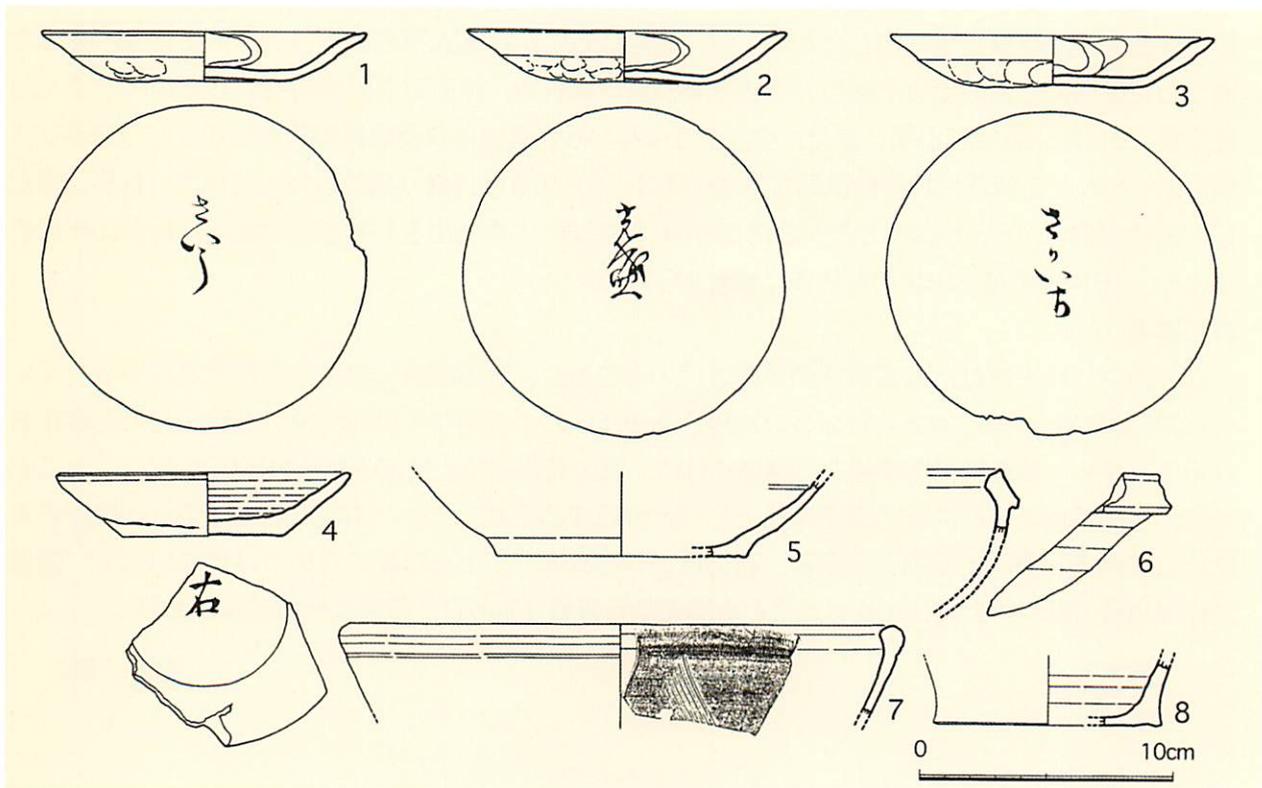
(高島 豊)



調査区全景  
(SD201の北側2/3を完掘した状況)



SD201・SD203完掘状況 (調査区南端)



SD201・SD203出土遺物 (6のみSD203出土) (S=1/3)

第五章  
宗麟と器



## 1.かわらけ

大友氏館跡出土で最も多い遺物は、高価な唐物の陶磁器ではなく、素焼きのかわらけである。一見廉価なこのかわらけが、意外にも大友氏館を権威付ける遺物であることはあまり知られていない。以下、大友氏館跡から出土するかわらけについてその出土位置、サイズ、種類、量、時期等、様々な角度から検証する。

まず、その出土位置であるが、大友氏館跡の発掘調査の結果、かわらけが大量に出土し、出土遺物の大半を占める調査区は、池状遺構が確認された第1・3次調査区と、中心部の大型建物関連遺構が確認された第6次調査区の2カ所である。室町將軍邸をモデルとした館の空間概念には、儀礼・儀式等を行う非日常的な「ハレ」の空間と、寝所や、厨房といった日常的な「ケ」の空間と大きく2つの空間概念が存在する。今回かわらけが大量に出土した2カ所の調査区は、共に、主殿（儀式空間）、会所・庭園（接客空間）といった「ハレ」の空間が想定される。

次に、出土するかわらけには大小様々なサイズが存在し、これらのかわらけが多くを必要とした使用目的が存在したこと、即ちこれまでの研究成果から、式三献を初めとする武家儀礼に使用されたことが想定される。

最後に、これらのかわらけが大量廃棄の状況で出土する点が注目される。このことは、これらのかわらけが1回のみを使い捨てで使用されたことや、こうした儀礼が何回も行われたことが想定される。

加えて、大友氏館から出土した土師器についてみると、ロクロ成形され、内面に工具による螺旋状の段成形が施された赤色系胎土の在り系a類かわらけと、ロクロ成形によらない、いわゆる京都系土師器と呼ばれる白色系胎土のb類カワラケの2種類が出土しており、この2種類のかわらけは、その出土遺構の切り合いからロクロ成形のa類が古く、京都系のb類が新しく位置付けられている。

以上、大友氏館跡出土のかわらけをまとめると、館内でも、「ハレ」の場において、式三献をはじめとする武家儀礼が何度も行われ、それに伴ってかわらけが1回限りの使い捨てで、大量消費されたことが想定される。更に、大友氏館においてこうした儀礼が、正統な京都系土師器で行われた事実に加え、その採用以前の段階から在り系かわらけで行われていたことは、大友氏による積極的な武家儀礼の導入を示しており、地方にあって京都との文化的あるいは政治的な距離が非常に近かったことを表している。即ち、一見廉価なかわらけが権威の象徴となり得た背景には、こうした点があったのである。

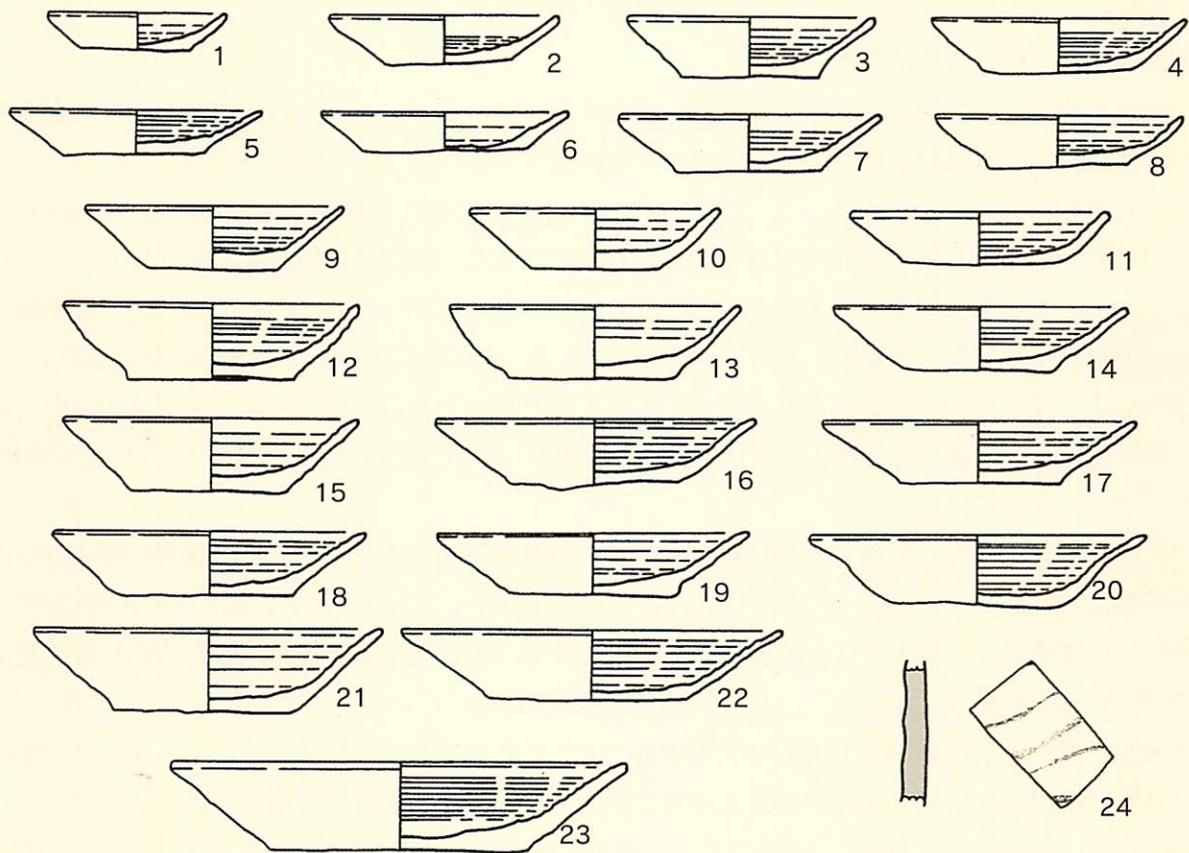
(河野 史郎)



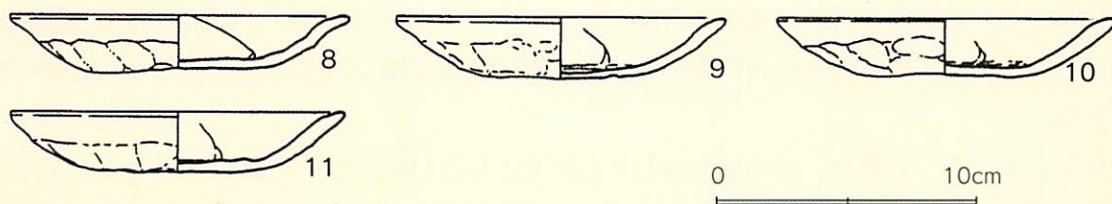
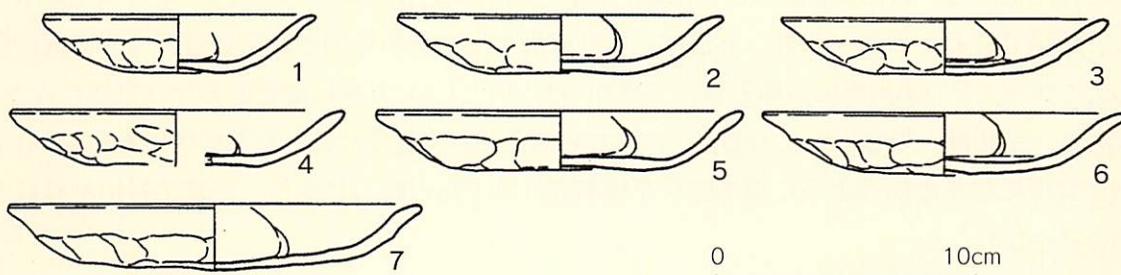
在り系土師器出土状況（池状遺構 I 期）



京都系土師器出土状況（池状遺構 II 期）



糸切り土師器 (池状遺構Ⅰ期)



京都系土師器 (池状遺構Ⅱ期)

大友氏館跡 池状遺構出土 かわらけ実測図 (S=1/3)

## 2. 茶の湯と宗麟

### 宗麟がみた壺 ～トラディスカント壺～

中世大友府内町跡の発掘調査からは中国・朝鮮をはじめ、タイ・ベトナム・ミャンマーなどの東南アジア産の貿易陶磁器が数多く出土しており、国際都市「Funai」の繁栄ぶりを雄弁に語っているが、こうした遺物の中に、いわゆる「トラディスカント壺」と称される鮮やかな三彩陶器片がみられる。この壺は表面に型押しされた花や葉などの文様が貼付けられ、頸部には縦方向の耳が付き、釉は緑色を基調として文様部分に黄色・褐色(紫・茶)・緑色の三色の釉がかけ分けられる独特の三彩貼花文耳付壺であり、イギリスの収集家—ジョン・トラディスカントの名に由来して、その名で呼ばれている。彼は東南アジアに住み、この種の壺をヨーロッパに持ち帰っており、現在ではイギリスのアシュモolean美術館にその所蔵が知られる。また、彼は寄贈後の1627年に没しているため、これ以前に生産されたことがわかっている。

明代の三彩は古くから交趾焼こうちと呼ばれ、一般に型物香合に代表されるが、その概念が曖昧であることから新たに「華南三彩陶」として呼称されている。トラディスカント壺もこの中の一器種にあたり、この他には轆轤成形で刻花文などの線刻文を施した壺・瓶・水注・盤などと、鳥や魚などの形をした型作りの水注・水滴・香合などがある。これらは東南アジア諸国をはじめ日本でも数多く出土してきており、その出土状況から16世紀末頃には日本に請来してきたことがわかっている。また、生産地も近年の研究により、漠然と中国南部・華南地方とされていたのが、香合の生産窯が福建省南部で確認され、その他の器種についてもこの周辺で焼かれている可能性が高くなってきている。

トラディスカント壺は華南三彩陶の中でもその制作技法の違いから分けて考えられるもので、型押しされた文様を表面に貼り付ける「貼花」は、この壺にみられる最大の特徴であり、鳥形水注などの型作りされたものと、刻花文を施した轆轤成形の壺との折衷的な要素をもったものといえる。

また、確認できるトラディスカント壺は、肩部に最大径があるものと胴部のほぼ中央に最大径があるものの、大きく2つの形態に分類でき、文様からもいくつかに分類可能であるが、文様が大きく4側面に展開し、宝相華を中心にしたものと、六弁から成る花卉文を中心にしたものの2種類がそれぞれ表裏で同じ文様になるというように基本的な文様構成はほとんど同じであり、一定の規格を基につくられていることがわかる。

大分市竹中の勝光寺にはこの壺が伝世品として残っている。寺に伝わる『南陽山勝光禅寺記』(1673年)には、大友歴代の当主ゆかりの品々が同寺の秘蔵品として記されている。トラディスカント壺もまた、同寺ゆかりのものであり、上記の史料の中には「茶壺」の記載があり、このことからそれとの関連が注目されている。彦根城博物館に所蔵されている旧彦根藩主井伊家に伝来する資料は、茶壺としての伝世が知られており、同寺のものも上記の史料に書かれている茶壺の可能性が非常に高いと言える。

このトラディスカント壺は、国内外を通じて周知されている例はそれほど多くなく、国内では伝世・請来品が7件、遺跡からの出土も7件を数える。国外では伝世・出土品を含めて5件を確認しているが、この他にもフィリピンをはじめ、東南アジア地域を中心に確認できる。国内では当時の大名や商人に関わる地域での出土事例が多く、伝世品でも井伊家や前田家など大名の遺品として残ってきている。勝光寺のものも数少ない伝世品の一つであり、また、他地域よりも群を抜いた府内町跡からの

## 第六章

# 府内で活躍した人々

# 1.大友宗麟

## 宗麟の生涯

宗麟は、大友氏20代義鑑の長男として享禄3年(1530)生まれ、幼名は塩法師丸、その後、五郎、新太郎と変わる。天文19年(1550)2月、大友家最後の内紛が大友館殿中の二階の間で発生し、義鑑は世を去った。いわゆる「二階崩れの乱」である。この時、別府に出かけていた宗麟は、直ちに府内に帰り陰謀派を討ち、迅速・果敢に事件をおさめた。これにより、大友氏21代家督を継ぎ、義鎮と称した。義鑑から引き継いだ豊後・肥後国の守護職のほか、天文23年(1554)には肥前国、永禄2年(1559)には豊前・筑前・筑後3国の守護職を得、北部九州6国を手中にし、西国最強の大名となった。永禄5年(1562)剃髪して「宗麟」と名乗り、臼杵の丹生島城に移り、府内を嫡子義統に譲った。その後、天正6年に宗麟を改名し「三非斎」、天正7年(1559)に「円斎」、天正9年(1581)に「府蘭」、天正14年「宗滴」へと頻繁に改称している。

宗麟が家督を継いだ翌年の天文20年(1551)7月、ポルトガル船が別府湾に入港し、翌8月には宗麟の招きにより、フランシスコ・ザビエルが周防山口から府内に入り、キリスト教の布教が許可される。本格的な布教は、翌21年府内に入ったパルテサル・カゴによって始まり、府内には住院が建てられた。弘治元年(1555)にルイス・ド・アルメイダによって府内に育児院、弘治3年には病院が建設される。この時、宗麟は、イエズス会に地所・会堂を寄進している。また、永禄8年(1565)にも、土地を寄進し臼杵に教会堂を建設させ、天正9年(1581)巡察使ヴァリニャーノに臼杵ノビシャトの設立、府内コレジオを開校させている。

天正6年、臼杵で宣教師カブラルについて洗礼を受け、ドン・フランシスコを名乗るようになった宗麟は、姻戚伊東氏の旧領日向国にキリスト教的理想郷国家の建設のため、大軍を率いて日向に進軍するが、耳川の合戦において大敗し、建設の夢は潰えた。この戦いを契機に人心を失った宗麟は、内外の武将の離反を招き、天正14年(1586)島津氏の侵入を許すことになる。侵略は、豊臣秀吉軍の九州入りで終わったが、秀吉は、当主義統に豊後一国を安堵し、宗麟には日向国を与えることにしたが、これを辞退し、10日後の5月23日、津久見の地で、その生涯を終えた。享年58歳であった。

## 宗麟と南蛮貿易

宗麟の時世は、まさに海外交易の時代であった。天文20年のポルトガル船の別府湾入港以後、弘治2年(1556)、永禄元年(1558)、同2年、同3年と5回入港している。これらは、キリスト教の布教と密接な関係にあるが、宗麟は、永禄10・11年(1567・1568)のニケア司教カルネイロ宛の書状に、毎年良質の硝石(火器や火薬の原料)を10ピコ(前者)、大砲を求め(後者)ている。この時期大友氏は毛利氏との運命を決する戦いの時であり、「硝石と大砲」はぜひとも入手する必要があった。宗麟がキリスト教をすすんで布教させたのは、①貿易の利を得ること、②大砲等の武器を調達すること、③医術その他のすすんだ西洋文化を輸入しようとしたことにある。そこには、キリスト教布教と引き換えにした宗麟のしたたかさを垣間見ることができる。一方、宗麟は朝鮮や中国との交易も盛んに行い、弘治元年(1555)には鄭舜功、浙江巡撫使蔣洲などが明船で訪れている。宗麟の朝鮮とのつながりは、対馬の宗氏を通じたもので、花席(花ござ)・虎皮・豹皮・鷹・犬・照布(上等の白麻布)・油布(桐油の布)等であった。ヤソ会士の通信によると、「豊後の市」とあり、ここには京・堺・博多の商人が来往して取引をした、とある。これは、宗麟の進取の気風がキリスト教布教の許可や積極的な南蛮貿易を推進したと考えられ、強大な大友権力が安全な商取引を保証した。

(玉永 光洋)

## 2. 府内の大豪商・技術職人・商人・蔵奉行

### 府内の大豪商: 仲屋乾通・宗悦

『大友興廢記』や『雉城雑誌』等の近世の編纂物によると、仲屋乾通・宗悦の父子は、戦国末期に西国一の財力をもった府内豪商であり、中国の貿易商人らと取り引きをしてアジア各地からの物品を入手していた。文禄2(1593)年の「豊後国海辺郡臼杵庄御検地帳」によると、宗悦は臼杵の唐人町懸ノ町に6軒、1町1反あまりの屋敷を所持しており、懸ノ町全体の55%を占めている。宗悦はやがて大友政権の政商的な地位に立ち、豊臣秀吉との間を使者として往復したり、渡来系職人の招集の任務を果たしたりしている。



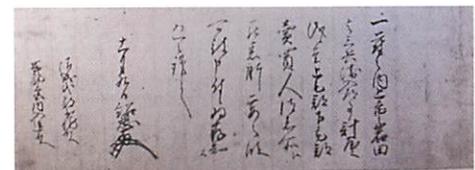
### 明から府内に移住してきた技術職人: 陳覚明・義明・元明

系図によると、陳氏は中国の長江(揚子江)の河口に近い江蘇省揚州府から、陳李長の代の永正3(1506)年に肥前に移住し、やがて子の陳覚明が9年後の永正11年に「豊後国府内住居」となると伝えられる。覚明は智元仏師と呼ばれた仏像師であり、また元明は豊臣秀吉の京都方広寺大仏造立の際に漆喰塗りの技術職人として馳走奉公している。系図は覚明・義明・元明の陳氏3代の府内居住を物語っている。



### 天秤を操る「計屋」商人: 岩田与三兵衛入道

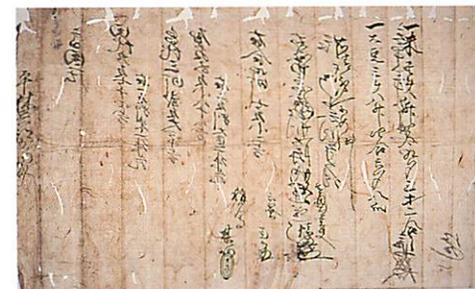
「上市町」に居住する岩田与三兵衛入道は、「計屋」を生業としていた。「計屋」は、府内の町で商取り引きに使われる代銀を、天秤を使って計量する商人である。大友氏の重臣田原紹忍の書状によると、豊前の上毛・下毛郡から府内に訪れる商売人は、この計屋岩田氏のもとに荷卸しするよう指定されている。商人の荷卸場や問丸的宿機能を有する計屋商人は、都市の流通経済上で重要な位置と役割を担っていた。



### 府内の「御蔵場」の蔵奉行: 寒田鎮郷・六寮覚阿・称名寺其阿

大友館の南に立地する「御蔵場」は、各地から大友氏のもとへ納められた米・大豆等の物資を保管する倉庫である。天正18(1590)年、ここで働く蔵奉行の寒田鎮郷・六寮覚阿・称名寺其阿の3人は、蔵に持ち込まれた米と大豆を計量し、納入割当状の裏に受け取り石高と日付を記し、署名に花押と黒印を押した請取状を発行している。

(鹿毛 敏夫)



### 3. 府内で活躍した外国人

ポルトガル人2名(3名とも)を乗せた中国船が種子島に漂着し、日本とヨーロッパの初めての出会ったのは1543年。その2年後の1545年、早くもポルトガル人が府内を訪れている。1578年受洗した大友宗麟がその直前に宣教師に語った回顧談によれば、16歳の時に中国人のジャンク船が入港し、6、7人のポルトガル人が同乗していたという。1530年生まれの子宗麟が16歳の時とはすなわち1545年となる。ポルトガル人一行のリーダー格であったジョルジ・デ・ファリアはその後約3年間府内に居住し、宗麟の弟晴英(のちの大内義長)が鉄砲を誤射して負傷した際、治療してくれたという。そして、宗麟は彼からヨーロッパやアジアの情勢、キリスト教の行状についてあれこれ聞かせてもらっている。ファリアこそが若き宗麟にキリスト教やヨーロッパ文明に対する興味を抱かせた人物であった。宗麟の回顧談ではファリアの帰国後、今度はアラゴンというポルトガル人が来訪し、5年程居住して日本語もほどほどわかる程度に話せるようになったという。それまで府内に居住する外国人はほとんど中国人であったが、次第にポルトガル人が加わるようになっていった。

1551年、ドアルテ・ダ・ガマ船長のポルトガル船が府内の港に入港した。これを契機に大友宗麟は山口に滞在していた、かのフランシスコ・ザビエルを府内に招待した。到着したザビエル一行は港から府内の町を歩いて宗麟の待つ館へ向かった。通りは行列を一目見ようと集まった民衆でいっぱいになったという。宗麟はザビエルを最高の礼をもって迎え、ポルトガル王と友好関係を結びたい旨を伝え、ザビエルが大友氏領国内で布教することを許可した。49歳の時ようやくキリスト教徒となった宗麟は洗礼名を自らフランシスコとしているが、これは32歳の時に会ったザビエルにいかにも感銘したかを物語っている。約2ヵ月後ザビエルは日本での布教活動支援体制を固めるためガマ船長の船がインドへ帰るのに合わせ、府内を離れた。ザビエル自身の活動は短かったものの、彼によって豊後にまかれたキリスト教の種はその後次々に訪れた宣教師たちにより大きく育てられ、府内は日本におけるキリスト教布教の最大拠点となったのである。

ザビエル離日後、府内には入れ替わり立ち代りキリスト教宣教師たちが訪れ、逗留し、布教活動を続けた。その中の一人に西洋医学の祖とされるルイス・アルメイダがいる。アルメイダはポルトガル・リスボン生まれで、医学を学んだのち東インドへ渡り商人となり、成功をおさめていた。しかし、31歳の頃その地位を捨て、府内でイエズス会に入会し、宣教師となった。直後から精力的に活動し、府内教会が建て直されたのを機に旧教会を病院に改築した。ポルトガルの外科医師資格を持つアルメイダはこの病院で手術を実施している。彼の指導のもと府内病院の名声は高まり、患者が遠く関西地方からも集まり、ポルトガル船の乗組員も治療を受けるため府内に入港するほどであったという。

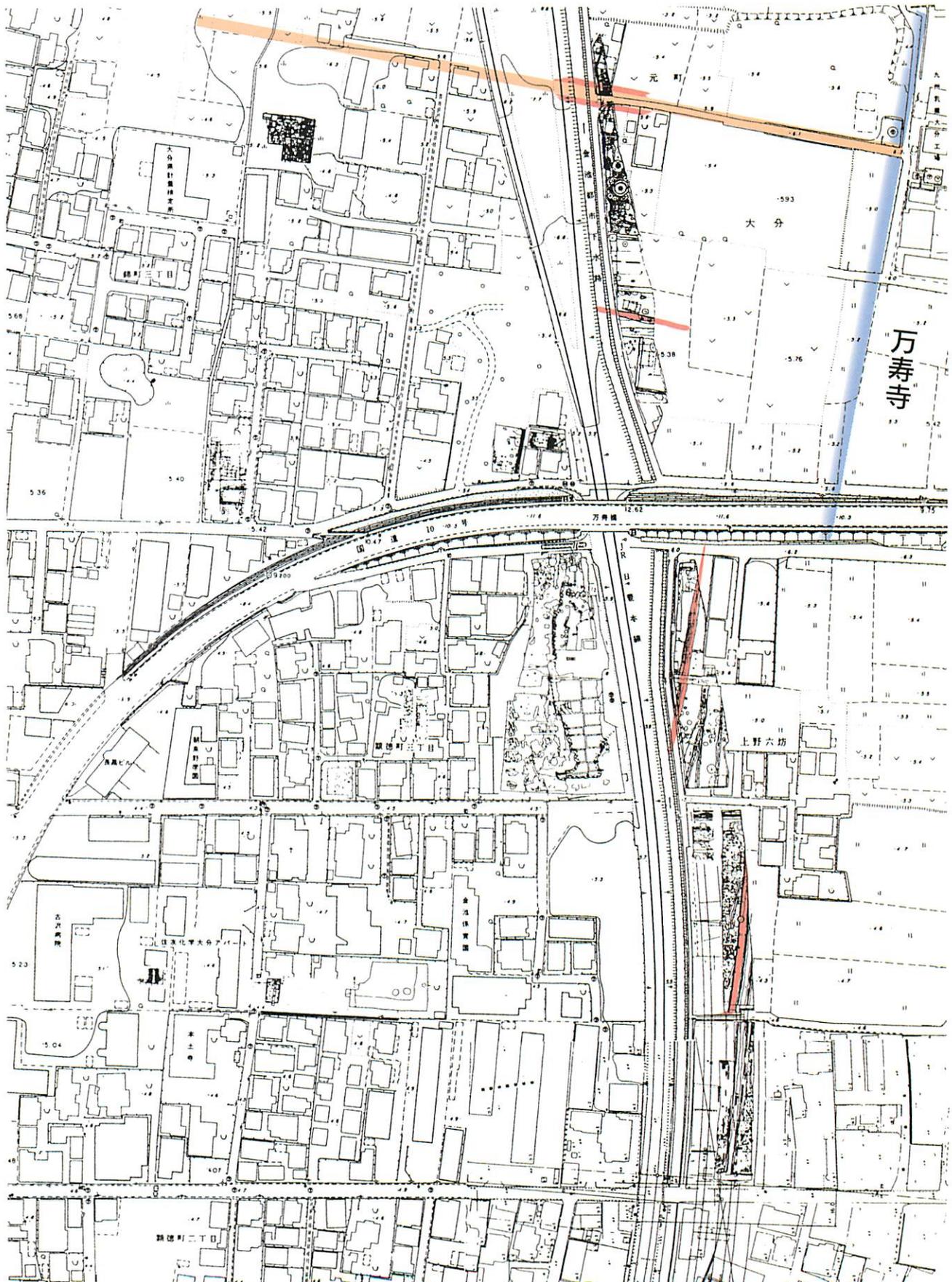
また、宣教師たちは子供たちに読み書きや歌、今のバイオリンに似た楽器(ピオラ・デ・アルコ)の演奏も教えていた。祭日になると、教会から府内の町に少年少女の歌声が流れていたのである。

宣教師たちは日本での布教活動の成果を必ずイエズス会のローマ本部に報告する。これを本部はすぐさま本に印刷し、ヨーロッパ各地に配布した。その本には当然豊後や府内の名が幾度となく登場する。その結果、1595年に出版された「ティセラ 日本図」には国名以外の地名として府内の他、臼杵や日出、佐賀関が書き込まれている。キリスト教宣教師たちを通じ「府内」の名は当時のヨーロッパ人に最もよく知られる日本の地名になっていたのである。

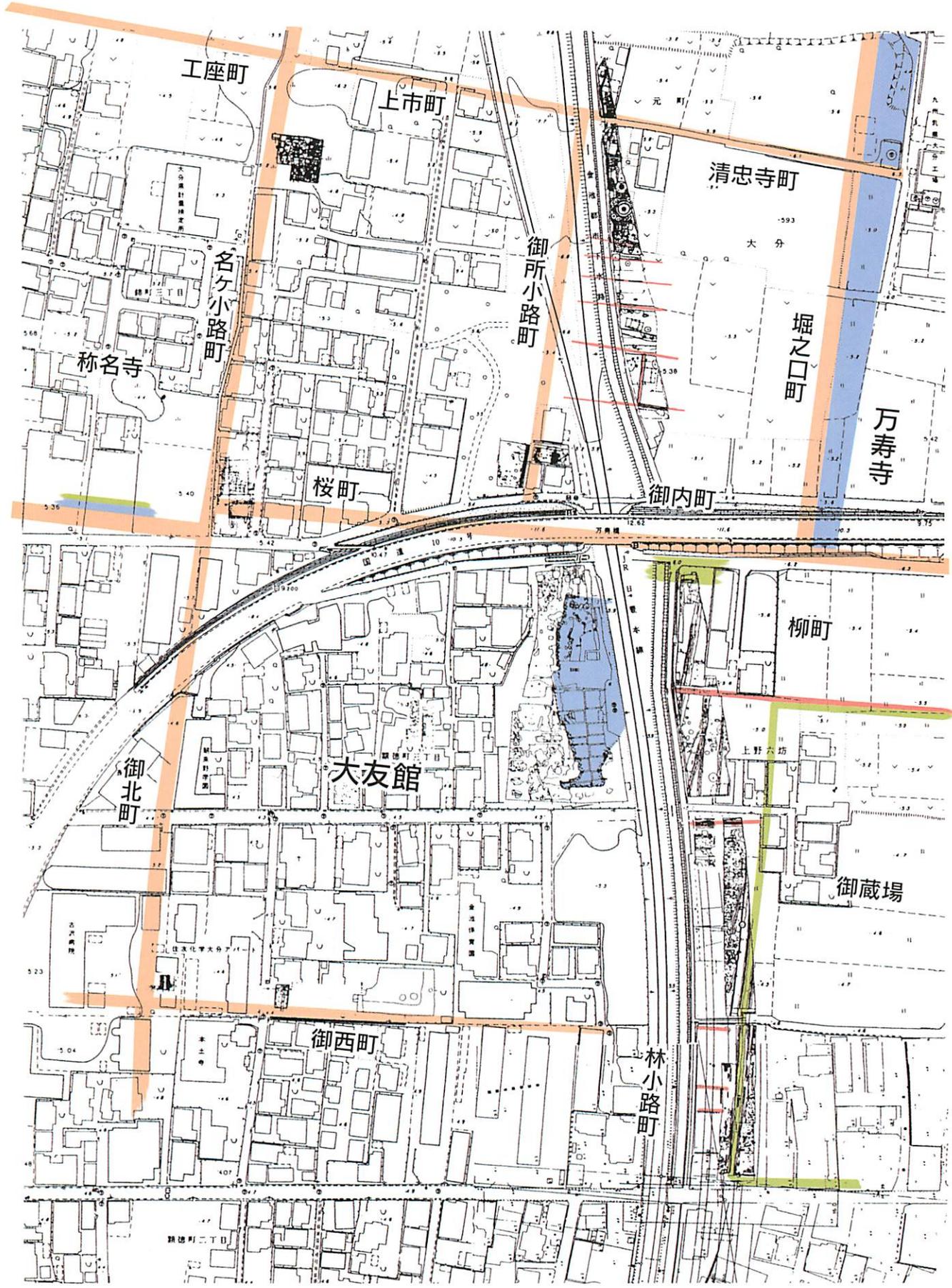
(長田 弘通)

# 第七章 関連資料

府内の町割変遷図 (坂本報告資料)



15世紀前半の遺構



16世紀後半の町割





## 大友氏関連年表

1053(天喜元年)	“高国府”初見(含台地下東一東北側)	1357(延文2年)	大友氏時高崎城を築く(傳)
1059(康平2年)・1077(承保4年)	田中寺	1361(康安1年)	斯波氏経、九州探題として高崎城に入る
1196(建久7年)	大友能直豊後国守護	1364(貞治3)	“当知行散在所領所職等事”在国司職、 検非違使職、惣追捕職、税所職 弘安の役恩賞 筑前怡土庄志摩方地頭職 (柑子岳城)、香椎社領(立花城)
1201(建仁元年)	下総古河恵比寿勸請(傳)	1387(嘉慶元年)	大智寺、開祖独芳禪師
1219(承久1年)	2代親秀、豊前豊後守護職及び鎮西奉行 等諸職をつぐ	1391(明德2年)	南朝滅亡
1223(貞応2年)	“勝津留号高国府”	1395(応永2年)	豊後国府立市佛地カ居屋敷一所(史料)
1234(文暦元年)	“府中”初見	1401(応永8年)	松坂八幡官、大友親世勸請(伝)
1242(仁治3年)	1.15「新御成敗状」 2.18大友頼泰守護職に	1429(永享1年)	12代持直、朝鮮にはじめて使節を出す (以降15代親繁、17代義右の代に数多く 派遣)
1254(建長6年)~1270(文永7年)頃	大友頼泰 勝津留(高国 府)に権利を得、居館(大友館)を構え る。	1430(永享2年)	笠和郷松末名(史料)
1274(文永11年)	文永の役	1453(享徳2年)	渡唐船6号船(大友船)
1281(弘安4年)	弘安の役	1455(享徳4年)	5代親繁(1493明応2年没)の館守(護所)、 茅や茨で屋根を葺き、竹を床にした極め て質素なもの。(『臥雲日件録』)
1288(正安元年)~1457(康正3年)	富成名(史料)	1468(応仁2年)	遣明船にて硫黄4万斤輸出(大友・島津)
1306(徳治元年)	万寿寺建立(5代貞親)開山直翁	1501(文亀元年)	大雄院建立・称名寺・金剛宝戒寺・万寿 寺・瑞光寺・大智寺・同慈寺
1307(徳治2年)	大友貞親、岩屋寺を移し総社山円寿寺と する	1501(文亀元年)	『海東諸国紀』成立(1471年博多統治=大 友殿東北6000余戸、少弐殿南西4000 余戸)
1333(元弘3年)	大友貞宗、少弐・島津と共に鎮西探題を 攻撃、北条英時を自刃させる	1516(永正13年)	朽網親満反乱
1333(元弘3年)	鎌倉幕府滅亡	1518(永正15)~1519(永正16年)	高崎城攻防
1333(元弘3年)	6代貞宗、所領諸職(守護職附五職(在庁 職?)並所領等)を7代氏泰に譲り、嫡子単 独相続制にする 後醍醐天皇より博多息浜拝領	1536-37(天文5-6年)頃	には式三献の儀式導入される
元弘の頃(1331-1333)	上野台地上に居館を移す(造営) (『大宰管内志』『豊後国志』)	1537(天文6年)	豊後国大智寺事...足利義晴(史料)
1336(建武3年)	玖珠城衆高国府乱入	? ( ? )	大智寺造営材木之事...義鑑(史料)
1337(建武4年)	玖珠城衆高国府乱入	1545(天文14年)	ポルトガル人来府(中国のジャンク船)、 ポルトガル人3~5年滞在
1341(暦応4年)	大友氏時瑞光寺建立	1547(天文16年)	金剛宝戒寺材木(史料5回)
1342(康永1年)	一所勝津留地頭職(相傳所領を嫡子頼房に 譲る)	1550(天文19年)	二階崩の変(大友館?内)
1346(貞和2年)	高国府隆生寺(史料)	1550(天文19年)	大友義鎮家督相続
1348(正平3年)	隆国府市屋敷一所を安堵し積禪庵を建立	1551(天文20年)	夏ポルトガル船(ドアルテ・ガマ船長)沖 の浜に来航。 8.19ザビエル府内訪問(接見場所は大友 館?) 10.24府内を去る(宗麟使者同道)
1349-1375	高崎城攻防の史料	1552(天文21年)	カゴ神父沖の浜に来航(宗麟使者も帰国)
1355(文和4年)以前	に廃寺となる一隆国府保寿寺、鐘銘「… 豊州隆国府金?山保寿寺…」選者萬寿寺 靈致(1381(永徳元年)没)	1553(天文22年)	府内教会建立
1355(文和4年)	“古国府”初見		
1355(文和4年)	懐良親王・菊池 府内大友を下す		

1555~56(弘治1~2年)鄭成功(『日本一鑑』著1560年代)来府	1580(天正8年) 府内コレジオ建設
1555(弘治1年) ルイス・アルメイダ幼児収容施設建設、住院及び礼拝堂建設	1582(天正10年) 6.18「万寿寺築地之内并西之屋敷両所...万寿寺町屋敷事」(史料)
1556(弘治2年) 4蔣洲来府、義鎮に会う(弘治3年帰国)	1582(天正10年) 府内の町8000人(又は戸)
1556(弘治2年) 1・2次遺明船	1586(天正14年) 島津氏豊後に攻め入る
(1557(弘治3年) 毛利元就、大内義長を滅ぼす)	1586(天正14年) 高崎城普請
1550~1558 この間に義鎮、居館を府内(大友館)から上原(上原館)に移す(『大友家文書録』)	1586(天正14年) 宗麟、臼杵から大坂へ、豊臣秀吉に島津討伐を依頼
1557(弘治2年) 府内病院建つ	1586(天正14年) うえのはるに一城を築く(上原館改修)
1558(永禄元年) 大友義統上原館で誕生(『大友家文書録』)	1586(天正14年) 戸次河原の合戦(四国連合軍大敗) 義統、高崎城を捨て亀王城に敗走。島津軍府内侵入、府内焼失
1559(永禄2年) 義鎮、豊前・筑前・筑後国守護に任せられ、九州中北部6ヶ国の守護。九州探題職に補任。	1587(天正15年) 3.島津軍府内撤退 5.3秀吉、義統に豊後一国を安堵、別に宗麟に日向一国を与えようとするも辞退 5.23大友宗麟津久見にて死去(58歳)
1559(永禄2年) 府内病院増改築	1588~1591(天正16~19年)『伊勢参宮帳』
1560(永禄3年) ポルトガル船入港本年まで	1592(文禄1年) 文禄の役(大友義統6000の軍勢で出陣)
1560(永禄3年) 義鎮嫡女、土佐一条氏に嫁す	1593(文禄2年) 大友軍、明の大軍の前に敗走、秀吉これを咎め大友義統を除国する
1561(永禄4年) 義鎮、毛利方の門司城を攻め、大敗す	1595(文禄4年) 『当家年中作法日記』(大友義統)
1562(永禄5年) 義鎮剃髪し、宗麟と称す	1596(慶長1年) 慶長大地震、府内津波による被害甚大
1563(永禄6年) 宗麟“上原館”より丹生島城に移る(『大友家文書録』)	1597(慶長2年) 福原直高入府、慶長4年三階高楼完成、入城。(荷揚城と称す)
1567(永禄10年) 宗麟、毎年硝石200斤を求める手紙をニセヤ司教カルネイ口に出す	1602(慶長7年) 天守閣ほか櫓完成、竹中重利旧府内町を新城下町に移す(府内城と称す)
1568(永禄11年) 宗麟、再度大砲を求める手紙をニセヤ司教カルネイ口に出す	1605(慶長10年) 吉統(義統)死去(48歳)
1570(元亀元年) 11.1「就至笠和郷、御長因屏之儀...」(史料)	1635(寛永12年) 墳丘上の大松倒れ、石棺と人骨露出。
1571(元亀2年) 7.13鐘銘「大日本国大分郡府中今小路惣道場...願主大明 台州府慮高平羊県陽愛有〜」(備前今城余慶寺鐘銘)	寛永13年 日根野吉明、萬寿寺伝説により石碑を建つ(大臣塔、大臣塚)
1571(元亀2年) 9.23土井廻之儀...宗麟(史料) 10.11土井廻之儀...宗麟(史料)	(註)本年表には、府内及び大友氏の歴史的流れを大まかに掴むため、各種意見のある事項や、二次史料に基づく事項も含んでいる。
1573(天正元年) 22代義統 家督相続	
? 6.12「府内屋敷...東之築地」(史料)	
1573(天正元年) 12.2「土井廻屏之儀...義統」(史料)	
1577(天正4年) 1.11宗麟、肥後高瀬に到着の大石火矢の運送を城蔵人太夫に命ず	
1578(天正6年) 宗麟臼杵にて洗礼を受ける。洗礼名ドン・フランシスコ 耳川の合戦(大友軍大敗)	
1578(天正6年) 政庁が府内に移る	

略○首

天正十六年戊七月五日  
豊後大分之郡符内たつ市衆

佐藤彈正殿 新の三郎殿 かのう新左衛門殿

略○中

天正十七年三月十三日<sup>(唐)</sup>  
豊後符中衆六人たう人まち

ゑんはい同與三郎殿 けんさん同新四郎殿  
(福 荷)  
ゐなり町石井新次郎殿

略○中

天正十七年三月廿二日  
豊後符内櫻町 藤左衛門尉殿 同内符<sup>方</sup>

甚四郎殿

略○中

天正十七年卯月一日  
豊後大分郡符内來迎寺宗純

とつちん町  
伯井善助殿

略○中

天正十七年七月十日  
豊後符内金剛寶戒寺 吉祥院長順坊

略○中

(符内)  
、豊後國舟江庄寺小路之内池邊孫三郎殿御一人也、  
天正十八年卯月七日

天正十八年卯月十二日  
、豊後符中櫻町之衆十六人つれ

了尚入道殿 宗久入道殿 同甚五郎殿 與三衛門殿

勘解由殿 新二郎殿 宗三郎殿 善一郎殿 彌三郎殿

紹意入道殿 同御小人 源三郎殿 與三大郎殿

賀衛門殿 源十郎殿

おふくの代参り彌衛門殿

略○中

天正十八年九月一日  
、豊後符中市之町之衆四人

宗之助大郎殿 高山甚之丞殿

宗之新五郎殿 宗之孫三郎殿

略○中

天正十九年正月十九日  
、豊後符中古川しゆ五人つれ

志村宗兵衛殿 二郎三郎殿

與三郎殿 又二郎殿 新三郎殿

略○中

天正十九年二月三日  
、豊後符中いなりまちしゆ 六人  
唐入まちしゆ

喜衛門殿 傳左衛門殿 吉衛門殿 新大郎殿、彦五郎殿宗權左衛門殿  
又唐人まちのしゆふくまん かけゆ殿

天正十九年二月四日  
、豊後符中衆五人つれ 市之町宗左衛門殿

市之町宮内殿 市之町彌左衛門殿

さくら町内藏助殿 さくら町彌二郎殿

略○中

天正十九年三月十一日  
、豊後符中二人 千手堂<sup>しんどう</sup>羽屋九右衛門殿

佐藤二郎三郎殿

略○中

天正十九年卯月六日  
、豊後符中市之町しゆ五人

宗之隼人助殿 速枝半衛門殿

秦之甚二郎殿 稱名寺之かなり房

略○中

天正十九年卯月七日  
、豊後符中櫻町 同唐人町四人つれ

月山櫻町吉田彌四郎殿 善周坊<sup>ぜんしゅう</sup>

渡邊彦四郎殿

略○中

天正十九年卯月十二日  
豊後符中しゆ三人

櫻町宗兵衛殿 うしろかうじ源三郎殿

はやし殿 かうじ一之助殿

略○中

天正十九年卯月廿三日  
、豊後符中下市しゆ一人下村甚五郎殿

略○中

天正十九年六月一日<sup>三人</sup>  
、豊後符中林九左衛門殿 下村甚五郎殿

御ともの人一喜織部<sup>助</sup>殿

略○中

天正十九年六月廿三日  
、豊後符中しゆ 大さいしゆ二人

櫻町彌三郎殿 大さいの新三郎殿

略○中

天正十九年七月三日  
豊後符中柳かうちしゆ三人源七郎殿

藤大郎殿 孫太郎殿

略○下

(豊後國 莊園公領史料集成上) 渡辺澄夫編)

② 今度至南蛮被差渡候船令婦朝、於御領中繫置候之處、去大

風之脚少過之子細有之由依到來、至貴殿以使節被申候之處、未御返事候之事、無御心許候、如御存知、貴家当方御代々被得御意候之處、以聊之儀可被及御隔心事、他那之嘲自他不可然之条、速二可被成御分別事、尤可目出候、然者彼船於南蛮国茂、如此節少難之儀雖有之、從宗麟被差渡船之段有存知、彼国守以相談廉直之扱、剩以使節被申越候處、万一御得心於相滯者大國迄之覺如何之条、以御遠慮示預候者祝着可被申候、猶期米喜候、恐々謹言、

八月廿五日

(田原) 親賢 (花押)  
(白性) 鑑速 (花押)  
(志賀) 親度 (花押)  
(花伯) 惟教 (花押)

河上々野入道殿

嶋津根津守殿

村田越前守殿

伊集院源介殿

平田美濃守殿

伊集院右衛門大夫殿

御宿所

追而

至伊集院右衛門尉殿、鑑速雖用先書候、御返事遲滯之条、衆中申談、重畳用運置候、為御心得候、

(島津家文書)

③ (マ、)

奉奇進鐘之事、

大日本国九州豊後国大分郡府中今小路惣道場、

右願主大明 台州府 鹿高 平羊縣 陽愛行

于時元龜第二拜歲七月十三日

(余慶寺梵鐘銘)

③ 大仏油断早速造立之段、神妙思食候、然者御負物之儀雖被仰付、尚以為御褒美、国役被成御免除候、并居屋敷被加御扶助候、可得其意候也、

八月九日

陳元明

(陳文書)

③ 其方事、大仏油断為調、兩度上洛辛勞感入候、然者国役免許、居屋敷八間半扶助之事、任 御朱印之旨、領掌不可有相違候、恐々謹言、

九月六日

陳元明

(陳文書)

③ 一符之内、上市岩田与三兵衛入道事、計屋之儀候条、上毛郡・下毛郡壳買入、彼者所江罷着肝要之段、可被申付候、

十一月九日

紹忍 (花押)

清成式部少輔殿  
岡部宮内入道殿

(蛸瀬文書)

③ 条々

(大友義統) (花押)

一、関兩浦町立之事 付、東西橋之事并 榎除之事

一、斗屋兩浦可為三間之事 付、其數等、同銀錢可有遺題 府内、白性可為同前、付、其數等、同銀錢可有遺題

一、火事出来之時、隣三間向三間可有其閉目、至火主者可處敵科事、

(第四、二一条略)

已上

右、背法度輩於在之者、不謂屈負用槍、以交名承、可加下知者也、

天正十六年六月廿八日

若林越後入道殿

(若林文書)

(鹿毛 敏夫 編集)

② 就至佐賀郷御土開廻屏之儀被 仰付候、御免許以着到、從役所言之上之趣、遂披露候之處、御領地分諸点役、雖御有免儀候、為 御所望御馳走、可為 御祝着由、以 御書被仰出候、被育御免許之首尾候之間、直早速御勤役專要候、聊不可有御油斷之儀候、恐々謹言、

十一月十五日

鑑久 (花押)  
鑑光 (花押)  
鑑永 (花押)  
鑑林 (花押)  
鑑貞 (花押)  
鑑種 (花押)

上野掃部助殿

(下田文書)

② 土開廻屏之儀、至諸郷庄申付候、仍直入郷之内、其方領地分之事、諸点役免許之段、雖存知候、此度之事、馳走肝要候、猶奉行中可申候、恐々謹言、

十二月二日

田北大炊助殿

(田北文書)

② 府内屋敷 祇園御神領分之儀、其方可有格護候、然者東之築地至外通者、町人召移、以屋敷料、右社頭上作等有馳走之由、尤肝要候、仍諸点役之儀、令免許候趣、巨細口上申候、恐々謹言、

六月十二日

税所越中守殿

(日野文書)

② 祇園会前二為御用向、如例年至□□兵船之儀被申付、来十一二日之間、必可被□□之由、被仰出候、聊不可有緩之儀候、恐々謹言、

六月一日

白杵庄政所殿

(藥師寺文書)

「墨引」

(藥師寺文書)

② (大友義統) (花押)

條々

- 一、万寿寺築地之内并西之屋敷兩所、令所望候之事、
- 一、一府之内万寿寺町屋敷之事、無残所預置候事、
- 一、百姓中前々之證文雖有之、每事礼能可被任存分事、
- 一、諸成敗之事、縱雖為人被官、至主人相理、礼能可被任存分事、
- 一、町役并点馬諸公事等之事、如前々可被勵馳走事、
- 一、地下人等雖企内訴、曾而不可有許容事、
- 一、公役等之事、聊無緩可有所勤之事、

天正十年正月廿二日

柴田筑前入道殿

(大友松野文書)

〔2〕「交易」関連資料

② 就渡唐之儀、疏黄事、如前々申付候者喜悅候、仍太刀一振

真檀遣之候、猶巨細申含陳外郎候也、

文明三二(四八〇年) (足利義滿)

六月廿一日 (御判)

大友豊前守とのへ

(大友家文書録)

② 唐船之事、被望申之趣、被開召入畢、於初度者、為御代始御船可被渡之、至其次者、就 鹿苑院殿百忌者被寄相国寺

之段、宜致存知、然間於三ヶ度

可有御成

元元年閏六月十三日

加賀前司 在判

大和守 在判

大友備前守殿

(大友家文書録)

② 猶々、来月於如何候間、当月中に各首途あるへ候、

渡唐二号船帰朝候之處、中乗と船頭慮外依喧嘩、客衆懸乘

之儀、不及是非候、然者方々懸追手候之間、於日州外浦留

置候、弥被船無出船様、可致覺悟候之矣、諸浦警固舟之事

相催、急度可差下候、誠国家外聞、此題目候、各至馳走者、

可為一段之軍忠候、重而日州江還飛脚候、来廿九卅日之間、

必可有到来候、其内船誘等相調、飛脚到来候者、翌日出船

之覺悟恐入候、不可有油斷之儀候、恐々謹言、

七月十九日 義長 (花押)

柳米藤九郎殿

岐部弥太郎殿

富米彦三郎殿

(岐部文書)

「墨引」

② 唐船三艘当年可帰朝也、各和泉堺地下人一万貫雜物積之、三倍四倍二可成之間、三艘八数万貫足也、自越中御所大内、大友・嶋津三人二為兵糧米一艘宛被下之、罷上可致迎忠旨、以御内書被仰出、各畏入旨申入御請、其御使奉行房定寛也、為事実者商人共可為迷惑者也、不思議之事也、日本王法冷落之者、自異朝可自專之由云々、然上者以異朝宝可違本朝之本意事併前表歟、

「大乘院寺社雜事記」明應五年四月二八日付

(四九六年)

⑧ 材木抽取之事申候之處、早々預馳走候、在陣之脇、一段辛勞、令悅喜候、同者急度可持給候、猶以面可申候、恐々謹言、

十月九日  
小田原三河守殿

(大友家文書錄)

⑨ 土藏之材木、以切符申候、各急度預馳走候者、可為祝着候、殊外急用候、各不可有油斷候、恐々謹言、

(天文三二(五四四)年)  
閏十一月十八日

(大友)  
義鑑 在判

帆足右衛門大夫殿  
松木丹後守殿  
平井三河守殿  
古後左近大夫殿  
惠良彈正忠殿  
太田安芸守殿  
惠良若狹守殿

(大友家文書錄)

⑩ (墨引) 一

門之材木、早速運送祝着候、猶雄城若狹守可申候、恐々謹言、

十二月廿五日  
波多備後守殿

(大友)  
義鑑 (花押)  
(岐部文書)

⑪ 遠侍戸悉損候、急度被申付、引兩戸結構可有馳走候、聊不可有緩之儀候、恐々謹言、

(天文六(一五四七)年)  
壬七月廿三日

(大友)  
義鑑 (花押)

津久見左馬助殿  
田北勘解由左衛門尉殿

(小野尾文書)

⑫ □志土知名、役所・台所上登之儀申付候、然者料□□事、以催促急度馳走肝要候、聊不可有緩之儀□□、謹言、

(天文六(一五四七)年)  
閏七月廿四日  
埴田越前守殿  
小田原三河守殿

(大友家文書錄)

⑬ 乾屋敷請辛勞察存候、近日馳走之假如何候、又鹿西進之候、猶面之時可申候、恐々謹言、

三月廿八日

(大友)  
義鑑 在判

小田原左京亮殿  
石合宮内少輔殿  
寒田又六殿  
清田九郎右衛門尉殿

(大友家文書錄)

⑭ 就女中屋作、各別而辛勞之儀候之条、黄金一枚進□候、恐々謹言、

十二月廿八日

(大友)  
義鑑 在判

小田原三河守殿  
埴田越前守殿

(大友家文書錄)

⑮ 至安岐郷、小門之儀申付候、然者其方領地之事、從前々万雜諸点役免許之儀、雖令承知候、可預馳走事、可為祝着之段申候之處、以用脚直納喜悅候、於檢断不入之儀者、永々不可有相違候、為存知候、恐々謹言、

九月三日  
若林彈正忠殿

(大友)  
宗麟

(若林文書)

⑯ 土井廻屏之儀、至諸郷申付候、仍積田庄之内、□□領地諸点役免許之段、雖令存知候、此度之事者、為所望、直馳走可為悅喜候、猶奉行中可申候、恐々謹言、

九月廿三日  
朽網左京亮殿

(大友家文書錄)

⑰ 土開廻屏之儀、至諸郷庄申付候、仍安岐郷之内、其方領地分諸点役免許之段、雖令存知候、此度之事者、為所望、直馳走肝要候、猶奉行中可申候、恐々謹言、

十月廿四日  
若林彈正忠殿

(若林文書)

⑱ 就至笠和郷御土開屏之儀被 仰付候、御免許衆之事、從役所言上之趣、遂披露候之處、貴方領地諸点役、雖被成御有免候、為 御所望馳走、可為 御祝着之由、可申旨被仰出候、早々勤役肝要候、不可有油斷之儀候、恐々謹言、

十一月一日

(花押)  
若林

小佐井内兵衛尉  
鎮永 (花押)  
葛原兵部  
鑑光 (花押)  
正田常陸  
鑑種 (花押)  
怒留海士殿助  
鑑貞 (花押)  
鑑久 (花押)

(向文書)

向刑部殿

⑲ 土井廻屏之儀、至諸郷庄申付候、仍窪隈郷之内、□方領地免許之段、雖令存知候、此度之事者、直馳走可為悅喜候、猶奉行中可申候、恐々謹言、

十一月十一日  
衛藤八郎殿

(大友家文書錄)

「豊後府内の都市と交易」に関連する文献史料

「1」都市」関連資料

① 新御成敗状 仁治三年正月十五日  
(一三四二年)

(第一条略)

一、六斎日殺生事、

右、禁断之由、累代之嚴制、関東之御定、重疊已畢、毎月伴日、奉行之國中、永可禁制之由、所被下御教書也、可存其旨、但於河海者、漁人以之依為渡世之計、被免之者歟矣、

(第三、一八条略)

一、給府中地輩事、

右、難洪所付于彼地之濟物、懈怠所役者、屋地者可召之矣、

(第一〇条)

一、道祖神社事、

右、同府住人等、立置彼社於府中之條可止之、但有殊所存者、申其旨、可隨左右矣、

(第二卷)

一、町押買事、

右、不論上下、一向可令停止之矣、次町人等諸物直法、背法過分之条、可止之矣、

(第三卷)

一、府中指笠事、

右、往反之諸人、非指雨儀之時、面々指之事、可停止之矣、

(第三卷)

一、大路事、

右、或称田畠作、或号立在家、令狹条、尤自由也、早仰其通行事、可令制止之矣、

(第四卷)

一、保々産屋事、

右、晴大路立之事、可止之、若不令承引者、可令破却之矣、

(第五卷)

一、府中墓所事、

右、一切不可有、若有違乱之所者、且改葬之由被仰主、且可召其屋地矣、

(第六卷)

一、令押作私物於道々細工等事、

右、儀有如然之輩、細工等有煩事云々、可止之矣、

(第二七条略)

(後日之式條)

② 豊後国隆国府市屋敷二所事、就仏地念定寄進、被建立積善庵由承候畢、不可有子細候、恐々謹言、大友

卯月十一日

運公書記禪師

(荒卷文書)

③

就 賀米社御造替之儀、任旧記、國中平均間別錢可有催促条々事、

一、間別錢 (一調別 之 事、 五文定)

一、至寺社者、由原宮中・万寿寺寺内斗可除之事、

一、不謂權門高家催促之事、

一、催促使往其所□上者家数之事、雖可為明鏡、若家主有聊爾之儀者、云神慮之冥鑒、云法度之憲法、可處罪科之事、

一、所々催促之事、受其方分奉行可副案内者之条調催促可渡社家事、

右守條々旨、不可有聊爾之儀者也、仍下知如件、  
(二五〇七年)  
 永正二年三月廿五日

(安部文書)

④

(龜裏ウ八書)  
 「平林兵部少輔殿」

高田庄

田地九反七十四步

右一反別米一舁宛

畠地三町式反大四十步

屋敷五反小八十八步

右二反別大豆一舁宛

右合四町七反小二步

右之前、急度相調、如府内運送肝要之由、依 御下知調符如件、

(二五九〇年)  
 天正十八年九月廿一日

統如 (花押)

仁通

(裏書)  
 「一、米壹斗八舁四合九勺三才二合」

一、大豆三斗八舁四合六勺八合 (マ、)

右、請取所如件、

天正十八年十一月廿五日

(寒田右近大夫 六寮 鎮郷)

覺阿 (花押)

其阿 (黒印)

(平林文書)

⑤

唐人供之儀、雖申付候、料所調第一之儀候之条、藏方之事申付候、万事白杵右京亮・富来作右衛門尉・竹田津志广守得指南□□、可被遂其節事肝要候、聊不可有口能候、為存知候、恐々謹言、

二

義統 御判有之

(竹中文書)

⑥

山香郷濟物、自檢使中調納之刻、兩人為藏奉行、堅固被請取置肝要候、為存知候、恐々謹言、

七月廿九日

吉統 (花押)

岩屋與兵衛入道殿  
 竹中宮内少輔殿

(竹中文書)

⑦

国東郡間別之儀、号直納不勤之人、歴々在之之由候、不及是非候、既各為奉行差遣候上者、堅固被請取、急度調納專一候、猶永富与右衛門尉・古庄喜右衛門尉可申候、恐々謹言、

八月十九日

吉統 (花押)

(龜裏ウ八書)  
 「竹中宮内少輔殿  
 都甲兵部少輔殿  
 帶刀安芸入道殿」

(竹中文書)

## 謝 辞

本書の作成にあたり、次の機関及び各位から多大なご協力・ご指導を賜りました。厚くお礼申し上げます。

文化庁  
福岡市教育委員会  
大分市美術館  
柞原八幡宮

国立歴史民俗博物館  
大分県教育委員会  
大分市歴史資料館

佐賀県立九州陶磁文化館  
大分県立先哲史料館  
大友遺跡検討委員会

神戸市博物館  
臼杵市教育委員会  
竹中 勝光寺

加藤 允彦	伊藤 正義	石井 進	河原 純之	小野 正敏	玉井 哲雄	鹿毛 敏夫
山村 亜希	森本 朝子	大橋 康二	大庭 康時	佐伯 弘次	清水 宗昭	渋谷 忠章
坂本 嘉弘	栗田 勝弘	田中 裕介	榎島 隆二	吉田 寛	後藤 晃一	甲斐 寿義
山本 恭弘	原田 昭一	松本 康弘	恒賀健太郎	幡上 敬一	高山龍五郎	佐藤 功
神田 高士	秦 政博	木村幾多郎	佐藤 友則	清松 直人	太田 孝子	藤沢 敏夫
武富 雅宣	宮崎 治	中西 武尚	長田 弘通	帯刀 修一	玉永 光洋	讃岐 和夫
熊谷 一秋	後藤 典幸	塔泉 光司	坪根 伸也	姫野 公德	幸 裕美	池邊千太郎
高畠 豊	河野 史郎	塩地 潤一	永松 正大	三浦 亜紀	杉崎 重臣	荻 幸二
宮田 剛	奥村 義貴	苧谷 史穂	羽田野達郎	上野 淳也	梅田 昭宏	佐藤 孝則
松竹 智之	小住 武史	羽田野裕之	松尾 聡	水町 裕子	勝間田あや	阿部真知子
高木麻奈美	山口しのぶ	姫野 尚之	中村由美子	野上 孝徳	林 裕子	伊東 みほ
深町 麻理	藤原佳和子	西村 大	木村 藍子	平田美智子	森永 美紀	小野千恵子
江藤井津子	首藤 直美	沖本美和子	井口あけみ	宮成 美恵	堤 美智代	黒田きくみ
今村 信子	三重野京子					

(順不同・敬称略)

中世大友再発見フォーラム  
**南蛮都市・豊後府内**  
都市と交易

2001年 9月1日

発行／大分市教育委員会  
中世都市研究会  
印刷／いづみ印刷株式会社



XANTON.

COREA INSVLA.

Luicheu

NANQV IN.

Cory

Punta dos ladrones

Ilhas dos ladrones

Ogoto

Meaxionia

P. Bom

S.C

Sachin

Mochozza

Sucuan

Chandequo

Suan

Ancho

Olepeyo

Nunpo  
Laampo

Varella